山梨県　ヤングケアラーに関する実態調査
報告書

2022 年 12 月

山梨県

目　次

第 I 章 実態調査概要 1

第 II 章子ども調査..... 2

1.　回答者について..... 2
（1）　性別 2
（2）　学年 2
（3）　居住地 3
（4）　家族構成 4
（5）　自分の健康 4

2.　学校生活などについて..... 5
（1）　現在、悩んだり困っていること..... 5
（2）　この 1 年間で学校で大人に相談したこと..... 6
（3）　先生への相談のしやすさ 7
（4）　今の生活への満足度..... 8

3.　ヤングケアラーやヤングケアラーへの支援について..... 9
（1）　「ヤングケアラー」という言葉の認知状況 9
（2）　「ヤングケアラー」という言葉をどこで知ったか 10
（3）　学校で「ヤングケアラー」を知った方法..... 11
（4）　自分が「ヤングケアラー」にあてはまるか 11
（5）　家事や家族のお世話を他の人に助けてもらっているか 12
（6）　友人や周りに「ヤングケアラー」にあてはまる子どもはいるか 13
（7）　「ヤングケアラー」の子どもがいた場合、どうするか 14
（8）　「電話相談窓口」の認知状況 15
（9）　「相談支援センター（山梨県総合教育センター）」の認知状況 15
（１０）　「電話相談窓口」に相談したことがない理由..... 16
（１１）　「山梨コネクトヤングケアラー」のカードを見たことの有無 16
（１２）　「相談支援センター」に相談したことがない理由..... 17
（１３）　どんな方法で「山梨コネクトヤングケアラー」のカードをみたか..... 18
（１４）　YouTube で「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たことの有無 19
（１５）　「山梨コネクトヤングケアラー」の動画について 20

4.　ヤングケアラーについて（追加分析）..... 22
（1）　自身がヤングケアラーか自己認識別の「ヤングケアラー」という言葉の認知状況 22
（2）　自身が「ヤングケアラー」か自己認識別の現在、悩んだり困っていること 23
（3）　自身が「ヤングケアラー」および、自身では「ヤングケアラー」かわからないが「ヤングケアラー」と思われる子ども 25

5.　自由意見 40

第 III 章　保護者調査..... 45

１.　基礎情報..... 45
（1）　年代 45
（2）　子どもからみた家族内での位置づけ 45
（3）　居住地 46
（4）　子どもの数（就学前、小学生、中学生、高校生や 16 歳から 18 歳の子ども）..... 47
（5）　子どもの年代別からみた保護者 47
（6）　PTA 活動への参加の有無..... 48
（7）　地域活動への参加の有無..... 50

（８）　住いの地域は「自分の子どもを見守ってくれる地域」か 51

２．　ヤングケアラーについて 52
（１）　「ヤングケアラー」という言葉の認知状況 52
（２）　「ヤングケアラー」と思われる子ども 53
（３）　ヤングケアラーのいる家庭に必要な支援 59
（４）　身近で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことの有無 62
（５）　「ヤングケアラー」と思った理由 63
（６）　「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合の行動 65
（７）　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関 66
（８）　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて「何もしない」主な理由 68
（９）　山梨県や県内市町村で取り組んでいる支援について 68
（１０）　「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のためにできる支援（自由記述） 70
（１１）　「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のために PTA ができる支援（自由記述） 71
（１２）　「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のために山梨県や各市町村・学校に求める対応・要望（自由記述） 73

３．　保護者インタビュー調査 75
（１）　概要 75
（２）　調査結果 76

第 IV 章　一般県民調査／県政モニター調査 77

１．　調査について 77

２．　基礎情報 78
（１）　年代 78
（２）　性別 78
（３）　居住地 79
（４）　婚姻状況 80
（５）　子どもの有無 80
（６）　職業 81
（７）　同居家族 82
（８）　同居している 18 歳未満の子ども・孫の年代 83
（９）　情報源 84

３．　ヤングケアラーについて 86
（１）　「ヤングケアラー」という言葉の認知状況 86
（２）　「ヤングケアラー」という言葉の認知経路 88
（３）　「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無 90
（４）　「ヤングケアラー」と思われる理由 92
（５）　身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合の対応 93
（６）　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関 94
（７）　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて「何もしない」主な理由 96
（８）　山梨県「ヤングケアラー相談窓口」について 97
（９）　ヤングケアラーが相談しやすい環境づくりにつながる仕組みや支援 99
（１０）　現在参加している地域活動や市民活動と、ヤングケアラーとの関わりについて 101
（１１）　ヤングケアラーに対して必要だと思われる支援 107
（１２）　「ヤングケアラー」支援のためにできること 109
（１３）　「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴の有無 111
（１４）　啓発活動として効果があると思われる取組 112
（１５）　ヤングケアラーの印象や「ヤングケアラー」の支援に必要だと思われること（自由記述） 115
（１６）　追加分析 119

第 V 章 支援者調査（子どもの居場所運営事業者） 121

1． 回答者の基礎情報..... 121
（1） 団体の所在地 121
（2） 団体の活動内容 121
（3） 団体の活動頻度 122

2． 県の「ヤングケアラー」に関する事業について 123
（1） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがあるか 123
（2） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ 123
（3） 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートについて..... 124
（4） ヤングケアラー啓発動画について..... 126
（5） ヤングケアラーの周知方法..... 127
（6） 昨年度と比べての、ヤングケアラーの発見、支援における変化..... 129

3． ヤングケアラーの把握、支援について 130
（1） 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度） 130
（2） ヤングケアラーに対して配慮していること..... 130
（3） 専門家のサポートの必要性〈子どもの居場所〉 131
（4） 必要な専門家のサポートの内容..... 131
（5） 子どもの居場所運営事業者で実態把握をしやすい要因..... 132
（6） ヤングケアラーの支援にあたって、やるべきことややりたいこと、家庭やケアが必要な人への支援に関して行政やサービス事業所等に期待すること、学校、SSW、SC と連携したいこと〈子どもの居場所〉..... 132

4． 子どもの居場所において把握されたヤングケアラーの事例 135
（1） 属性 135
（2） ヤングケアラーの状況について 137

第 VI 章 支援者調査（スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー・養護教諭）.. 141

1． 回答者の基礎情報..... 141
（1） 回答者の属性 141
（2） 〈養護教諭〉学校の所在地..... 141
（3） 〈養護教諭〉学校区分 142
（4） 〈養護教諭〉保健室在籍状況 142
（5） 〈スクールカウンセラー〉子どもとの面談 143

2． 県のヤングケアラーに関する事業について 144
（1） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがあるか 144
（2） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ 144
（3） 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートについて..... 145
（4） ヤングケアラー啓発動画について..... 148
（5） 〈養護教諭〉啓発カード以外の山梨県ヤングケアラー相談窓口の周知 149
（6） 昨年度と比べての、ヤングケアラーの発見、支援における変化..... 150

3． ヤングケアラーの把握、支援について 151
（1） 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度） 151
（2） 〈スクールカウンセラー（SC）・養護教諭〉 学校で「ヤングケアラー」と思われる子どもを発見または相談を受けた際の対応として課題に感じていること..... 151
（3） 〈スクールソーシャルワーカー（SSW）〉 ヤングケアラーの支援について、学校と外部の関係機関との連携にあたっての課題や連携を進めるために必要なこと 153
（4） 役割分担についての課題 154
（5） 〈養護教諭〉 今後のヤングケアラーの支援 156
（6） 〈スクールソーシャルワーカー（SSW）・スクールカウンセラー（SC）〉 今後のヤングケアラーの支援 159

４．　スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー・養護教諭において把握されたヤングケアラーの事例 .. 162
（１）　支援に関わって良かったと思う事例 162
（２）　支援が困難だった事例 177

第 VII 章　調査のとりまとめ・考察..... 190

１．　各調査のとりまとめ 190
（１）　子ども調査 190
（２）　保護者調査..... 191
（３）　一般県民調査／県政モニター調査..... 192
（４）　支援者調査..... 193

２．　考察 194

第I章　実態調査概要

ヤングケアラーの実態や支援の状況を把握するため、下記のような対象に実態調査を行った。

調査名	対象	調査の概要	調査方法	調査時期	対象者数	有効回答数
子ども調査	県内の学校に通う小学６年生、中学生、高校生	県内の学校に在籍する対象者全員に対して、ヤングケアラーの実態や認知度などを把握	学校にてWeb調査	令和４年９月	約53,000人	合計　28,179件 （小学６年生 4,714件） （中学生 13,989件） （高校生（全日制） 8,769件） （高校生（定時制） 605件） （高校生（通信制） 24件）
保護者調査	県内の学校に通う小学６年生、中学生、高校生の保護者	ヤングケアラーの認知度や日常の地域活動等でのヤングケアラーへの関わりや今後の関わり意向等を把握	学校から子どもを通じて調査協力の依頼 Web回答 補足のため、個別インタビューを実施	令和４年７月~10月		2,760件
一般県民調査／県政モニター調査	モニター調査会社に登録している県内在住の方		Web調査	令和４年８月	840件	840件
	県政モニターに登録している方		Web調査／紙回答	令和４年８月~９月	436件	324件
学校支援者調査	養護教諭、SSW、SC	日常のヤングケアラーへの関わりや関わりの中での課題、今後の取り組みの意向や必要な支援等を把握 また、スクールソーシャルワーカー（SSW）、スクールカウンセラー（SC）、養護教諭、子どもの居場所運営事業者のワークショップを行い、多職種での連携等の在り方等についての意見交換を実施	教育委員会及び私立学校を通じて依頼 Web回答	令和４年７月～８月	合計 436件 （SSW 16人） （SC 96人） （養護教諭 324人）	合計　268件 （SSW 8人） （SC 34人） （養護教諭 226人）
子どもの居場所支援者調査	子どもの居場所運営事業者		紙の調査票配布（Webでの回答可）	令和４年７月～８月	50件	31件

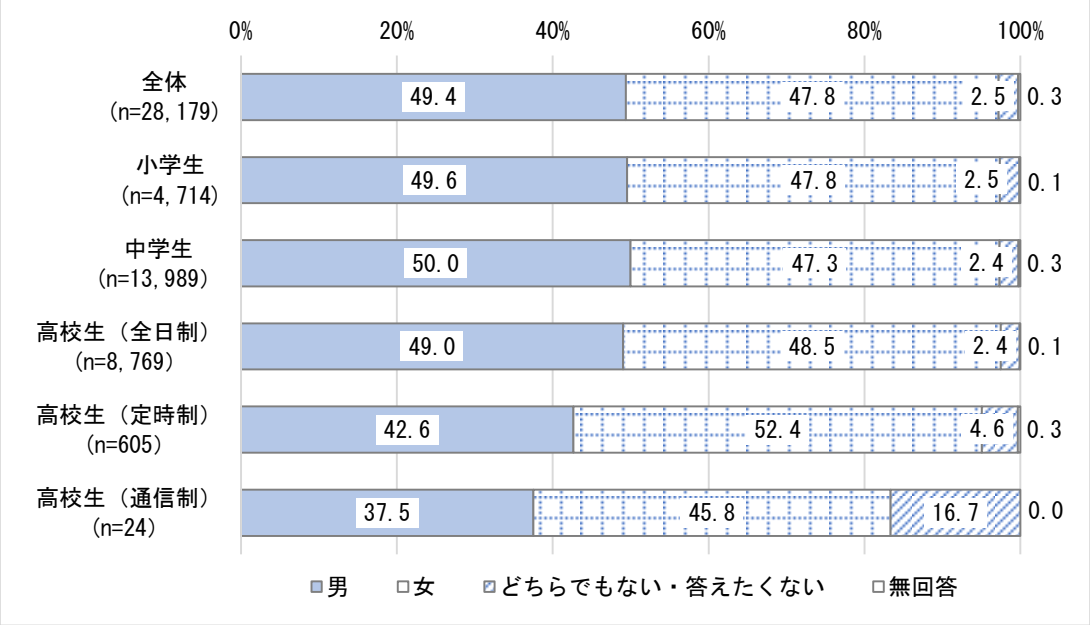
第II章　子ども調査

1. 回答者について

（1） 性別

性別は、男女ほぼ半々であるが、高校生（定時制）では、「男」が42.6%、「女」が52.4%と「女」がやや高くなっている。

図表 1　性別

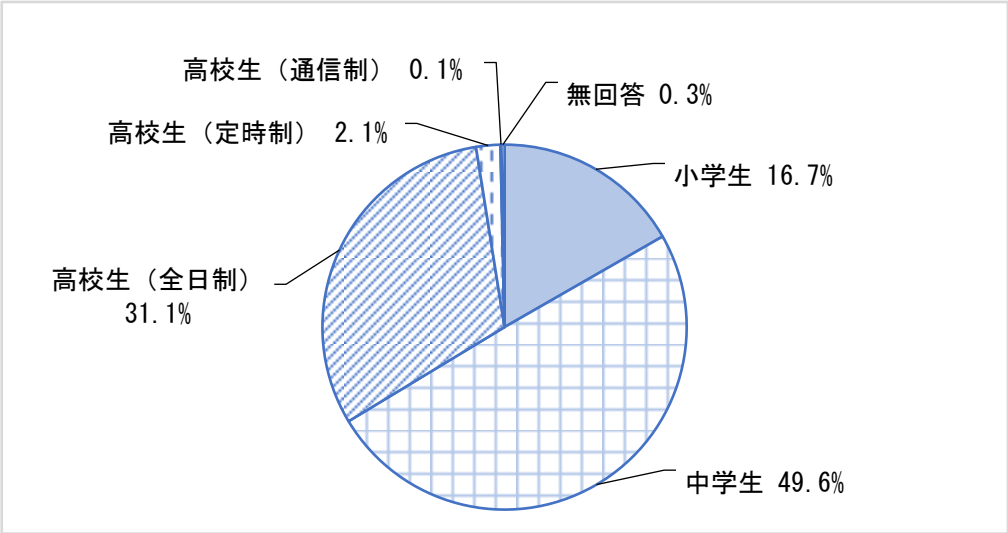


※全体には学年不明が含まれる。以下のグラフ、表は同様

（2） 学年

学年は、「中学生」が 49.6%と最も高く、次いで「高校生（全日制）」（31.1%）、「小学生」（16.7%）などとなっている。

図表 2　学年



（３） 居住地

居住地は、以下のとおり。

図表 3　居住市町村　（%）

	全体（n＝）	甲府市	富士吉田市	都留市	山梨市	大月市	韮崎市	南アルプス市	北杜市	甲斐市
全体	28,179	24.0	7.4	4.1	4.3	1.4	3.8	10.9	4.4	10.3
小学生	4,714	26.2	6.7	3.9	6.0	2.6	2.0	9.9	3.8	9.7
中学生	13,989	25.9	7.7	4.1	3.4	0.8	4.3	10.1	5.2	10.7
高校生（全日制）	8,769	19.8	7.1	4.0	4.9	1.7	4.1	12.8	3.5	10.1
高校生（定時制）	605	24.6	10.9	6.1	3.3	1.0	3.3	8.4	3.3	8.9
高校生（通信制）	24	0.0	8.3	4.2	0.0	4.2	12.5	25.0	4.2	4.2

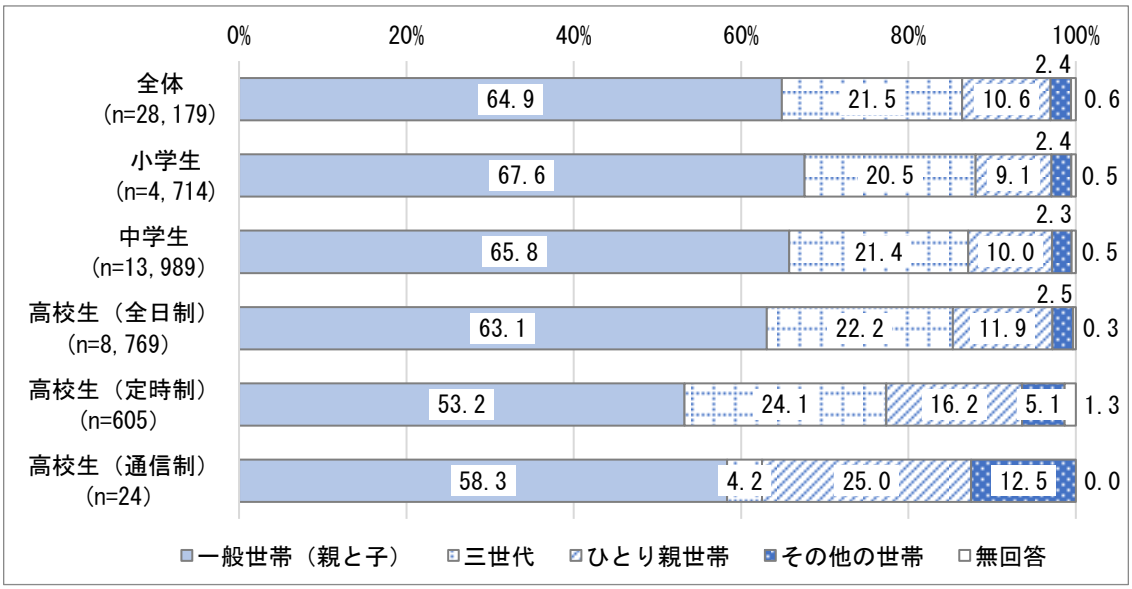
	笛吹市	上野原市	甲州市	中央市	市川三郷町	早川町	身延町	南部町	富士川町	昭和町
全体	7.7	1.3	3.0	3.0	1.5	0.1	0.9	0.8	2.2	2.7
小学生	5.7	1.6	2.1	3.0	2.0	0.0	0.6	0.7	2.4	3.2
中学生	8.4	1.4	2.9	2.5	1.0	0.1	1.0	0.9	2.2	2.7
高校生（全日制）	7.7	0.9	3.5	3.8	2.0	0.1	0.9	0.8	2.1	2.6
高校生（定時制）	7.6	1.0	3.6	3.6	2.0	0.0	0.5	1.2	1.5	2.8
高校生（通信制）	0.0	0.0	4.2	12.5	4.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

	道志村	西桂町	忍野村	山中湖村	鳴沢村	富士河口湖町	小菅村	丹波村	県外	無回答
全体	0.1	0.6	1.4	0.5	0.3	2.4	0.0	0.0	0.1	1.0
小学生	0.0	0.6	1.4	0.3	0.6	3.9	0.1	0.0	0.1	0.7
中学生	0.0	0.6	1.7	0.4	0.0	1.1	0.0	0.0	0.1	0.9
高校生（全日制）	0.2	0.6	1.1	0.7	0.5	3.4	0.0	0.0	0.2	1.1
高校生（定時制）	0.0	0.3	1.3	0.3	0.7	2.6	0.0	0.0	0.2	0.8
高校生（通信制）	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0	0.0	4.2	4.2	4.2

（４） 家族構成

家族構成について、「一般世帯（親と子）」がどの区分でも最も高くなっており、小学生、中学生、高校生（全日制）では６割強となっている。

図表 4　家族構成

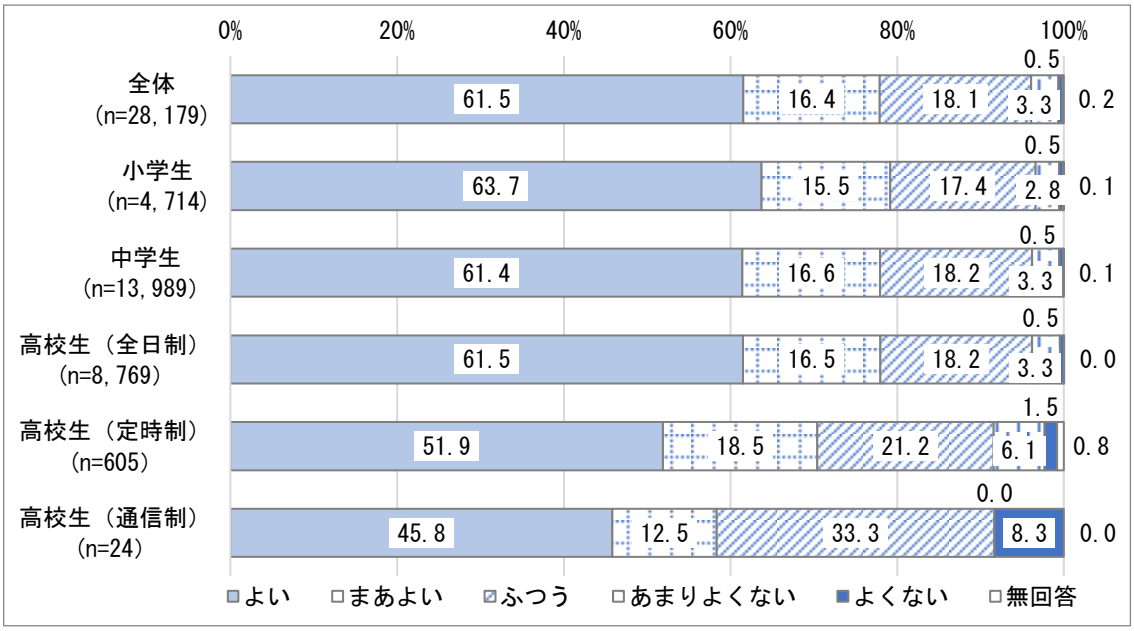


（５） 自分の健康

回答者の健康については、小学生では「よい」が 63.7%で最も高く、「まあよい」（15.5%）とあわせて、79.2%がよいとなっている。

高校生（定時制）は「よい」が 51.9%と、高校生（全日制）（61.5%）に比べて低くなっている。

図表 5　自分の健康



2. 学校生活などについて

（１） 現在、悩んだり困っていること

現在、悩んだり困っていることは、小学生では「特にない」が 58.0%で最も高く、次いで「しょうらいの夢や進路のこと」（20.0％）「勉強のこと（学校の成績など）」（18.4％）、「友人との関係のこと」（15.5%）などとなっている。

中学生では「勉強のこと（学校の成績など）」が 45.0%で最も高く、次いで「しょうらいの夢や進路のこと」（35.0%）、「友人との関係のこと」（16.2%）などとなっている。

高校生（全日制）では「しょうらいの夢や進路のこと」（45.3%）、「勉強のこと（学校の成績など）」（44.8%）が高く、次いで「部活動のこと」（12.5%）、「友人との関係のこと」（11.4%）が高い。

高校生（定時制）では「しょうらいの夢や進路のこと」（45.6%）が最も高く、次いで「勉強のこと（学校の成績など）」（34.7%）、「友人との関係のこと」（13.9%）などとなっている。

図表 6　現在、悩んだり困っていること（複数回答）　（%）

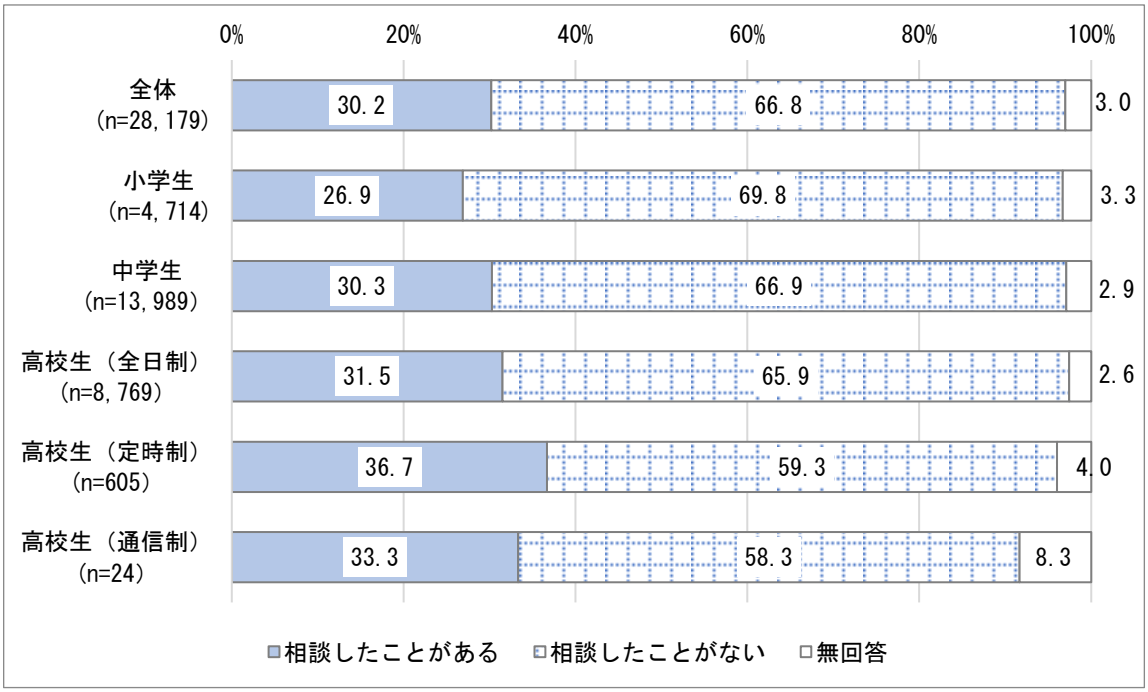
	全体（n＝）	友人との関係のこと	勉強のこと（学校の成績など）	しょうらいの夢や進路のこと	部活動のこと	じゅく や習い事ができないこと	学校に支払うお金のこと（学費、集金など）	家庭のお金のこと（食べ物を買うお金や必要なものを買うお金がたりないことなど）
全体	28,179	14.5	40.2	35.9	9.6	1.4	2.1	2.1
小学生	4,714	15.5	18.4	20.0	4.7	1.8	1.1	1.7
中学生	13,989	16.2	45.0	35.0	9.6	1.8	1.3	1.8
高校生（全日制）	8,769	11.4	44.8	45.3	12.5	0.7	3.5	2.5
高校生（定時制）	605	13.9	34.7	45.6	7.1	1.2	6.8	5.5
高校生（通信制）	24	20.8	41.7	58.3	12.5	8.3	12.5	12.5

	自分と家族との関係のこと	家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）	病気や障がいのある家族のこと	自分のために使える時間が少ない	特にない	その他	無回答
全体	4.9	3.7	1.2	3.9	40.4	0.7	2.0
小学生	5.2	3.7	1.4	2.9	58.0	1.3	2.5
中学生	5.2	3.9	1.2	3.4	39.0	0.6	2.3
高校生（全日制）	4.0	3.3	1.0	5.0	33.3	0.4	1.1
高校生（定時制）	7.1	4.5	2.8	5.5	36.5	1.3	1.2
高校生（通信制）	12.5	8.3	12.5	16.7	25.0	0.0	8.3

（２） この１年間で学校で大人に相談したこと

この１年間で、悩んだり困ったりしていることなどについて、学校で大人（先生など）に「相談したことがある」のは、小学生で 26.9%、中学生で 30.3%、高校生（全日制）で 31.5%となっている。高校生（定時制）では 36.7%と他の学年に比べて高くなっている。

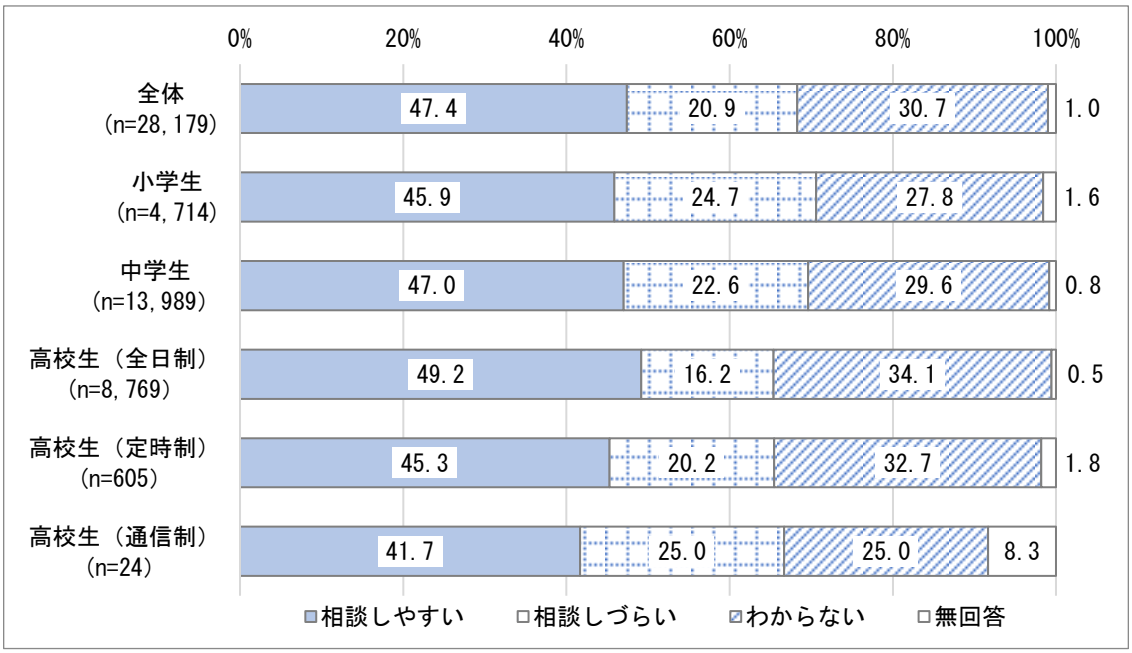
図表 7　この１年間で学校で大人に相談したこと



（３） 先生への相談のしやすさ

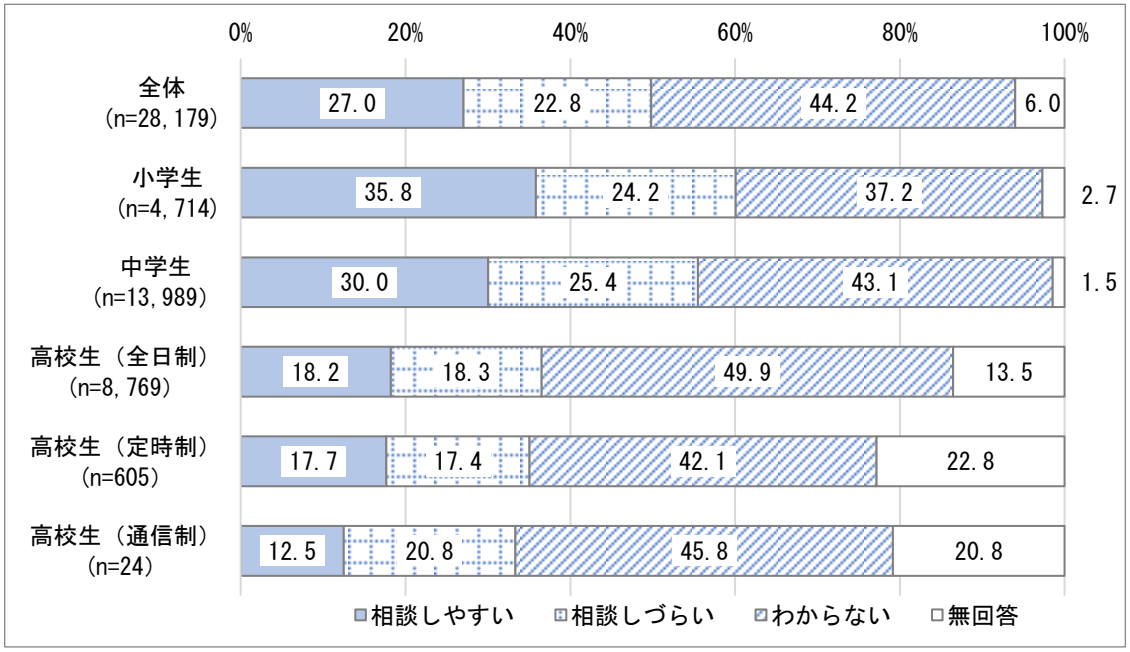
先生への相談のしやすさについて、「担任の先生」に「相談しやすい」のは、小学生で 45.9%、中学生で 47.0%、高校生（全日制）で 49.2%と、学年があがるにつれ高くなっているが、高校生（定時制）では 45.3%と高校生（全日制）に比べて低くなっている。

図表 8　先生への相談のしやすさ　＜担任の先生＞



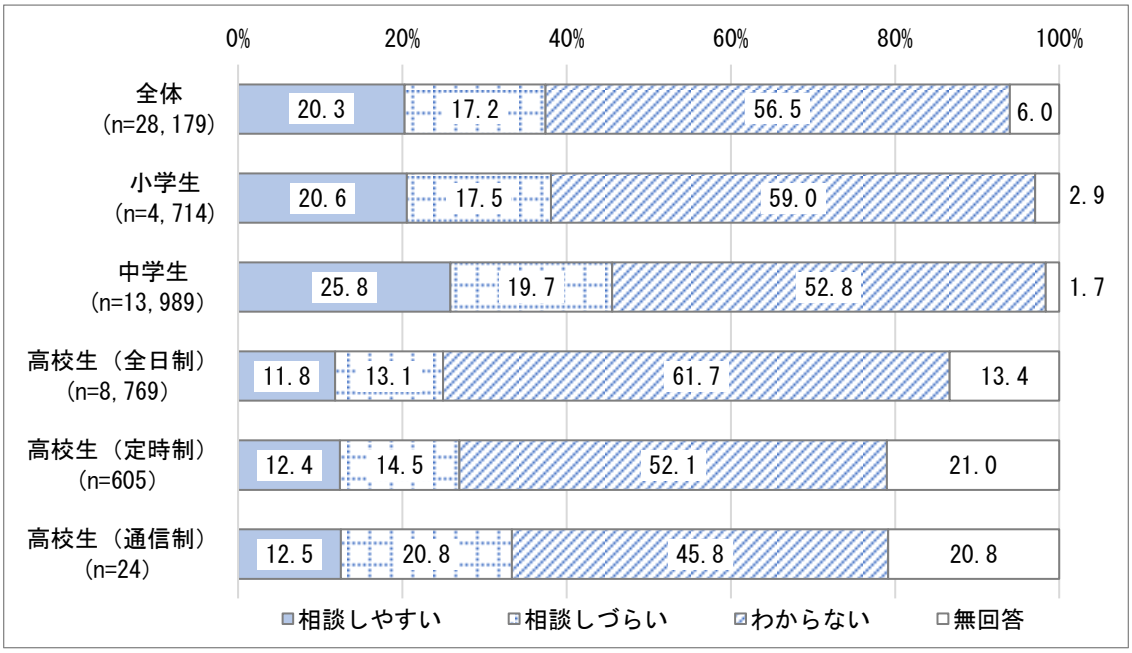
「保健室の先生」に「相談しやすい」のは、小学生で 35.8%、中学生で 30.0%であるが、高校生では（全日制）で 18.2%と、（定時制）で 17.7%と低く、「わからない」と「無回答」の割合がいずれも６割強となっている。

図表 9　先生への相談のしやすさ　＜保健室の先生（養護教諭＞



「カウンセラーの先生」に「相談しやすい」のは、小学生で 20.6%、中学生で 25.8%と２割強である。高校生ではさらに低く、（全日制）で 11.8%、（定時制）で 12.4%となっている。いずれの学年も、「わからない」の割合が５～６割と高い。

図表 10　先生への相談のしやすさ　＜カウンセラーの先生＞



（４）　今の生活への満足度

今の生活（学校生活や家族のことを含めて）にどのくらい満足しているかについて、たいへん満足を１０点、まったく満足していないを０点として聞いたところ、小学生と中学生では「１０点」が、高校生（全日制）では「8 点」が高校生（定時制）では「７点」が最も高くなっている。

図表 11　今の生活への満足度　（%）

	全体（n=）	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	無回答	平均	標準偏差
全体	28,179	0.7	0.5	1.2	3.2	4.9	10.6	9.1	15.8	19.9	13.3	20.1	0.7	7.35	2.182
小学生	4,714	0.7	0.6	1.0	2.8	4.3	7.9	6.2	11.5	16.9	16.8	30.7	0.6	7.84	2.229
中学生	13,989	0.6	0.5	1.1	3.1	4.7	9.6	7.7	14.4	20.4	15.3	22.0	0.5	7.51	2.171
高校生（全日制）	8,769	0.7	0.5	1.4	3.4	5.4	13.5	12.7	20.1	21.0	8.7	11.8	0.7	6.89	2.053
高校生（定時制）	605	2.0	2.0	2.0	5.5	5.0	15.5	11.9	19.2	16.4	7.1	11.7	1.8	6.49	2.368
高校生（通信制）	24	4.2	4.2	4.2	4.2	8.3	8.3	4.2	8.3	16.7	8.3	20.8	8.3	6.55	3.128

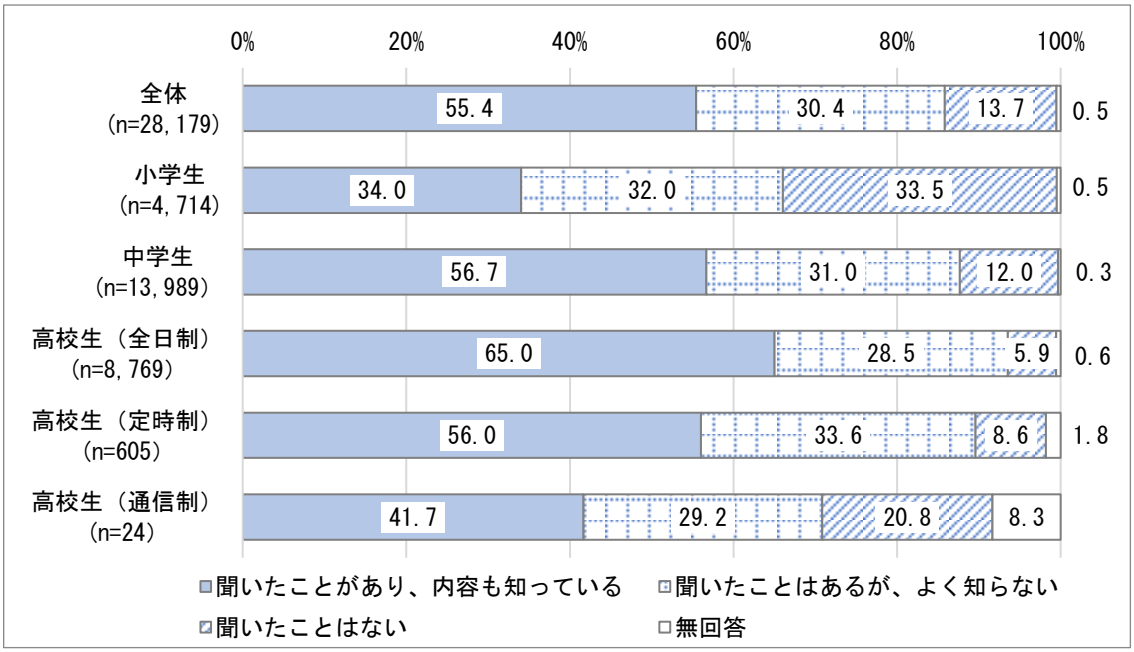
3. ヤングケアラーやヤングケアラーへの支援について

（１） 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに聞いたことがあるかについて、小学生は「聞いたことがあり、内容も知っている」が 34.0%、「聞いたことはあるが、よく知らない」が 32.0%、「聞いたことはない」が 33.5%となっており、中学生以上に比べて認知は低い。

中学生以上では「聞いたことがあり、内容も知っている」のは、中学生で 56.7%、高校生（全日制）で 65.0%となっている。高校生（定時制）は 56.0%で、高校生（全日制）に比べて低い。

図表 12 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況



（２）「ヤングケアラー」という言葉をどこで知ったか

「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに「聞いたことがあり、内容も知っている」、「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答した子どもに「ヤングケアラー」という言葉をどこで知ったか聞いたところ、小学生では、「テレビ」が 68.0%で最も高く、次いで「学校」（38.0%）となっている。他の学年に比べて、「学校」の割合が低い。一方、「家族から聞いた」（18.0%）は、他の学年に比べて高くなっている。

中学生以上では、「学校」が最も高く、次いで「テレビ」となっている。高校生（定時制）では、他の学年に比べて「テレビ」（49.3%）は、低くなっている。

図表 13　「ヤングケアラー」という言葉をどこで知ったか（複数回答）　（%）

	全体（n＝）	テレビ	新聞	ラジオ	雑誌や本	チラシや掲示物	イベントや交流会	学校
全体	24,187	57.9	12.2	2.4	8.7	11.5	1.6	62.2
小学生	3,112	68.0	13.2	3.4	11.5	13.2	1.4	38.0
中学生	12,263	58.7	12.3	2.4	9.2	11.9	1.3	63.2
高校生（全日制）	8,201	53.5	11.8	2.1	7.0	10.2	1.9	69.4
高校生（定時制）	542	49.3	10.1	2.0	5.9	10.7	1.7	69.9
高校生（通信制）	17	35.3	23.5	17.6	17.6	29.4	11.8	58.8

	インターネットのホームページ	ＳＮＳ	友人・知人から聞いた	家族から聞いた	おぼえていない	その他	無回答
全体	7.4	16.6	3.5	10.7	7.4	0.4	0.7
小学生	10.0	12.1	5.3	18.0	9.7	1.3	0.6
中学生	7.9	16.3	3.5	11.8	7.3	0.3	0.9
高校生（全日制）	5.6	18.5	2.9	6.5	6.6	0.3	0.5
高校生（定時制）	5.9	18.1	1.7	8.3	7.4	0.2	0.4
高校生（通信制）	5.9	29.4	11.8	11.8	11.8	0.0	0.0

（３） 学校で「ヤングケアラー」を知った方法

「ヤングケアラー」という言葉「学校」で知ったと回答した子どもに、「学校」ではどのような方法で「ヤングケアラー」という言葉を知ったか聞いたところ、いずれの学年でも「配布されたチラシ」が６割前後で最も高く、次いで「授業」が３割～４割となっている。

図表 14　学校で「ヤングケアラー」を知った方法（複数回答）　（%）

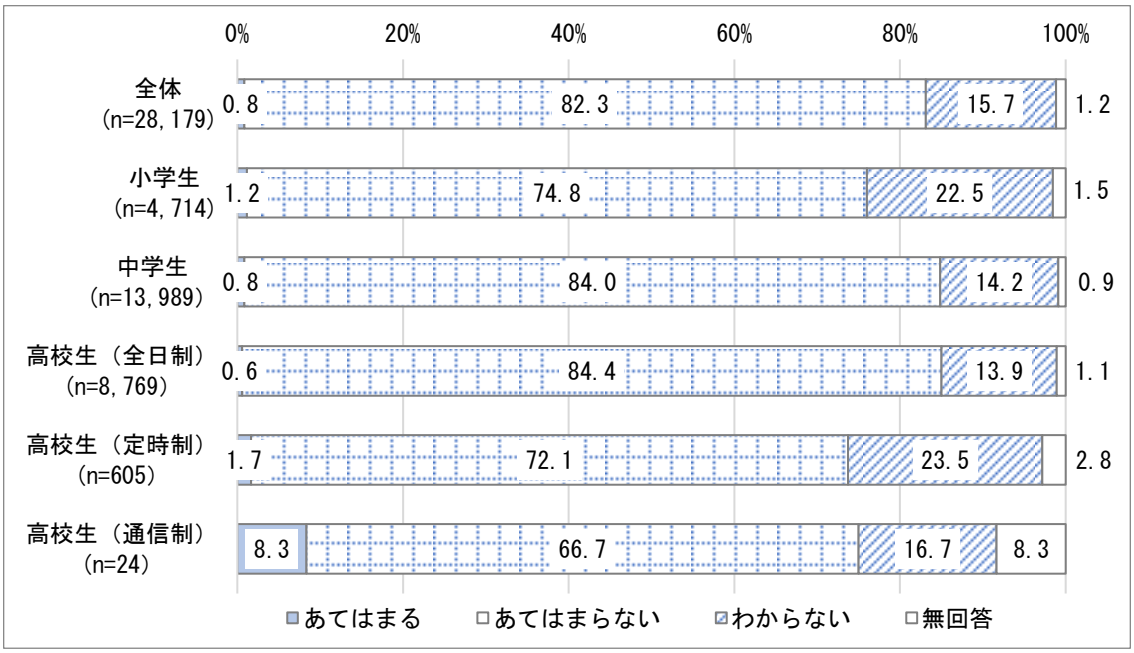
	全体（n=）	授業	集会	配布されたチラシ	掲示物	その他	無回答
全体	15,050	35.4	11.2	61.6	10.1	4.3	2.2
小学生	1,182	31.0	1.7	63.5	8.1	4.1	3.6
中学生	7,756	37.4	8.4	61.5	8.9	6.0	2.4
高校生（全日制）	5,690	33.8	16.4	61.5	12.0	2.2	1.7
高校生（定時制）	379	33.8	21.1	57.0	11.3	1.6	2.1
高校生（通信制）	10	20.0	20.0	90.0	10.0	0.0	0.0

（４） 自分が「ヤングケアラー」にあてはまるか

自分が「ヤングケアラー」にあてはまると思うか聞いたところ、「あてはまる」は小学生で 1.2%、中学生で 0.8%、高校生（全日制）で 0.6%、高校生（定時制）で 1.7%であった。

小学生と、高校生（定時制）では、「わからない」がそれぞれ 22.5%、23.5%と他の学年に比べて高くなっている。

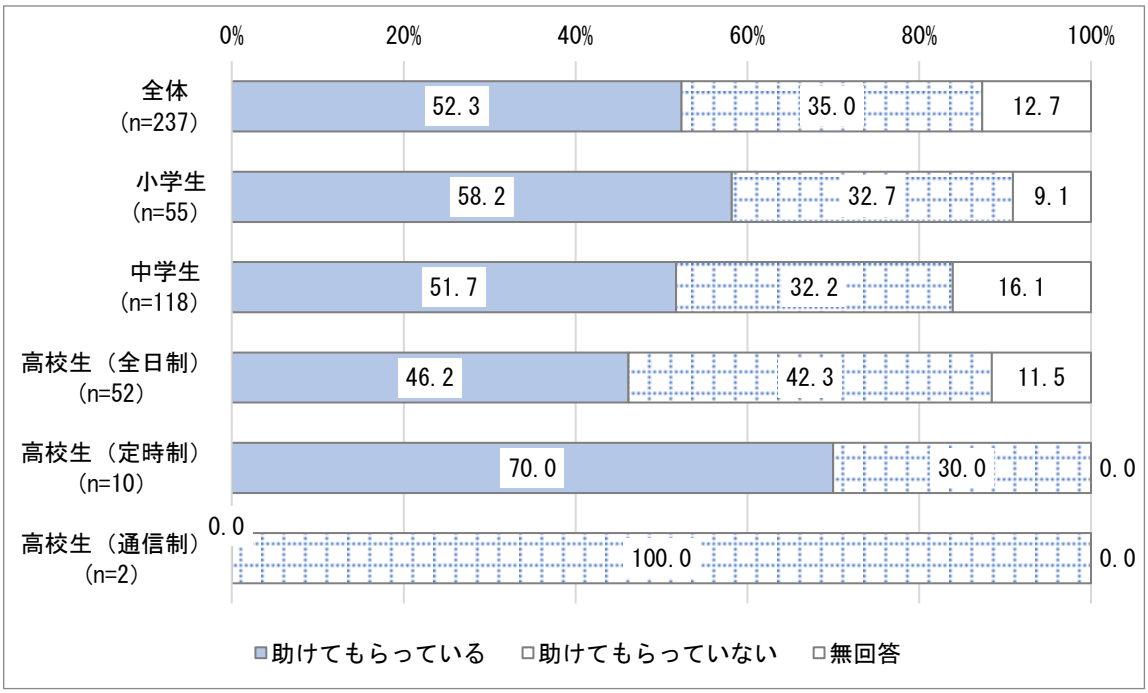
図表 15　自分が「ヤングケアラー」にあてはまるか



（５） 家事や家族のお世話を他の人に助けてもらっているか

自分が「ヤングケアラー」に「あてはまる」と回答した子どもに、家事や家族のお世話をすることを、他の人（ヘルパー、親せき、近所の人、友人）に助けてもらっているか聞いたところ、「助けてもらっている」のは、小学生で 58.2%、中学生で 51.7%、高校生（全日制）で 46.2%と、学年があがるにつれ、低くなっている。

図表 16　家事や家族のお世話を他の人に助けてもらっているか

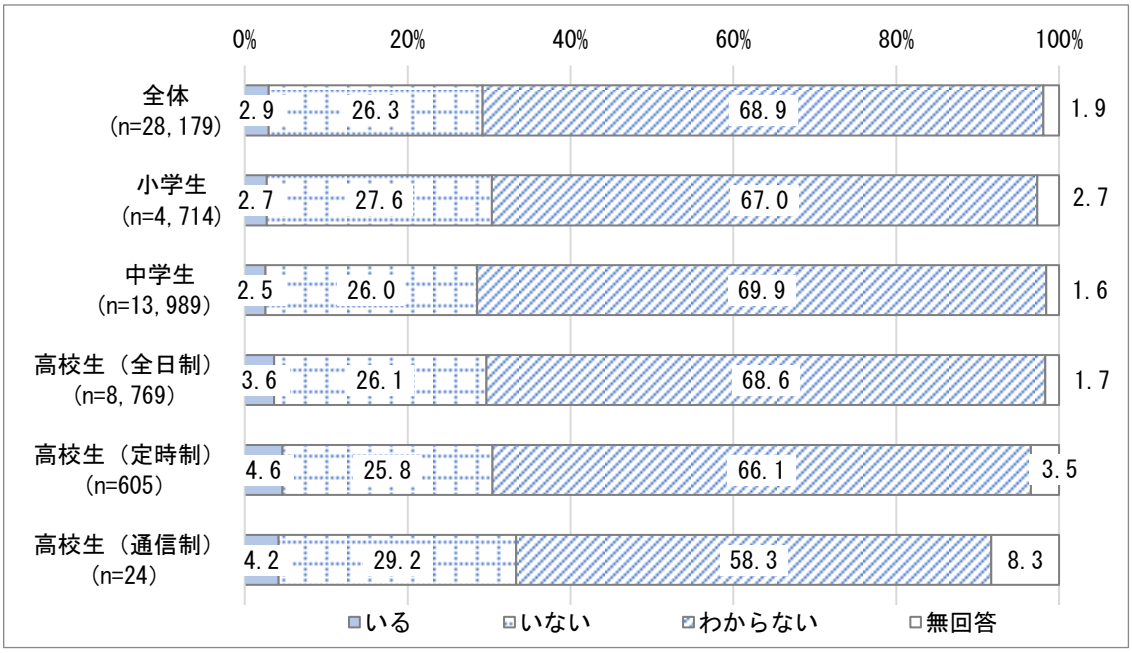


（６） 友人や周りに「ヤングケアラー」にあてはまる子どもはいるか

友人や周り（クラスメイト、違うクラスの子、違う学年の子、他の学校の友人）に「ヤングケアラー」にあてはまる子どもがいるか聞いたところ、「いる」は小学生で2.7%、中学生で2.5%、高校生（全日制）で3.6%、高校生（定時制）で 4.6%となっている。

一方、「わからない」が、いずれの学年においても７割近くとなっている。

図表 17　友人や周りに「ヤングケアラー」にあてはまる子どもはいるか



（７）「ヤングケアラー」の子どもがいた場合、どうするか

友人や周りに、「ヤングケアラー」にあてはまる子どもがいた場合、どうするか聞いたところ、いずれの学年でも、「相談にのってあげる、困っていることがないか聞いてみる」が最も高く、小学生 73.8%、中学生 73.1%、高校生（全日制）69.4%、高校生（定時制）62.0%となっている。

次いで、小学生では「家族（親、きょうだいなど）に相談する」（24.4%）、「学校の先生に相談する」、「相談できる場所（相談窓口など）を教えてあげる」（各 23.3%）、中学生では「学校の先生に相談する」（20.5%）、「相談できる場所（相談窓口など）を教えてあげる」（19.5%）、「家族（親、きょうだいなど）に相談する」（19.4%）となっている。

高校生では「わからない」が全日制 14.1%、定時制 18.2%で高くなっている。

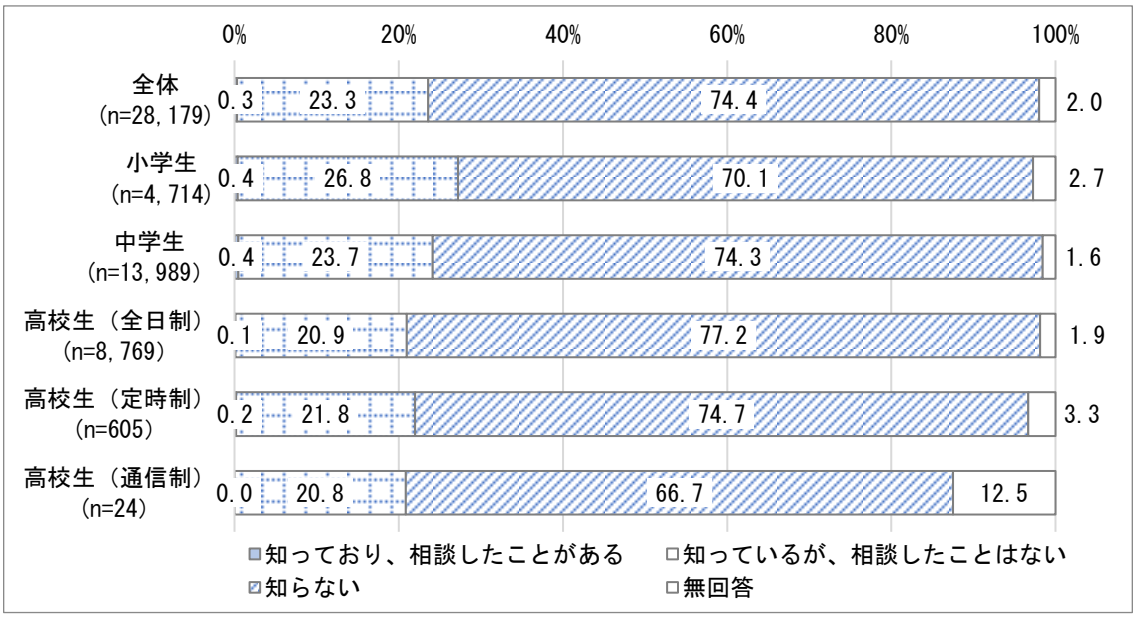
図表 18　「ヤングケアラー」の子どもがいた場合、どうするか（複数回答）　（%）

	全体（n＝）	相談にのってあげる、困っていることがないか聞いてみる	学校の先生に相談する	家族（親、きょうだいなど）に相談する	知り合いの大人（学童の先生、近所の人、スポ少のコーチ、じゅくの先生など）に相談する	別の友人に相談する	相談できる場所（相談窓口など）を教えてあげる	何もしない	わからない	その他	無回答
全体	28,179	71.7	18.1	18.0	4.6	9.4	17.5	4.4	12.8	0.3	2.1
小学生	4,714	73.8	23.3	24.4	6.2	14.0	23.3	2.9	12.0	0.5	2.6
中学生	13,989	73.1	20.5	19.4	5.6	10.3	19.5	4.0	12.0	0.3	1.6
高校生（全日制）	8,769	69.4	11.9	12.9	2.3	5.8	11.5	5.5	14.1	0.2	2.0
高校生（定時制）	605	62.0	12.1	9.9	2.0	5.1	13.2	6.9	18.2	0.0	4.3
高校生（通信制）	24	29.2	16.7	4.2	4.2	8.3	20.8	20.8	16.7	0.0	16.7

（８）「24 時間電話相談窓口」の認知状況

「24 時間電話相談窓口（0120-189-783、0120-0-78310）」の認知状況は、いずれの学年も「知らない」が７割強となっている。

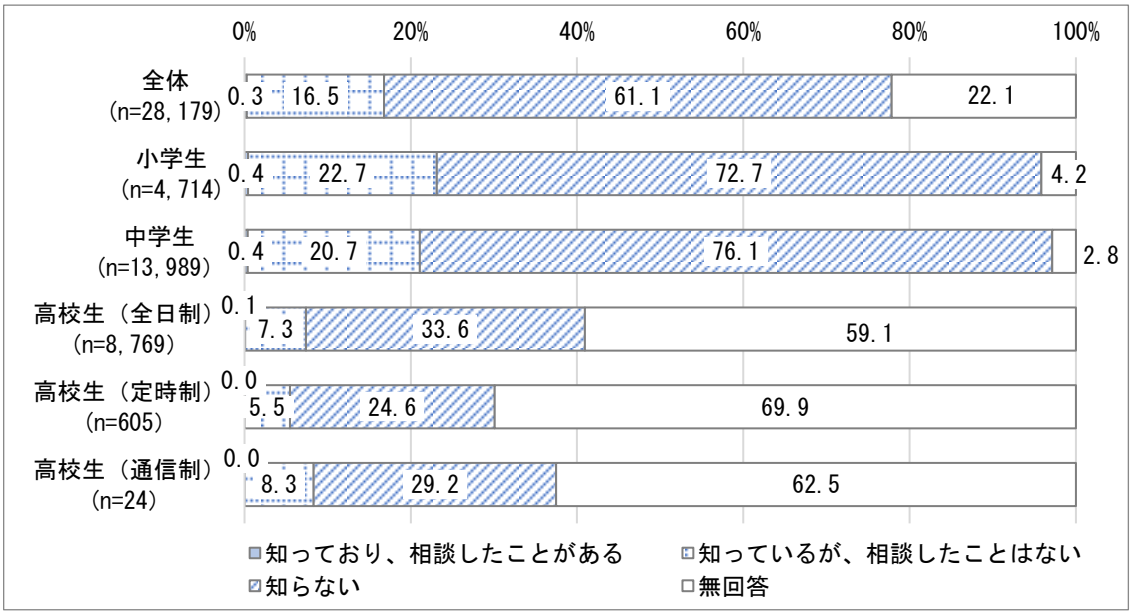
図表 19　「24 時間電話相談窓口」の認知状況



（９）「相談支援センター（山梨県総合教育センター）」の認知状況

「相談支援センター（山梨県総合教育センター）」について知っているか聞いたところ、知っている子ども（「知っており、相談したことがある」と「知っているが、相談したことはない」の合計）が小学生と中学生で２割強となっている。高校生では１割にも満たない。

図表 20　「相談支援センター（山梨県総合教育センター）」の認知状況



（１０）「24 時間電話相談窓口」に相談したことがない理由

「24 時間電話相談窓口」について、「知っているが、相談したことはない」と回答した子どもの、相談したことがない理由は、どの学年も「特に相談する必要がないから」が最も高く、小学生で 76.4%、中学生で 82.3%、高校生（全日制）では 90.2%となっている。

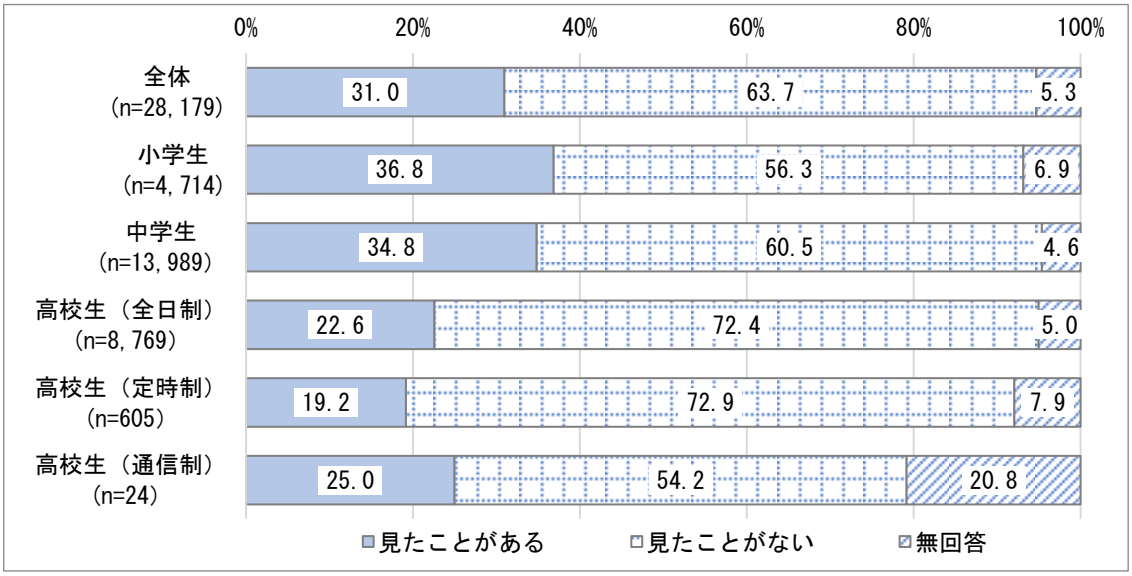
図表 21　「24 時間電話相談窓口」に相談したことがない理由（複数回答）　（%）

	全体（n＝）	特に相談する必要がないから	何を話したらよいかわからないから	話を聞いてもらえるか不安だから	話を聞いてくれる人がどんな人かわからないから	電話で話をするのが苦手だから	電話で相談していることを親や友人など周りの人に知られたくないから	相談しても何もかわらないと思うから	相談する時間がないから	その他	無回答
全体	6,560	83.4	8.6	3.6	6.8	6.1	5.4	5.9	2.8	0.5	6.2
小学生	1,264	76.4	12.1	7.3	11.5	9.3	10.1	6.7	3.9	1.0	7.7
中学生	3,314	82.3	9.7	3.8	7.5	6.6	6.0	7.0	3.0	0.4	7.1
高校生（全日制）	1,831	90.2	4.3	0.9	2.4	3.3	1.4	3.5	1.9	0.2	3.6
高校生（定時制）	132	81.8	7.6	2.3	4.5	1.5	0.8	6.8	0.8	0.0	5.3
高校生（通信制）	5	80.0	20.0	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	20.0	0.0

（１１）「山梨コネクトヤングケアラー」のカードを見たことの有無

「山梨コネクトヤングケアラー」のカードを見たことがあるか聞いたところ、小学生で 36.8%、中学生で 34.8%が、「見たことがある」となっている。高校生では２割前後と低くなっている。

図表 22　「山梨コネクトヤングケアラー」のカードを見たことの有無



（１２）「相談支援センター」に相談したことがない理由

「相談支援センター」について、「知っているが、相談したことはない」と回答した子どもの、相談したことがない理由は、どの学年も「特に相談する必要がないから」が最も高く、小学生で 73.6%、中学生で 81.5%、高校生（全日制）では 92.7%となっている。

図表 23 「相談支援センター」に相談したことがない理由（複数回答） （%）

	全体（n＝）	特に相談する必要がないから	何を話したらよいかわからないから	話を聞いてもらえるか不安だから	話を聞いてくれる人がどんな人かわからないから	直接会って、話をするのが苦手だから	直接会って、相談していることを親や友人など周りの人に知られたくないから	相談しても何もかわらないと思うから	相談する時間がないから	その他	無回答
全体	4,652	81.2	9.4	4.4	7.3	7.1	6.2	6.0	3.2	0.3	8.1
小学生	1,070	73.6	12.1	6.8	10.5	10.5	9.4	6.1	4.3	0.6	10.8
中学生	2,898	81.5	9.3	4.2	7.1	6.5	5.8	6.4	3.1	0.2	8.5
高校生（全日制）	640	92.7	5.2	1.1	3.3	4.4	2.3	3.4	2.0	0.2	1.7
高校生（定時制）	33	78.8	9.1	6.1	9.1	9.1	9.1	12.1	3.0	0.0	6.1
高校生（通信制）	2	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0

（１３） どんな方法で「山梨コネクトヤングケアラー」のカードをみたか

どんな方法で「山梨コネクトヤングケアラー」のカードをみたか聞いたところ、どの学年も「学校でカードをもらった」が最も高く８割以上となっている。

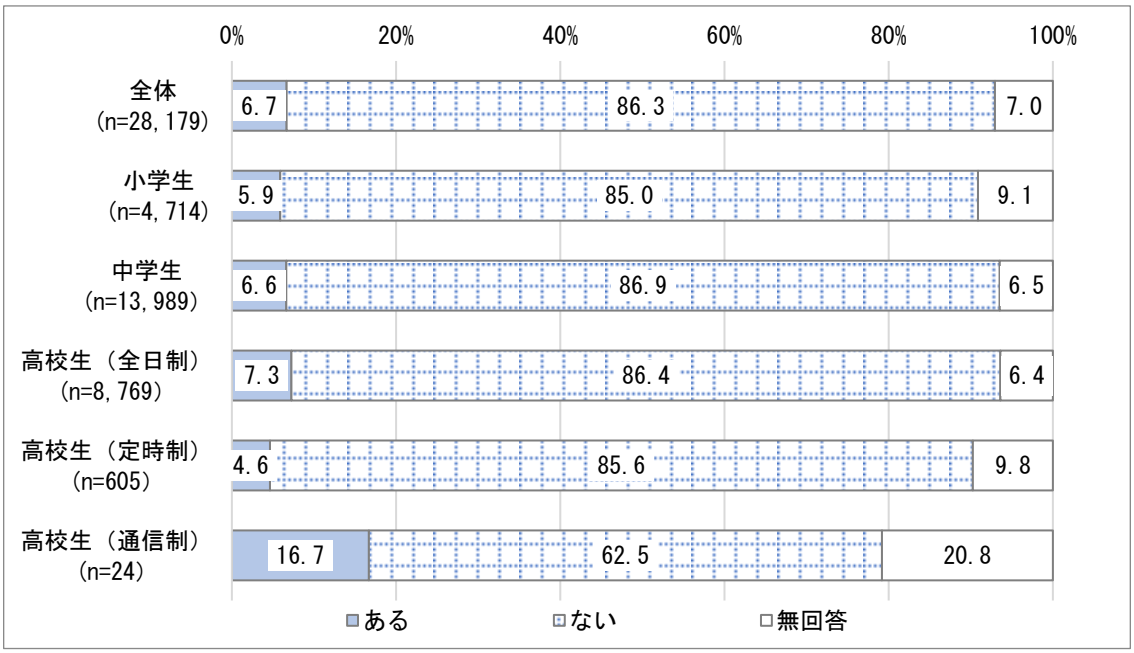
図表 24　どんな方法で「山梨コネクトヤングケアラー」のカードをみたか（複数回答）（%）

	全体（n＝）	学校でカードをもらった	子ども食堂でカードをもらった	テレビや新聞で見た	インターネットのホームページやSNSで見た	その他	無回答
全体	8,728	85.0	0.3	12.1	9.0	0.6	2.0
小学生	1,737	81.0	0.2	16.9	11.7	1.1	3.1
中学生	4,870	85.7	0.3	11.6	8.4	0.6	1.8
高校生（全日制）	1,980	86.8	0.1	9.2	8.1	0.1	1.3
高校生（定時制）	116	84.5	2.6	10.3	8.6	0.0	0.9
高校生（通信制）	6	100.0	16.7	16.7	16.7	0.0	0.0

（１４） YouTube で「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たことの有無

YouTube で「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たことがあるか聞いたところ、高校生（通信制）を除く全ての学年で８割以上が「ない」となっている。「ある」と回答した子どもは１割にも満たなかった。

図表 25　YouTube で「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たことの有無



（１５）「山梨コネクトヤングケアラー」の動画について

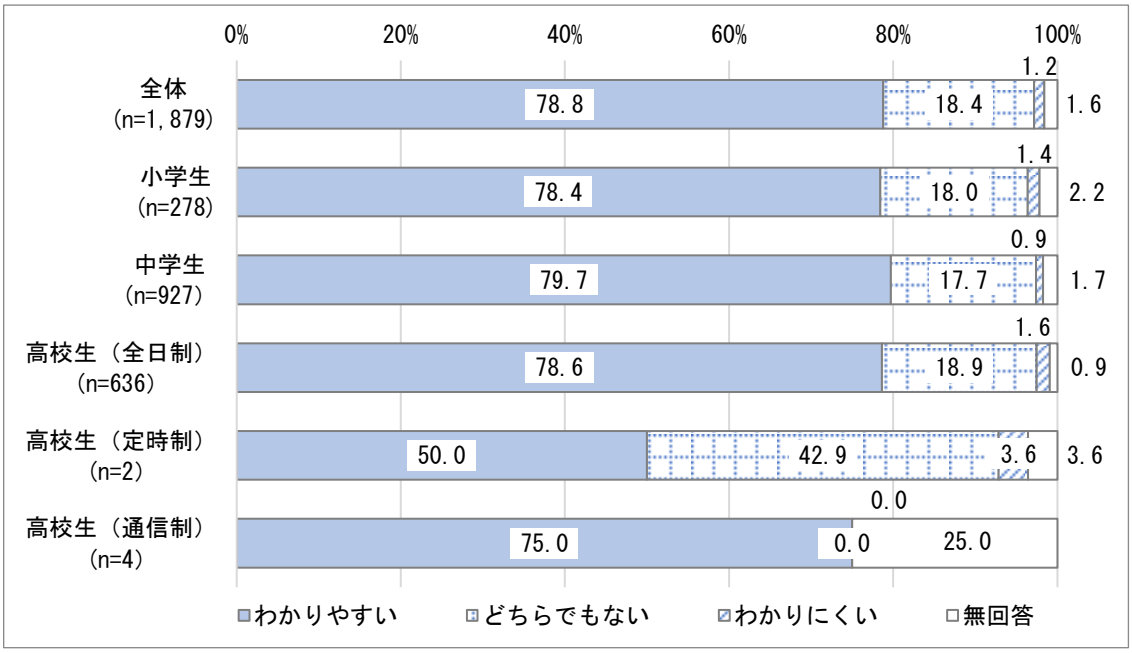
「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たことがあると回答した子どもに、どのようにして動画を知ったか聞いたところ、どの学年も「SNS（YouTube、Twitter、TikTok）の広告で知った」が最も高く、小学生で 67.6%、中学生で 67.2%となっている。次いで小学生では「テレビや新聞で見た」、中学生、高校生では「学校や子ども食堂でもらったカードから知った」となっている。

図表 26　「山梨コネクトヤングケアラー」動画の認知経路　（%）

	全体（n＝）	学校や子ども食堂でもらったカードから知った	SNS（YouTube、Twitter、TikTok）の広告で知った	インターネットのホームページから知った	テレビや新聞で見た	その他	無回答
全体	1,879	23.1	63.3	9.4	12.1	1.8	2.4
小学生	278	7.2	67.6	16.2	18.7	3.2	5.0
中学生	927	17.2	67.2	11.2	13.8	2.3	2.7
高校生（全日制）	636	38.2	55.5	3.9	7.2	0.6	1.1
高校生（定時制）	28	35.7	64.3	7.1	0.0	0.0	0.0
高校生（通信制）	4	25.0	75.0	0.0	0.0	0.0	0.0

「山梨コネクトヤングケアラー」の動画を見たと回答した子どもに、動画のわかりやすさについて聞いたところ、どの区分も「わかりやすい」が最も高く、小学生、中学生、高校生（全日制）では８割近くとなっている。

図表 27　動画のわかりやすさ



4. ヤングケアラーについて（追加分析）

（１） 自身がヤングケアラーか自己認識別の「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

自身が「ヤングケアラー」にあてはまるか自己認識別の「ヤングケアラー」の認知状況をみると、小学生から高校生まで共通して、自身が「ヤングケアラー」に「あてはまらない」とする子どもは「聞いたことがあり、内容も知っている」割合が高くなっている。

小学生では、自身が「ヤングケアラー」にあてはまるか「わからない」と回答した子どもの大半が、「聞いたことはあるが、よく知らない」「聞いたことはない」としており、アンケート時の説明やイラストでは「ヤングケアラー」のことを理解できないため、素直に「わからない」と回答している子どもが多くいることがうかがえる。

一方、中学生以上では、自身が「ヤングケアラー」に「あてはまる」子どもは「ヤングケアラー」のことを理解していると回答している割合が高くなっている。また、「わからない」と回答している子どもの半数は「聞いたことはあるが、よく知らない」としており、小学生同様に「ヤングケアラー」の言葉だけでは判断できないため「わからない」と回答していることが推察される。ただし、中学生以上で「わからない」と回答しているそれぞれ２割の子どもは「ヤングケアラー」のことを理解しても「わからない」と回答しており、自身が「ヤングケアラー」と言いづらいのか、認めたくないのかといったことを見極めていく必要がある。

図表 28　自身がヤングケアラーであるかの自己認識別　「ヤングケアラー」という言葉の認知状況　（%）

		全体（n＝）	聞いたことがあり、内容も知っている	聞いたことはあるが、よく知らない	聞いたことはない	無回答
全体	あてはまる	237	37.1	29.1	33.8	0.0
	わからない	4,426	19.0	47.2	33.8	0.0
	あてはまらない	23,184	63.1	27.4	9.5	0.0
小学生	あてはまる	55	16.4	27.3	56.4	0.0
	わからない	1,059	11.2	32.5	56.3	0.0
	あてはまらない	3,527	41.5	32.4	26.1	0.0
中学生	あてはまる	118	38.1	30.5	31.4	0.0
	わからない	1,991	21.1	47.0	31.8	0.0
	あてはまらない	11,754	63.3	28.3	8.4	0.0
高校生（全日制）	あてはまる	52	55.8	25.0	19.2	0.0
	わからない	1,219	21.8	59.1	19.1	0.0
	あてはまらない	7,403	72.7	23.7	3.6	0.0
高校生（定時制）	あてはまる	10	50.0	40.0	10.0	0.0
	わからない	142	21.8	58.5	19.7	0.0
	あてはまらない	436	69.0	25.7	5.3	0.0
高校生（通信制）	あてはまる	2	0.0	50.0	50.0	0.0
	わからない	4	25.0	50.0	25.0	0.0
	あてはまらない	16	56.3	25.0	18.8	0.0

（２） 自身が「ヤングケアラー」か自己認識別の現在、悩んだり困っていること

現在、悩んだり困っていることは、自身の「ヤングケアラー」かどうかの自己認識にかかわらず、上位は同じ傾向となっているが、自身が「ヤングケアラー」に「あてはまる」とする子どもは、他に比べて「自分と家族との関係のこと」「家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）」「病気や障がいのある家族のこと」「自分のために使える時間が少ない」をあげる割合が高く、「特にない」とする割合は低くなっている。また、自身が「ヤングケアラー」にあてはまるか「わからない」とする子どもも、「あてはまらない」とする子どもに比べて、「自分と家族との関係のこと」「家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）」「病気や障がいのある家族のこと」「自分のために使える時間が少ない」をあげる割合が高く、「特にない」とする割合は低くなっている。

図表 29　自身が「ヤングケアラー」かの自己認識別　現在、悩んだり困っていること（複数回答）　（%）

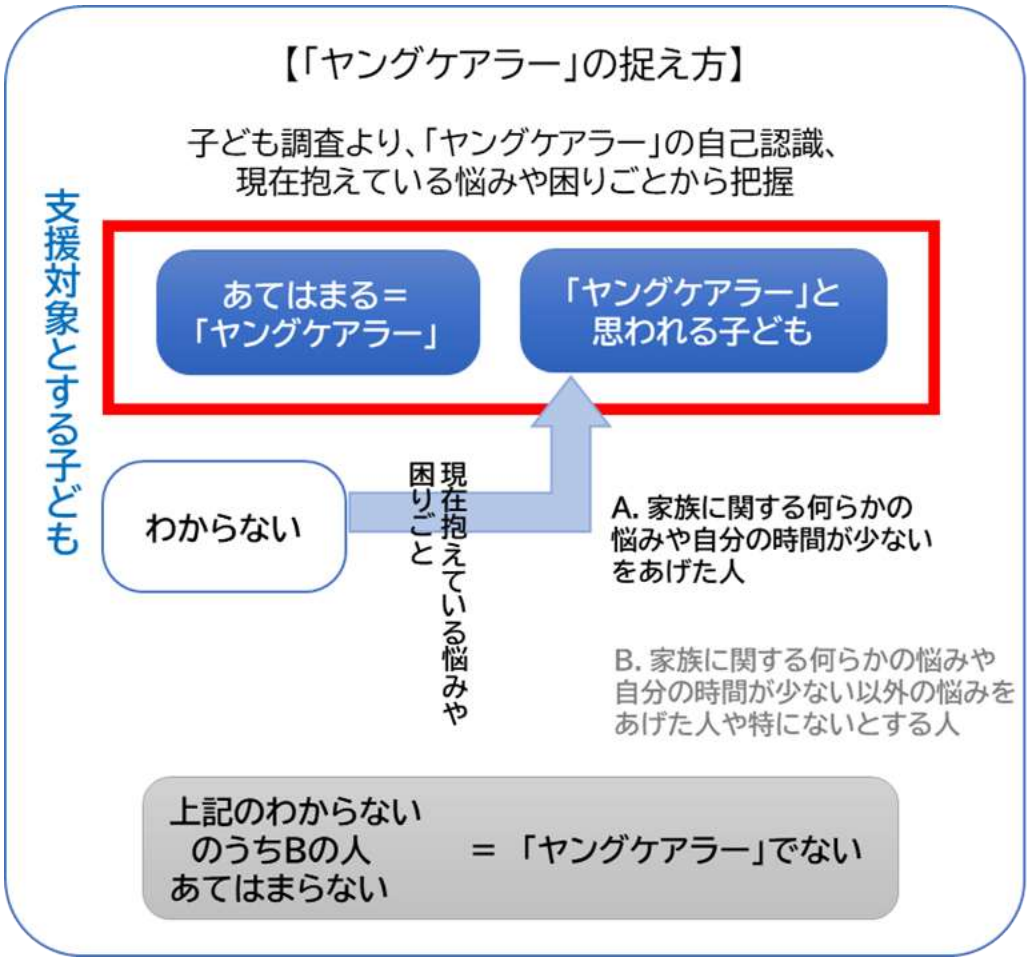
		全体(n＝)	友人との関係のこと	勉強のこと（学校の成績など）	しょうらいの夢や進路のこと	部活動のこと	じゅくや習い事ができないこと	学校に支払うお金のこと（学費、集金など）	家庭のお金のこと（食べ物を買うお金や必要なものを買うお金がたりないことなど）
全体	あてはまる	237	19.4	46.8	42.2	15.6	6.3	7.6	11.4
	わからない	4,426	16.9	41.5	35.0	10.1	2.6	3.5	4.0
	あてはまらない	23,184	14.1	40.1	36.3	9.5	1.2	1.8	1.6
小学生	あてはまる	55	29.1	41.8	29.1	12.7	5.5	7.3	9.1
	わからない	1,059	19.0	24.1	22.9	5.5	2.8	1.8	2.9
	あてはまらない	3,527	14.5	16.2	19.2	4.4	1.5	0.8	1.1
中学生	あてはまる	118	19.5	52.5	43.2	15.3	6.8	5.9	9.3
	わからない	1,991	19.0	52.2	36.9	10.9	3.6	3.0	3.9
	あてはまらない	11,754	15.7	44.0	34.8	9.3	1.4	1.0	1.4
高校生（全日制）	あてはまる	52	7.7	42.3	46.2	17.3	3.8	9.6	15.4
	わからない	1,219	12.0	39.9	41.7	13.5	1.1	4.9	4.5
	あてはまらない	7,403	11.4	45.8	46.2	12.4	0.6	3.2	2.1
高校生（定時制）	あてはまる	10	30.0	30.0	80.0	30.0	20.0	20.0	20.0
	わからない	142	15.5	37.3	43.7	3.5	0.7	12.0	10.6
	あてはまらない	436	12.6	34.4	46.6	7.8	0.9	4.8	3.4
高校生（通信制）	あてはまる	2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0
	わからない	4	25.0	50.0	50.0	0.0	0.0	25.0	0.0
	あてはまらない	16	25.0	43.8	68.8	18.8	12.5	12.5	12.5

		全体（n＝）	自分と家族との関係のこと	家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）	病気や障がいのある家族のこと	自分のために使える時間が少ない	特にない	その他	無回答
全体	あてはまる	237	18.1	13.9	12.2	11.8	29.1	0.8	1.7
	わからない	4,426	8.9	6.8	2.8	6.3	37.8	1.2	1.8
	あてはまらない	23,184	4.0	3.1	0.8	3.4	40.8	0.6	1.9
小学生	あてはまる	55	16.4	10.9	12.7	12.7	29.1	3.6	0.0
	わからない	1,059	8.0	5.6	2.3	4.3	50.0	2.2	2.5
	あてはまらない	3,527	4.2	3.1	0.9	2.4	60.9	1.0	2.4
中学生	あてはまる	118	16.9	11.9	10.2	11.0	30.5	0.0	2.5
	わからない	1,991	10.6	8.3	3.5	6.4	33.0	0.9	1.8
	あてはまらない	11,754	4.1	3.1	0.7	2.8	40.0	0.6	2.3
高校生（全日制）	あてはまる	52	19.2	19.2	13.5	11.5	28.8	0.0	1.9
	わからない	1,219	6.5	5.7	2.1	7.3	35.9	0.9	1.2
	あてはまらない	7,403	3.6	2.9	0.7	4.6	32.7	0.3	1.0
高校生（定時制）	あてはまる	10	40.0	30.0	20.0	20.0	10.0	0.0	0.0
	わからない	142	11.3	4.9	4.2	10.6	31.7	2.1	0.0
	あてはまらない	436	5.3	3.9	2.1	3.7	38.8	0.9	0.7
高校生（通信制）	あてはまる	2	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	わからない	4	25.0	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0	0.0
	あてはまらない	16	12.5	12.5	12.5	18.8	25.0	0.0	0.0

（３） 自身が「ヤングケアラー」および、自身では「ヤングケアラー」かわからないが「ヤングケアラー」と思われる子ども

前述にもあげたように、自身が「ヤングケアラー」かの自己認識で「わからない」と回答した子どもについて、さらに分析を行ったところ、実際に家族のことや、自分自身に使える時間のことで悩んだり困ったりしている子どもが多くいることが明らかとなった。

自身が「ヤングケアラー」に「あてはまる」と回答した子ども及び、「わからない」と回答した子どものうち、「自分と家族との関係のこと」「家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）」「病気や障がいのある家族のこと」「自分のために使える時間が少ない」のいずれか１つ以上選んだ子どもを「ヤングケアラー」と思われる子どもとし、それぞれの状況についてみていくこととする。



① 家族構成

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、「ひとり親世帯」の割合が高くなっている。

図表 30　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　家族構成　（%）

		全体（n＝）	一般世帯（親と子）	三世代	ひとり親世帯	その他の世帯	無回答
全体	ヤングケアラー	237	49.8	24.1	22.4	3.0	0.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	53.2	23.6	17.7	4.9	0.6
	ヤングケアラーではない	26,830	65.5	21.5	10.2	2.3	0.5
小学生	ヤングケアラー	55	52.7	20.0	23.6	3.6	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	52.7	23.3	18.5	4.8	0.7
	ヤングケアラーではない	4,440	68.4	20.3	8.5	2.3	0.5
中学生	ヤングケアラー	118	50.8	23.7	22.9	1.7	0.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	57.0	21.9	17.6	2.8	0.8
	ヤングケアラーではない	13,347	66.2	21.4	9.7	2.3	0.5
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	46.2	28.8	21.2	3.8	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	48.3	26.4	16.9	8.5	0.0
	ヤングケアラーではない	8,421	63.5	22.2	11.7	2.3	0.3
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	40.0	30.0	10.0	10.0	10.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	40.0	26.7	20.0	10.0	3.3
	ヤングケアラーではない	548	54.6	23.7	16.2	4.6	0.9
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	66.7	0.0	22.2	11.1	0.0

② 健康状態

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、健康状態が「あまりよくない」「よくない」といった割合が高くなっている。中でも「ヤングケアラー」と思われる子どもは高くなっている。

図表 31　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　自身の健康　（%）

		全体(n＝)	よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
全体	ヤングケアラー	237	48.9	16.9	19.4	11.8	3.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	26.5	19.6	35.3	16.0	2.2	0.4
	ヤングケアラーではない	26,830	62.7	16.3	17.7	2.8	0.4	0.1
小学生	ヤングケアラー	55	45.5	25.5	21.8	5.5	1.8	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	37.7	14.4	34.9	11.6	1.4	0.0
	ヤングケアラーではない	4,440	64.7	15.5	16.9	2.4	0.4	0.1
中学生	ヤングケアラー	118	51.7	14.4	19.5	12.7	1.7	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	24.1	22.6	35.2	15.3	2.3	0.5
	ヤングケアラーではない	13,347	62.6	16.4	17.8	2.8	0.4	0.1
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	53.8	17.3	13.5	13.5	1.9	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	24.9	17.4	36.8	18.9	2.0	0.0
	ヤングケアラーではない	8,421	62.4	16.4	17.9	2.9	0.4	0.0
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	10.0	0.0	30.0	30.0	30.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	16.7	20.0	26.7	30.0	6.7	0.0
	ヤングケアラーではない	548	54.7	19.0	21.2	4.2	0.7	0.2
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	50.0	11.1	33.3	0.0	5.6	0.0

③ 現在、悩んだり困っていること

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、さまざまな悩みや困りごとをあげる割合が高く、中でも、「ヤングケアラー」と思われる子どもは大半が何らかの悩みや困りごとがあるとしている。

図表 32　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　現在、悩んだり困っていること

（複数回答）（%）

		全体（n＝）	友人との関係のこと	勉強のこと（学校の成績など）	しょうらいの夢や進路のこと	部活動のこと	じゅくや習い事ができないこと	学校に支払うお金のこと（学費、集金など）	家庭のお金のこと（食べ物を買うお金や必要なものを買うお金がたりないことなど）
全体	ヤングケアラー	237	19.4	46.8	42.2	15.6	6.3	7.6	11.4
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	38.8	64.2	60.9	21.4	7.2	11.5	13.3
	ヤングケアラーではない	26,830	13.8	39.7	35.4	9.3	1.2	1.8	1.7
小学生	ヤングケアラー	55	29.1	41.8	29.1	12.7	5.5	7.3	9.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	38.4	43.8	45.9	13.7	5.5	8.2	12.3
	ヤングケアラーではない	4,440	14.8	17.2	19.2	4.3	1.7	0.8	1.2
中学生	ヤングケアラー	118	19.5	52.5	43.2	15.3	6.8	5.9	9.3
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	45.0	74.9	65.8	20.4	9.8	8.0	12.8
	ヤングケアラーではない	13,347	15.3	44.3	34.2	9.2	1.5	1.1	1.4
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	7.7	42.3	46.2	17.3	3.8	9.6	15.4
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	27.4	60.2	62.7	30.8	4.0	16.9	13.9
	ヤングケアラーではない	8,421	11.1	44.6	45.1	12.1	0.6	3.1	2.1
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	30.0	30.0	80.0	30.0	20.0	20.0	20.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	43.3	46.7	60.0	13.3	3.3	36.7	23.3
	ヤングケアラーではない	548	11.7	34.5	45.1	6.4	0.7	4.9	4.2
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	27.8	44.4	66.7	16.7	11.1	11.1	11.1

		全体（n＝）	自分と家族との関係のこと	家族内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）	病気や障がいのある家族のこと	自分のために使える時間が少ない	特にない	その他	無回答
全体	ヤングケアラー	237	18.1	13.9	12.2	11.8	29.1	0.8	1.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	50.5	38.5	16.0	35.9	1.4	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	26,830	3.4	2.6	0.7	2.9	41.5	0.7	1.9
小学生	ヤングケアラー	55	16.4	10.9	12.7	12.7	29.1	3.6	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	58.2	40.4	16.4	31.5	2.7	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	4,440	3.4	2.5	0.7	1.9	60.2	1.4	2.5
中学生	ヤングケアラー	118	16.9	11.9	10.2	11.0	30.5	0.0	2.5
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	53.3	41.5	17.3	31.9	0.8	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	13,347	3.6	2.7	0.7	2.5	40.1	0.7	2.3
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	19.2	19.2	13.5	11.5	28.8	0.0	1.9
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	39.3	34.3	12.9	44.3	1.5	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	8,421	3.1	2.5	0.6	4.0	33.9	0.4	1.0
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	40.0	30.0	20.0	20.0	10.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	53.3	23.3	20.0	50.0	3.3	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	548	4.2	3.1	1.6	2.9	38.9	1.3	0.5
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	11.1	11.1	11.1	16.7	27.8	0.0	0.0

④ この１年間で学校で大人に相談したこと

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに、小学生、中学生は、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、この１年間で学校で大人に「相談したことがある」割合が高くなっている。一方、高校生（全日制）」は大きな違いは見られない。

図表 33　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　この１年間で学校で大人に相談したこと

（%）

		全体（n＝）	相談したことがある	相談したことがない	無回答
全体	ヤングケアラー	237	35.9	61.6	2.5
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	37.9	60.3	1.8
	ヤングケアラーではない	26,830	30.0	67.2	2.8
小学生	ヤングケアラー	55	36.4	61.8	1.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	36.3	62.3	1.4
	ヤングケアラーではない	4,440	26.5	70.2	3.2
中学生	ヤングケアラー	118	35.6	62.7	1.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	42.7	56.0	1.3
	ヤングケアラーではない	13,347	29.9	67.3	2.8
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	30.8	63.5	5.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	28.9	68.2	3.0
	ヤングケアラーではない	8,421	31.6	66.0	2.3
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	60.0	40.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	40.0	60.0	0.0
	ヤングケアラーではない	548	36.3	60.4	3.3
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	50.0	50.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	50.0	50.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	33.3	66.7	0.0

⑤ 学校の大人への相談のしやすさ

学校の大人への相談のしやすさについて「相談しやすい」とあげた割合をみると、「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」のいずれも学年を問わず、「担任の先生」が高くなっているものの、「ヤングケアラー」と思われる子どもは他に比べて、「相談しやすい」とする割合が低くなっている。

図表 34　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　悩んだり困ったりしたことを相談しやすいか_「相談しやすい」割合　（%）

		全体（n＝）	担任の先生	保健室の先生（養護教諭）	カウンセラーの先生
全体	ヤングケアラー	237	43.0	31.2	25.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	32.6	22.9	20.4
	ヤングケアラーではない	26,830	47.9	27.1	20.3
小学生	ヤングケアラー	55	52.7	49.1	29.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	32.2	24.0	20.5
	ヤングケアラーではない	4,440	46.1	35.7	20.5
中学生	ヤングケアラー	118	40.7	28.8	27.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	32.9	25.6	25.1
	ヤングケアラーではない	13,347	47.5	30.2	25.9
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	36.5	15.4	17.3
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	33.8	19.4	10.4
	ヤングケアラーではない	8,421	49.7	18.3	11.9
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	50.0	40.0	30.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	23.3	10.0	23.3
	ヤングケアラーではない	548	46.7	18.2	11.9
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	50.0	50.0	50.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	44.4	11.1	11.1

⑥「ヤングケアラー」の言葉の認知度と

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、「聞いたことはない」割合が高くなっている。

図表 35　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　「ヤングケアラー」の言葉の認知度

（%）

		全体（n＝）	聞いたことがあり、内容も知っている	聞いたことはあるが、よく知らない	聞いたことはない	無回答
全体	ヤングケアラー	237	37.1	29.1	33.8	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	38.8	38.7	22.4	0.0
	ヤングケアラーではない	26,830	56.5	30.3	13.2	0.0
小学生	ヤングケアラー	55	16.4	27.3	56.4	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	21.2	34.2	44.5	0.0
	ヤングケアラーではない	4,440	35.0	32.3	32.7	0.0
中学生	ヤングケアラー	118	38.1	30.5	31.4	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	43.0	37.4	19.6	0.0
	ヤングケアラーではない	13,347	57.6	30.8	11.6	0.0
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	55.8	25.0	19.2	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	44.8	41.8	13.4	0.0
	ヤングケアラーではない	8,421	66.0	28.4	5.6	0.0
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	50.0	40.0	10.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	33.3	50.0	16.7	0.0
	ヤングケアラーではない	548	58.8	32.8	8.4	0.0
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	50.0	50.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	50.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	50.0	27.8	22.2	0.0

⑦「ヤングケアラー相談窓口」について 「知っており、相談したことのある」子ども

「ヤングケアラー相談窓口」である、「24 時間電話相談窓口」「相談支援センター」ともに、「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」のいずれも学年を問わず、「知っており、相談したことのある」子どもはほとんどいなかった。

図表 36 「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別 「ヤングケアラー相談窓口」について_「知っており、相談したことがある」 （%）

		全体（n＝）	24 時間電話相談窓口	相談支援センター
全体	ヤングケアラー	237	1.7	0.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	1.2	1.4
	ヤングケアラーではない	26,830	0.3	0.3
小学生	ヤングケアラー	55	3.6	1.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	0.7	2.1
	ヤングケアラーではない	4,440	0.3	0.4
中学生	ヤングケアラー	118	1.7	0.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	2.0	1.8
	ヤングケアラーではない	13,347	0.4	0.3
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	0.0	0.5
	ヤングケアラーではない	8,421	0.1	0.1
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	548	0.2	0.0
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	0.0	0.0

⑧「24 時間電話相談窓口」、「相談支援センター」へ相談したことがない理由

「24 時間電話相談窓口」、「相談支援センター」へ相談したことがない理由については、どちらも、「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、相談することに対して何らかの不安を感じている子どもが多く、特に小学生、中学生は「電話や直接会って相談していることを親や友人など周りの人に知られたくないから」をあげる子どもの割合が高くなっている。また、「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに、「相談しても何もかわらないと思うから」をあげる子どもも多く、相談すること自体をあきらめている子どもがいることがうかがえる。

図表 37　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　「24 時間電話相談窓口」相談したことがない理由（複数回答）　（%）

		全体（n＝）	特に相談する必要がないから	何を話したらよいかわからないから	話を聞いてもらえるか不安だから	話を聞いてくれる人がどんな人かわからないから	電話で話をするのが苦手だから
全体	ヤングケアラー	75	48.0	34.7	14.7	16.0	17.3
	ヤングケアラーと思われる子ども	221	42.1	33.9	18.6	32.1	32.6
	ヤングケアラーではない	6,264	85.3	7.4	3.0	5.8	5.0
小学生	ヤングケアラー	16	56.3	31.3	18.8	31.3	25.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	41	22.0	41.5	34.1	41.5	41.5
	ヤングケアラーではない	1,207	78.5	10.9	6.2	10.2	8.0
中学生	ヤングケアラー	38	50.0	34.2	18.4	13.2	10.5
	ヤングケアラーと思われる子ども	117	44.4	35.0	18.8	35.9	35.9
	ヤングケアラーではない	3,159	84.1	8.4	3.1	6.4	5.5
高校生（全日制）	ヤングケアラー	17	47.1	35.3	5.9	11.8	29.4
	ヤングケアラーと思われる子ども	55	52.7	23.6	7.3	12.7	21.8
	ヤングケアラーではない	1,759	91.8	3.4	0.6	2.0	2.5
高校生（定時制）	ヤングケアラー	3	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	7	28.6	42.9	14.3	57.1	0.0
	ヤングケアラーではない	122	86.9	4.1	1.6	1.6	1.6
高校生（通信制）	ヤングケアラー	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	1	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0
	ヤングケアラーではない	3	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		全体（n＝）	電話で相談していることを親や友人など周りの人に知られたくないから	相談しても何もかわらないと思うから	相談する時間がないから	その他	無回答
全体	ヤングケアラー	75	21.3	22.7	10.7	2.7	6.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	221	26.7	32.1	15.4	0.9	3.6
	ヤングケアラーではない	6,264	4.5	4.8	2.3	0.4	6.3
小学生	ヤングケアラー	16	31.3	18.8	12.5	6.3	6.3
	ヤングケアラーと思われる子ども	41	36.6	43.9	24.4	2.4	4.9
	ヤングケアラーではない	1,207	8.9	5.3	3.1	0.9	7.8
中学生	ヤングケアラー	38	26.3	26.3	13.2	0.0	7.9
	ヤングケアラーと思われる子ども	117	30.8	30.8	12.8	0.0	2.6
	ヤングケアラーではない	3,159	4.9	5.9	2.5	0.4	7.2
高校生（全日制）	ヤングケアラー	17	5.9	23.5	5.9	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	55	12.7	23.6	16.4	1.8	5.5
	ヤングケアラーではない	1,759	1.0	2.7	1.4	0.2	3.6
高校生（定時制）	ヤングケアラー	3	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3
	ヤングケアラーと思われる子ども	7	14.3	57.1	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	122	0.0	4.1	0.8	0.0	4.9
高校生（通信制）	ヤングケアラー	1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

図表 38　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　「相談支援センター」相談したことがない理由（複数回答）

（%）

		全体（n＝）	特に相談する必要がないから	何を話したらよいかわからないから	話を聞いてもらえるか不安だから	話を聞いてくれる人がどんな人かわからないから	直接会って、話をするのが苦手だから
全体	ヤングケアラー	52	53.8	23.1	19.2	17.3	26.9
	ヤングケアラーと思われる子ども	158	43.7	36.7	23.4	32.3	28.5
	ヤングケアラーではない	4,442	82.8	8.2	3.5	6.3	6.1
小学生	ヤングケアラー	14	50.0	21.4	28.6	28.6	35.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	20.0	46.7	33.3	33.3	40.0
	ヤングケアラーではない	1,026	75.4	11.0	5.8	9.6	9.3
中学生	ヤングケアラー	32	59.4	18.8	18.8	12.5	18.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	105	49.5	33.3	21.9	33.3	23.8
	ヤングケアラーではない	2,761	82.9	8.3	3.3	6.0	5.7
高校生（全日制）	ヤングケアラー	5	40.0	60.0	0.0	20.0	60.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	20	55.0	35.0	15.0	20.0	35.0
	ヤングケアラーではない	615	94.3	3.7	0.7	2.6	2.9
高校生（定時制）	ヤングケアラー	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	3	0.0	66.7	33.3	66.7	33.3
	ヤングケアラーではない	30	86.7	3.3	3.3	3.3	6.7
高校生（通信制）	ヤングケアラー	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

（%）

		全体（n＝）	直接会って、相談していることを親や友人など周りの人に知られたくないから	相談しても何もかわらないと思うから	相談する時間がないから	その他	無回答
全体	ヤングケアラー	52	25.0	23.1	9.6	1.9	9.6
	ヤングケアラーと思われる子ども	158	29.7	30.4	12.0	0.6	7.6
	ヤングケアラーではない	4,442	5.1	4.9	2.8	0.2	8.1
小学生	ヤングケアラー	14	28.6	21.4	7.1	7.1	7.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	46.7	40.0	16.7	3.3	10.0
	ヤングケアラーではない	1,026	8.1	4.9	3.9	0.4	10.9
中学生	ヤングケアラー	32	28.1	25.0	9.4	0.0	9.4
	ヤングケアラーと思われる子ども	105	26.7	26.7	10.5	0.0	8.6
	ヤングケアラーではない	2,761	4.7	5.4	2.7	0.2	8.5
高校生（全日制）	ヤングケアラー	5	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	20	20.0	30.0	10.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	615	1.8	2.4	1.6	0.2	1.8
高校生（定時制）	ヤングケアラー	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	3	33.3	66.7	33.3	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	30	6.7	6.7	0.0	0.0	6.7
高校生（通信制）	ヤングケアラー	1	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

⑨ 今の生活の満足度

「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子どもともに学年を問わず、「ヤングケアラーではない（ヤングケアラーにあてはまらない）」に比べて、今の生活の満足度の平均点が低く、中でも、「ヤングケアラー」と思われる子どもの平均点は５点前後と、他に比べて１点以上の差がある。

図表 39　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　今の生活の満足度　（%）

		全体（n＝）	０点	１点	２点	３点	４点	５点	６点
全体	ヤングケアラー	237	3.8	3.0	4.2	8.9	8.0	13.5	5.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	3.3	3.8	6.7	12.4	14.9	17.7	12.3
	ヤングケアラーではない	26,830	0.6	0.4	1.1	2.9	4.5	10.5	9.1
小学生	ヤングケアラー	55	5.5	5.5	5.5	7.3	5.5	16.4	3.6
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	0.7	4.8	4.8	18.5	13.0	16.4	13.0
	ヤングケアラーではない	4,440	0.7	0.4	0.8	2.2	3.9	7.5	6.1
中学生	ヤングケアラー	118	4.2	1.7	1.7	8.5	10.2	12.7	5.1
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	3.3	4.0	6.3	11.1	17.6	15.6	12.1
	ヤングケアラーではない	13,347	0.5	0.3	1.0	2.8	4.3	9.4	7.7
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	1.9	1.9	9.6	7.7	5.8	7.7	7.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	4.5	3.0	7.0	10.9	11.9	21.4	12.9
	ヤングケアラーではない	8,421	0.6	0.5	1.3	3.2	5.2	13.5	12.8
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	0.0	0.0	0.0	30.0	10.0	40.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	10.0	3.3	13.3	13.3	10.0	20.0	10.0
	ヤングケアラーではない	548	1.6	2.0	1.5	4.7	4.6	15.0	12.4
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0
	ヤングケアラーではない	18	5.6	0.0	0.0	5.6	11.1	5.6	5.6

（%）

		全体（n＝）	７点	８点	９点	10点	無回答	平 均
全体	ヤングケアラー	237	10.1	11.0	9.7	19.4	3.4	6.29
	ヤングケアラーと思われる子ども	780	12.9	9.1	3.2	3.1	0.5	5.02
	ヤングケアラーではない	26,830	15.9	20.4	13.7	20.5	0.5	7.42
小学生	ヤングケアラー	55	10.9	3.6	12.7	21.8	1.8	6.13
	ヤングケアラーと思われる子ども	146	9.6	12.3	2.7	4.1	0.0	5.14
	ヤングケアラーではない	4,440	11.7	17.3	17.3	31.7	0.5	7.94
中学生	ヤングケアラー	118	7.6	12.7	11.0	22.0	2.5	6.57
	ヤングケアラーと思われる子ども	398	14.3	7.0	4.8	3.5	0.5	5.08
	ヤングケアラーではない	13,347	14.5	20.9	15.7	22.5	0.4	7.59
高校生（全日制）	ヤングケアラー	52	17.3	15.4	5.8	13.5	5.8	6.18
	ヤングケアラーと思われる子ども	201	13.9	10.9	1.0	1.5	1.0	4.96
	ヤングケアラーではない	8,421	20.3	21.4	8.9	11.9	0.5	6.94
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10	0.0	10.0	0.0	0.0	10.0	4.56
	ヤングケアラーと思われる子ども	30	6.7	10.0	0.0	3.3	0.0	4.30
	ヤングケアラーではない	548	20.1	16.8	7.8	12.6	0.9	6.64
高校生（通信制）	ヤングケアラー	2	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	5.50
	ヤングケアラーと思われる子ども	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.50
	ヤングケアラーではない	18	11.1	22.2	11.1	22.2	0.0	7.00

5. 自由意見

ヤングケアラーを助けるため必要なこと、助けてほしいことについて主な意見は以下のとおり。

＜小学生＞

自身がヤングケアラーに「あてはまる」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話せる場、人	・母が精神病で意味のわからないことを毎日聞いてくるため、ストレスだが、話せる場がない。学校で話せる場があれば楽になると思う
	・交流会など
	・友達関係
相談できる場	・近くの人に相談する
	・学校でヤングケアラー専門の相談ができるところが欲しい
必要な支援	・家族のことやいろいろな事を助けてほしい

「ヤングケアラー」と思われる子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話せる場、人	・少しでも不安や心配事の話しに乗ってあげる
	・話を聞いてもらう
相談できる場	・相談しやすい環境を作る
	・周りに相談して、解決策を考える
必要な支援・困り事	・日替わりで市・県の職員が予定を立ててヤングケアラーの人たちの家庭に助けに行く
	・政府の支えが足りないし、もっとヤングケアラーのことを広めたり支えを増やすことが必要
	・安心できる場所を用意する
	・家庭のお金の支援
	・睡眠が取れない、勉強に追いつけない

自身がヤングケアラーに「あてはまらない」「わからない」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声をかける	・困っていることを聞き、どうすればいいか一緒に考えてあげる
	・相手のことを思って話を聞く。相手がどのような気持ちで話しているのか考える
相談できる場	・気軽に相談できるところを増やす
	・電話だと相談しにくいので、チャットやインターネットで相談できるようにする
	・学校に相談できる部屋など、気楽に相談できる場を作ったりする
	・学校などに直接来てくれる人を増やしたり、来る回数を増やしたりすればよい
助け合い、思い合い	・ヤングケアラーの気持をわかってあげる
	・自分からヤングケアラーとは言えないと思うから、周りが気づかないといけない
生活支援	・ヤングケアラーの人の家を訪問する人、毎月必要なものをとどけるシステムなど
	・小さい子どもや高齢者を預けられる場所を増やす
経済的支援	・ヤングケアラーの家庭への給付金制度を作る
	・ヤングケアラーへの募金があればよい
気づき、アンケート	・大人がヤングケアラーに気付いて生活を支援すること
	・定期的にアンケートなどをとる
安心できる、精神的なケア	・メンタルを励まして、少し落ち着かせて優しく相談にのってあげる
	・楽しい環境やヤングケアラー同士が集まって話して交流できる機会を増やす
啓発	・学校での呼びかけや自治体の支援やイベントで世間に広く存在を認識させること

＜中学生＞

自身がヤングケアラーに「あてはまる」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・話を聞いてあげる
相談できる場	・家庭内について相談に乗って欲しい
	・身近な人にもヤングケアラーを知ってほしいので、大きなショッピングモールなどで話を聞いてあげる相談会を開けばよい
生活支援	・家事を手伝ってほしい
	・親の病気で困っている人の体験談や、アドバイスをもらいたい
経済的支援	・市役所にお金の申請をできるようにする
	・部活の道具が買ってもらえない
安心できる、自分の時間がもてる場所、精神的なケア	・もっと自分の時間がほしい。家事をしたりしている分を褒めてもらいたい。寄り添ってほしい
	・授業についていけない、友達と遊ぶ時間がない
	・授業中寝てしまったり勉強の理解があまりできていない

「ヤングケアラー」と思われる子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・困っている人の話を聞いたり、困っていることを助ける方法がないかを考えることが必要
	・相談にのる
相談できる場	・親の仕事の調整や家族での話し合いなど、家族で相談するとよい
	・相談窓口を増やす、相談しやすい環境をつくる
生活支援	・支援制度を作る
	・ヤングケアラーが大変な思いをせずに生活できる環境を周りの大人が整える
経済的支援	・ヤングケアラーの人たちに補助金を与える
	・家族で一定以上の収入があると、国（県や市）が出してくれる費用が少なくなる。収入が関係ないようにしてほしい
気づき、アンケート	・アンケートを取る頻度を多くする
	・学校がヤングケアラーに当たる生徒を把握し、それ相応の対応をする
欲しい支援	・支えてくれる人がいるとよい
	・施設に預ける。環境の良い場所を提供することにより、少しでもメンタル面で楽になる
啓発	・周りの人にヤングケアラーのことについて理解を深めてもらう

自身がヤングケアラーに「あてはまらない」「わからない」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・なにか困っていそうだったら相談に乗ってあげる、話を聞く
	・ヤングケアラーをしていることについてどう思うのか聞いてみてその子の気持ちを聞いてみたほうがよい
相談できる場	・電話以外の相談手段（LINE で相談など）
	・安心してすぐに相談できる環境を作ってほしい。（学校でも相談できるなど）
	・ヤングケアラーの本人が周りに状況を説明し協力を求めることで自分の時間を作ることが必要
自分ができることをする	・その人に寄り添って手伝えることは協力する。
	・相談窓口を教えてあげる、先生に相談する
	・自分の家族などに聞いてみて、手伝えることがあったら助け合う
生活支援	・生活援助やフードバンクなどの食べるものの援助を増やす
	・デイサービスや介護施設をもっと増やす

項目	主な意見（抜粋）
	・家事代行サービスの無料提供
	・ヤングケアラーを助けるためだけの団体を作って欲しい
経済的支援	・お金を補助したりする支援制度
	・募金
気づき、アンケート	・アンケートを定期的に実施する
	・ささいなことに気づいてあげる、体調の変化に気づく、異変に気づく
安心できる、自分の時間がもてる場所、精神的なケア	・保健室登校のようなのを提供する
	・家でも授業を受けられる体制を整える
	・その人に寄り添ったり、自由になれる場所や勉強ができる環境
	・ヤングケアラー同士で話し合える環境を作ること
啓発	・「ヤングケアラー」という存在を社会に認知してもらう(イベント等)
	・ヤングケアラーの大変さをもっと世の中に広める
	・ヤングケアラーは決して悪いことではないと、「ヤングケアラー」という言葉を広めるときに一緒に伝える

＜高校生（全日制）＞

自身がヤングケアラーに「あてはまる」とする子どもの意見

項目	主な意見（抜粋）
その他	・あまり触れない

「ヤングケアラー」と思われる子どもの意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・その人に寄り添う、相談にのる
経済的支援	・お金が必要
気づき、アンケート	・こまめにアンケートをする
	・ヤングケアラーを助けるために、各家庭の状況を行政や学校などがなんとなくでも知っておくべきだと思う
自分の時間がもてる	・1 人になれる時間が欲しい
啓発	・ポスターを貼る
	・ヤングケアラーへの理解を広める

自身がヤングケアラーに「あてはまらない」「わからない」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・話を聞いてあげる、その人の相談相手になる
	・ちょっとでもヤングケアラーかなと思われる人に声をかけたりすることが一番早期発見につながる
相談できる場	・LINE などの、若者がよく利用するアプリでの相談がよい
	・いつでも誰かに気軽に相談できるような人間関係や環境を築く
自分ができることをする	・一緒に調べたり相談出来るところを調べたりしたい。一緒に寄り添ってあげたい
	・家族や先生に相談したりして必要な相談機関につなげたりして、その人を助けてあげたい
生活支援	・レトルト食品など簡単に作れる食べ物の支給
	・サポートする場所を整える、充実する
	・デイサービス、老人ホームの利用料を少なくする。長時間保育の実施
経済的支援	・お金があれば高齢者のデイサービスを使えたりするので、ヤングケアラーのいる世帯にはお金を支給すればよい

項目	主な意見（抜粋）
	・ヤングケアラーのいる世帯に現金給付、介護できる人を無料で 1 人派遣するなど(給料は税金等)
	・お金を保証する。親が安定した収入を得られるようにサポートする
気づき、アンケート	・ひとりひとり家で困っていることを知る必要があると思う。周りの人がヤングケアラーかどうかはあまり可視化されていないと思う
	・アンケートをこまめに実施する
安心できる、自分の時間がもてる場所、精神的なケア	・あまり可哀想だと思われたくないと聞いたことかあるので、特別視しないことも大切
	・子どもが家事などの仕事をしながらでも通えるような学校の形態を作る
	・心のケアが必要
啓発	・1 人 1 人がヤングケアラーについて理解し、理解を持った上で行動を取る
	・SNS（スマホ等）にもっと分かりやすく広く普及させる
	・ヤングケアラー本人が、ヤングケアラーだと自覚する必要がある

＜高校生（定時制）・（通信制）＞

自身がヤングケアラーに「あてはまる」とする子どもの意見

項目	主な意見（抜粋）
経済的支援	・補助金
	・市で家庭への支援金を用意する
自分の時間	・毎日ではないが、親が疲れたから幼稚園児のきょうだいをお風呂に入れて歯磨きして寝かしつけるようお願いされる。自分の勉強をしたいのに十分にできない。

「ヤングケアラー」と思われる子どもの意見

項目	主な意見（抜粋）
その他	・根本的な解決

自身がヤングケアラーに「あてはまらない」「わからない」とする子どもの主な意見

項目	主な意見（抜粋）
話を聞く、声を掛ける	・まず話し相手になり、気安い仲になって相談にのってあげる
	・言いたいことを全て吐き出させて受け止める
	・話を聞いてあげて、寄り添ってあげる、その人を受け入れる
相談できる場	・ヤングケアラーの人が相談しやすい環境をつくる
	・個々で相談しやすい環境を作ってあげる、信頼関係をつくる
	・自分の状態を打ち明けられる場、頼れる存在が何よりも重要
自分ができることをする	・手伝えることがあれば手伝いたい
	・話を聞いてあげて密かに先生に相談する
生活支援	・家事を手伝ってあげる
	・ちゃんとした制度や支援があればよいと思う
	・教育制度を変えてヤングケアラーでも十分に学習できる環境を整え、かつヤングケアラーとして苦しむことない生活を送れるような制度を作る
経済的支援	・経済的な援助
	・サービスを無料提供するべき
気づき、アンケート	・政府や自治体が大きく取り上げて適当に流すのではなく、個々の家庭をみる
	・支援をしたり、現在の生活状況を定期的に聞くなどをしたりする
安心できる、自分の時間がもてる場	・学校自体が時間を作れるように環境作りをすることが大切
	・学校の先生や地域の方がヤングケアラーにいついての理解を深め子どもたちとの交流を深める

項目	主な意見（抜粋）
所、精神的なケア	・病気や疾患をもつ家族を保護する施設や、ヤングケアラーが少しでも心のよりどころになれる環境を作り、気軽に行けたり、助けを求めることの出来る施設を作る
啓発	・ヤングケアラーだということを知ってもらうためのことをする
	・ヤングケアラーについて詳しく知る
	・支援の種類を広く周知させる
	・ヤングケアラーについてまずはしっかり理解すること。まずはそこからだと思う

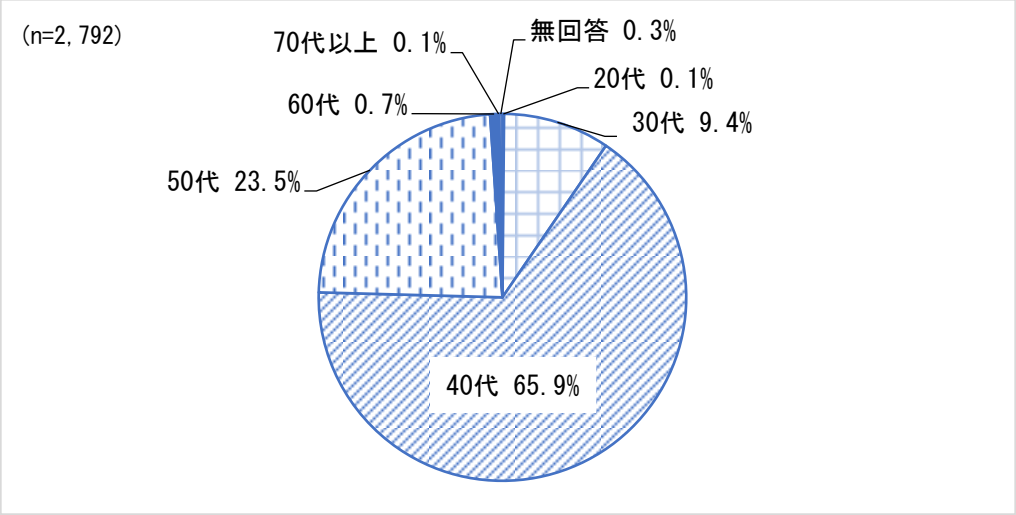
第III章　保護者調査

1．　基礎情報

（1）　年代

年代は、「40代」が65.9%で最も高く、次いで「50代」（23.5%）、「30代」（9.4%）となっている。

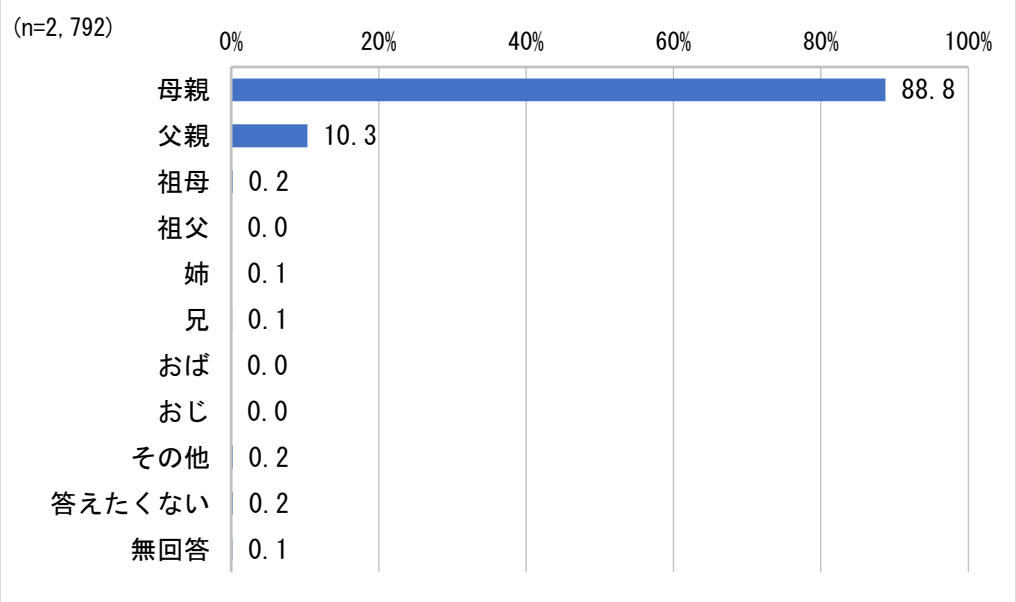
図表 40　年代



（2）　子どもからみた家族内での位置づけ

回答者の子どもから見た家族内での位置づけは、「母親」が 88.8%、「父親」が 10.3%となっている。

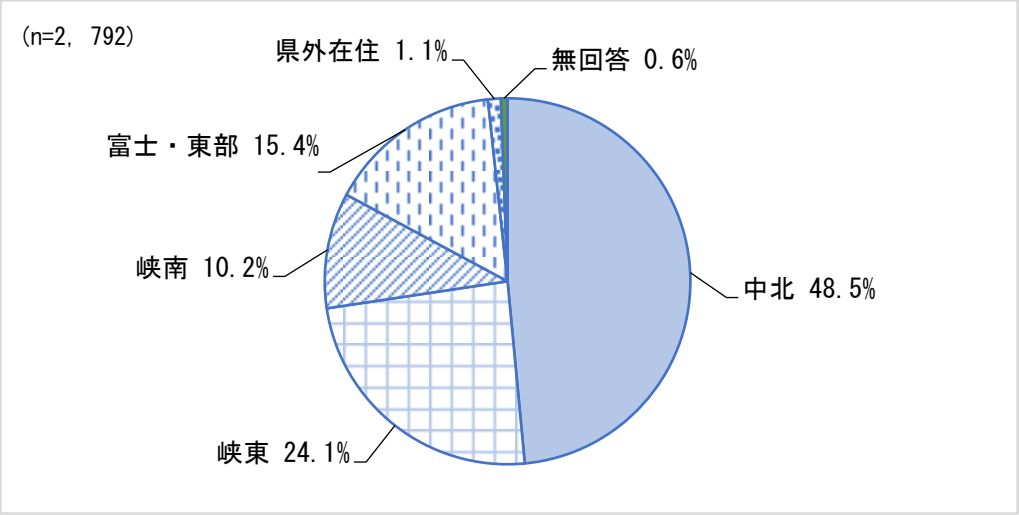
図表 41　子どもからみた家族内での位置づけ



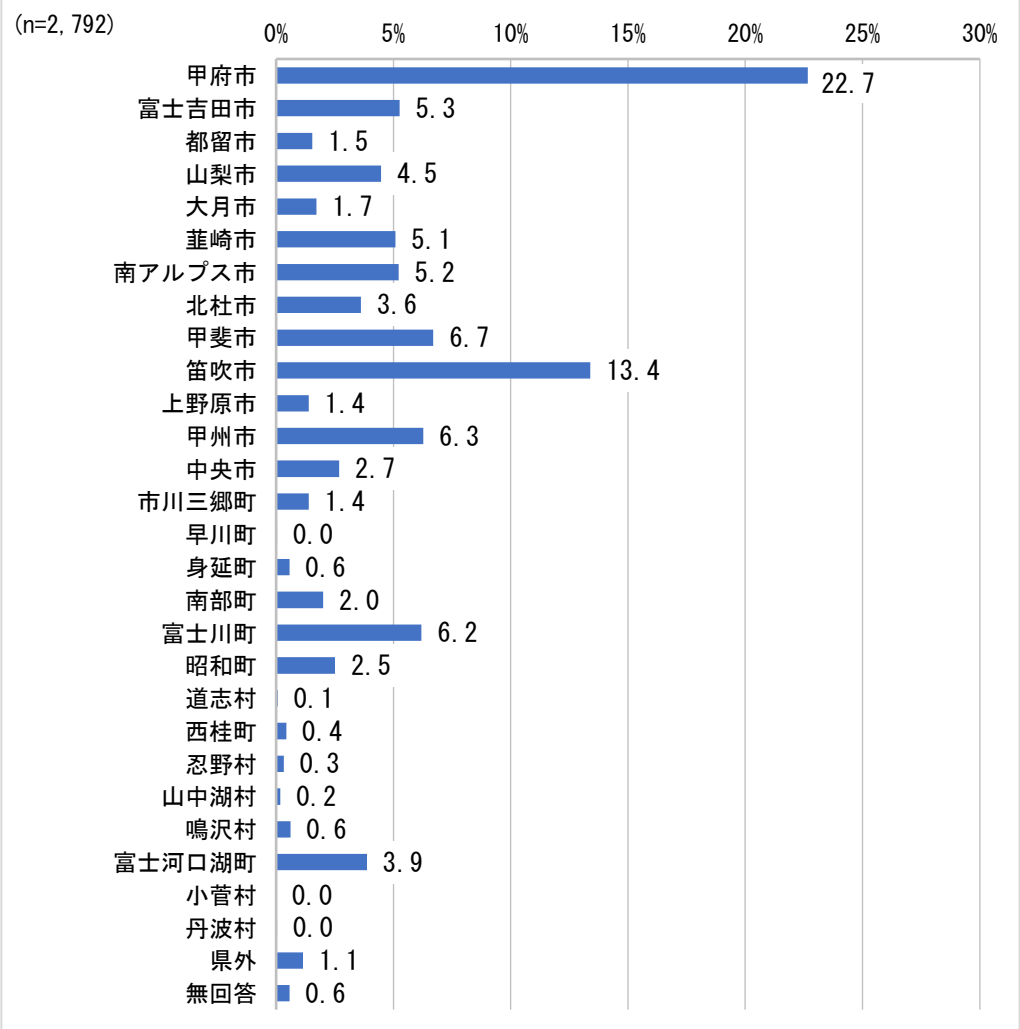
（3） 居住地

居住圏域は、「中北」が 48.5%と最も高く、次いで「峡東」（24.1%）、「富士・東部」（15.4%）となっている。居住市町村では、「甲府市」が 22.7%と全体の約 2 割となっている。

図表 42　居住圏域



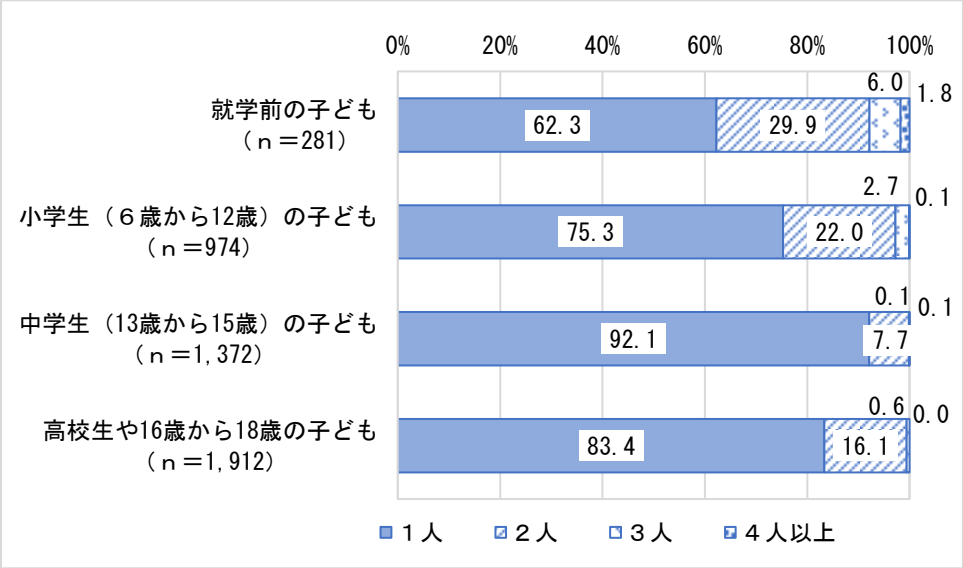
図表 43　居住市町村



（４） 子どもの数（就学前、小学生、中学生、高校生や 16 歳から 18 歳の子ども）

子どもの数（就学前、小学生、中学生、高校生や 16 歳から 18 歳の子ども）では、「１人」と回答した方が最も高く、「中学生（13 歳から 15 歳の子ども）」で 92.1%、「高校生や 16 歳から 18 歳の子ども」で 83.4%、「小学生（６歳から 12 歳の子ども）」で 75.3%となっている。

図表 44　子どもの数（就学前、小学生、中学生、高校生や 16 歳から 18 歳の子ども）

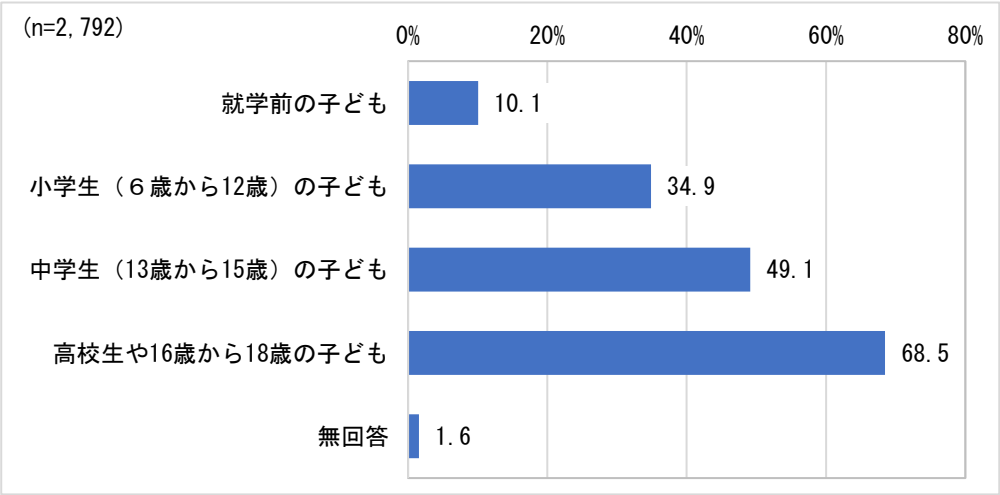


（５） 子どもの年代別からみた保護者

子どもの年代別からみた保護者は、「高校生や 16 歳から 18 歳の子どもの保護者」が 68.5%で最も高く、次いで「中学生（13 歳から 15 歳）の子どもの保護者」（49.1%）、「小学生（６歳から 12 歳）の子どもの保護者」（34.9%）、「就学前の子どもの保護者」（10.1%）となっている。

圏域別では「高校生や 16 歳から 18 歳の子どもの保護者」は中北が、「中学生（13 歳から 15 歳）の子どもの保護者」は峡南が他より高く、「小学生（６歳から 12 歳）の子どもの保護者」「就学前の子どもの保護者」は中北が他に比べて低くなっている。

図表 45 子どもの年代別から見た保護者の数（複数回答）



図表 46　子どもの年代別から見た保護者の数（複数回答）

＜圏域別分析＞　（%）

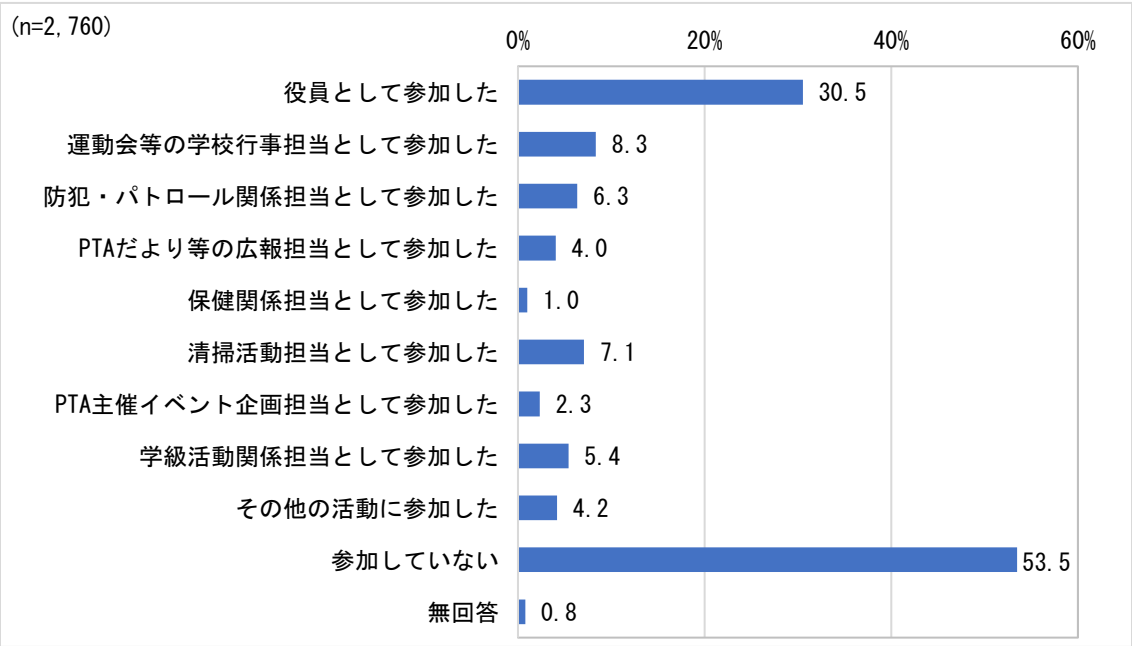
		全体（n＝）	就学前の子どもの保護者	小学生（6歳から12歳）の子どもの保護者	中学生（13歳から15歳）の子どもの保護者	高校生や16歳から18歳の子どもの保護者	無回答
圏域別	中北	1,354	8.5	27.9	45.9	78.3	0.1
	峡東	674	13.2	44.7	48.2	61.9	0.3
	峡南	285	10.2	34.0	72.3	55.8	0.7
	富士・東部	431	11.1	45.5	50.1	61.5	0.7

（6） PTA 活動への参加の有無

この１年で、子どもが通っている学校等での PTA 活動への参加の有無は、「参加していない」が 53.5%で最も高く、次いで「役員として参加した」が 30.5%となっている。

圏域別では、中北が「参加していない」が 57.8%と最も高く、次いで富士・東部（56.1%）となっている。参加したものの中では「役員として参加した」が峡東と峡南で約 35%と高くなっている。

図表 47　PTA 活動への参加の有無（複数回答）



図表 48　PTA 活動への参加の有無（複数回答）

＜圏域別＞

（%）

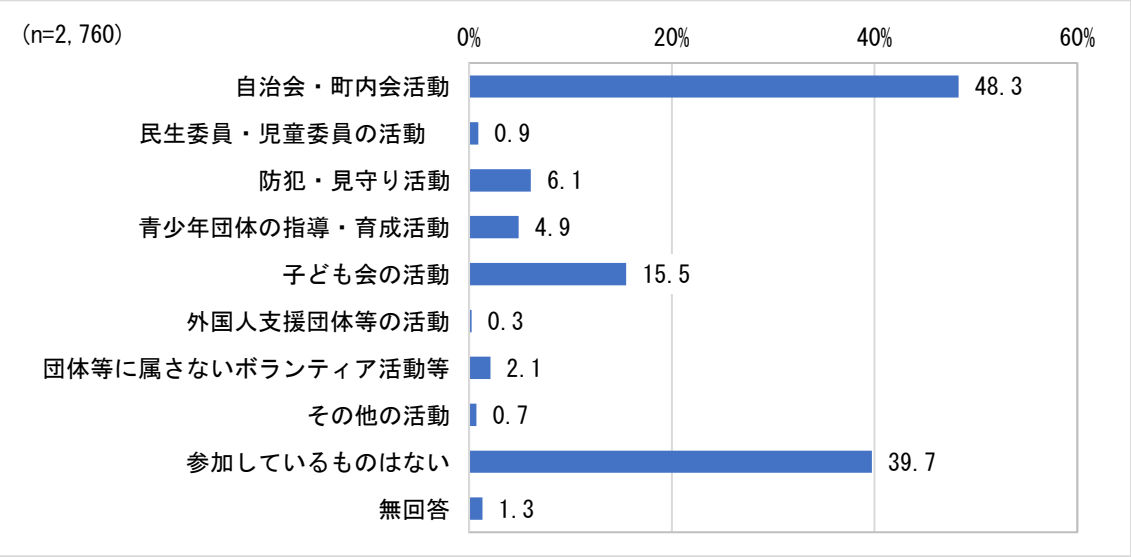
		全体（n＝）	役員として参加した	運動会等の学校行事担当として参加した	防犯・パトロール関係担当として参加した	PTA だより等の広報担当として参加した	保健関係担当として参加した	清掃活動担当として参加した	PTA 主催イベント企画担当として参加した	学級活動関係担当として参加した	その他の活動に参加した	参加していない	無回答
圏域別	中北	1,354	27.8	7.0	6.7	3.4	1.3	6.1	2.7	4.4	4.2	57.8	0.5
	峡東	674	35.2	12.2	8.5	6.1	1.0	8.0	1.3	7.3	4.9	45.7	0.6
	峡南	285	35.1	7.4	3.5	3.2	0.4	6.3	1.4	8.8	3.2	47.0	1.1
	富士・東部	431	29.2	7.2	3.7	3.0	0.5	9.0	3.5	3.2	3.7	56.1	1.2

（７） 地域活動への参加の有無

この１年で参加した地域活動については、「自治会・町内会活動」が 48.3%で最も高く、次いで「子ども会の活動」（15.5%）となっている。「参加しているものはない」は 39.7%となっている。

圏域別では、「自治会・町内会活動」が峡南で 54.0%、中北で 50.7%と高く５割を超えている。一方、富士・東部では「参加しているものはない」（53.1%）が５割を超えている。

図表 49　地域活動への参加の有無（複数回答）



図表 50　地域活動への参加の有無（複数回答）

＜圏域別＞　（%）

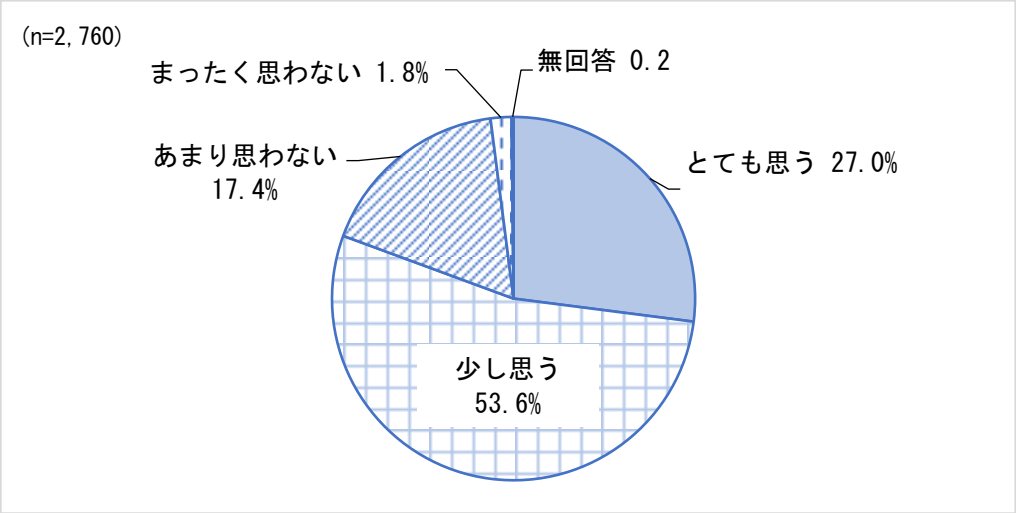
		全体（n＝）	自治会・町内会活動	民生委員・児童委員の活動	防犯・見守り活動	青少年団体の指導・育成活動	子ども会の活動	外国人支援団体等の活動	団体等に属さないボランティア活動等	その他の活動	参加しているものはない	無回答
圏域別	中北	1,354	50.7	0.8	6.1	4.1	13.2	0.3	2.2	1.0	39.8	1.5
	峡東	674	48.7	1.3	7.0	5.3	26.3	0.4	1.8	0.4	33.2	0.9
	峡南	285	54.0	1.1	4.9	5.3	14.0	0.0	1.8	0.7	35.4	1.1
	富士・東部	431	35.7	0.2	4.6	6.0	7.4	0.0	2.6	0.2	53.1	1.2

（８） 住いの地域は「自分の子どもを見守ってくれる地域」か

住いの地域は「自分の子どもを見守ってくれる地域」と思うかは、「少し思う」が 53.6%と最も高く、次いで「とても思う」（27.0%）、「あまり思わない」（17.4%）となっている。

圏域別では、思っている人（「とても思う」と「少し思う」の合計」）は峡南で 85.3%と最も高くなっている。一方、富士・東部では思わない人（「あまり思わない」と「まったく思わない」の合計）が 22.7%と最も高く２割を超えている。

図表 51　住いの地域は「自分の子どもを見守ってくれる地域」か



図表 52　住いの地域は「自分の子どもを見守ってくれる地域」か

＜圏域別＞　（%）

		全体（n＝）	とても思う	少し思う	あまり思わない	まったく思わない	無回答
圏域別	中北	1,354	27.2	53.8	16.5	2.4	0.1
	峡東	674	25.4	54.9	18.2	1.5	0.0
	峡南	285	30.9	54.4	14.0	0.7	0.0
	富士・東部	431	26.7	50.6	21.1	1.6	0.0

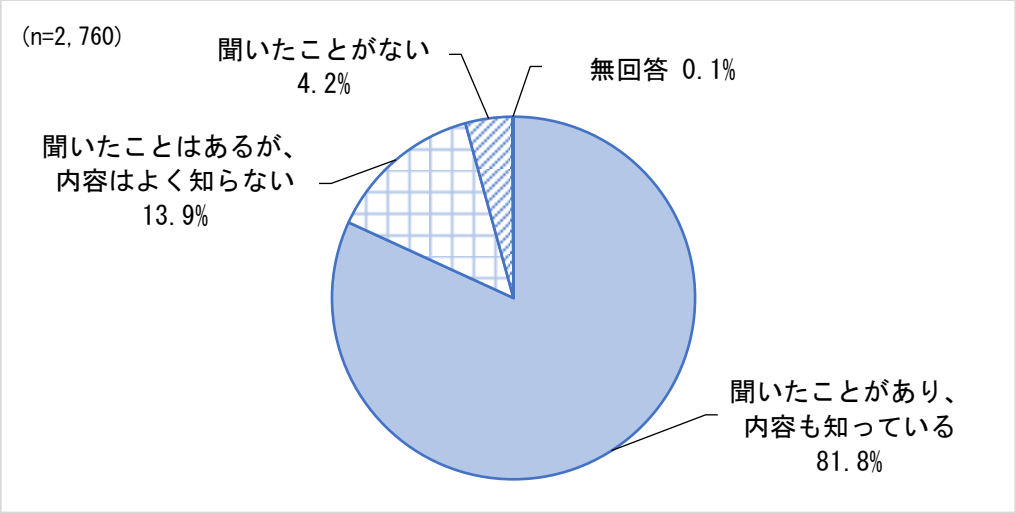
2． ヤングケアラーについて

（１） 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに聞いたことがあるかについて、「聞いたことがあり、内容も知っている」が 81.8%、「聞いたことはあるが、内容はよく知らない」が 13.9%で、ほとんどが聞いたことがあるとなっている。一方、「聞いたことはない」は 4.2%となっている。

圏域別では、中北が聞いたことがある人（「聞いたことがあり、内容も知っている」と「聞いたことはあるが、よく知らない」の合計）が、96.1%と最も高くなっている。

図表 53 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況



図表 54 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

＜圏域別＞ （%）

		全体（n＝）	聞いたことがあり、内容も知っている	聞いたことはあるが、内容はよく知らない	聞いたことはない	無回答
圏域別	中北	1,354	82.7	13.4	3.8	0.1
	峡東	674	82.0	13.8	4.2	0.0
	峡南	285	80.0	14.0	6.0	0.0
	富士・東部	431	80.0	15.8	4.2	0.0

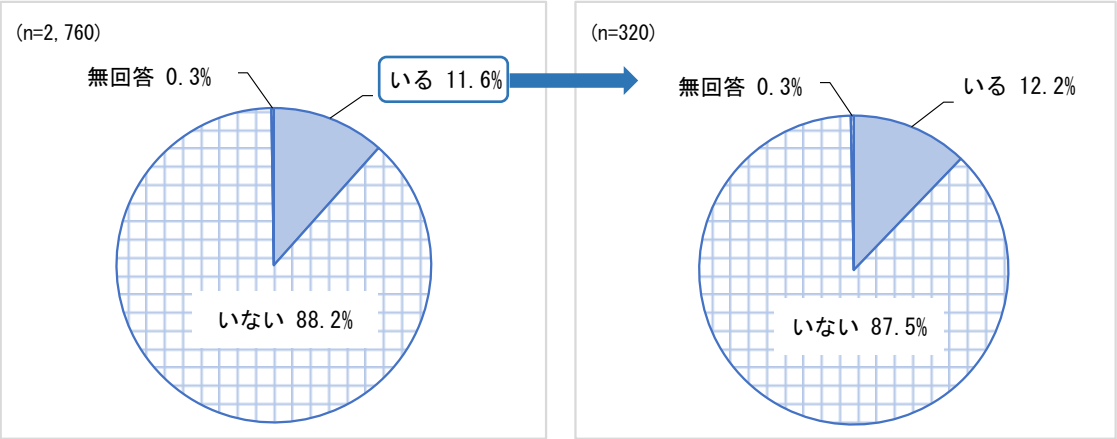
（２） 「ヤングケアラー」と思われる子ども

① 日常的に「お世話」が必要な家族の有無と「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

家庭内の、幼い・高齢・病気・障がいなど、日常的に「お世話」が必要な家族の有無については、「いる」が 11.6%、「いない」が 88.2%となっている。

「いる」と回答した人のうち、「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」の有無について尋ねたところ、「いる」が 12.2%、「いない」が 87.5%となっている。

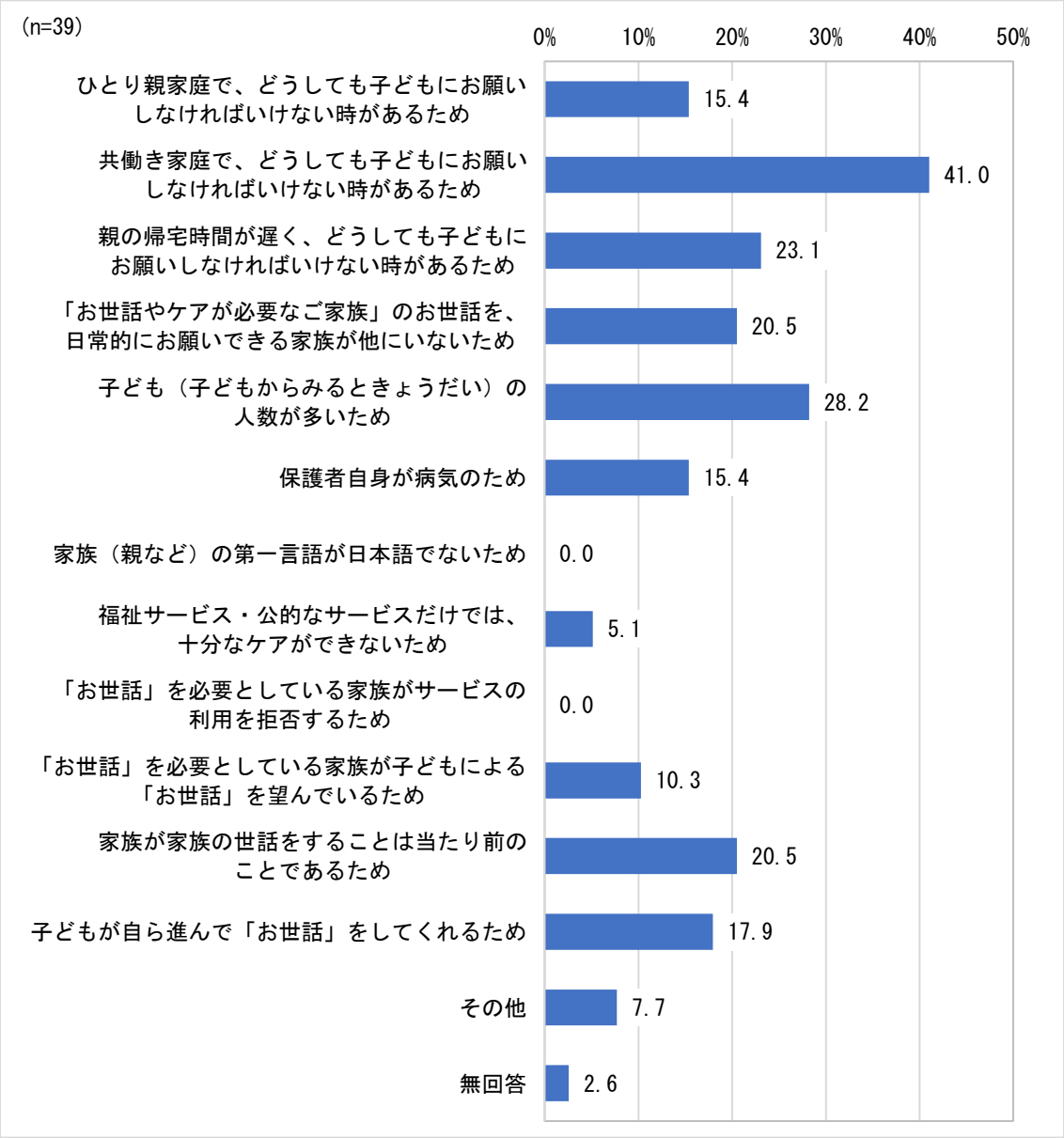
図表 55　日常的に「お世話」が必要な家族の有無（左）と
家庭内の「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」の有無（右）



② 子どもが「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行う」ことになった理由（きっかけ）

家庭内に「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」が「いる」と回答した人に、その理由（きっかけ）について聞いたところ、「共働き家庭で、どうしても子どもにお願いしなければいけない時があるため」が 41.0%で最も高く、次いで「子ども（子どもからみるときょうだい）の人数が多いため」（28.2%）、「親の帰宅時間が遅く、どうしても子どもにお願いしなければいけない時があるため」（23.1%）などとなっている。

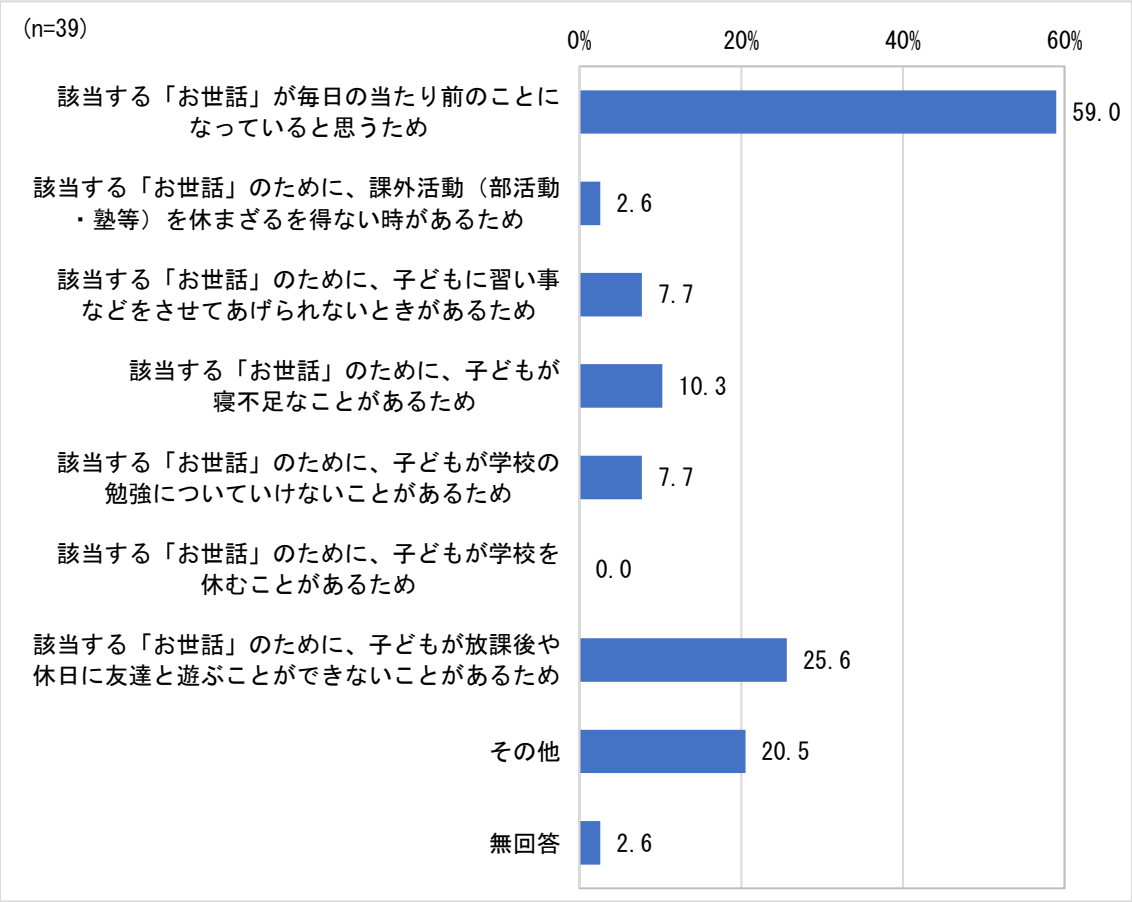
図表 56　子どもが「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行う」ことになった理由（きっかけ）（複数回答）



③ 子どもがなぜ「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている」と思ったか

家庭内に「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」が「いる」と回答した人に、なぜそう思ったかを聞いたところ、「該当する「お世話」が毎日の当たり前のことになっていると思うため」が 59.0%と最も高く、次いで「該当する「お世話」のために、子どもが放課後や休日に友達と遊ぶことができないことがあるため」（25.6%）などとなっている。

図表 57　子どもがなぜ「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている」と思ったか（複数回答）

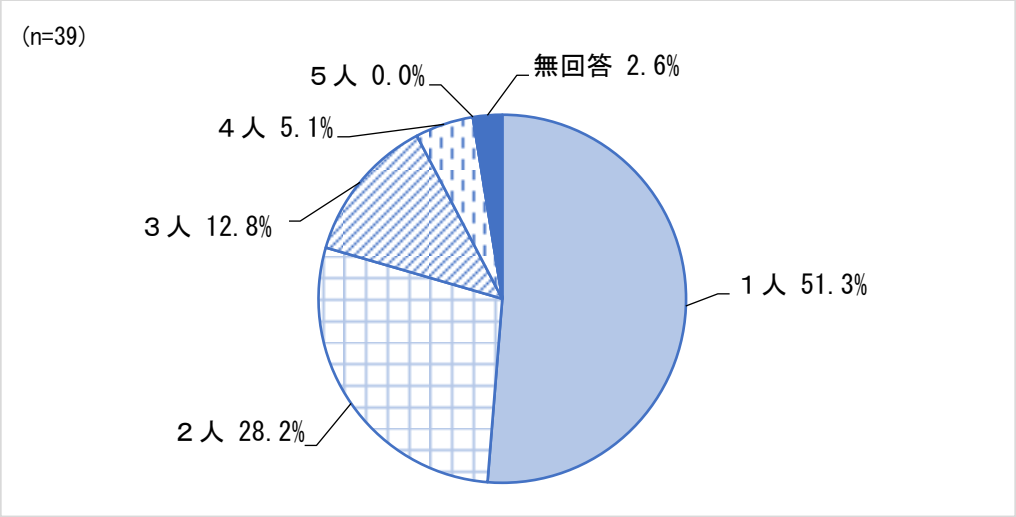


④「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」について

（ア）　家族の「お世話やケア」をしている子どもの人数

家庭内に「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている子ども」が「いる」と回答した人に、該当する子どもの人数を聞いたところ、「１人」が 51.3%、「２人」が 28.2%、「３人」が 12.8%、「４人」が 5.1%となっている。

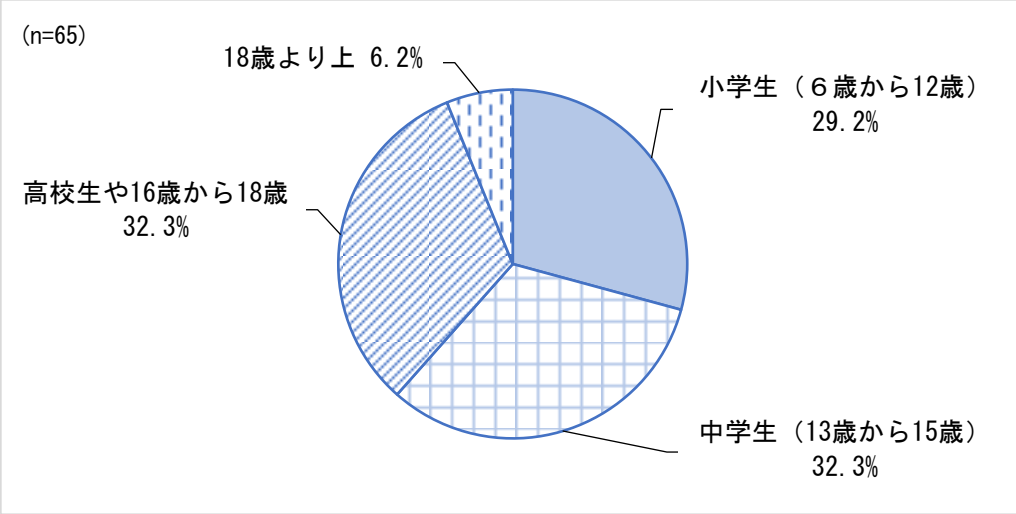
図表 58　家族の「お世話やケア」をしている子どもの人数



（イ）　家族の「お世話やケア」をしている子どもの年齢

家族の「お世話やケア」をしている子どもの年齢は、「小学生（６歳から 12 歳）」が 29.2%、「中学生（13 歳から 15 歳）」が 32.3%、「高校生や 16 歳から 18 歳」が 32.3%、「18 歳より上」が 6.2%となっている。

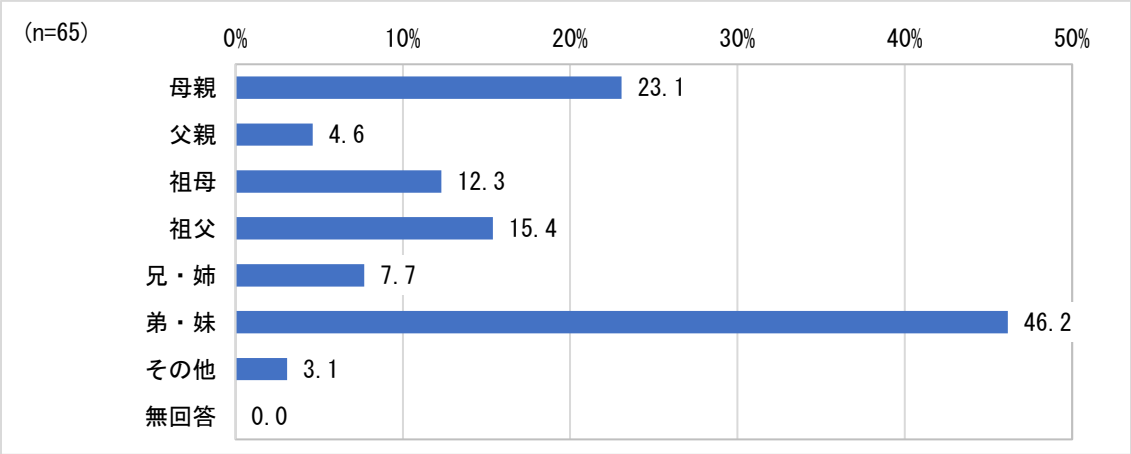
図表 59　家族の「お世話やケア」をしている子どもの年齢



（ウ）「お世話やケア」を必要としている家族

「お世話やケア」を必要としている家族は、「弟・妹」が46.2%で最も高く、次いで「母親」（23.1%）、「祖父」（15.4%）、「祖母」（12.3%）、「父親」（4.6%）となっている。

図表 60　「お世話やケア」を必要としている家族（複数回答）



（エ）「お世話やケア」の内容

「お世話やケア」の内容について、上位に挙がっているものは、母親では「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」、祖父では「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」「見守り」、弟・妹では「見守り」となっている。

図表 61　「お世話やケア」の内容（複数回答）

（人）

	全体（n＝）	家事（食事の準備や掃除、洗濯）	きょうだいの世話や保育所等への送迎など	身体的な介護（入浴やトイレのお世話など）	外出の付き添い（買い物、散歩など）	通院の付き添い	感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）	見守り	通訳（日本語や手話など）	金銭管理	薬の管理	その他	わからない	無回答
母親	15	11	4	2	9	3	8	3	0	0	5	0	0	0
父親	3	1	0	0	1	0	3	0	0	0	0	1	0	0
祖母	8	4	0	3	1	0	3	7	0	0	0	0	0	1
祖父	10	4	1	2	0	0	7	7	0	0	0	0	0	0
兄・姉	5	1	0	1	1	0	4	4	0	0	0	0	0	0
弟・妹	30	12	13	12	3	0	2	19	0	0	0	0	0	0
その他	2	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

（オ）「お世話やケア」に費やす頻度

「お世話やケア」に費やす頻度については、母親、祖父は「ほぼ毎日」が、弟・妹では「ほぼ毎日」「週に３～５日」「週に１～２日」が多くなっている。

図表 62　「お世話やケア」に費やす頻度

（人）

	全体（ｎ＝）	ほぼ毎日	週に３～５日	週に１～２日	１か月に数日	その他	無回答
母親	15	9	3	2	0	0	1
父親	3	1	0	2	0	0	0
祖母	8	2	2	1	0	3	0
祖父	10	5	3	1	1	0	0
兄・姉	5	4	1	0	0	0	0
弟・妹	30	11	10	7	0	2	0
その他	2	1	1	0	0	0	0

（カ）１日あたりの「お世話やケア」に費やす時間

１日あたりの「お世話やケア」に費やす時間は、それぞればらつきがあるものの、最も多かったものは、平日で母親が「２～３時間未満」、祖父、弟・妹が「１～２時間未満」、休日で母親が「４時間以上」、祖父、弟・妹で「１～２時間未満」となっている。平日の平均は、母親が 2.77 時間、弟・妹が 1.38 時間となっている。

図表 63　１日あたりの「お世話やケア」に費やす時間

（人）

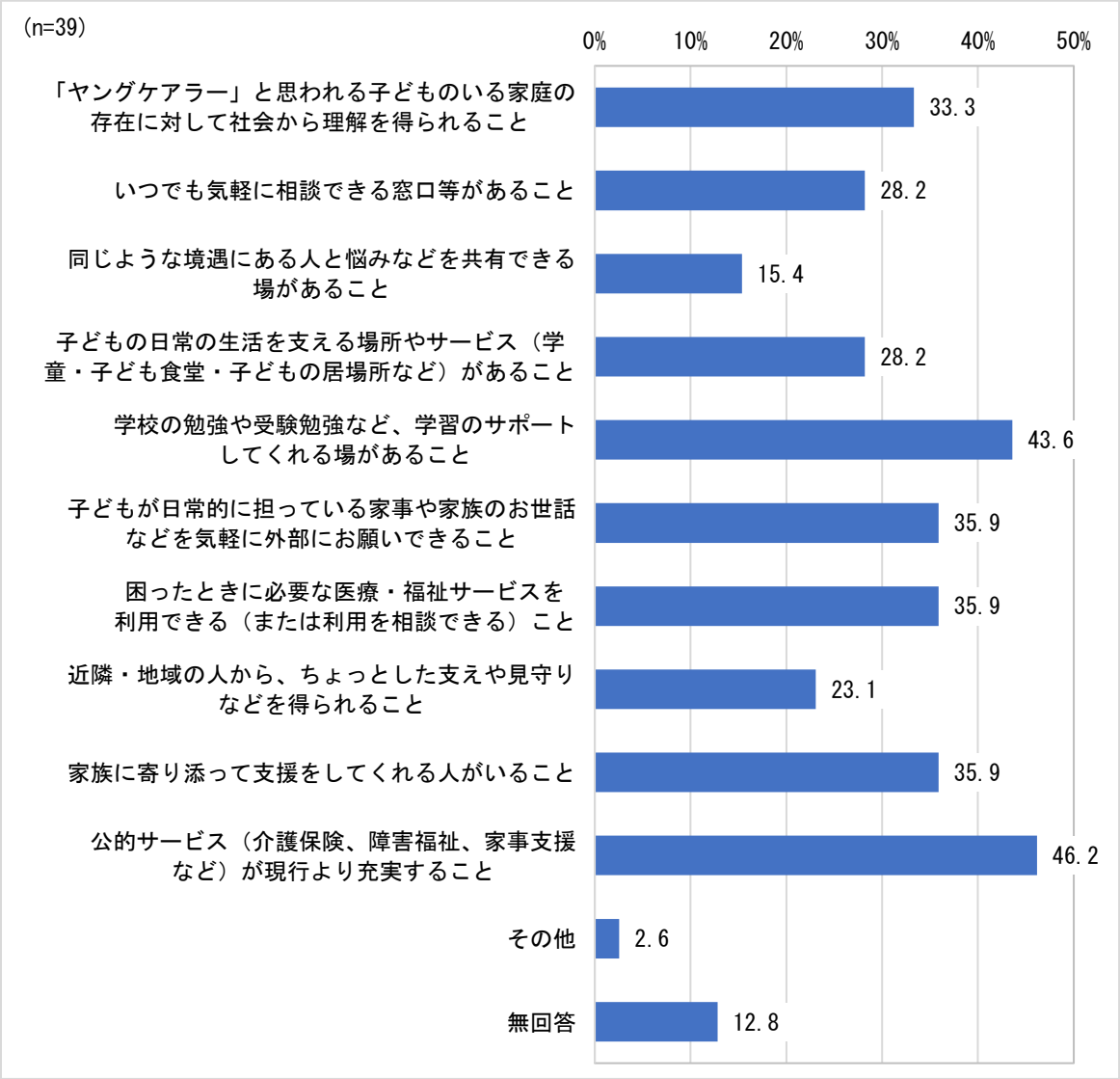
		全体（ｎ＝）	１時間未満	１～２時間未満	２～３時間未満	３～４時間未満	４時間以上	無回答	平均
平日	母親	15	0	3	4	3	3	2	2.77
	父親	3	1	0	1	1	0	0	1.83
	祖母	8	1	4	2	1	0	0	1.44
	祖父	10	1	7	2	0	0	0	1.15
	兄・姉	5	1	1	1	0	2	0	5.43
	弟・妹	30	6	16	2	3	1	2	1.38
	その他	2	1	0	0	1	0	0	1.75
休日	母親	15	0	1	4	2	5	3	5.17
	父親	3	1	0	1	0	1	0	2.17
	祖母	8	0	1	2	2	3	0	3.75
	祖父	10	0	5	1	3	1	0	2.0
	兄・姉	5	1	0	2	0	2	0	5.63
	弟・妹	30	8	13	2	3	2	2	1.31
	その他	2	1	1	0	0	0	0	0.75

（３） ヤングケアラーのいる家庭に必要な支援

① 必要な支援や求める環境

あなた自身や、「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている」子どもの負担が軽くなるようにするために、必要な支援や求める環境について聞いたところ、「公的サービス（介護保険、障害福祉、家事支援など）が現行より充実すること」が 46.2%と最も高く、次いで「学校の勉強や受験勉強など、学習のサポートしてくれる場があること」（43.6%）などとなっている。

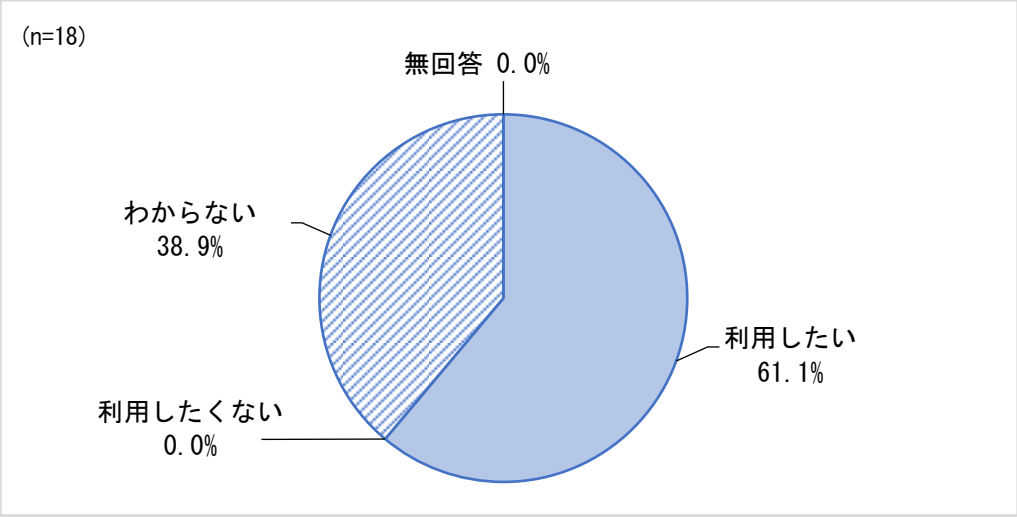
図表 64　必要な支援や求める環境（複数回答）



② 通常の公的サービスを補えるような特別なサービスの利用意向

必要な支援や求める環境で「公的サービス（介護保険、障害福祉、家事支援など）が現行より充実すること」と回答した人に、通常の公的サービス（介護保険、障害福祉、家事支援など）では時間的制約や家庭収入などの要件があるために利用できない部分を補えるような特別なサービスがあったら利用したいと思うか聞いたところ、「利用したい」が 61.1%、「利用したくない」が 0.0%、「わからない」が 38.9%となっている。

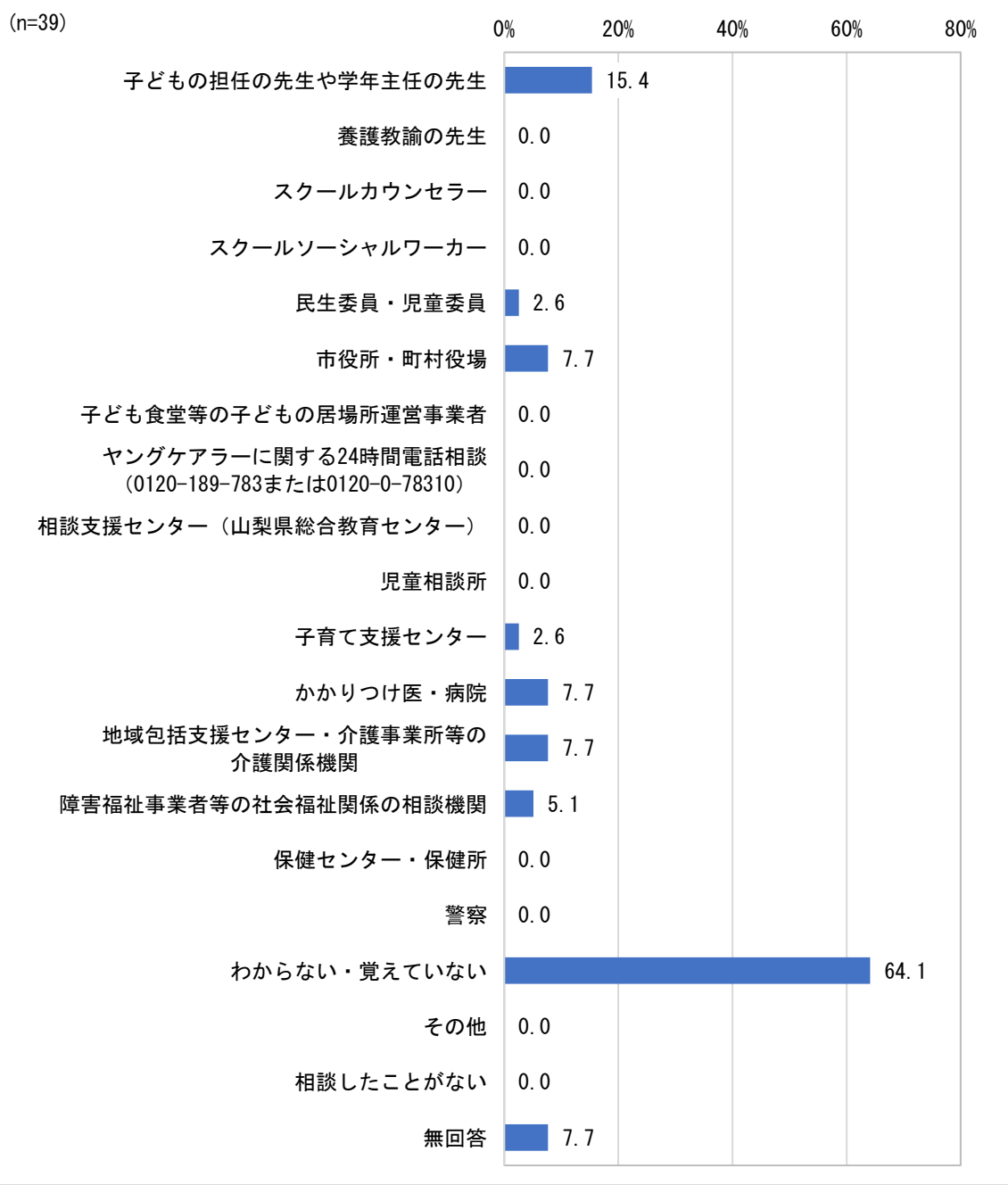
図表 65　通常の公的サービスを補えるような特別なサービスの利用意向



③ 家族の世話等を行っている子どもについての相談先

「本来大人が担うと想定される家事、家族の世話等を日常的に行っている」子どもについて、家族以外で周囲の関係機関等に相談したことについて聞いたところ、「わからない・覚えていない」が 64.1%と最も高くなっている。相談先では「子どもの担任の先生や学年主任の先生」が 15.4%と最も高くなっている。

図表 66　家族の世話等を行っている子どもについての相談先（複数回答）

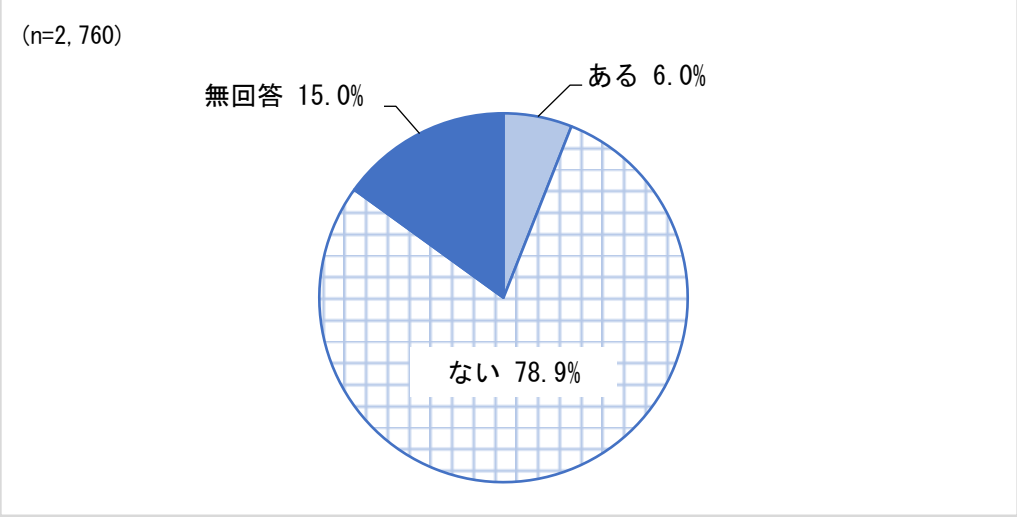


（４） 身近で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことの有無

身近（知人・近所・子どものクラスメイト等）で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことがあるか聞いたところ、「ある」が 6.0%、「ない」が 78.9%となっている。

圏域別では、「ある」では富士・東部が 7.7%と最も高くなっている。一方、「ない」では中北と富士・東部が高く、８割強となっている。

図表 67　身近で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことの有無



図表 68　身近で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことの有無

＜圏域別＞　（%）

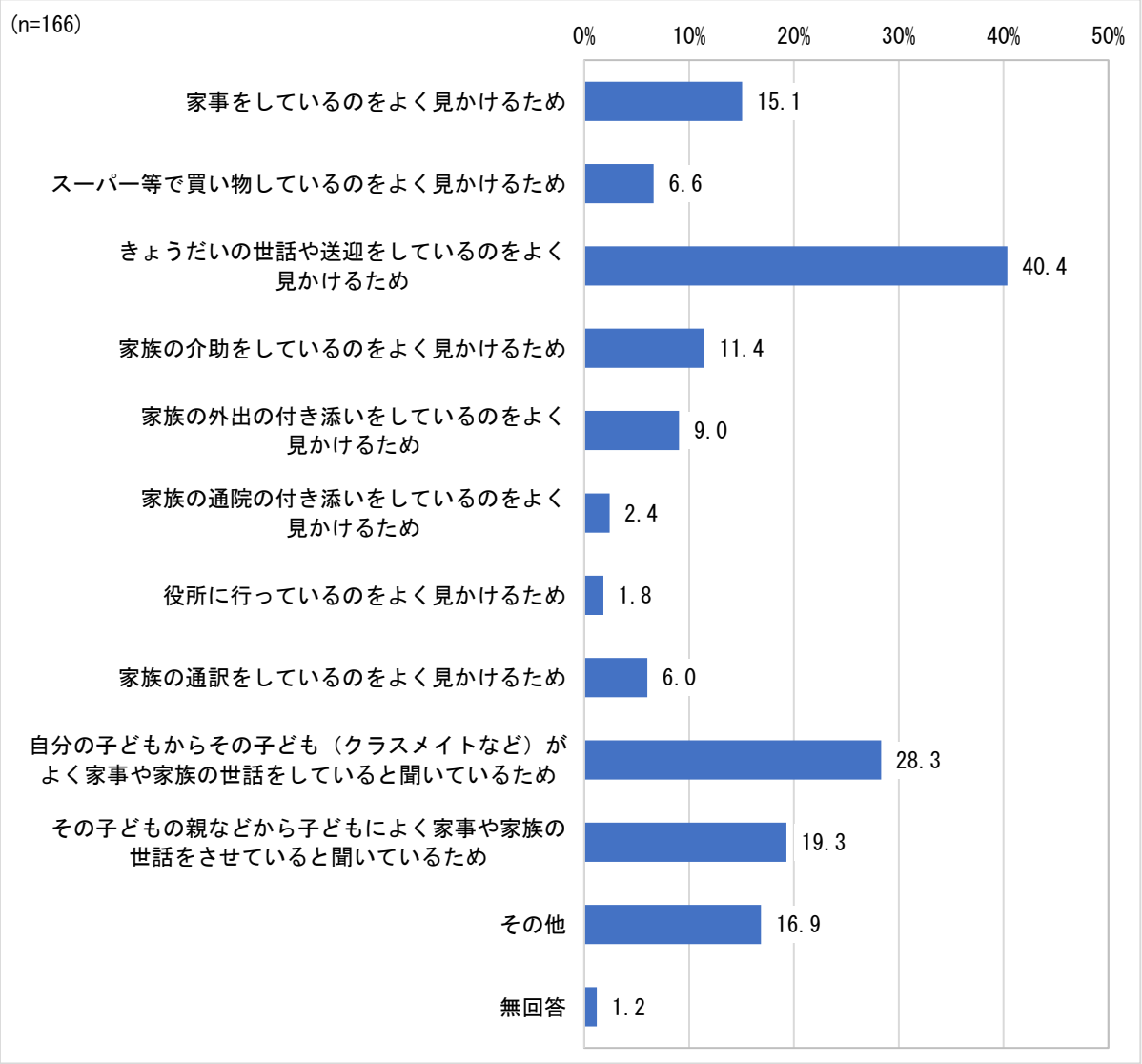
		全体（ｎ＝）	ある	ない	無回答
圏域別	中北	1,354	6.9	85.7	7.5
	峡東	674	4.2	62.9	32.9
	峡南	285	4.2	74.0	21.8
	富士・東部	431	7.7	85.8	6.5

（５）「ヤングケアラー」と思った理由

身近（知人・近所・子どものクラスメイト等）で「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいたことが「ある」と回答した人に、なぜその子どもが「ヤングケアラー」だと思うか聞いたところ、「きょうだいの世話や送迎をしているのをよく見かけるため」が 40.4%で最も高く、次いで「自分の子どもからその子ども（クラスメイトなど）がよく家事や家族の世話をしていると聞いているため」（28.3%）などとなっている。

圏域別では、中北と峡東では「きょうだいの世話や送迎をしているのをよく見かけるため」が、峡南では「自分の子どもからその子ども（クラスメイトなど）がよく家事や家族の世話をしていると聞いているため」が、富士・東部では「その子どもの親などから子どもによく家事や家族の世話をさせていると聞いているため」が最も高くなっている。

図表 69　「ヤングケアラー」と思った理由（複数回答）



図表 70 「ヤングケアラー」と思った理由（複数回答）

＜圏域別＞ （%）

		全体（n＝）	家事をしているのをよく見かけるため	スーパー等で買い物しているのをよく見かけるため	きょうだいの世話や送迎をしているのをよく見かけるため	家族の介助をしているのをよく見かけるため	家族の外出の付き添いをしているのをよく見かけるため	家族の通院の付き添いをしているのをよく見かけるため
圏域別	中北	93	19.4	3.2	45.2	10.8	8.6	1.1
	峡東	28	14.3	14.3	50.0	14.3	10.7	3.6
	峡南	12	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	8.3
	富士・東部	33	9.1	12.1	21.2	15.2	12.1	3.0

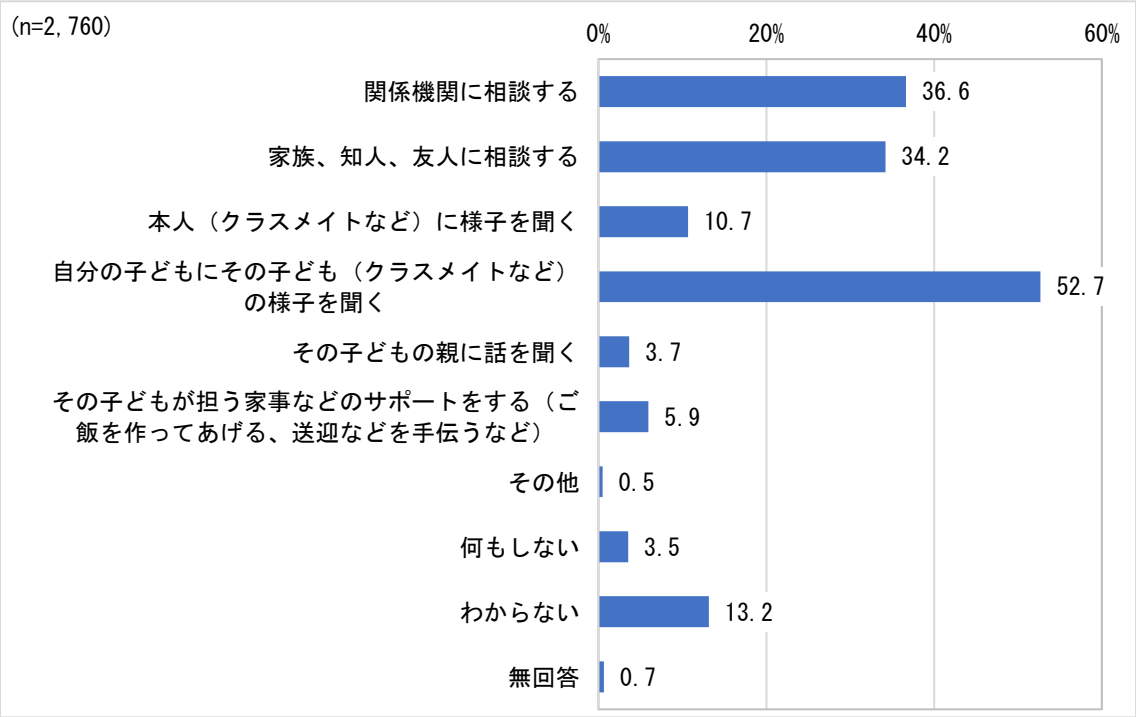
		役所に行っているのをよく見かけるため	家族の通訳をしているのをよく見かけるため	自分の子どもからその子ども（クラスメイトなど）がよく家事や家族の世話をしていると聞いているため	その子どもの親などから子どもによく家事や家族の世話をさせていると聞いているため	その他	無回答
圏域別	中北	1.8	6.0	28.3	19.3	16.9	1.2
	峡東	1.1	6.5	26.9	17.2	17.2	1.1
	峡南	0.0	10.7	35.7	21.4	17.9	0.0
	富士・東部	8.3	8.3	25.0	41.7	8.3	0.0

（６）「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合の行動

「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合（気づいたと仮定した場合も含む）、どのような行動をしようと思うか聞いたところ、「自分の子どもにその子ども（クラスメイトなど）の様子を聞く」が 52.7%で最も高く、次いで「関係機関に相談する」（36.6%）「家族、知人、友人に相談する」（34.2%）などとなっている。

圏域別では、「自分の子どもにその子ども（クラスメイトなど）の様子を聞く」が、峡東で 55.2%と最も高くなっている。

図表 71　「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合の行動（複数回答）



図表 72　「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合の行動（複数回答）

＜圏域別＞　（%）

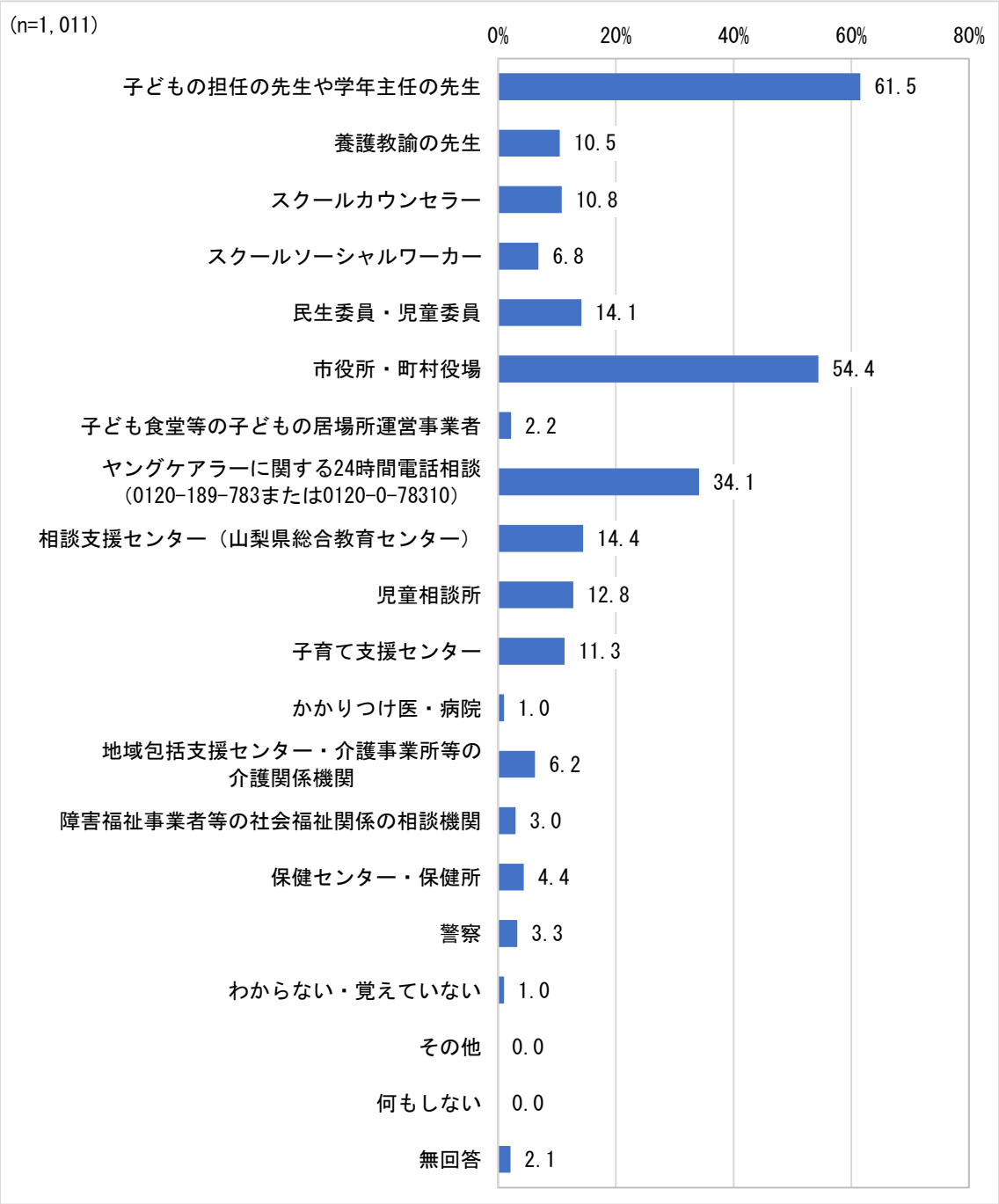
		全体（n＝）	関係機関に相談する	家族、知人、友人に相談する	本人（クラスメイトなど）に様子を聞く	自分の子どもにその子ども（クラスメイトなど）の様子を聞く	その子どもの親に話を聞く	その子どもが担う家事などのサポートをする（ご飯を作ってあげる、送迎などを手伝うなど）	その他	何もしない	わからない	無回答
圏域別	中北	1,354	37.2	33.7	10.9	52.4	3.6	5.6	0.4	4.0	12.8	0.4
	峡東	674	37.1	33.1	9.9	55.2	3.4	5.0	0.6	2.5	12.9	0.4
	峡南	285	38.6	38.2	10.5	51.9	4.9	6.3	0.0	3.9	10.9	1.1
	富士・東部	431	33.2	35.3	10.9	50.3	3.0	8.1	0.7	3.5	16.0	0.9

（７）「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関

「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた場合（気づいたと仮定した場合も含む）、「関係機関に相談する」と回答した人に、どのような機関に相談しようと思うか聞いたところ、「子どもの担任の先生や学年主任の先生」が 61.5%で最も高く、次いで「市役所・町村役場」（54.4%）、「ヤングケアラーに関する 24 時間電話相談窓口（0120-189-783 または 0120-0-78310）」（34.1%）などとなっている。

圏域別では、「子どもの担任の先生や学年主任の先生」が峡南で 73.6%と最も高くなっている。また「養護教諭の先生」も峡南が 19.1%と他に比べて高くなっている。

図表 73　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関（複数回答）



図表 74　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関（複数回答）

＜圏域別＞

（%）

		全体（n＝）	子どもの担任の先生や学年主任の先生	養護教諭の先生	スクールカウンセラー	スクールソーシャルワーカー	民生委員・児童委員	市役所・町村役場	子ども食堂等の子どもの居場所運営事業者	ヤングケアラーに関する24時間電話相談窓口	相談支援センター（山梨県総合教育センター）	児童相談所
圏域別	中北	504	57.5	9.9	10.7	6.9	13.7	54.8	1.6	36.7	17.1	13.5
	峡東	250	62.0	10.8	12.4	6.4	14.0	53.6	2.8	31.6	11.2	12.4
	峡南	110	73.6	19.1	8.2	7.3	18.2	50.9	3.6	27.3	10.0	10.9
	富士・東部	143	65.7	5.6	10.5	6.3	12.6	57.3	2.1	34.3	14.0	11.2

		子育て支援センター	かかりつけ医・病院	地域包括支援センター・介護事業所等の介護関係機関	障害福祉事業者等の社会福祉関係の相談機関	保健センター・保健所	警察	わからない・覚えていない	その他	何もしない	無回答
圏域別	中北	10.9	1.0	6.3	3.0	5.2	4.0	1.2	0.0	0.0	2.0
	峡東	10.8	0.0	4.4	2.0	4.4	2.4	0.8	0.0	0.0	2.4
	峡南	12.7	2.7	7.3	4.5	4.5	0.9	0.9	0.0	0.0	0.9
	富士・東部	11.2	1.4	7.7	2.8	1.4	4.2	0.7	0.0	0.0	2.8

（８） 「ヤングケアラー」と思われる子どもについて「何もしない」主な理由

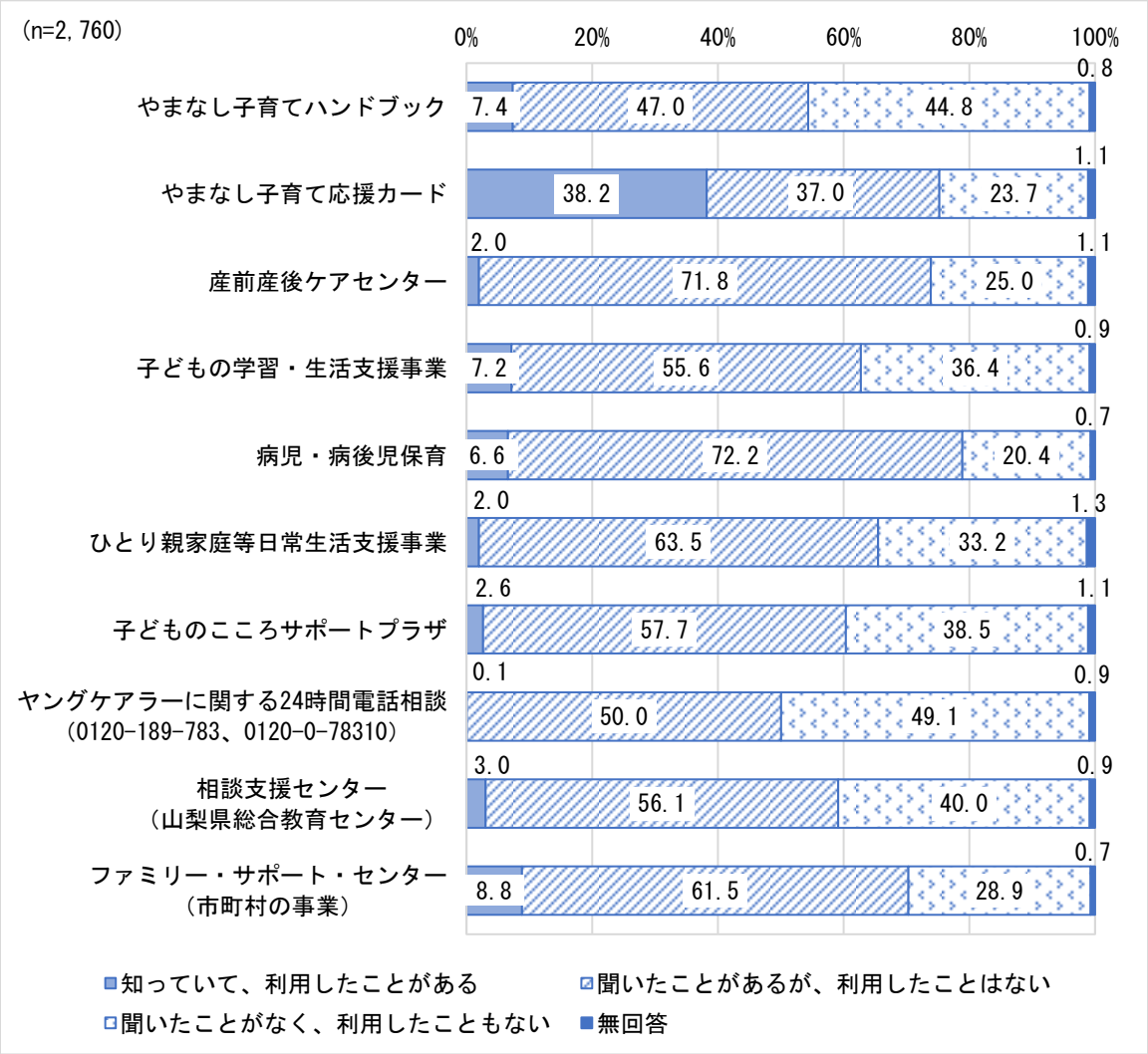
「ヤングケアラー」と思われる子どもがいた場合（いたと仮定した場合も含む）「何もしない」と回答した人は０.0%（０人）であった。

（９） 山梨県や県内市町村で取り組んでいる支援について

山梨県や県内の市町村で子育て世帯に向けて行っている様々な支援の取組の中で、「利用したことがある、聞いたことがある」（「知っていて、利用したことがある」と「聞いたことがあるが、利用したことはない」の合計）と回答した人が、どの取組も５割以上となっている。やまなし子育て応援カードでは「知っていて、利用したことがある」と回答した人が 38.2%と最も高くなっている。

圏域別では、ヤングケアラーに関する 24 時間電話相談窓口（0120-189-783、0120-0-78310）について、中北と峡東で「聞いたことがあるが、利用したことはない」が、峡南と富士・東部で「聞いたことがなく、利用したこともない」が５割強となっている。ファミリー・サポート・センターについては、「利用したことがある、聞いたことがある」（「知っていて、利用したことがある」と「聞いたことがあるが、利用したことはない」の合計）と回答した人が富士・東部で 72.6%と最も高くなっている。

図表 75　山梨県や県内市町村で取り組んでいる支援について



図表 76　山梨県や県内市町村で取り組んでいる支援【ヤングケアラーに関する24時間電話相談窓口（0120-189-783、0120-0-78310）】

＜圏域別＞　（%）

		全体（n＝）	知っていて、利用したことがある	聞いたことがあるが、利用したことはない	聞いたことがなく、利用したこともない	無回答
圏域別	中北	1,354	0.1	50.9	48.4	0.7
	峡東	674	0.0	50.4	49.0	0.6
	峡南	285	0.4	48.1	50.5	1.1
	富士・東部	431	0.0	48.0	50.6	1.4

図表 77　山梨県や県内市町村で取り組んでいる支援【ファミリー・サポート・センター】

＜圏域別＞　（%）

		全体（n＝）	知っていて、利用したことがある	聞いたことがあるが、利用したことはない	聞いたことがなく、利用したこともない	無回答
圏域別	中北	1,354	8.3	61.6	29.4	0.7
	峡東	674	8.3	62.2	28.8	0.7
	峡南	285	7.7	61.1	30.9	0.4
	富士・東部	431	11.6	61.0	26.7	0.7

（１０）「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のためにできる支援（自由記述）

地域の大人として、今後、「ヤングケアラー」と思われる子どもやその家庭のためにできる支援について聞いたところ、以下のような意見があった。

①専門・公的機関等に気軽に相談・連絡でき、サポートにつなげることのできる体制の整備
＜主な意見＞ ・ 担当機関に相談して家庭事情を把握し、通院の送迎・買い物・掃除・炊事など、必要としている支援を把握できるようにすることが第一歩。 ・ 気軽に相談できる環境を整備し、当事者が求めることや必要としている支援等について情報を得られるようにすること。 ・ 子どもが気軽に話ができるよう関わり、公的な相談や支援機関へ繋げていくこと。 ・ 友人・知人等には相談しにくい。気づいたら行政に気軽に連絡できるようになること。 ・ 実際にヤングケアラーが身近にいたとしても気づかないことも多い。認知・周知することも必要。

②学校の中で子どもの様子を気に掛けることのできる場づくり
＜主な意見＞ ・ 学校現場での気づきから民生委員や行政へつなげてヤングケアラーだと思われる子ども達を支援してあげられると良い。 ・ 学校が家庭環境を少なからず把握できていると思うし、把握する必要がある。担任の先生に相談することは難しいこともあるため、スクールカウンセラーや、スクールソーシャルワーカーを活用した相談しやすい環境づくりが必要。

③「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる家庭への公的支援の充実
＜主な意見＞ ・「ヤングケアラー」と思われる子どもが普通の児童・生徒のような放課後を送れるような公的サポート。 ・ 申し込みをすれば今必要なサポートが得られるようなシステムの構築。 ・ 困窮している家庭の子どもの負担が軽減されるような公的機関による柔軟なサービス・制度（例：単位時間ごとに利用可能なベビーシッター派遣制度）。 ・ 子どもや家庭に負担がかからないような訪問介護・看護、デイサービス・ショートステイ支援、子どもの食事の手配。 ・ 子どもだけが問題を抱え込まないようにする為に相談窓口や地域の見守り。 ・ 学校関係者と各市町村の福祉課が連携をとりながらスピード感を持った対応ができる見守り・サポート体制の構築。

④「ヤングケアラー」と思われる家庭のプライバシーに配慮した状況把握
＜主な意見＞ ・ 地域で気づいてあげたいが、地域の大人としてその家庭に介入してその様子を知るのは難しい。 ・ まず見守り、状況をしっかり把握してからどのような対応をしてあげたらよいのかを検討する。 ・ 民生委員・児童委員や市の担当者、学校の先生方と相談をしてその子に対して最善の策を考え

て進めていきたい。
・ 様子を見守り、必要に応じて声掛けをし、国や県のサービスの利用を勧めるなど出来たら良いが、最近のプライバシーを重視する風潮から、他の家庭への働きかけが難しいのが現実。
・ 人間関係が希薄になっている時代で、誰がどこに住んでいるのかも知らない事が多い。まずは、どのような人がどこに住んでいるか把握できる環境を作り、子どもの変化に気づくことからだと思う。
・ 日常的な声かけを行い、見守る。信頼関係を築くことで、子どもが SOS を出しやすいようにする。具体的な、家事などの支援には介入しすぎず、行政に介入してもらう。
・ その家庭の困りごとを把握できれば、周囲でできる手助けなら協力したい。とにかく一度話を聞いてみる。

⑤地域の大人として子どもの環境を見守りつつ、気づきや小さな支援の第一歩につなげること

＜主な意見＞
・ 早めに気づいてあげる。地域の大人が近隣の子どもに関心を持つ。
・ まず気づくこと。子どもや家庭を孤立させないような声かけ（温かい言葉かけやあいさつ）が必要。
・ 地域から孤立しないよう関わりを持つ。必要に応じ支援できるよう、関係機関に連絡相談をする。
・ 子どもが子どもらしく、日常生活を送れるよう、地域社会が目を向けてあげること。出来る範囲で手助けをしてあげられる社会を構築してあげること。
・ ヤングケアラーだった経験から、恥ずかしさから話すことができなかった。子どもにとって受け入れて過ごすしかない日常なので、周りで支え合っていいと発信できることが必要。
・ ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたときに声かけができる距離感。
・ 自覚がなかったり、踏み込んでほしくないと思う子もいると思うが、周りの大人に相談してもいいんだということを周知してほしい。
・ ヤングケアラーの子ども達本人が、少しでも気持ちを素直に話せる場所や環境を作ること。

（１１）「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のためにPTAができる支援（自由記述）

PTA 活動の経験のある人に、今後、「ヤングケアラー」と思われる子どもやその家庭のために PTA ができる支援について聞いたところ、以下のような意見があった。

①「ヤングケアラー」そのものに関する学習・理解を深められるような取組を進めること

＜主な意見＞
・ ヤングケアラーを知ってもらうための講演企画・資料配布などの広報・啓発活動。
・ ヤングケアラーの事について正しく知り、偏見や差別につながらないような周知活動。
・ 会報や総会資料などでヤングケアラーの問題を積極的に取り上げ、当事者だけでなく地域住民が気付いて相談機関につなげられる取組みを行うことが必要。
・ PTA 活動に参加できる家庭には、参加するだけの余裕があり、ヤングケアラーと思われる子の家族が PTA 活動に参加できるとは考えにくいため、保護者間での理解促進が必要。
・ 自分がヤングケアラーであることを認識させつつ、相談窓口を紹介し、誰かに相談することにより、改善策があることを伝える。
・ PTA の中でどんな支援が出来るかなどを話し合い、理解を深め、支援できる体制作りをする。

②子どもの様子の変化に気づき、話を聞いてあげられるようになること
＜主な意見＞ ・ 子どもの率直な意見を聞き取り、それに相応しい支援を提供する。子どもらしい時間を持てるようにしてあげる。 ・ 見守る。その家族が何を望んでいるのかを知り関係機関に連絡したり、できそうな支援を考え、実行できたらいい。 ・ 話を聞くこと。困り事の相談にのること。 ・ 困っていることを相談しやすくなるような活動をしたり環境を整えたりすること。子ども達の様子に目を配る。 ・ まずは気付き、声をかけて、コミュニケーションを取る事が一番大切。その中で支援できる事を早期に実行していく。 ・ いち家庭の問題と捉えず、自分の子どもたちを含め状況を理解し、困り事などを話せる関係性を維持できるようにする。 ・ 気軽に相談出来るような関係作り。挨拶したり、適宜褒めたりしながら、子どもとの関係を築き、子どもが悩みなどを話せるような声がけをする。 ・ ヤングケアラーは踏み込まないと見えてこないため、お互いに信頼を得られるような強制的でない親睦を通して、偏りのない話し合いができるようなファシリテーター的な立場の人が必要。

③学校内での気づきに対して関係機関と連携できる対応
＜主な意見＞ ・ 行政の窓口や、その前段階でコーディネーター的な役割をしている問い合わせ先を把握すること。 ・ 学校や行政につなげること。 ・ PTA を通した学校や市町村と連携したサポートや情報共有。必要ならば学習支援。 ・ 支援機関への橋渡し役。 ・ ヤングケアラーと思われる子どもが声をあげやすくする工夫をし（学校からの声かけ）、必要なサポートが受けられるよう手助けする。

④PTA 組織としての組織的対応の難しさ
＜主な意見＞ ・ デリケートな問題であり、PTA での支援は難しい。託児などを設置した事もあるが、コロナ感染の観点から手助けの難しさは感じる。 ・ PTA として個々に関わることは難しいと思う。 ・ 個人情報の保護の観点から、PTA が直接の支援をするのは難しく、現実的でない。 ・ ヤングケアラーの家庭の方はまず、PTA 活動をする余裕がないと思う。 当事者は世間に家庭の事情等を知られたくはないのではないか。むやみに PTA が関わるのではなく、きちんと行政に繋げた方がよいのではないか。

（１２）「ヤングケアラー」と思われる子どもや家族のために山梨県や各市町村・学校に求める対応・要望（自由記述）

「ヤングケアラー」と思われる子どもやその家庭への支援として、山梨県や各市町村・学校に求める対応・要望について聞いたところ、以下のような意見があった。

①子どもが気軽に相談・発信できる場所・環境・機会の充実と相談窓口の更なる啓発
＜主な意見＞ ・ 子どものための相談窓口を設け、プライバシーを保ちながら子ども個人と対話できる場所の設置。 ・ 当事者の家庭には介入することが難しい。子どもが自ら相談できる体制の充実（スクールカウンセラーなど）と地域社会のつながりが重要。 ・ 子どもが相談しやすい環境づくりと周知が必要。ちょっとでも気になる事があれば大人が声をかけてあげる社会づくり。 ・ 実際にヤングケアラーとなっている子ども自身が相談しやすい連絡先を子ども達にわかりやすく提示してあげてほしい。 ・ 様々なサポートや窓口があると思うが、実際にどこに相談窓口があるのか、困っているとき誰に相談したらいいのか、もう少しわかりやすくした方がいいのかと思う。 ・ 相談しやすい環境を整えてあげることと、相談を待つだけではなく、少しでも疑われる場合は、各機関から直接こまめに連絡をとってあげること。 ・ 当たり前と思って相談の必要性を感じていなかったり、実情を世間に知られるのが嫌だったりして相談していないといった事が多いと聞く。相談の必要性を訴えてほしい。 ・ 身近にヤングケアラーな子がいると気づいた方が相談できる窓口の設置。 ・ 世の中にだんだんヤングケアラーという言葉が浸透してきているのは、県や市町村での活動のおかげで、良いことだと思う。ヤングケアラーへの対応で、成功例などの具体的な情報の公開をしてもらえると、自分ができることの参考になる。

②学校内での気づきから支援につなげられるような多機関連携
＜主な意見＞ ・ まずは、学校が気付くこと。 先生、管理職、関係機関、いずれかの大人が、早急に子ども本人とつながること。SOS を出せるようにすること。 孤立させないこと。 ・ 先生が親身になって相談に乗り、県や市町村の相談機関との橋渡しをすることが必要。 ・ 学校が窓口になり、支援機関を紹介したりする。 ・ 学校の先生に相談したら専門機関に繋がるシステムを作ってほしい。先生はただ繋ぐだけで、その他の負担を強いられなければ、繋がる件数が増えると思う。 ・ 学校と行政や地域の民生委員など垣根を越えて連携ができないと支援は難しい。 ・ 担任の先生が異変をキャッチしやすいと思うので、そこから相談機関に繋ぐ。県は具体的な事例から支援方法を検討して欲しい。 ・ 学校は子どもをよく観察してあげて欲しい。最近、様子が変わった等一番最初に気づける立場にあると思うので、関係機関に連絡し支援に繋げて欲しい。 ・ 子どもが自ら相談しやすい窓口を設置して学校や市町村と連携しサポートの提案ができる仕組。

・ 学校に子どもが悩み事や困り事を伝えやすい常駐の相談員を適切な人数で配置してほしい。日々の業務で先生方はとても忙しく子どもからの相談にまで手が回っていないように見えてしまい、人員が不足しているように感じる。

③ヤングケアラーとその家庭の状況把握と支援の強化

＜主な意見＞

・ ケアが必要な家族が公的支援を受けやすいような工夫（利用手続きのスマート化、利用費用負担軽減など）。
・ ヤングケアラーのためのヘルパー的システムの構築。 第三者が家庭に入ることにより、家庭の状況把握や様々な気付き、ケアの幅が広がる。
・ 幼いきょうだいの保育所の優先的な入所斡旋、高齢者・障がい者のデイサービス（ショートステイ含む）の斡旋などの、少しでも家庭負担が減るような支援。
・ 学校に通えなくなっている子どもに対して、勉強時間が確保できる工夫をして、学習の支援ができる場があればいいと思う。
・ 定期的な訪問による状況把握や対話によって、ヤングケアラーの心の支えになることが必要。
・ 家庭内の支援が充実できれば自然とヤングケアラーは減るのではないか。
・ 子どもの支援だけではなく、親への支援が大切だと思う。どのようなサービスが受けられるか家族に説明した上で、児童と別で面談し、定期的に近況を聞くべきだと思う。
・ ヤングケアラー支援も大切だが、普通の子育て支援の拡充を求める。子どもの医療費窓口無料化は助かっている。

３． 保護者インタビュー調査

（１） 概要

アンケート調査協力者に対して、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査の対象者は、「ヤングケアラー」と思われるお子さんの保護者のほか、実際にヤングケアラーを見かけた保護者、及び役員等で PTA 活動や地域活動に従事した経験のある保護者を対象とした。 対象者には、カテゴリーごとに主に以下の項目について伺った。

グループⅠ　家庭内に「ヤングケアラー」と思われるお子さんがいる保護者
＜主な質問事項＞ ・お子さんがケアを担うことになった経緯・開始時期 ・ご家庭の方やお子さん自身が「ヤングケアラー」に該当すると認識しているかとその理由 ・お子さんのお世話の状況の詳細 ・お世話を必要としている方の状況 ・家庭内のほかの家族のケアへのかかわりの状況 ・相談機関への相談ニーズ ・ケアを必要としている状況で特に困っていることや改善したいこと ・現在利用可能なサービスを利用できているかどうか・どのような支援機関につないでほしいか ・利用してみたいと思うサービスの仕組みはあるか ・ヤングケアラーの家庭の支援充実のために拡大してほしいサービスや支援策に関するご意見　等

グループⅡ　身近にヤングケアラーを見かけた経験のある保護者
＜主な質問事項＞ ・ヤングケアラーと思われるお子さんを見かけた場面・状況の詳細 ・ヤングケアラーと思われるお子さんを見かけた際の行動（または行動を取ることが難しかったか） ・行動を取ったことによる効果等 ・ヤングケアラーと思われるお子さんを見かけた際に周囲から手を差し伸べやすいような環境づくりに関して ・PTA や身近な地域活動でヤングケアラーやその家庭の支援のために取り組もうとしていることや支援していくうえで難しいと感じることがあるか　　等

グループⅢ　昨年度 PTA 役員として PTA 活動に携わっていた保護者
＜主な質問事項＞ ・PTA 活動で、ヤングケアラーやその家庭を支援するために、取り組んでいることや、取り組もうとしていること ・PTA 活動でヤングケアラー支援を拡げていくために、学校に期待する役割や行動 ・PTA や地域活動ができるヤングケアラー支援を拡げていくために必要な支援について ・子どもが気軽に立ち寄れるような「居場所」を地域主体で作りたいと思うか ・ヤングケアラーやケアが必要なご家族のいる家庭の支援のために行政が取り組むべきと思うこと ・山梨県の取組に対する要望　等

（２） 調査結果

各グループの対象者からあげられた主な意見は以下の通りであった。

項目	主な意見（抜粋。カッコ内の表記はグループ）
既存の相談窓口・サービスの更なる啓発	・現在の家庭状況について踏み込んで話を聞いてくれる窓口があればよい。（Ⅰ） ・24 時間総合相談窓口の存在を知らなかった。ひとり親家庭などの何らかの支援を必要とする家庭宛の情報提供のチラシを全校生徒に配布していただければありがたい。何らかの支援が必要な状態になった時に参照可能な情報が得られる。（Ⅰ、Ⅲ） ・家庭は子どもが持って帰るプリント類が主な情報収集手段。PTA 広報誌など、各家庭に届くお便りの配布機会を活用し、県のヤングケアラーの取組みの特集や窓口の連絡先を皆の目に触れやすくしたほうがよい。（Ⅰ） ・「ヤングケアラー」の保護者は必要な情報を自分から取りに行くことが難しい。情報が届かない人や活用できない人に、どのように情報を届けるかを考えることが必要。（Ⅰ、Ⅲ） ・「ヤングケアラー」と思われる子どもを発見した時の相談先とそのルートが思い浮かばない。既に相談窓口はあるかもしれないが、十分に周知されていないのでは。（Ⅲ）
子どもや家庭と地域がゆるやかな接点を持ち、気づきにつながる関係を構築	・近所・地域でのつながりは大事で、地域の活動にできるだけ子どもを連れていき、地域住民に子どもを認知してもらえるようにしている。（Ⅰ） ・面識のない大人には話すことはできないが、子どもは友人には家庭内のことを話している可能性があるため、さりげない人間関係の中で自然に手を差し伸べるのがよい。地域で気軽に声を掛け合う関係づくりが大切。（Ⅱ、Ⅲ） ・「ヤングケアラー」と思われる子どもを見かけた場合、学校に伝えるか、自治会にも相談できるようにしている。民生委員の定例会の話題にも挙がっている。（Ⅲ） ・行政に支援を依頼する以前に、地域で自分たちが気づくことが大切。（Ⅲ） ・子どもにとっては第三者である地域の大人が窓口に導くことが必要。（Ⅲ）
周囲からリーチアウトすることの難しさ	・校内や地域にうわさが広まる恐れもあり、恥ずかしいという思いから、子どもは自分から家庭状況を周囲には明かすことはない。大人の側も、知らない子どもに声をかけることは難しい。（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ） ・「ヤングケアラー」と思われる子どもを見つけても、PTA の役員や民生委員などではない一般の保護者の場合は、行動を取ることが難しいのではないか。（Ⅱ、Ⅲ） ・児童委員、民生委員もヤングケアラーの支援を行うのは現状ではなかなか難しい。（Ⅱ） ・保護者の反発や外部の介入のしにくさを感じる。（Ⅱ） ・子どもとの間にコミュニケーションの温度差があり、バランスのとり方が難しい。顔見知りとなれば、様子を聞けるようになる。（Ⅲ） ・子どもに心を開いてもらうことができないと、何をしてあげられるか、何を求めているか分からない。（Ⅲ） ・コミュニケーションを嫌がる保護者も少なくなく、社会全体で人付き合いが希薄になっているため、余計にヤングケアラーが孤立している。（Ⅲ）
子どもと大人が気軽に立ち寄り、交流できる場や機会の不在	・学校の先生が日々多忙な中では最低限のかかわりにとどまり、子どもや保護者が状況を他者と共有できる機会が少ない。（Ⅰ、Ⅱ，Ⅲ） ・親子で食事を共にできる子ども食堂があるとありがたい。（Ⅰ、Ⅱ） ・親のケアが必要なケースがある。親のケアが整えば、子どもに負担がかからなくなる。（Ⅲ） ・子どもが自主的に行きたいと思う施設をどのように作るかが課題だと感じる。学習スペースなど、子どもが自由に出入りできるようなところがあるとよい。大人自身も地域の人と触れ合う機会がない。（Ⅲ）

第IV章　一般県民調査／県政モニター調査

1．　調査について

一般県民の「ヤングケアラー」の認知度や意識を確認するため、Web アンケート調査会社にモニター登録している 20 代以上の男女を対象に「一般県民調査」を行った。また、今後の県民意識の経年比較を行うために、県政モニターの登録者に対する「県政モニター調査」も実施した。いずれもサンプリングによる調査のため、回答者の属性ごとの回収割合は母集団の人口構成と異なる。そのため、県民の意見を適切に反映できるよう、回答者の属性ごとの回収割合を母集団の人口の構成比となるよう重みづけをして集計した。

なお、県政モニター調査については、回答者が少ない設問については結果を省略している。

＜参考：重みづけについて＞

例えば、①のように母集団の人口構成比と回収割合に差異がある場合、それらを比較して補正率を算出し（②）、男性の回収サンプルであれば「1.25」の重みづけをすることで、全人口に対する割合と同じ構成比にできる（③）。

①母集団と回収数（例）

	母集団の人口及び人口構成比		回収数及び回収割合	
	人口（人）	人口構成比（%）	回収数（人）	回収割合（%）
男性	1,000	**50.0**	120	**40.0**
女性	1,000	**50.0**	180	**60.0**
合計	2,000	100.0	300	100.0

②補正率（例）

	補正率
男性	**1.25**
女性	**0.83**

例：（男性の補正率）＝（母集団の男性の人口構成比）／（男性の回収割合）

③補正後の回収数（例）

	回収数（人）	回収割合（%）
男性	150	50.0
女性	150	50.0
合計	300	100.0

例：（男性の補正後の回収数）＝（男性の回収数）×（男性の補正率）

2． 基礎情報

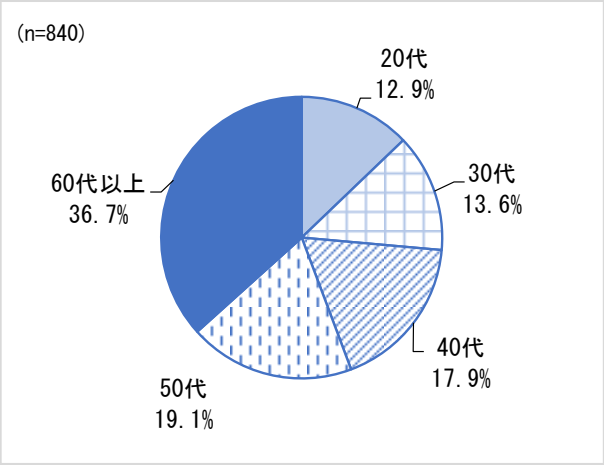
（1） 年代

年代は、一般県民調査では、「60 代以上」が 36.7%で最も高く、次いで「50 代」（19.1%）、「40 代」（17.9%）となっている。

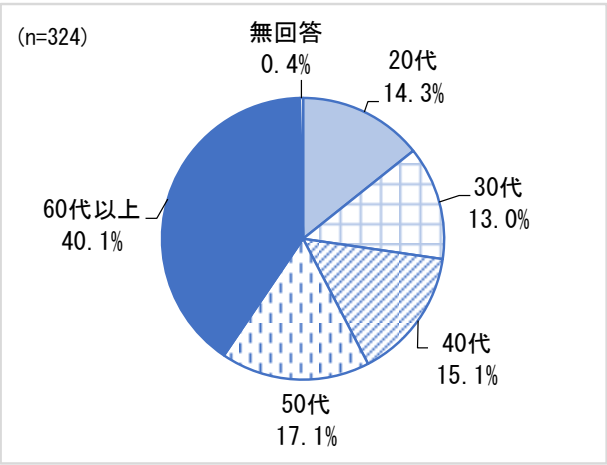
県政モニター調査では、「60 代以上」が 40.1%で最も高く、次いで「50 代」（17.1%）、「40 代」（15.1%）となっている。

図表 78 年代

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



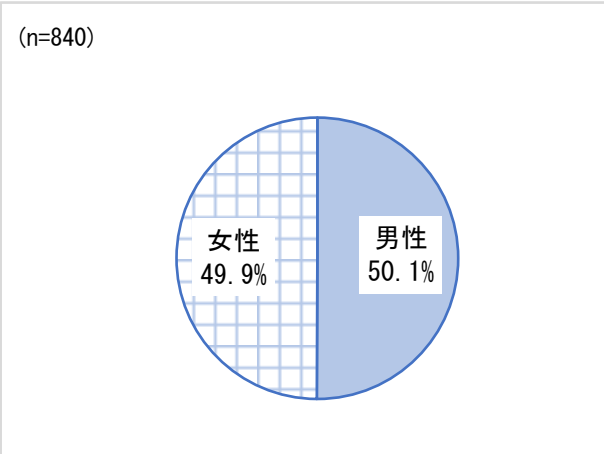
（2） 性別

性別は、一般県民調査では、「男性」が 50.1%、「女性」が 49.9%となっている。

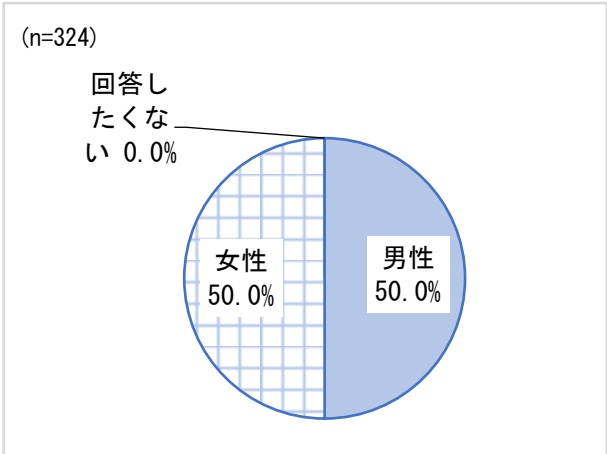
県政モニター調査では、「男性」「女性」ともに 50.0%となっている。

図表 79 性別

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



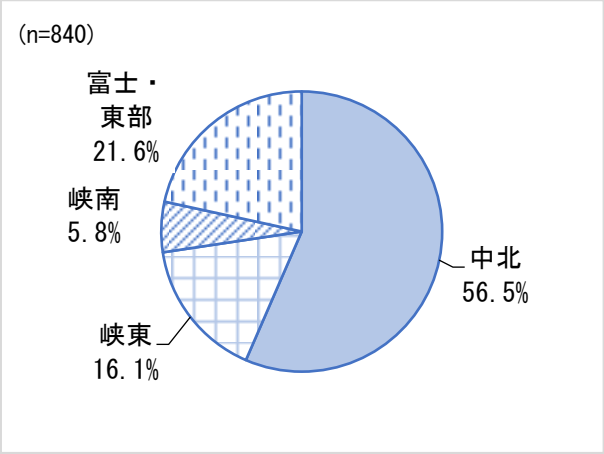
（3） 居住地

居住圏域は、一般県民調査では、「中北」が 56.5%と最も高く、次いで「富士・東部」（21.6%）、「峡東」（16.1%）となっている。居住市町村では、「甲府市」が 25.7%と全体の約４分の１となっている。

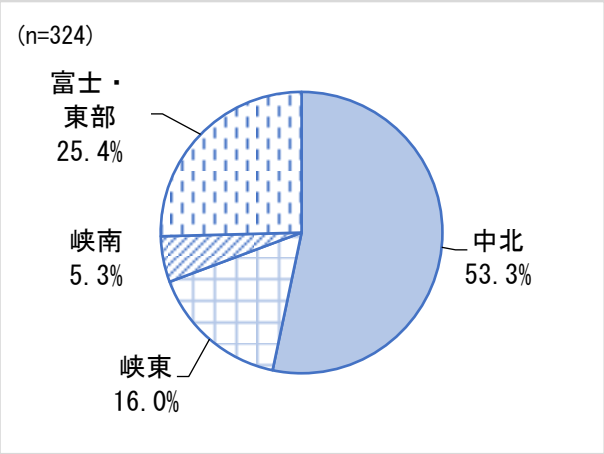
県政モニター調査でも、「中北」が 53.5%と最も高く、次いで「富士・東部」（25.4%）、「峡東」（16.0%）となっている。

図表 80　居住圏域

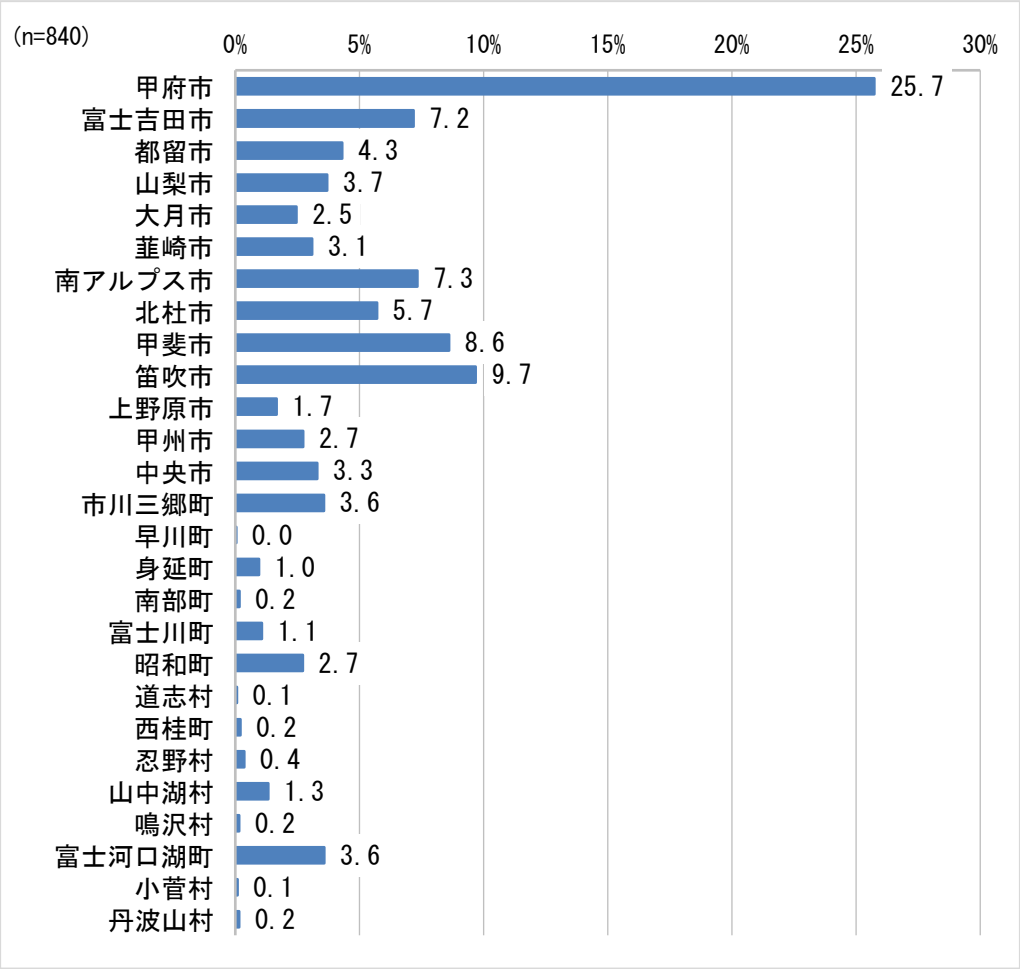
＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



図表 81　居住市町村　＜一般県民調査＞



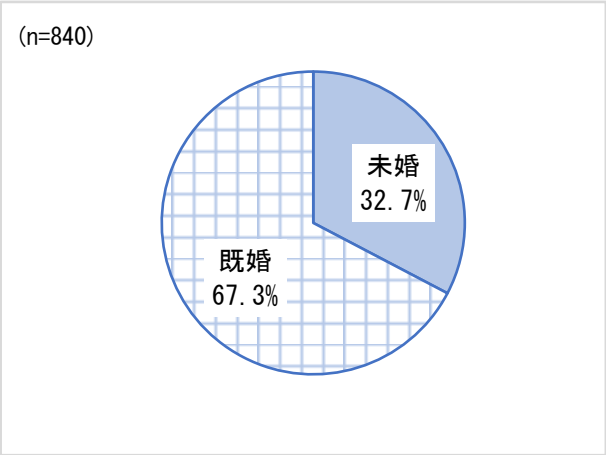
（４） 婚姻状況

婚姻状況は、一般県民調査では、「既婚」が 67.3%、「未婚」が 32.7%となっている。

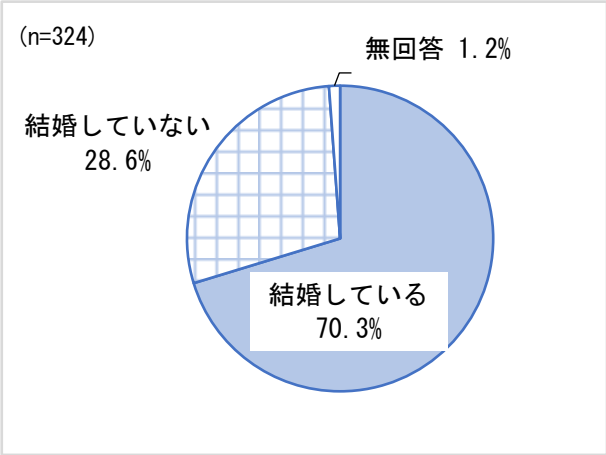
県政モニター調査では、「結婚している」が 70.3%、「結婚していない」が 28.6%となっている。

図表 82　婚姻状況

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



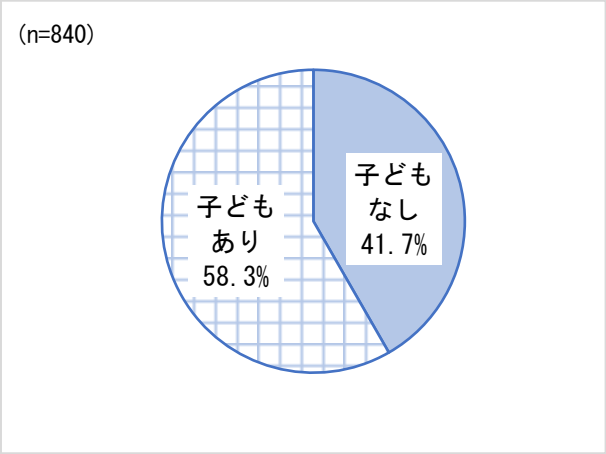
（５） 子どもの有無

子どもの有無は、一般県民調査では、「子どもあり」が 58.3%、「子どもなし」が 41.7%となっている。

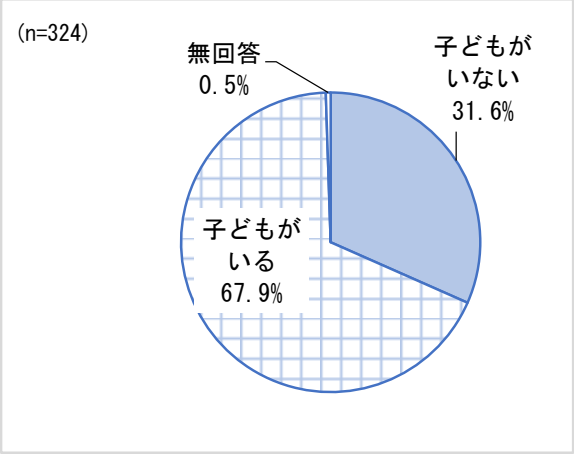
県政モニター調査では、「子どもがいる」が 67.9%で、一般県民調査より高くなっている。

図表 83　子どもの有無

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



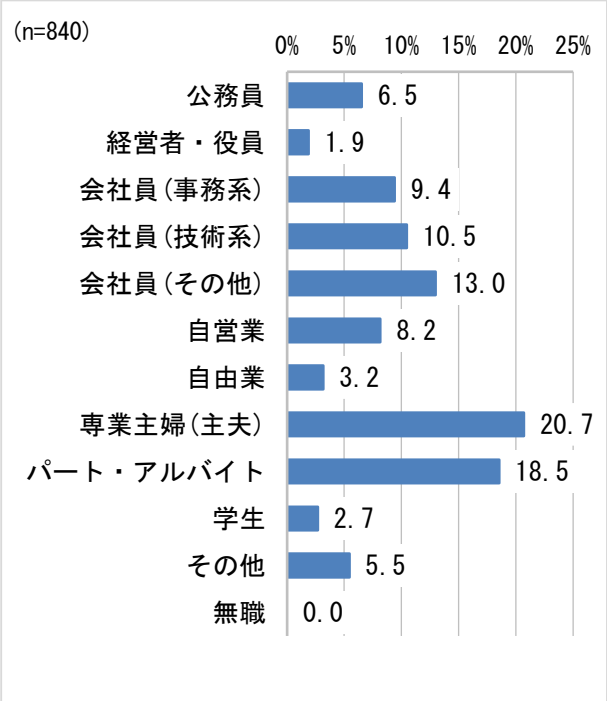
（6） 職業

職業は、一般県民調査では、「専業主婦(主夫)」が 20.7%で最も高く、次いで「パート・アルバイト」（18.5%）、「会社員（その他）」（13.0%）となっている。また、「学生」（2.7%）の内訳は、「大学生」が 87.5%となっている。

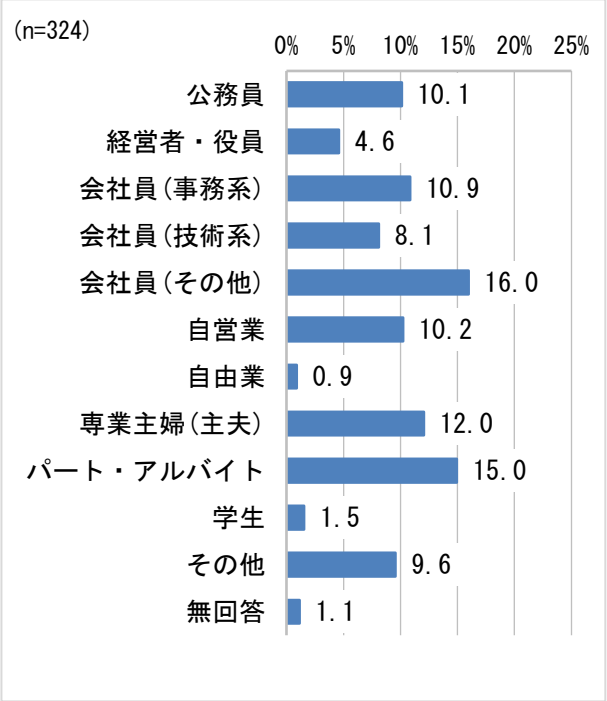
県政モニター調査では、「会社員（その他）」が 16.0%で最も高く、次いで「パート・アルバイト」（15.0%）、「専業主婦(主夫)」（12.0%）となっている。

図表 84　職業

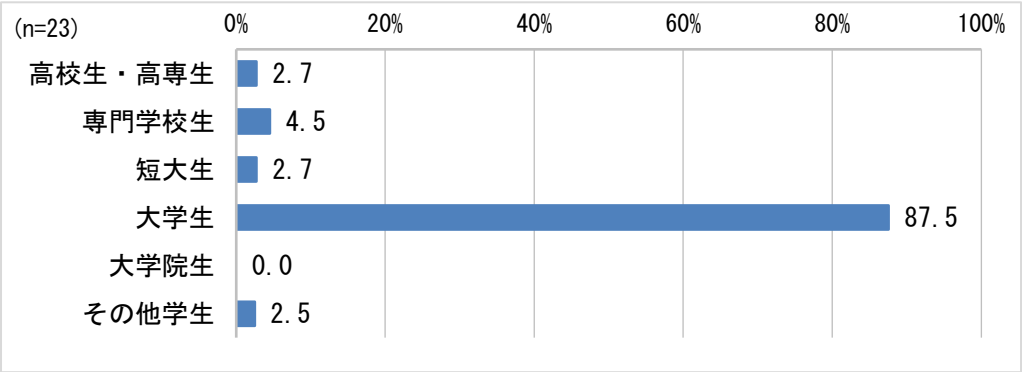
＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



図表 85　学生種別　＜一般県民調査＞

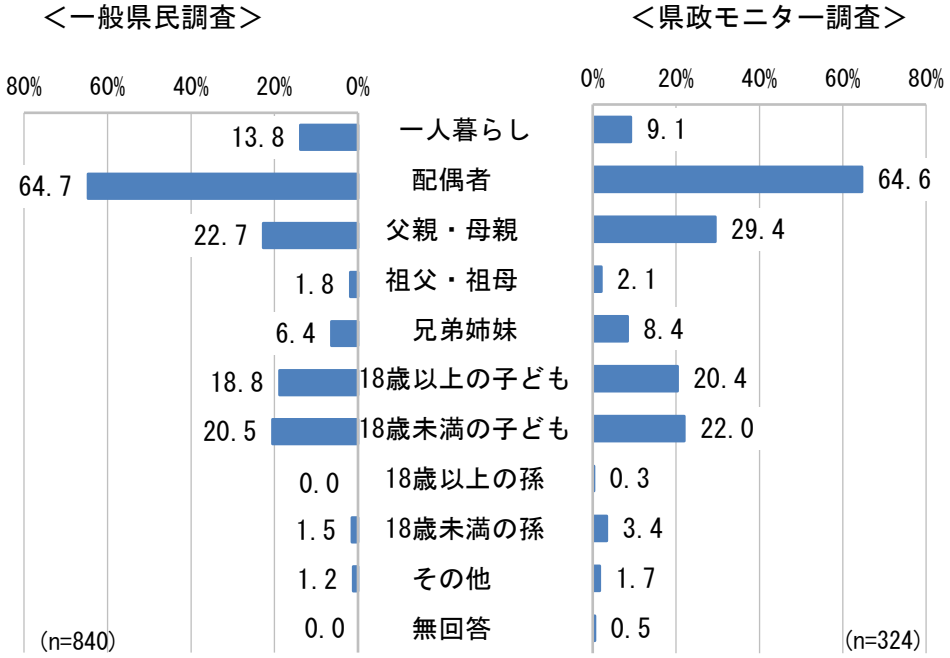


（７） 同居家族

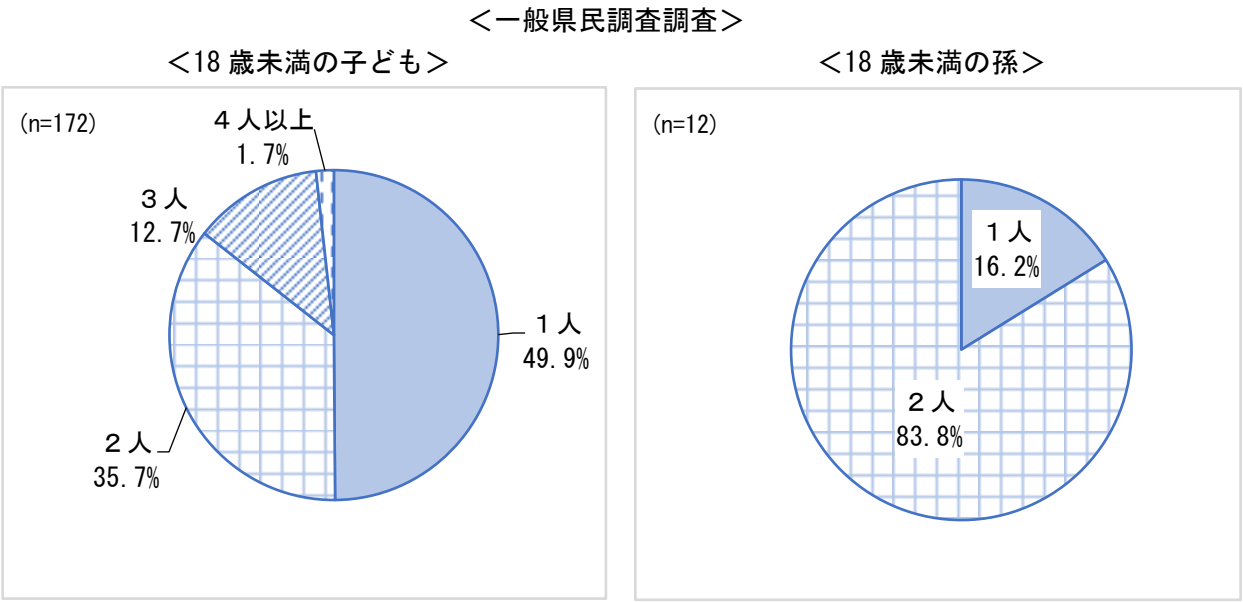
現在一緒に住んでいる家族は、一般県民調査では、「配偶者」が 64.7%と最も高く、次いで「父親・母親」（22.7%）、「18 歳未満の子ども」（20.5%）、「18 歳以上の子ども」（18.8%）となっている。「18 歳未満の子ども」の人数は「１人」が 49.9%で最も高く、次いで「２人」が 35.7%となっている。また、「一人暮らし」は 13.8%となっている。

県政モニター調査では、「配偶者」が 64.6%と最も高く、次いで「父親・母親」（29.4%）、「18 歳未満の子ども」（22.0%）、「18 歳以上の子ども」（20.4%）となっている。「18 歳未満の子ども・孫」の人数は「１人」が 45.3%で最も高く、次いで「２人」が 38.9%となっている。

図表 86　同居家族（複数回答）

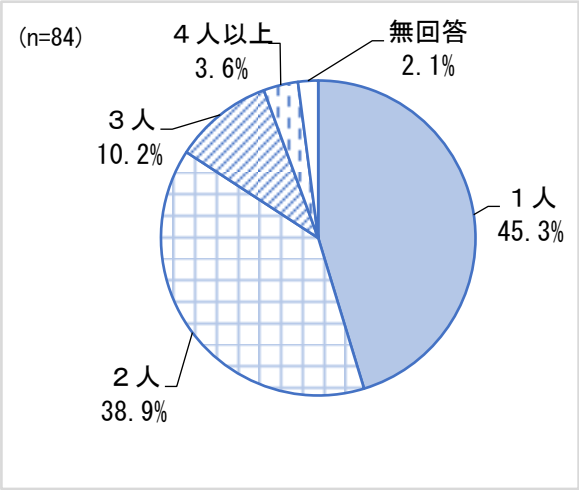


図表 87　18 歳未満の子ども・孫の人数



図表 88　18 歳未満の子ども・孫の人数

＜県政モニター調査＞

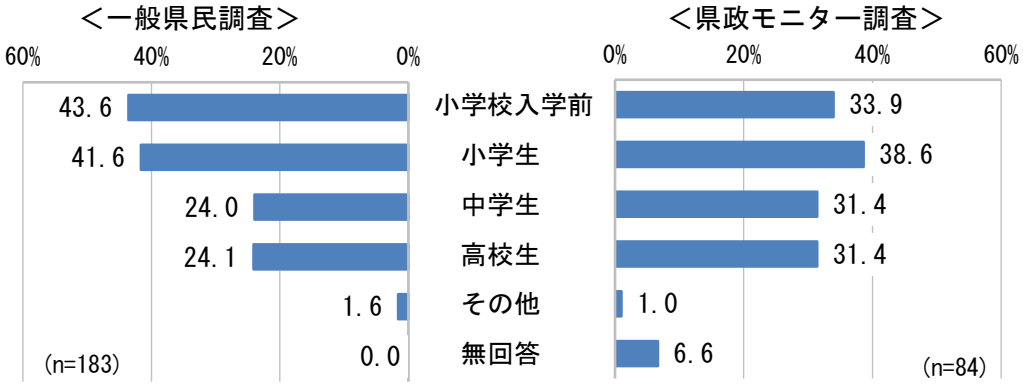


（８）　同居している 18 歳未満の子ども･孫の年代

現在一緒に住んでいる家族に「18 歳未満の子ども」「18 歳未満の孫」がいると回答した方の、子どもや孫の年代は、一般県民調査では、「小学校入学前」が 43.6%、「小学生」が 41.6%、「中学生」が 24.0%、「高校生」が 24.1%となっている。

県政モニター調査では、「小学生」が 38.6%、「小学校入学前」が 33.9%、「中学生」と「高校生」がともに 31.4%となっている。

図表 89　18 歳未満の子ども・孫の年代



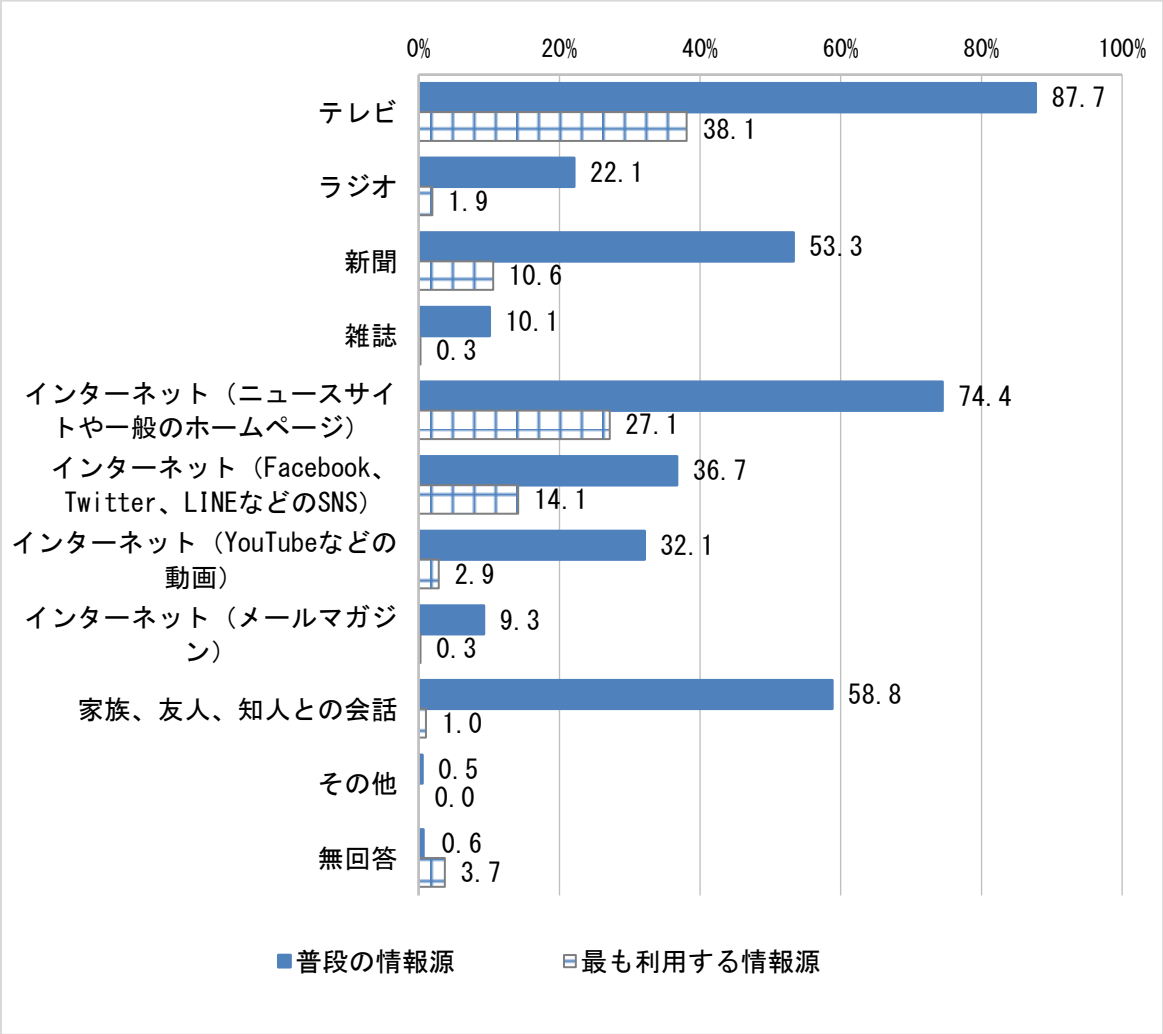
（９） 情報源

県政モニター調査において、普段どのような方法で情報を入手しているかについては「テレビ」が 87.7%で最も高く、次いで「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」（74.4%）、「家族、友人、知人との会話」（58.8%）となっている。

最も利用する情報源としては、「テレビ」が 38.1%で最も高く、次いで「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」（27.1%）、「インターネット（Facebook、Twitter、LINE などの SNS）」（14.1%）となっている。

図表 90 情報源（「普段の情報源」複数回答、「最も利用する情報源」単数回答）

＜県政モニター調査＞



年代別にみると、普段の情報源については、20 代・30 代では「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」が最も高く、次いで「テレビ」、「インターネット（Facebook、Twitter、LINE などの SNS）」となっている。20 代では、「家族、友人、知人との会話」より「インターネット（YouTube などの動画）」が高い。40・50 代では「テレビ」、「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」に次いで「家族、友人、知人との会話」が高い。60 代以上は「テレビ」に次ぎ、「新聞」が高くなっている。

最も利用する情報源は、20 代・30 代は「インターネット（Facebook、Twitter、LINE などの SNS）」が最も高く、次いで「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」となっている。40 代・50 代は「インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）」が最も高く、次いで「テレビ」が高い。60 代以上は「テレビ」が最も高く、次いで「新聞」となっている。

図表 91　情報源（「普段の情報源」複数回答、「最も利用する情報源」単数回答）：年代別

＜県政モニター調査＞　（%）

		全体（n＝）	テレビ	ラジオ	新聞	雑誌	インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）	インターネット（Facebook、Twitter、LINE などの SNS）	インターネット（YouTube などの動画）	インターネット（メールマガジン）	家族、友人、知人との会話	その他	無回答
普段の情報源	20 代	46	71.4	15.3	19.8	12.7	79.2	78.6	69.2	6.3	65.1	0.0	0.0
	30 代	42	83.3	17.9	24.8	4.0	89.1	66.5	45.5	9.8	62.5	0.0	0.0
	40 代	49	82.0	17.0	41.7	10.2	81.3	41.9	39.4	11.2	60.0	0.0	0.0
	50 代	55	89.6	31.7	50.3	4.6	91.0	27.9	24.0	14.3	58.8	0.0	0.0
	60 代以上	130	96.2	23.1	79.6	13.5	59.1	14.4	15.6	7.3	55.5	1.3	1.6
最も利用する情報源	20 代	46	10.8	1.8	2.7	0.0	28.8	42.4	0.0	0.0	0.0	0.0	13.5
	30 代	42	23.9	0.0	2.0	2.0	25.7	35.5	8.9	0.0	0.0	0.0	2.0
	40 代	49	30.9	2.5	1.7	0.0	44.2	9.5	4.2	1.7	3.5	0.0	1.7
	50 代	55	36.1	3.7	9.0	0.0	39.0	7.5	1.5	0.0	0.0	0.0	3.1
	60 代以上	130	56.3	0.7	20.2	0.0	15.8	1.9	2.0	0.0	1.3	0.0	1.9

３． ヤングケアラーについて

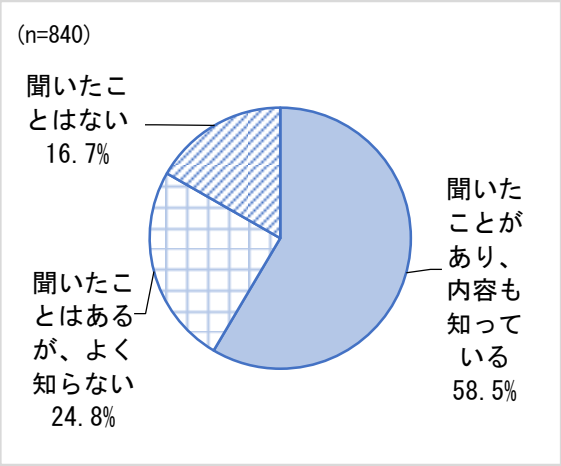
（１） 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに聞いたことがあるかについて、一般県民調査では「聞いたことがあり、内容も知っている」が 58.5%、「聞いたことはあるが、よく知らない」が 24.8%で、約８割強（83.3%）が「聞いたことがある」となっている。一方、「聞いたことはない」は 16.7%となっている。

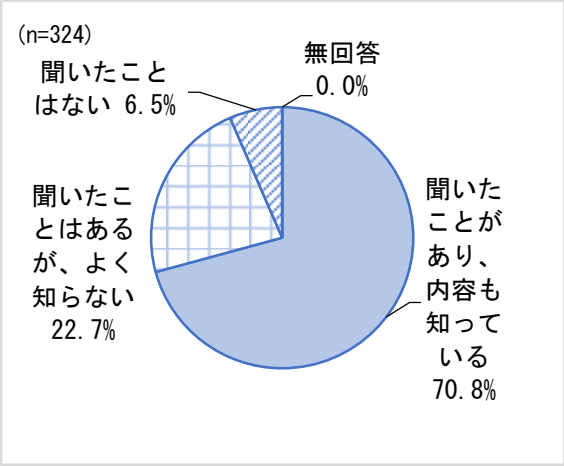
県政モニター調査では、「聞いたことがあり、内容も知っている」が 70.8%、「聞いたことはあるが、よく知らない」が 22.7%で、約９割強（93.5%）が「聞いたことがある」となっている。一方、「聞いたことはない」は 6.5%となっている。

図表 92 「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



年代別・圏域別にみると、一般県民調査における年代別では、「聞いたことがあり、内容も知っている」は、40 代が 62.3%で最も高く、次いで 60 代が 60.3%となっている。一方、「聞いたことはない」は 20 代が 22.6%と最も高い。圏域別では、「峡南」が「聞いたことがある」（「聞いたことがあり、内容も知っている」（57.9%）と「聞いたことはあるが、よく知らない」（29.4%）の合計）が、87.3%と最も高くなっている。

県政モニター調査における年代別では、「聞いたことがあり、内容も知っている」は、60 代が 82.1%で最も高く、次いで 50 代が 80.5%となっている。一方、「聞いたことはない」は 30 代が 9.0%と最も高くなっている。

図表 93　「ヤングケアラー」という言葉の認知状況

＜一般県民調査＞：年代別・圏域別　（%）

		全体（n＝）	聞いたことがあり、内容も知っている	聞いたことはあるが、よく知らない	聞いたことはない
年代別	20 代	108	51.8	25.6	22.6
	30 代	114	56.0	27.0	17.0
	40 代	150	62.3	22.9	14.8
	50 代	160	57.9	23.1	19.0
	60 代以上	308	60.3	25.4	14.3
圏域別	中北	475	60.6	21.1	18.2
	峡東	135	59.7	23.9	16.4
	峡南	49	57.9	29.4	12.7
	富士・東部	181	52.3	33.6	14.2

＜県政モニター調査＞：年代別　（%）

		全体（n＝）	聞いたことがあり、内容も知っている	聞いたことはあるが、よく知らない	聞いたことはない
年代別	20 代	324	70.8	22.7	6.5
	30 代	46	65.1	25.9	9.0
	40 代	42	76.3	23.7	0.0
	50 代	49	80.5	12.7	6.8
	60 代以上	55	82.1	11.9	6.0

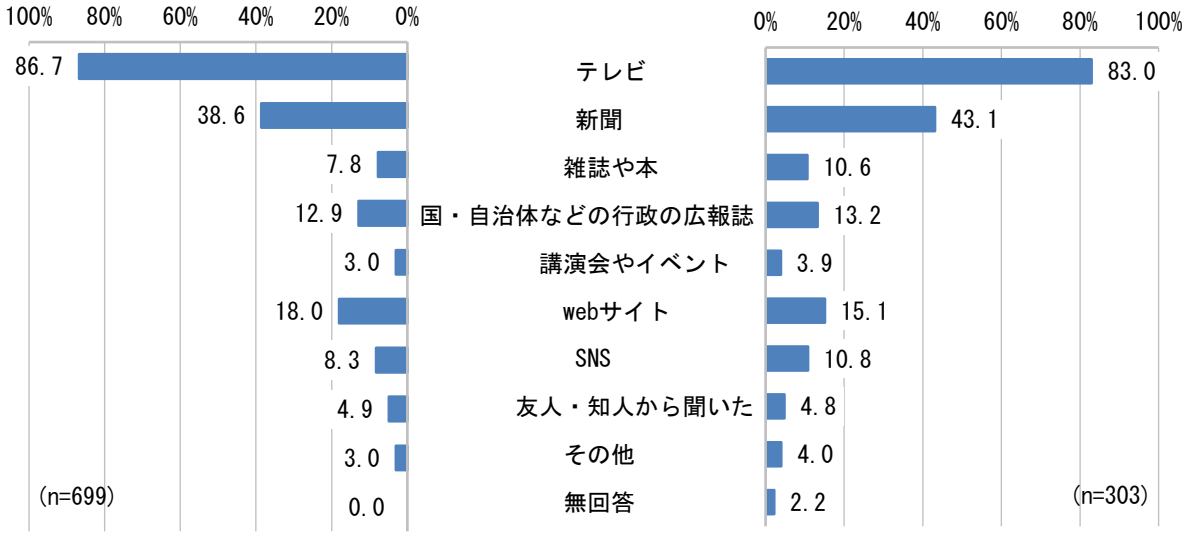
（２）「ヤングケアラー」という言葉の認知経路

「ヤングケアラー」という言葉を「聞いたことがあり、内容も知っている」「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答した方に、「ヤングケアラー」という言葉をどこで知ったか聞いたところ、一般県民調査では、「テレビ」が86.7%と最も高く、次いで「新聞」（38.6%）、「web サイト」（18.0%）、「国・自治体などの行政の広報誌」（12.9%）となっている。

県政モニター調査でも、「テレビ」が 83.0%と最も高く、次いで「新聞」（43.1%）、「web サイト」（15.1%）、「国・自治体などの行政の広報誌」（13.2%）となっている。

図表 94　「ヤングケアラー」という言葉の認知経路（複数回答）

＜一般県民調査＞　＜県政モニター調査＞



年代別にみると、一般県民調査では、どの年代でも「テレビ」が最も高く、８～９割となっている。また、20代では、「SNS」（20.6%）、30代では「WEB」サイト（37.0%）が、40代以上では「新聞」（３～５割）が、「テレビ」に次いで高くなっている。

県政モニター調査でも、どの年代でも「テレビ」が最も高く、7～９割となっている。20 代・30 代では、「SNS」（各22.9%、22.6%）、40代では「新聞」（29.4%）、「Webサイト」（23.8%）、50代以上では「新聞」（各42.9%、63.9%）が、「テレビ」に次いで高くなっている。

図表 95　「ヤングケアラー」という言葉の認知経路（複数回答）

＜年代別＞　（%）

		全体（n＝）	テレビ	新聞	雑誌や本	国・自治体などの行政の広報誌	講演会やイベント	webサイト	SNS	友人・知人から聞いた	その他
一般県民	20代	84	79.1	19.7	10.4	6.5	7.1	14.2	20.6	7.1	4.5
	30代	95	79.1	25.6	8.5	9.8	0.3	37.0	15.7	5.0	2.7
	40代	128	89.2	31.1	10.2	12.1	1.0	23.3	8.1	5.8	3.3
	50代	130	83.9	46.6	5.2	11.3	4.8	15.1	6.8	2.9	2.4
	60代以上	264	92.0	48.9	6.8	17.2	2.8	11.4	2.6	4.6	2.9
県政モニター	20代	42	71.1	16.8	2.0	5.8	2.0	17.7	22.9	2.9	12.1
	30代	42	82.4	23.7	8.9	0.0	2.0	16.7	26.6	4.9	4.9
	40代	46	83.6	29.4	13.0	16.6	1.9	23.8	13.9	1.9	4.6
	50代	52	89.7	42.9	12.9	12.1	2.4	12.7	3.3	0.0	4.0
	60代以上	120	84.0	63.9	11.5	19.8	5.6	11.4	3.1	8.7	0.7

（３） 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

家族・親族や、友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるか聞いたところ、一般県民調査では、家族・親族で「いる」は 3.3%、友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもで「いる」は 6.4%となっている。

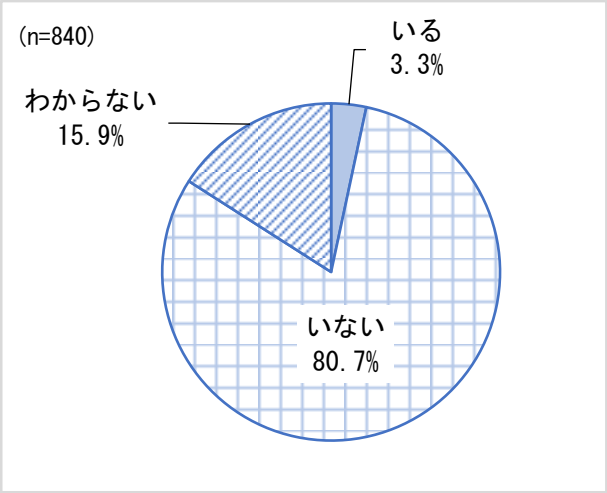
県政モニター調査では、家族・親族で「いる」は 0.9%、友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもで「いる」は 1.8%と一般県民調査より低くなっている。

年代別・圏域別に見ると、一般県民調査では、家族・親族で「いる」は、20 代（6.7%）が高くなっている。一方、「いない」は、60 代以上（84.9%）峡東と峡南（それぞれ 84.2%）が高い。

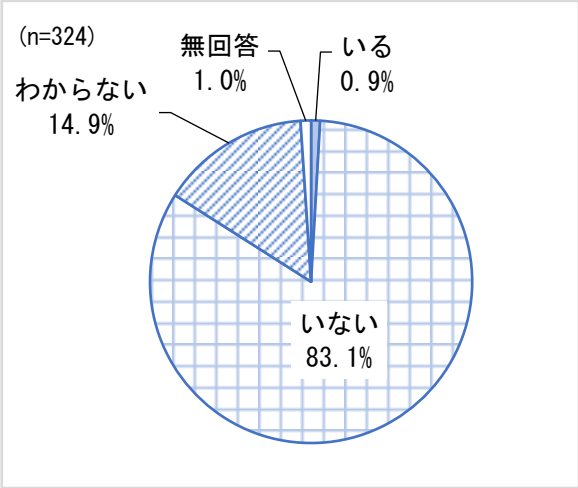
友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもで「いる」は、20 代（12.8%）、30 代（12.2%）が高くなっている。一方、「いない」は、60 代以上（69.7%）、峡南（67.0%）が高い。

図表 96　家族・親族で「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

＜一般県民調査＞

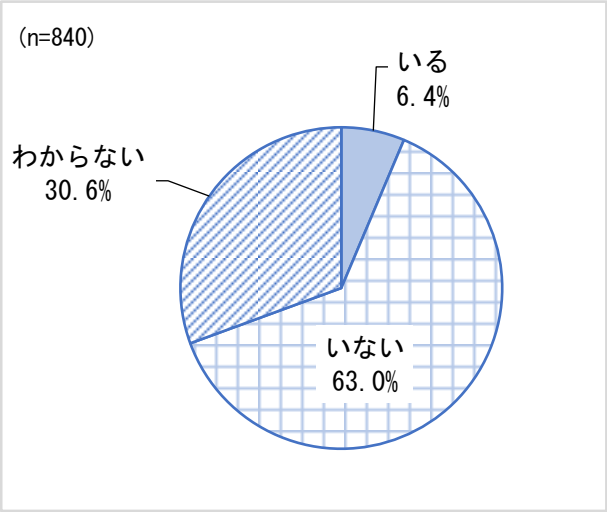


＜県政モニター調査＞

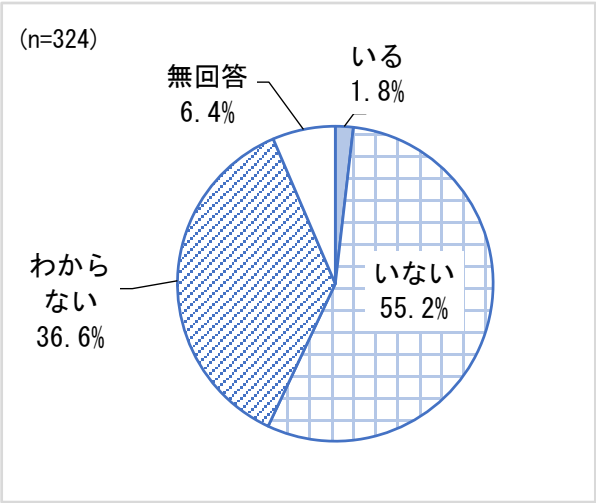


図表 97　友人・知人や、その子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもで「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



図表 98　家族・親族で「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

＜一般県民調査＞：年代別・圏域別　（%）

		全体（ｎ＝）	いる	いない	わからない
年代別	20 代	108	6.7	71.4	21.9
	30 代	114	5.0	79.4	15.6
	40 代	150	1.6	78.8	19.7
	50 代	160	1.9	81.6	16.5
	60 代以上	308	3.2	84.9	11.9
圏域別	中北	475	3.0	79.8	17.1
	峡東	135	5.5	84.2	10.3
	峡南	49	1.3	84.2	14.5
	富士・東部	181	3.1	79.4	17.5

図表 99　友人・知人や、その子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもで「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無

＜一般県民調査＞：年代別・圏域別　（%）

		全体（ｎ＝）	いる	いない	わからない
年代別	20 代	108	12.8	54.5	32.7
	30 代	114	12.2	50.3	37.4
	40 代	150	2.8	65.7	31.5
	50 代	160	2.8	62.6	34.6
	60 代以上	308	5.5	69.7	24.8
圏域別	中北	475	5.3	63.0	31.8
	峡東	135	8.8	63.3	27.9
	峡南	49	3.8	67.0	29.2
	富士・東部	181	8.1	61.9	30.0

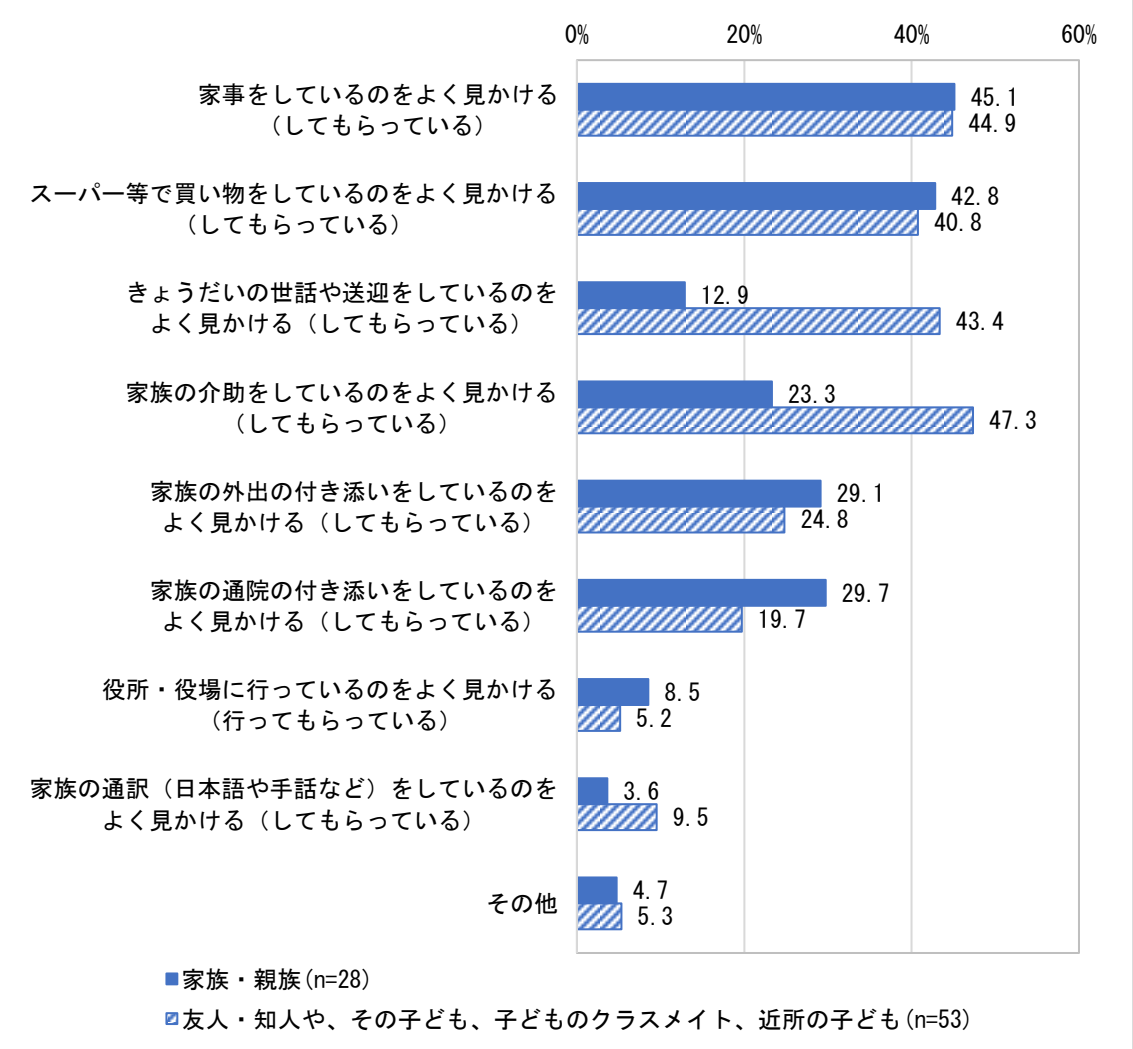
（４）「ヤングケアラー」と思われる理由

一般県民調査において、「ヤングケアラー」と思われる子どもが「いる」と回答した方に、なぜその子どもが「ヤングケアラー」だと思うか聞いたところ、家族・親族では「家事をしているのをよく見かける（してもらっている）」（45.1%）と「スーパー等で買い物をしているのをよく見かける（してもらっている）」（42.8%）が高く、次いで、「家族の通院の付き添いをしているのをよく見かける（してもらっている）」（29.7%）、「家族の外出の付き添いをしているのをよく見かける（してもらっている）」（29.1%）となっている。

友人・知人や、その子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもでは、「家族の介助をしているのをよく見かける（してもらっている）」（47.3%）、「家事をしているのをよく見かける（してもらっている）」（44.9%）、「きょうだいの世話や送迎をしているのをよく見かける（してもらっている）」（43.4%）、「スーパー等で買い物をしているのをよく見かける（してもらっている）」（40.8%）が高くなっている。

図表 100　「家族・親族」「友人・知人や、その子ども、子どものクラスメイト、近所の子どもが「ヤングケアラー」と思われる理由（複数回答）

＜一般県民調査＞

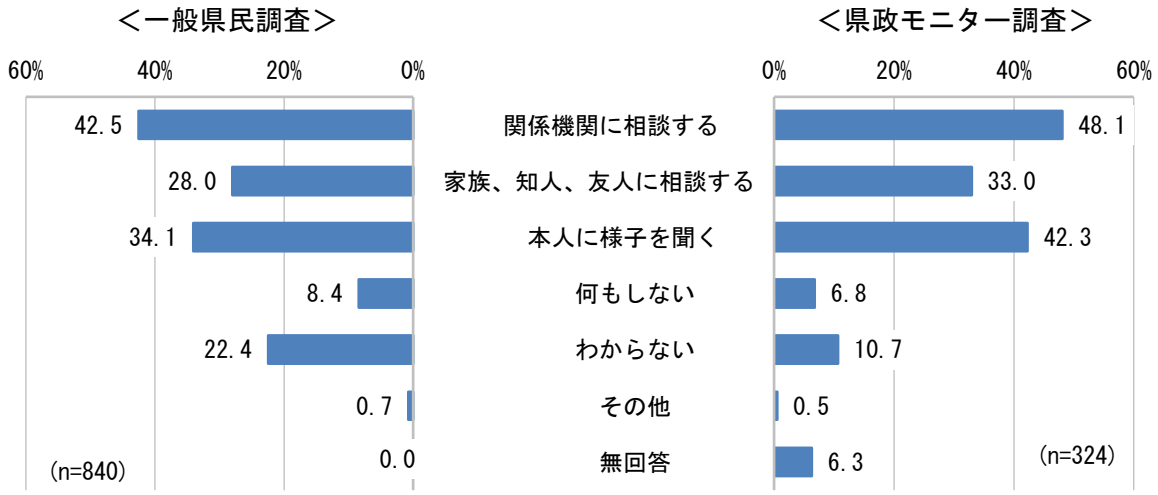


（５） 身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合の対応

身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合、どのような対応をするか（身の回りに、「ヤングケアラー」と思われる子どもがいない・いるかわからない場合はいたと仮定）聞いたところ、一般県民調査では、「関係機関に相談する」が 42.5%と最も高く、次いで「本人に様子を聞く」（34.1%）、「家族、知人、友人に相談する」（28.0%）となっている。一方、「わからない」は 22.4%、「何もしない」は 8.4%となっている。県政モニター調査でも、「関係機関に相談する」が 48.1%と最も高く、次いで「本人に様子を聞く」（42.3%）、「家族、知人、友人に相談する」（33.0%）となっており、一般県民調査より全体的に高くなっており、「わからない」は 10.7%と一般県民調査より低くなっている。

一般県民調査の圏域別では、「峡南」で「関係機関に相談する」が 53.7%と高くなっている。

図表 101　身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合の対応（複数回答）



図表 102　身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合の対応（複数回答）

＜一般県民調査＞：圏域別　（%）

		全体（n＝）	関係機関に相談する	家族、知人、友人に相談する	本人に様子を聞く	何もしない	わからない	その他
圏域別	中北	475	44.1	28.7	34.8	8.3	20.6	1.3
	峡東	135	39.8	30.9	30.7	7.4	24.7	0.0
	峡南	49	53.7	27.8	36.3	9.2	22.1	0.0
	富士・東部	181	37.6	24.0	34.0	9.2	25.7	0.0

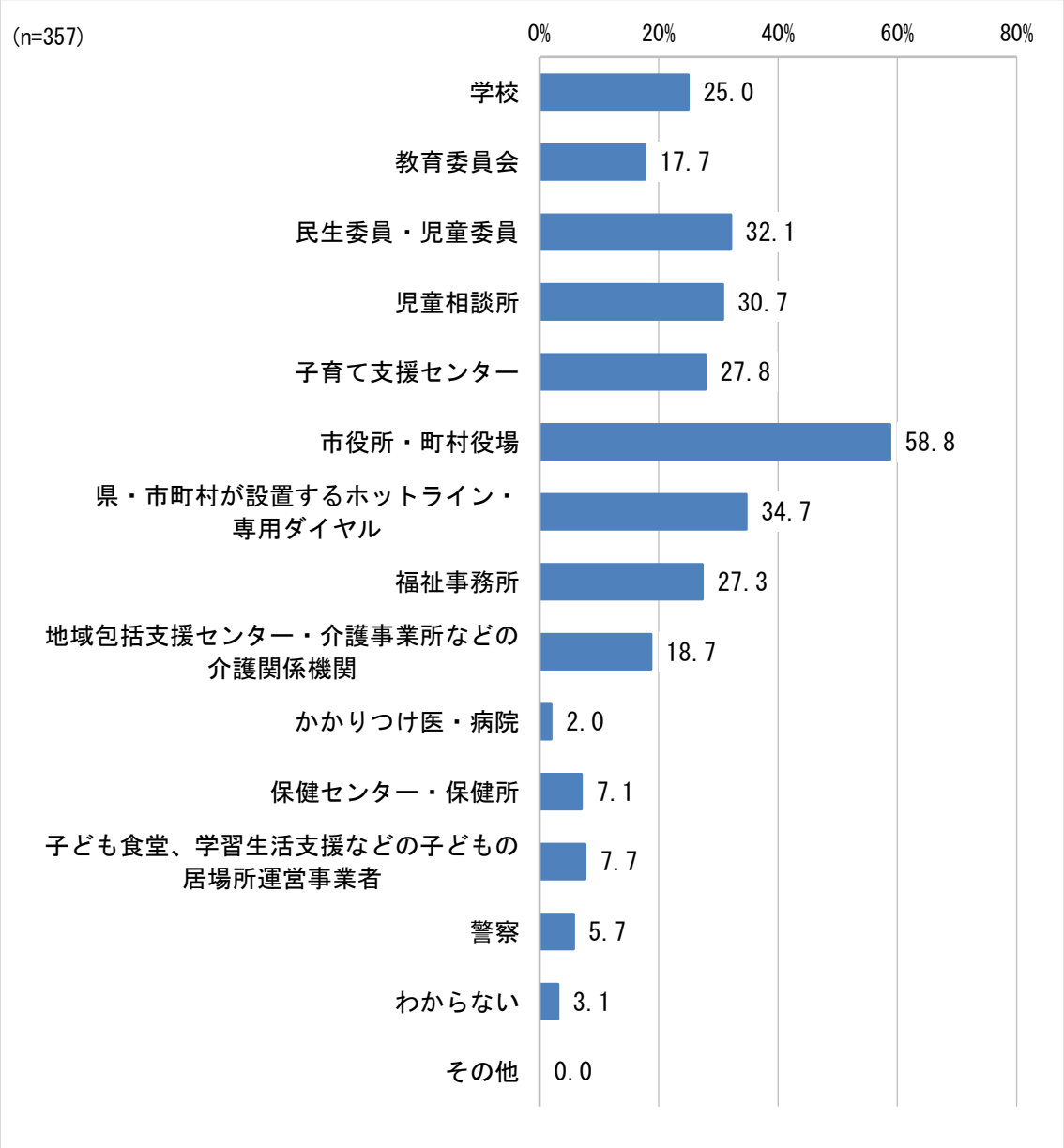
（６）「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関

「ヤングケアラー」と思われる子どもがいた場合（いたと仮定した場合も含む）「関係機関に相談する」と回答した方に、どのような機関に相談しようと思うかについては、一般県民調査では、「市役所・町村役場」が 58.8%と最も高い。次いで「県・市町村が設置するホットライン・専用ダイヤル」（34.7%）、「民生委員・児童委員」（32.1%）、「児童相談所」（30.7%）となっている。

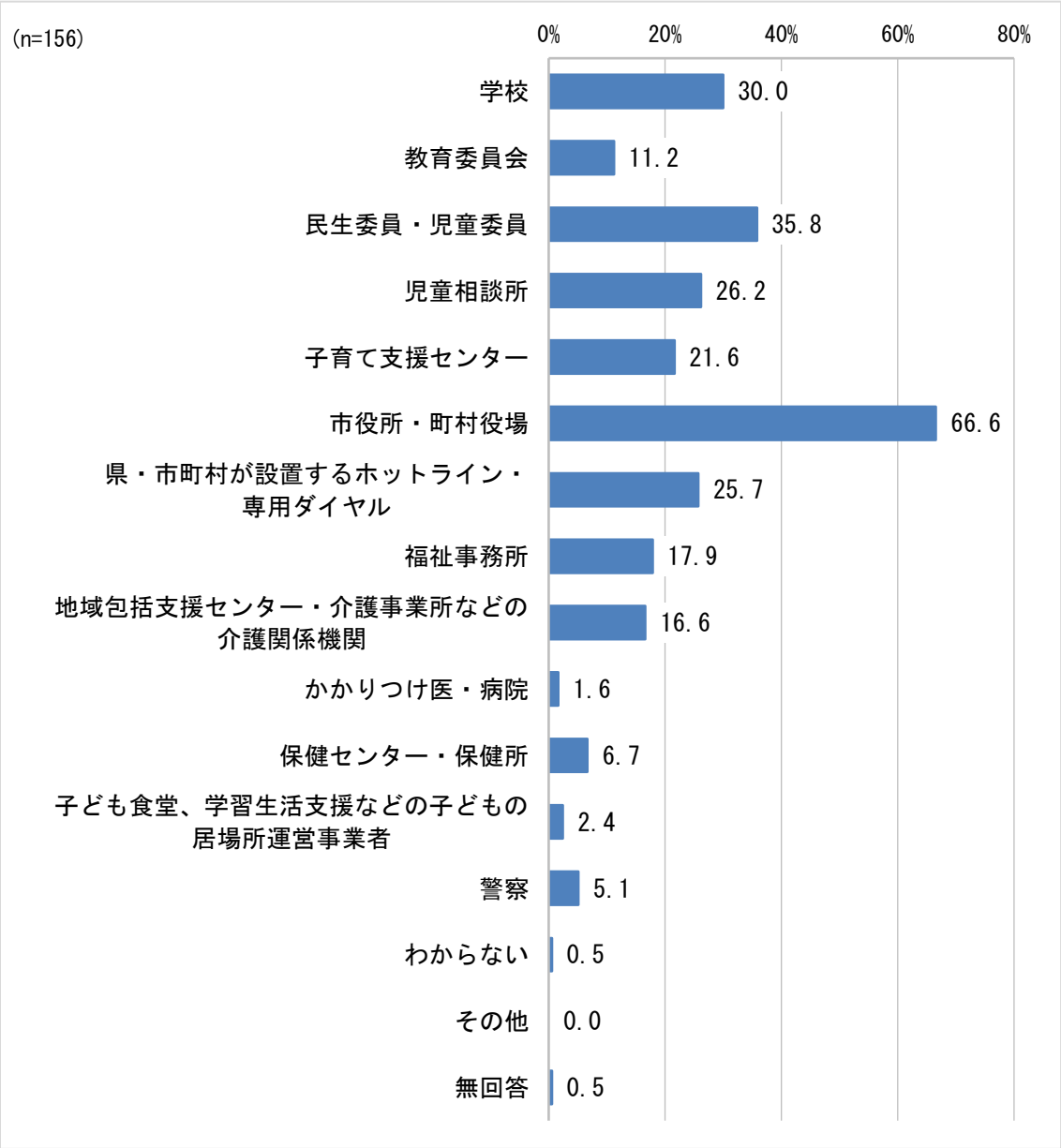
県政モニター調査では、「市役所・町村役場」が 66.6%と最も高い。次いで「民生委員・児童委員」（35.8%）、「学校」（30.0%）となっている。

図表 103　「ヤングケアラー」と思われる子どもについて相談する機関（複数回答）

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞

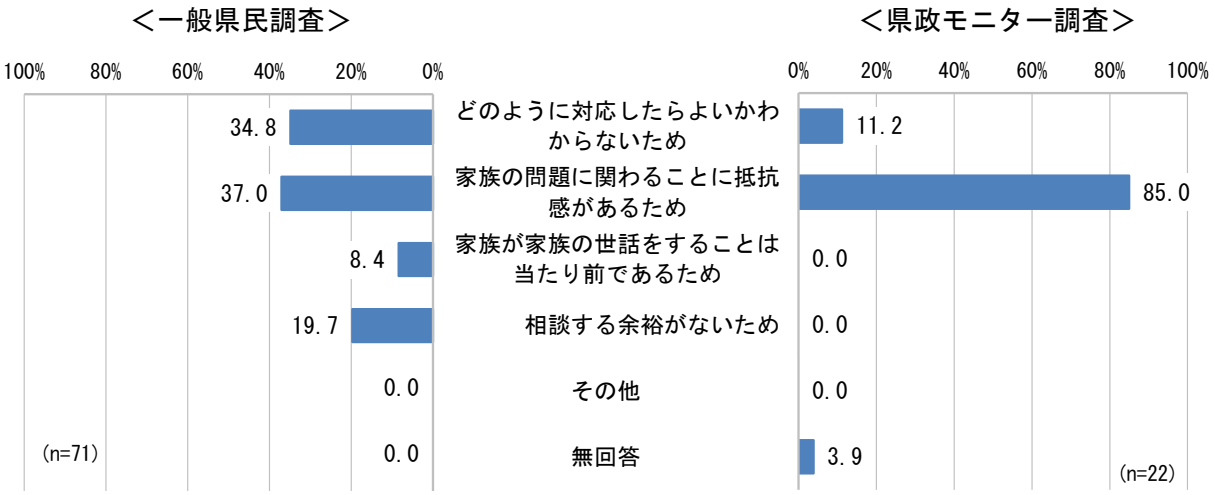

(n=156)
0%
20%
40%
60%
80%
学校 30.0
教育委員会 11.2
民生委員・児童委員 35.8
児童相談所 26.2
子育て支援センター 21.6
市役所・町村役場 66.6
県・市町村が設置するホットライン・専用ダイヤル 25.7
福祉事務所 17.9
地域包括支援センター・介護事業所などの介護関係機関 16.6
かかりつけ医・病院 1.6
保健センター・保健所 6.7
子ども食堂、学習生活支援などの子どもの居場所運営事業者 2.4
警察 5.1
わからない 0.5
その他 0.0
無回答 0.5

（７） 「ヤングケアラー」と思われる子どもについて「何もしない」主な理由

「ヤングケアラー」と思われる子どもがいた場合（いたと仮定した場合も含む）「何もしない」と回答した方に、その理由としてもっともあてはまるものを聞いたところ、一般県民調査では、「家族の問題に関わることに抵抗感があるため」が 37.0%、「どのように対応したらよいかわからないため」が 34.8%となっている。

県政モニター調査では、「家族の問題に関わることに抵抗感があるため」が 85.0%と高くなっている。

図表 104 「ヤングケアラー」と思われる子どもについて「何もしない」理由



（８） 山梨県「ヤングケアラー相談窓口」について

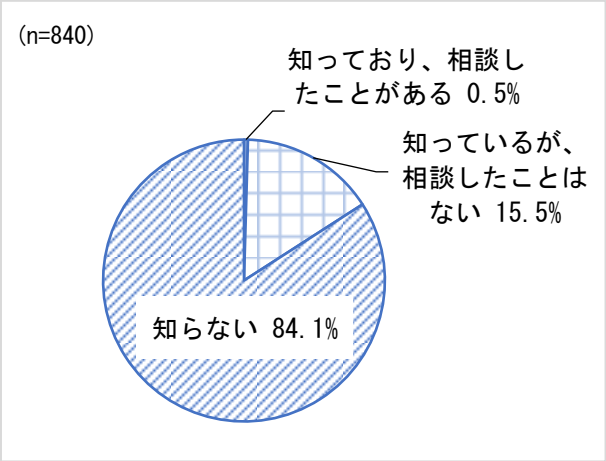
① 山梨県「ヤングケアラー相談窓口」の認知状況

山梨県「ヤングケアラー相談窓口」について知っているか聞いたところ、24 時間電話相談窓口(0120-189-783、0120-0-78310）については、一般県民調査では、「知らない」が 84.1%となっている。一方、「知っているが、相談したことはない」が 15.5%、「知っており、相談したことがある」が 0.5%となっている。県政モニター調査では「知らない」が 77.5%、「知っているが、相談したことはない」が 21.1%となっている。

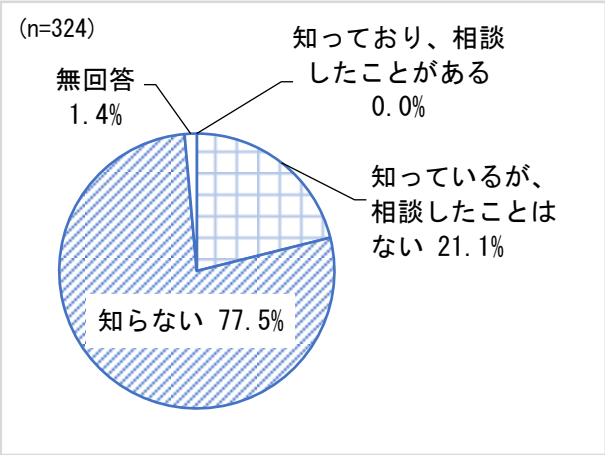
相談支援センター（山梨県総合教育センター）については、一般県民調査では、「知らない」が 79.0%となっている。一方、「知っているが、相談したことはない」が 20.3%、「知っており、相談したことがある」が 0.7%となっている。県政モニター調査では、「知らない」が 76.9%となっている。一方、「知っているが、相談したことはない」が 18.9%となっている。

図表 105　24 時間電話相談窓口(0120-189-783、0120-0-78310）の認知状況

＜一般県民調査＞

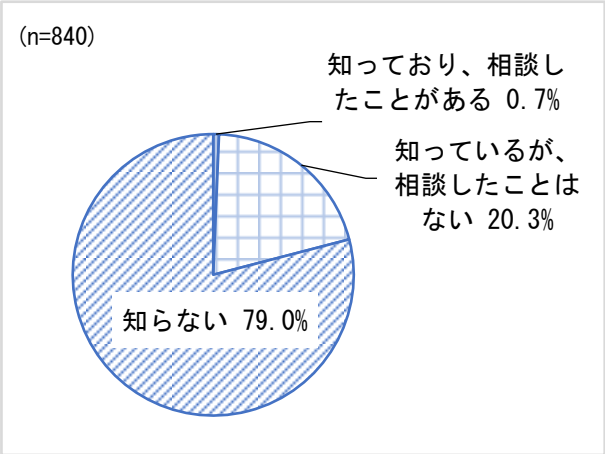


＜県政モニター調査＞

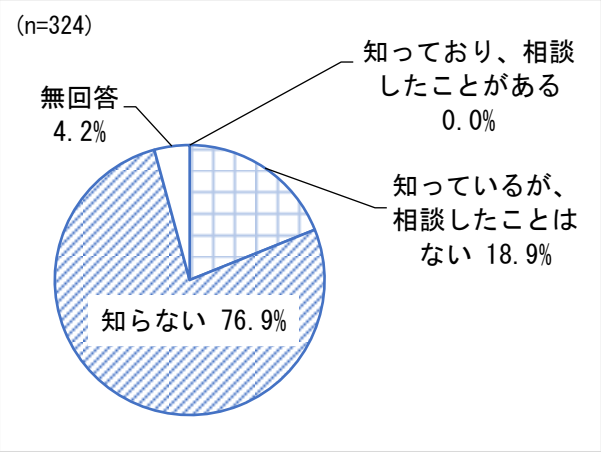


図表 106　相談支援センター（山梨県総合教育センター）の認知状況

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



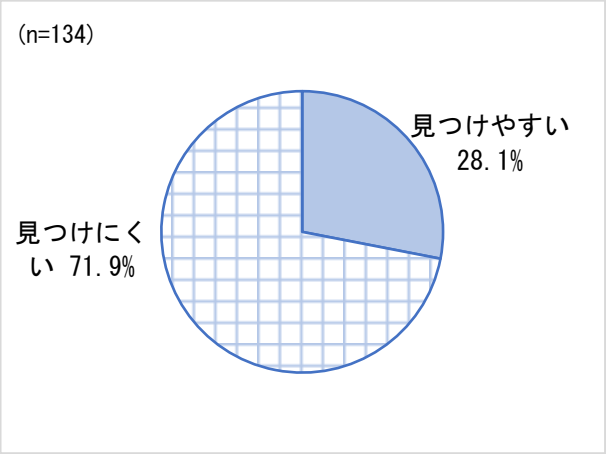
② 山梨県「ヤングケアラー相談窓口」の見つけやすさ

山梨県「ヤングケアラー相談窓口」を、「知っており、相談したことがある」「知っているが、相談したことはない」と回答した方に、相談窓口の見つけやすさについて聞いたところ、24 時間電話相談窓口(0120-189-783、0120-0-78310）については、一般県民調査では、「見つけにくい」が 71.9%、「見つけやすい」が 28.1%となっている。県政モニター調査では、「見つけにくい」が 68.3%、「見つけやすい」が 24.4%となっている。

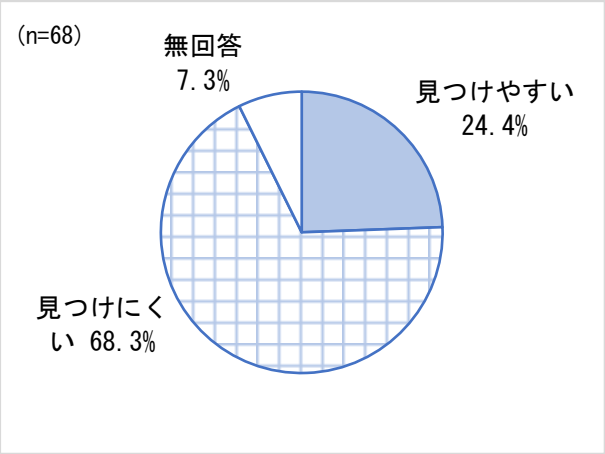
相談支援センター（山梨県総合教育センター）については、一般県民調査では、「見つけにくい」が 69.2%、「見つけやすい」が 30.8%となっている。県政モニター調査では、「見つけにくい」が 69.5%、「見つけやすい」が 25.1%となっている。

図表 107　24 時間電話相談窓口(0120-189-783、0120-0-78310）の認知状況

＜一般県民調査＞

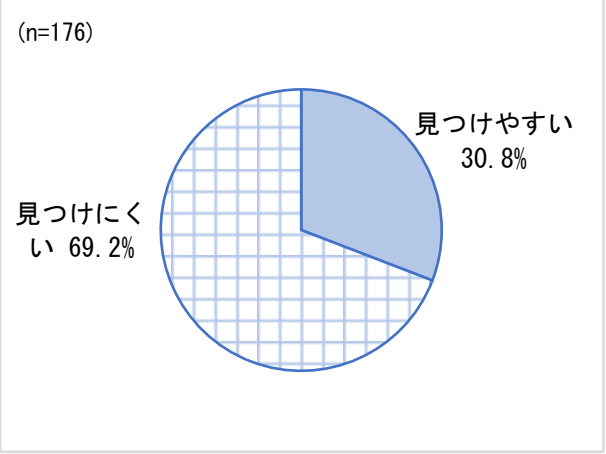


＜県政モニター調査＞

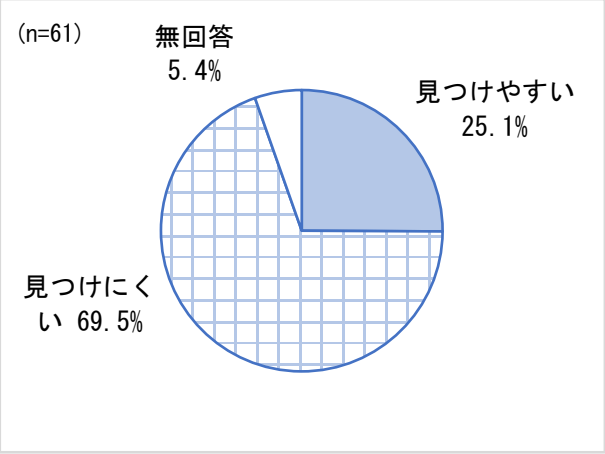


図表 108　相談支援センター（山梨県総合教育センター）の認知状況

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



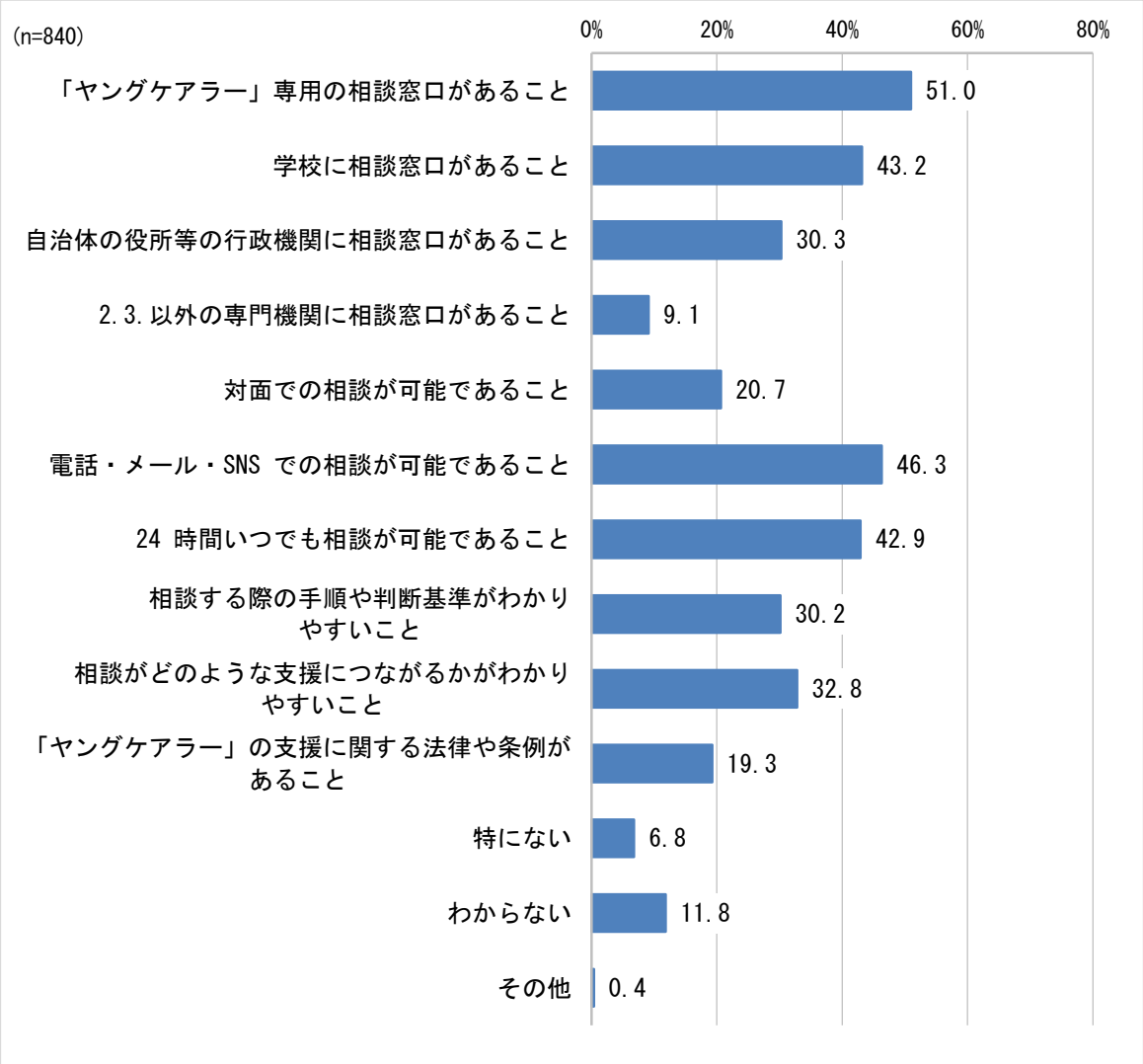
（９） ヤングケアラーが相談しやすい環境づくりにつながる仕組みや支援

「ヤングケアラー」と思われる子どもがいる場合、その子どもにとってどのような仕組みや取組があると相談しやすい環境づくりにつながると思うか聞いたところ、一般県民調査では、「「ヤングケアラー」専用の相談窓口があること」が 51.0%と最も高く、次いで、「電話・メール・SNS での相談が可能であること」（46.3%）、「学校に相談窓口があること」（43.2%）、「24 時間いつでも相談が可能であること」（42.9%）となっている。

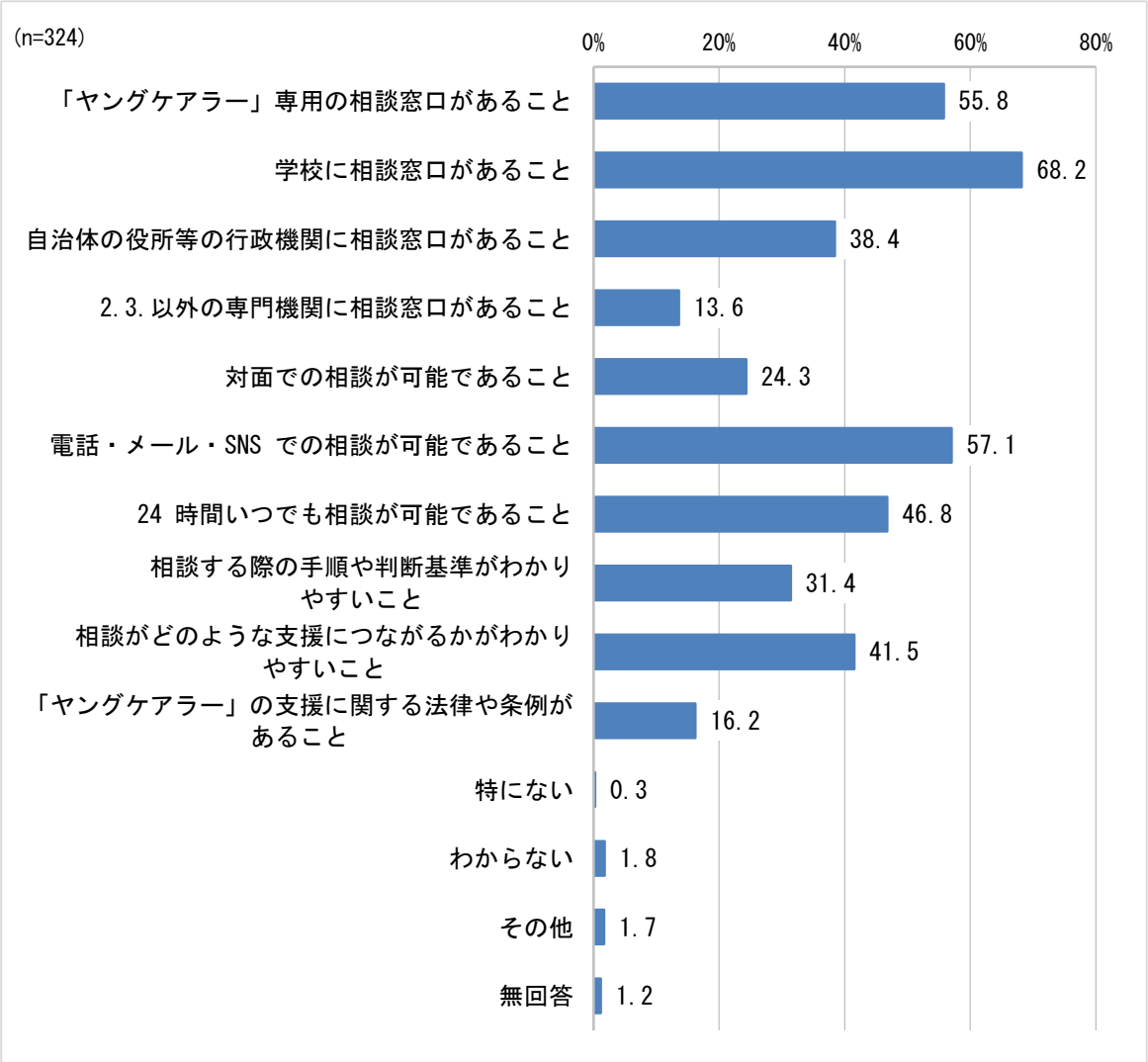
県政モニター調査では、「学校に相談窓口があること」が 68.2%と最も高く、次いで、「電話・メール・SNS での相談が可能であること」（57.1%）、「「ヤングケアラー」専用の相談窓口があること」（55.8%）、「24 時間いつでも相談が可能であること」（46.8%）となっている。

図表 109　ヤングケアラーが相談しやすい環境づくりにつながる仕組みや支援（複数回答）

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞


(n=324)
0%
20%
40%
60%
80%
「ヤングケアラー」専用の相談窓口があること
55.8
学校に相談窓口があること
68.2
自治体の役所等の行政機関に相談窓口があること
38.4
2.3.以外の専門機関に相談窓口があること
13.6
対面での相談が可能であること
24.3
電話・メール・SNS での相談が可能であること
57.1
24 時間いつでも相談が可能であること
46.8
相談する際の手順や判断基準がわかりやすいこと
31.4
相談がどのような支援につながるかがわかりやすいこと
41.5
「ヤングケアラー」の支援に関する法律や条例があること
16.2
特にない
0.3
わからない
1.8
その他
1.7
無回答
1.2

（１０） 現在参加している地域活動や市民活動と、ヤングケアラーとの関わりについて

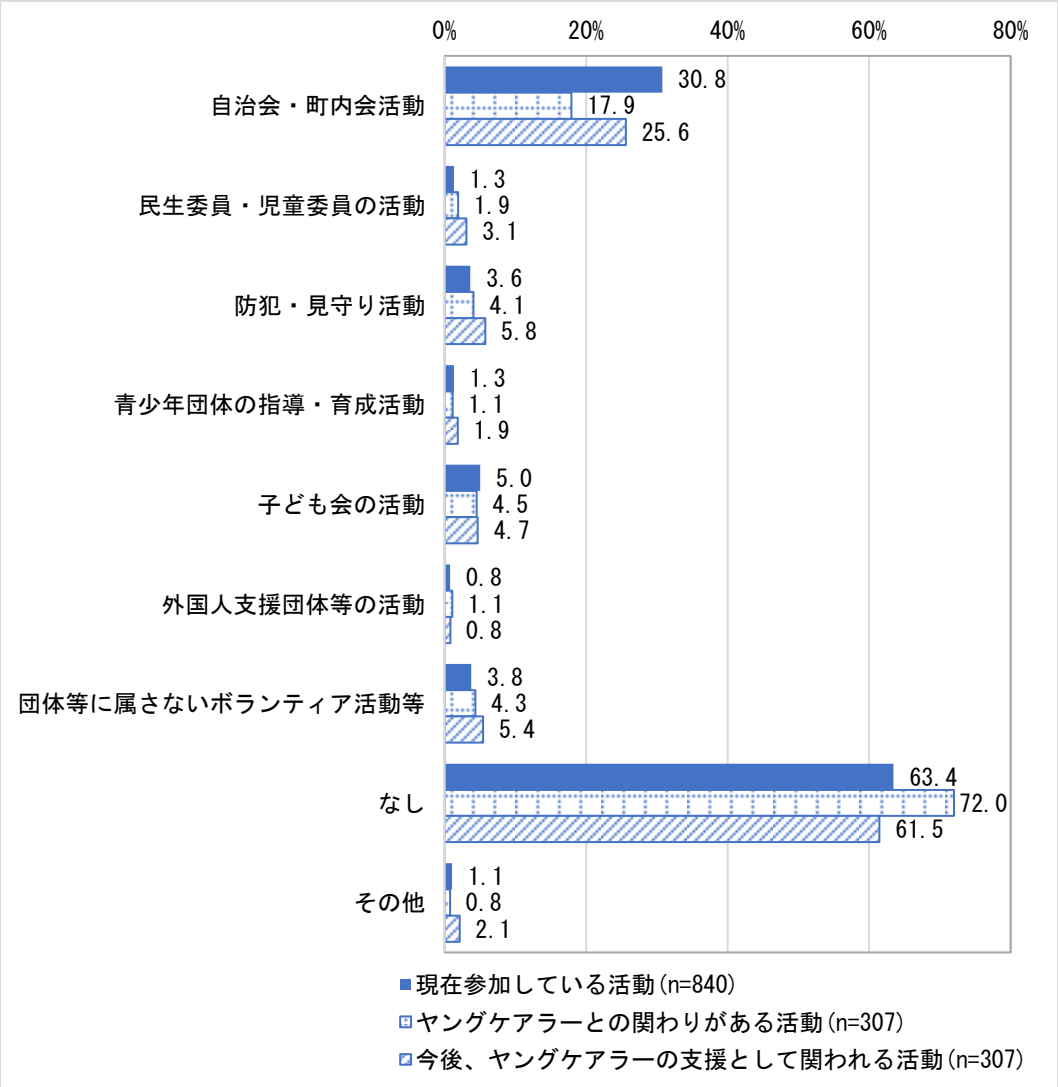
① 現在参加している活動における、ヤングケアラーに対する関わり方

一般県民調査において、現在参加している地域活動や市民活動について聞いたところ、現在参加している活動としては、「自治会・町内会活動」が 30.8%と最も高く、その他はいずれも１割未満であった。何らかの地域活動等に参加している人は 36.6%となっている。

一般県民調査において、現在参加している活動のうち、ヤングケアラーとの関わりがある活動は、「自治会・町内会活動」が 17.9%と最も高く、次に「子ども会の活動」（4.5%）が高くなっている。地域活動等に参加している人のうち、ヤングケアラーとの関りがある活動に参加している人は 28.0%となっている。

一般県民調査において、現在参加している活動で、今後、ヤングケアラーの支援として関われる活動についても、「自治会・町内会活動」が 25.6%と最も高くなっており、次いで「防犯・見守り活動」（5.8%）が高くなっている。地域活動等に参加している人のうち、今後、ヤングケアラーの支援として関われる活動に参加している人は 38.5%となっている。

図表 110　現在参加している活動、ヤングケアラーと関わりのある活動、今後、ヤングケアラーの支援として関われる活動（複数回答）



一般県民調査において、現在参加している活動について、年代別に見ると、年代が若いほど「なし」が高くなっている。「自治会・町内会活動」では 60 代以上（42.0%）、「防犯・見守り活動」では 30 代（6.3%）、「子ども会の活動」では 50 代（8.2%）、「団体に属さないボランティア活動等」では 60 代以上（6.3%）がそれぞれ他の年代に比べて高くなっている。

圏域別に見ると、「自治会・町内会活動」では峡南（34.2%）、「防犯・見守り活動」では富士・東部（5.1%）、「子ども会の活動」では峡東（7.4%）、「団体に属さないボランティア活動等」では富士・東部（6.3%）がそれぞれ他の圏域に比べてやや高くなっている。

図表 111　現在、参加している活動（複数回答）

＜一般県民調査＞：年代別　（%）

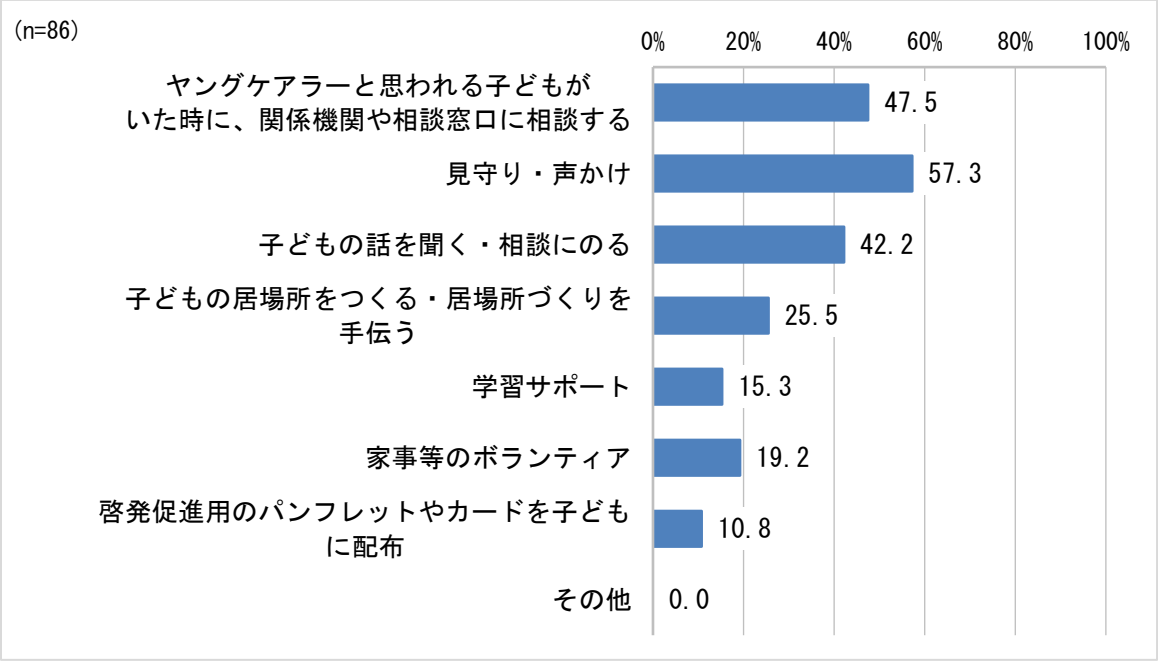
		全体（n＝）	自治会・町内会活動	民生委員・児童委員の活動	防犯・見守り活動	青少年団体の指導・育成活動	子ども会の活動	外国人支援団体等の活動	団体等に属さないボランティア活動	なし	その他
年代別	20 代	108	11.3	0.9	3.8	2.3	4.9	1.5	2.0	82.0	0.0
	30 代	114	21.9	1.1	6.3	0.5	5.3	2.5	2.6	72.9	0.0
	40 代	150	28.6	1.1	1.5	0.3	6.4	0.0	2.5	67.6	0.4
	50 代	160	30.7	0.8	3.1	0.6	8.2	0.3	2.2	63.8	2.3
	60 代以上	308	42.0	2.0	3.9	2.1	2.6	0.6	6.3	51.2	1.5
圏域別	中北	475	32.1	0.9	2.9	1.3	5.0	0.9	3.5	63.0	1.2
	峡東	135	23.5	2.0	4.6	1.3	7.4	0.8	2.3	70.2	1.2
	峡南	49	34.2	1.1	2.7	1.3	5.4	0.0	0.8	62.3	0.0
	富士・東部	181	31.8	1.9	5.1	1.4	3.3	0.6	6.3	59.7	0.8

② 現在参加している活動における、ヤングケアラーに対する関わり方

「現在参加している活動で、ヤングケアラーとの関わりがあるもの」があると回答した方に、ヤングケアラーに対して、どのような関わりをもっているか聞いたところ、「見守り・声かけ」が 57.3%と最も高く、次いで「ヤングケアラーと思われる子どもがいた時に、関係機関や相談窓口に相談する」（47.5%）、「子どもの話を聞く・相談にのる」（42.2%）となっている。

図表 112　現在参加している活動における、ヤングケアラーに対する関わり方（複数回答）

＜一般県民調査＞

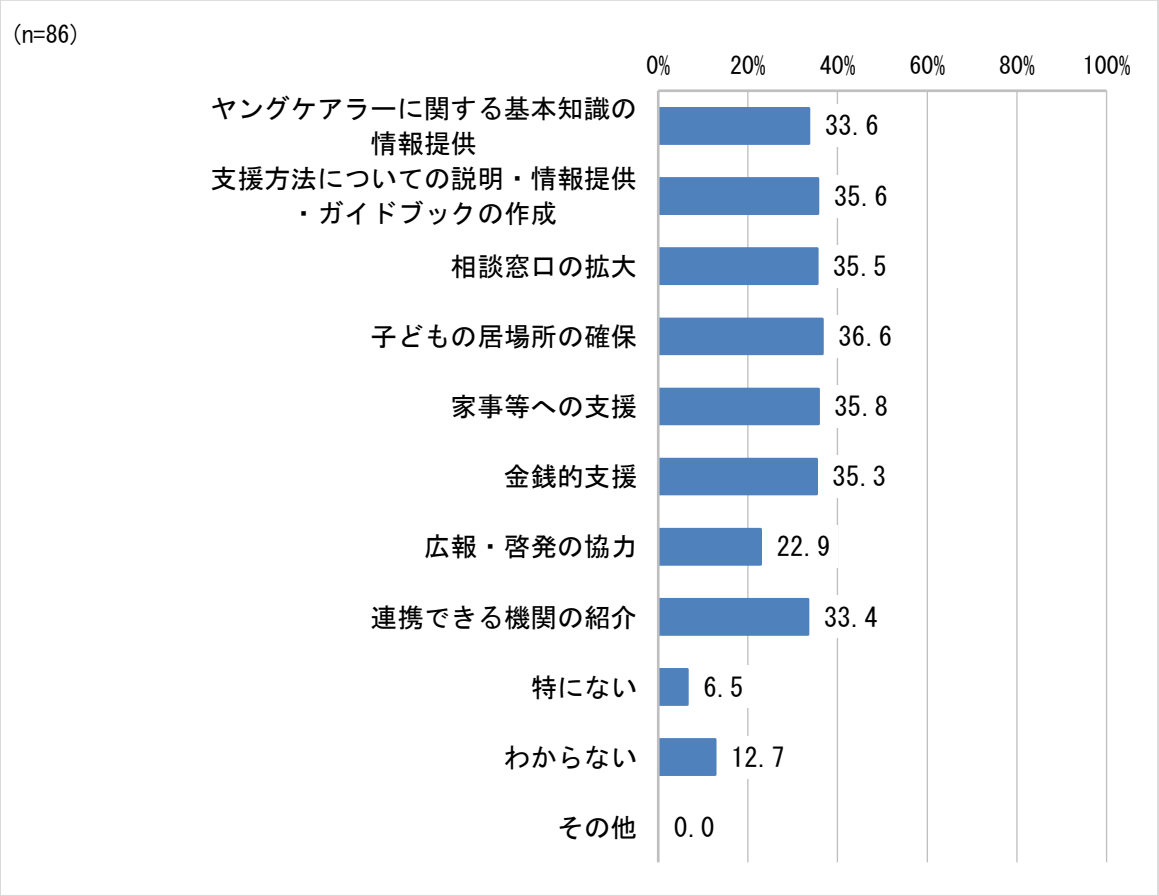


③ 現在参加している活動における、ヤングケアラー支援を行うために必要な行政からの支援

「現在参加している活動で、ヤングケアラーとの関わりがあるもの」があると回答した方に、ヤングケアラー支援を行うために行政からの支援として必要なものを聞いたところ、ほとんどの項目で 35%前後であった。

図表 113　現在参加している活動における、ヤングケアラー支援を行うために必要な行政からの支援（複数回答）

＜一般県民調査＞

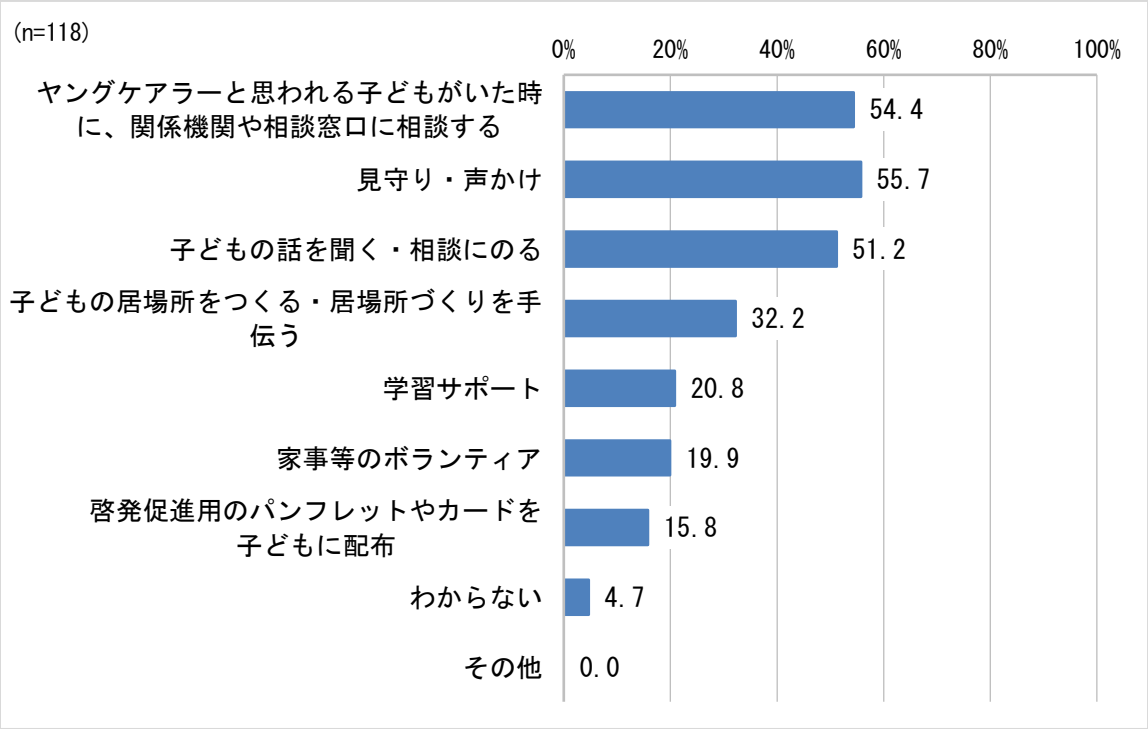


④ 今後、参加している活動の中で、ヤングケアラー支援のためにできること

「現在参加している活動で、今後、ヤングケアラーの支援として関われるもの」があると回答した方に、今後、ヤングケアラー支援のためにできることを聞いたところ、「見守り・声掛け」（55.7%）、「ヤングケアラーと思われる子どもがいた時に、関係機関や相談窓口に相談する」（54.4%）、「子どもの話を聞く・相談にのる」（51.2%）が高くなっている。

図表 114　今後、参加している活動の中で、ヤングケアラー支援のためにできること（複数回答）

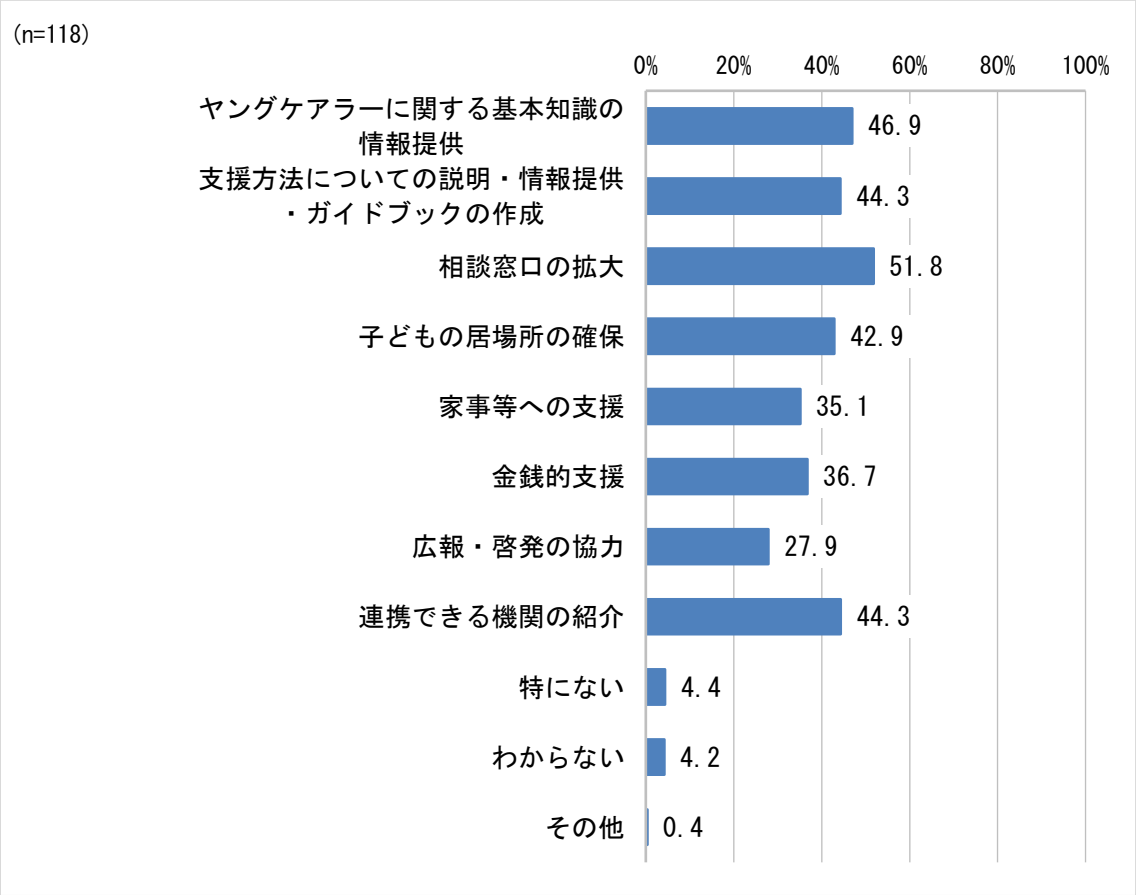
＜一般県民調査＞



⑤ 今後、活動の中でヤングケアラー支援を行うために必要な行政からの支援

「現在参加している活動で、今後、ヤングケアラーの支援として関われるもの」があると回答した方に、ヤングケアラー支援を行うために行政からの支援として必要なもの聞いたところ、「相談窓口の拡大」が 51.8%で最も高く、次いで「ヤングケアラーに関する基本知識の情報提供」（46.9%）、「支援方法についての説明・情報提供・ガイドブックの作成」「連携できる機関の紹介」（それぞれ 44.3%）となっている。

図表 115　今後、活動の中でヤングケアラー支援を行うために必要な行政からの支援（複数回答）
＜一般県民調査＞



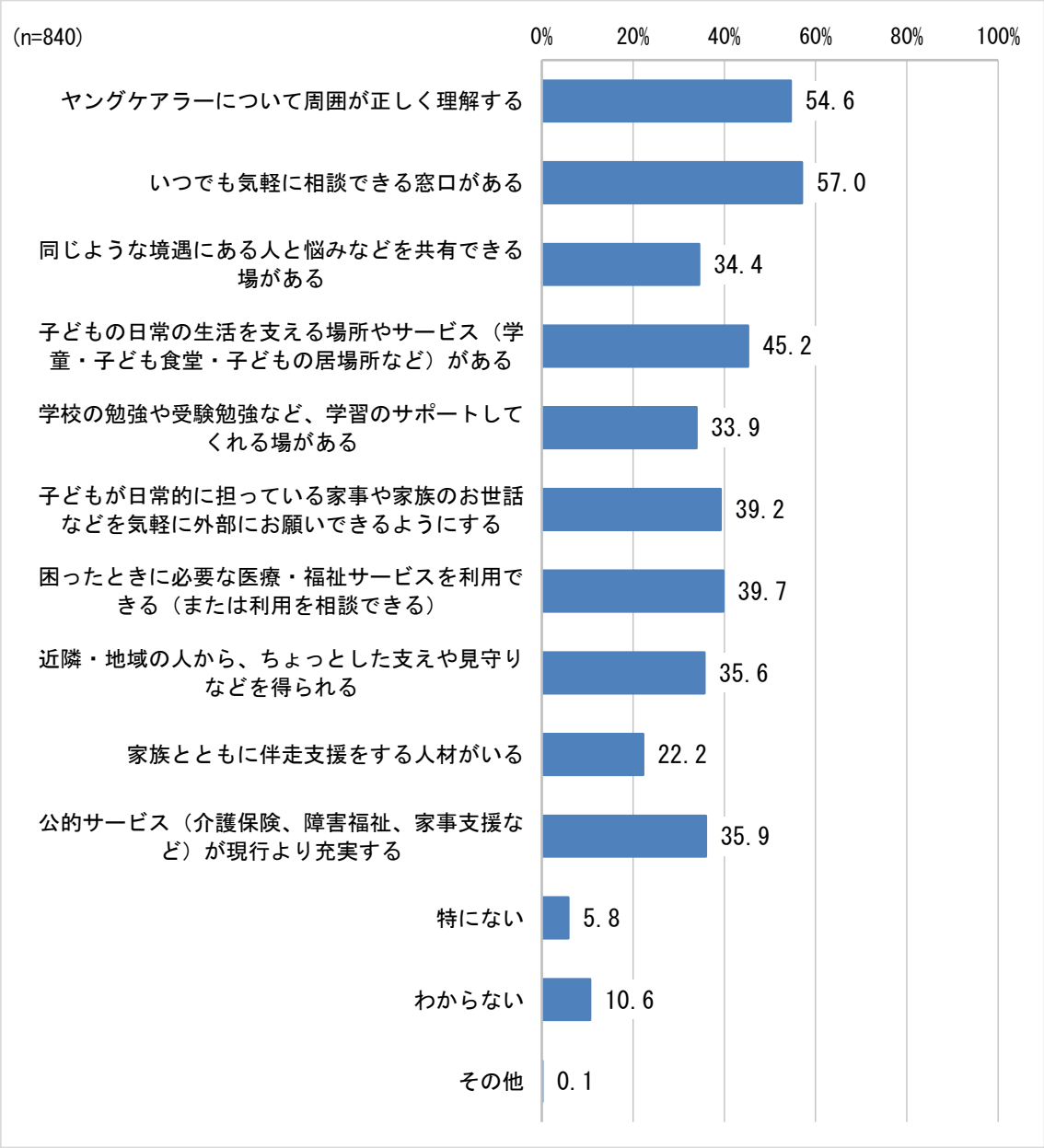
（１１） ヤングケアラーに対して必要だと思われる支援

ヤングケアラーに対して必要だと思われる支援については、一般県民調査では、「いつでも気軽に相談できる窓口がある」（57.0%）、「ヤングケアラーについて周囲が正しく理解する」（54.6%）、「子どもの日常的の生活を支える場所やサービス（学童・子ども食堂・子どもの居場所など）がある」（45.2%）が高くなっている。

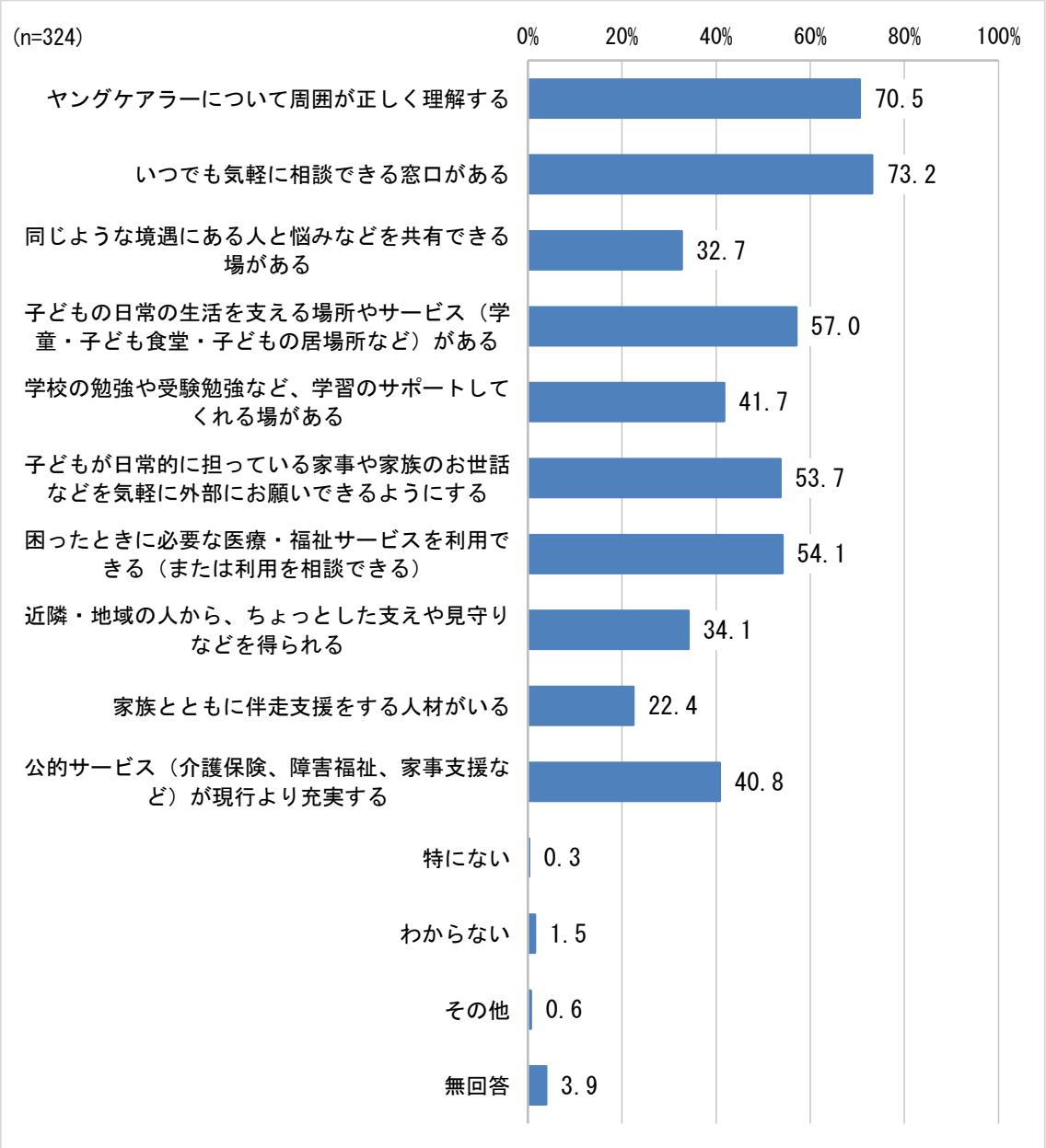
県政モニター調査では、「いつでも気軽に相談できる窓口がある」（73.2%）、「ヤングケアラーについて周囲が正しく理解する」（70.5%）が高い。

図表 116　ヤングケアラーに対して必要だと思われる支援（複数回答）

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞


(n=324)
0%
20%
40%
60%
80%
100%
ヤングケアラーについて周囲が正しく理解する
70.5
いつでも気軽に相談できる窓口がある
73.2
同じような境遇にある人と悩みなどを共有できる場がある
32.7
子どもの日常の生活を支える場所やサービス（学童・子ども食堂・子どもの居場所など）がある
57.0
学校の勉強や受験勉強など、学習のサポートしてくれる場がある
41.7
子どもが日常的に担っている家事や家族のお世話などを気軽に外部にお願いできるようにする
53.7
困ったときに必要な医療・福祉サービスを利用できる（または利用を相談できる）
54.1
近隣・地域の人から、ちょっとした支えや見守りなどを得られる
34.1
家族とともに伴走支援をする人材がいる
22.4
公的サービス（介護保険、障害福祉、家事支援など）が現行より充実する
40.8
特にない
0.3
わからない
1.5
その他
0.6
無回答
3.9

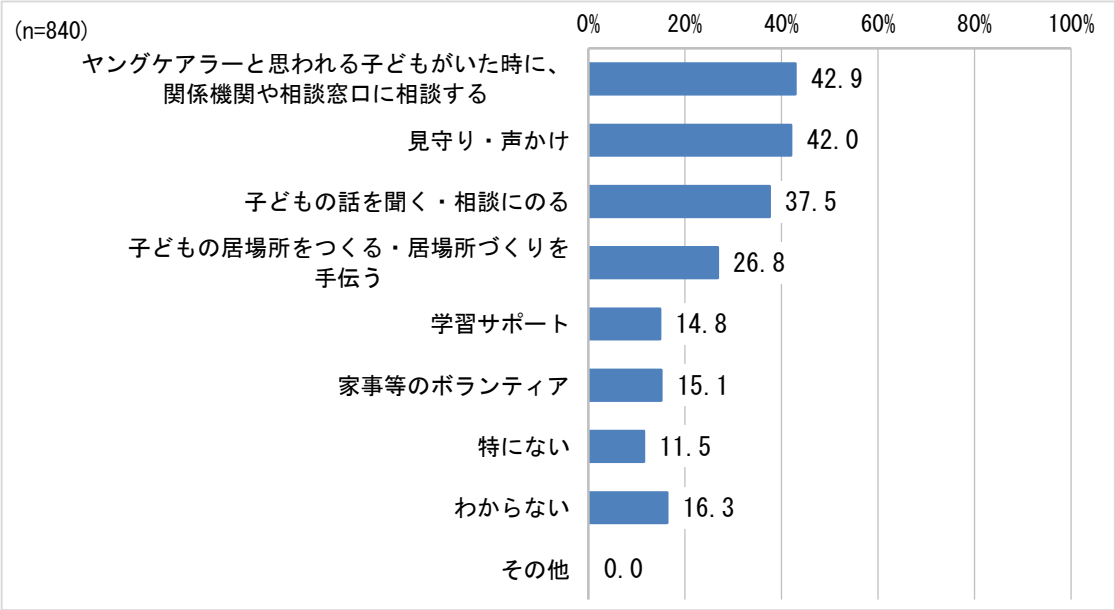
（１２）「ヤングケアラー」支援のためにできること

「ヤングケアラー」支援のためにできることとして、一般県民調査では、「ヤングケアラーと思われる子どもがいた時に、関係機関や相談窓口に相談する」（42.9%）、「見守り・声かけ」（42.0%）、「子どもの話を聞く・相談にのる」（37.5%）が高くなっている。県政モニター調査においても同様の傾向となっている。

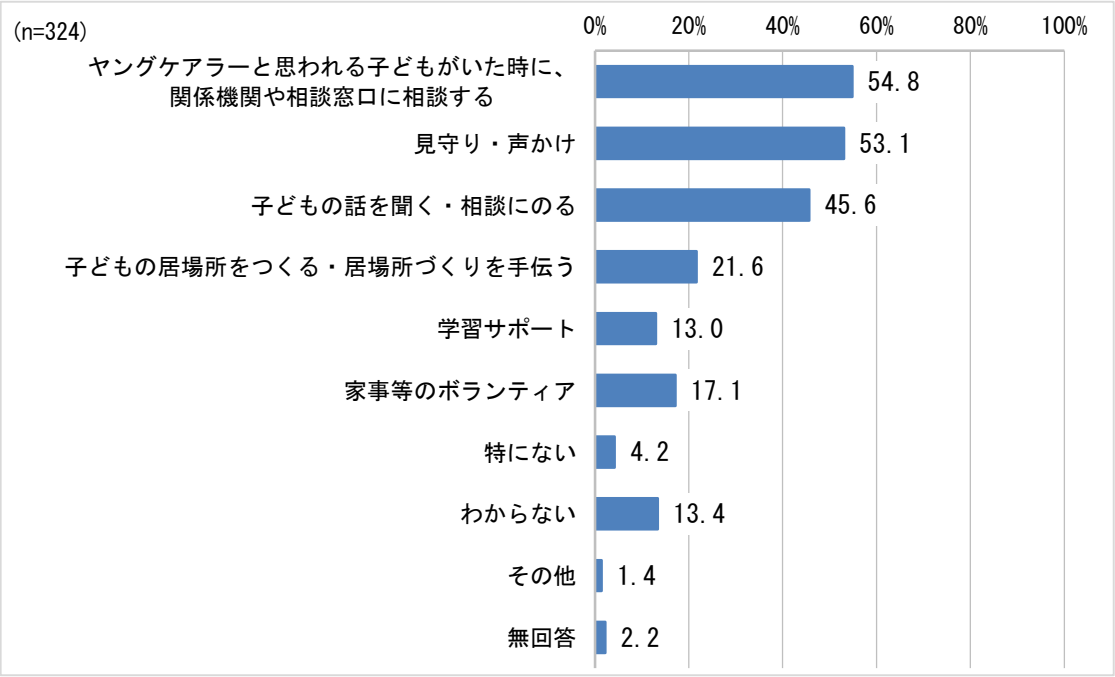
一般県民調査において年代別に見ると、20 代では、「子どもの居場所をつくる・居場所づくりを手伝う」（40.7%）が他の年代に比べて高くなっている。また、30 代では、「ヤングケアラーと思われる子どもがいた時に、関係機関や相談窓口に相談する」（48.2%）、「見守り・声かけ」（49.4%）、「子どもの話を聞く・相談にのる」（49.9%）が、他の年代に比べて高い。

図表 117　「ヤングケアラー」支援のためにできること（複数回答）

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



図表 118　「ヤングケアラー」支援のためにできること（複数回答）

＜一般県民調査　年代別＞

（%）

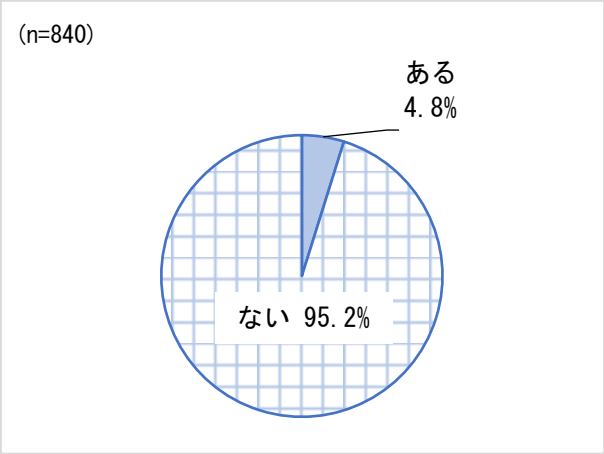
		全体（n＝）	ヤングケアラーと思われる子どもがいた時に、関係機関や相談窓口に相談する	見守り・声かけ	子どもの話を聞く・相談にのる	子どもの居場所をつくる・居場所づくりを手伝う	学習サポート	家事等のボランティア	特にない	わからない	その他
年代別	20 代	108	30.9	36.4	44.3	40.7	15.5	13.5	15.0	14.2	0.0
	30 代	114	48.2	49.4	49.9	32.2	16.1	14.4	7.5	15.4	0.0
	40 代	150	41.2	40.0	36.3	20.8	15.4	13.6	8.9	20.9	0.0
	50 代	160	42.5	45.2	34.9	27.8	14.1	14.8	13.4	13.2	0.0
	60 代以上	308	46.2	40.5	32.5	22.2	14.2	16.8	12.0	16.7	0.0

（１３）「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴の有無

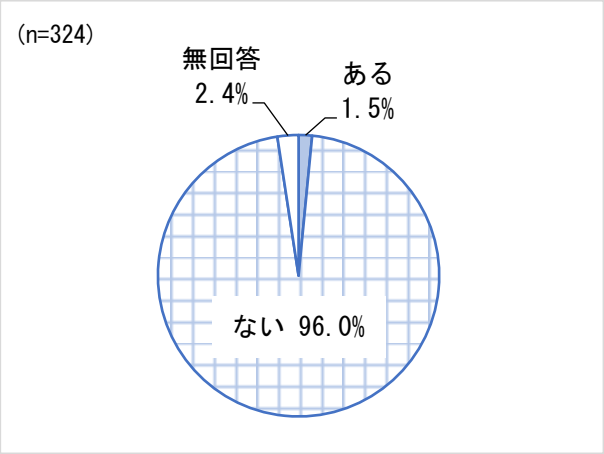
山梨県公式 YouTube チャンネル「山梨チャンネル」でヤングケアラー啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴の有無は、一般県民調査では「ない」が 95.2%、「ある」が 4.8%、県政モニター調査では「ない」が 96.0%、「ある」が 1.5%となっている。

図表 119　「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴の有無

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞



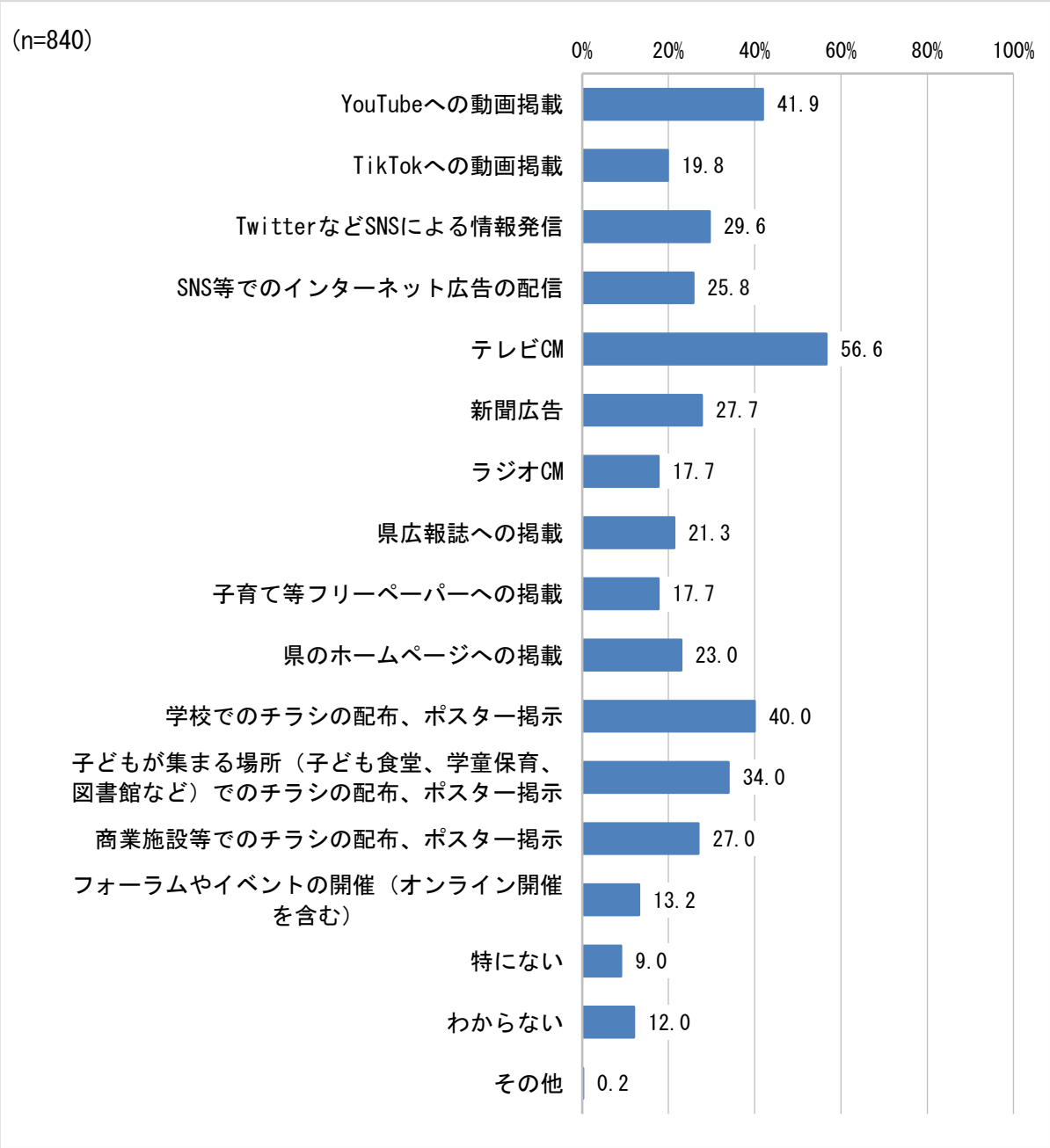
（１４） 啓発活動として効果があると思われる取組

山梨県の啓発活動として効果があると思われる取組としては、一般県民調査では、「テレビ CM」が56.6%と最も高く、次いで「YouTube への動画掲載」（41.9%）、「学校でのチラシの配布、ポスター掲示」（40.0%）となっている。

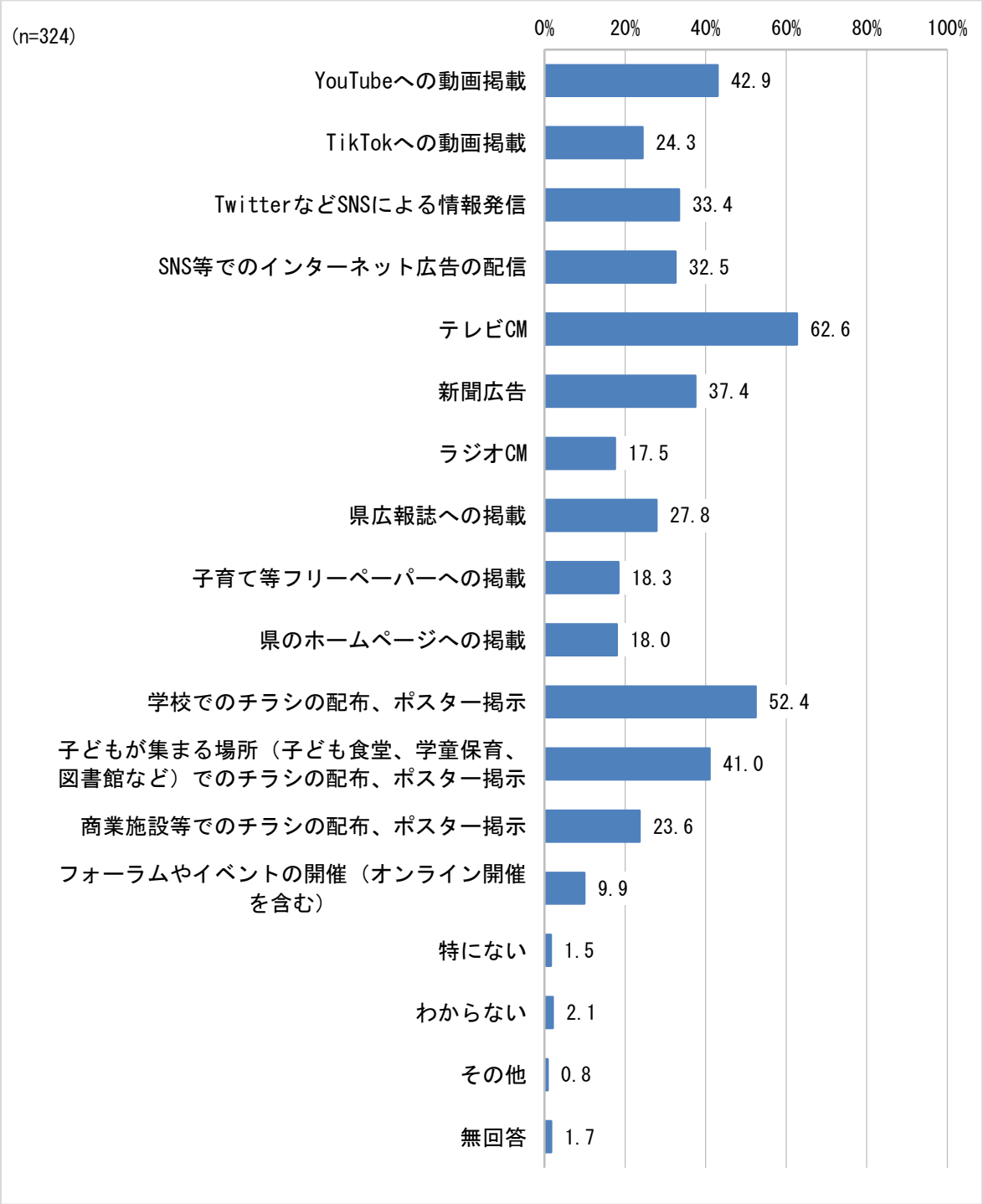
県政モニター調査では、「テレビ CM」が 62.6%と最も高く、次いで「学校でのチラシの配布、ポスター掲示」（52.4%）、「YouTube への動画掲載」（42.9%）となっている。

図表 120　啓発活動として効果があると思われる取組

＜一般県民調査＞



＜県政モニター調査＞


(n=324)
0%
20%
40%
60%
80%
100%
YouTubeへの動画掲載 42.9
TikTokへの動画掲載 24.3
TwitterなどSNSによる情報発信 33.4
SNS等でのインターネット広告の配信 32.5
テレビCM 62.6
新聞広告 37.4
ラジオCM 17.5
県広報誌への掲載 27.8
子育て等フリーペーパーへの掲載 18.3
県のホームページへの掲載 18.0
学校でのチラシの配布、ポスター掲示 52.4
子どもが集まる場所（子ども食堂、学童保育、図書館など）でのチラシの配布、ポスター掲示 41.0
商業施設等でのチラシの配布、ポスター掲示 23.6
フォーラムやイベントの開催（オンライン開催を含む） 9.9
特にない 1.5
わからない 2.1
その他 0.8
無回答 1.7

一般県民調査で年代別に見ると、「テレビCM」は60代以上、「YouTubeへの動画掲載」は20代、30代、40代、「学校でのチラシの配布、ポスター掲示」は50代が高くなっている。このほか、20代、30代では、「TikTokへの動画掲載」、「Twitterなど SNSによる情報発信」、「SNS等でのインターネット広告の配信」が高い。また、30代では「子どもが集まる場所（子ども食堂、学童保育、図書館など）でのチラシの配布、ポスター掲示」（40.5%）、30代、40代では「子育て等フリーペーパーへの掲載」が他の年代に比べて高くなっている。

図表 121　啓発活動として効果があると思われる取組（複数回答）

＜一般県民調査＞：年代別　（%）

		全体（n＝）	YouTubeへの動画掲載	TikTokへの動画掲載	Twitterなど SNSによる情報発信	SNS等でのインターネット広告の配信	テレビCM	新聞広告	ラジオCM	県広報誌への掲載
年代別	20代	108	47.2	36.2	43.0	33.4	44.9	17.0	12.9	9.3
	30代	114	48.4	32.4	40.9	30.8	47.1	21.7	13.3	16.3
	40代	150	46.4	24.0	32.1	28.2	55.0	17.3	15.0	15.8
	50代	160	43.2	22.2	30.8	27.2	59.8	30.4	19.3	19.1
	60代以上	308	34.8	6.2	18.7	19.3	63.4	37.4	21.4	31.3

		子育て等フリーペーパーへの掲載	県のホームページへの掲載	学校でのチラシの配布、ポスター掲示	子どもが集まる場所（子ども食堂、学童保育、図書館など）でのチラシの配布、ポスター掲示	商業施設等でのチラシの配布、ポスター掲示	フォーラムやイベントの開催（オンライン開催を含む）	特にない	わからない	その他
年代別	20代	14.4	22.9	36.0	30.1	17.2	8.2	8.7	13.5	0.0
	30代	28.2	18.0	42.4	40.5	29.0	10.5	11.6	8.1	0.3
	40代	23.2	21.8	38.8	29.6	24.9	13.7	9.6	14.1	0.0
	50代	19.3	20.7	44.3	35.9	31.1	18.1	7.9	13.2	0.0
	60代以上	11.4	26.6	38.9	34.0	28.5	13.1	8.5	11.3	0.4

（１５） ヤングケアラーの印象や「ヤングケアラー」の支援に必要だと思われること（自由記述）

ヤングケアラーの印象や「ヤングケアラー」の支援に必要だと思われることについて聞いたところ、以下のような意見があった。

図表 122　ヤングケアラーの印象や「ヤングケアラー」の支援に必要だと思われること（自由意見）

印象
・かわいそう ・若い時から大変 ・勉強時間が少ないが、頑張って欲しい ・動画をみるまでは人ごとだと思っていた ・子どもなのに大人以上の苦労をしている人の多さを新聞等で知り、ショックを受けた ・身近にヤングケアラーがいないので無関心だったが、このアンケートをきっかけにヤングケアラーについての理解が深まり、何か自分でもできることがあれば協力したい ・誰にも相談出来ない子が多そう ・一人で抱え込まずに身近な親戚・友人などにまずは相談したらよいと思う ・一人でも、そのような子どもがいなくなればよい ・「ヤングケアラー」は昔からいたが、ごく最近ようやく取り上げられたような感じ ・家庭という外部には見えにくいことが、問題。今までは「家庭の事情」ですまされてきたのでは ・各家庭に事情があり、一方的な援助が善意とは限らない。相手の出方や求めるものをよく観察すべき。ヤングケアラーに当てはまる子どもが必ずしも不幸な子どもというわけではないと思う ・ヤングケアラーは素晴らしいことだけど本人の負担になりすぎない程度に行うべき ・よくある事だと思う。核家族化が進み仕方のない事。やはり、昔のように家族、親族の繋がりが大切 ・身近にいないのでよくわからない など
「ヤングケアラー」の支援に必要だと思われること
＜「ヤングケアラー」の認知・理解促進＞ ・いろいろなメディアを通して実態、大変さをもっと知らせることで、力になりたいという動機付けになれば ・ヤングケアラーという言葉が、ダサい。動画も興味が持てるものではなかった。アニメで制作した方がいい ・世の中全般、大人にも、子どもにも、正しい知識を伝える。特に小学校の授業でしっかりと教える ・うまくサービス導入ができた例を新聞や広報等で提示されると、近所の人が関わるきっかけになりそう ・子どもの目線で発信してほしい ・かかわる側の認識不足がいじめにもつながる恐れがあるので地域住民の意識を高めるための学習が必要。パンフレットの配布や学習会の場 ・身近な存在であるということを、もっとフランクに発信した方が、若者への理解や興味も深まる。当事者にならないと分からないこともあるので、当事者目線の発信が重要 ・中高生は学校や周囲の友人が一番気づきやすいと思うので、子どもたちへの啓発が重要

＜ヤングケアラー当人への「ヤングケアラー」の認知・理解＞

・自らがそうだと分かる事と、相談しても良い、頼っても良いとわかってもらえる事
・家庭内で何とかしようと思う心境をいかに変えられるかが重要
・もっと周りに頼っても良いという気持ちをもってもらいたい。SNS などからの情報発信や、人気の YouTuber からの発信、LINE の上部に出るニュースなどが伝わりやすいのでは
・当人自身がヤングケアラーであると気が付くための知識、認識の構築。学校教育に組み込む
・若者が見る YouTube、インスタ Twitter 等で画像や動画で広報。ヤングケアラーとはどんなものか、相談後はどうなるのか等アニメや漫画でストーリーにする
・チェックリストなどを利用して本人の気づきへと導きたい
・本人がどれだけ負担と感じるのか個人差があるので、介護認定のように聞き取りを行い段階分けすることで、支援の依頼がしやすくなり、周りからも分かりやすくなる

＜「ヤングケアラー」当人が支援の情報を得やすい発信＞

・子どもがしっかり情報を受け取れるようにする
・ヤングケアラーでも情報が手に入るよう SNS で情報発信をする。同時に、大人がヤングケアラーだと気付き手助けする手続きを新聞やテレビなどで発信。補助制度の手続き等も、ヤングケアラー本人がわかるよう、難しい言葉や手続きは避ける

＜気軽に相談できる手段・相手・場所＞

・LINE、SNS などで、匿名で相談しやすいもの
・ネット上での相談。夜間にも相談出来るよう、24 時間体制で対応。大人より、少し年上、20 代位の方が話しやすい
・信頼できる人達が登録していて、助けて欲しい時に呼び出せるアプリ。利用が定額制だと金銭的な躊躇もなくなる
・ヤングケアラー本人が SNS やネットで検索すると、相談窓口がすぐヒットしたり、ヤングケアラーに該当するのか簡易的に判断できるようなヤングケアラー診断ができるといい
・気軽に相談出来る場所や、電話 24 時間対応の所があればいい
・介護関係なので包括支援センターに相談できるようにしては
・1 人で悩まずに気軽に相談出来る大人がいる事が大切
・本人が自分の状況を話せる大人が居て、そこから解決へと進められる手段があればよい

＜周りの大人が気づくこと＞

・自分の状態を理解してもらうのが、同年代だと難しいと思うので、成人や年配の方が相談に乗る
・本人がヤングケアラーという意識がないことが多いと聞いたことがあるので、周りが気づいてあげられるような、押し付けにならない近所付き合いができるとよい
・本人が相談できない場合が多いように感じるので周囲の大人がよく見守り気付く事が大事
・本人がいつでも相談出来るよう、学校や親戚などが気をつけるのが大事

＜見守り・声かけ＞

・子ども自ら相談するのはハードルが高いと思うので、近くの大人から声をかけることが必要
・近所でも何か気が付くことがあったら、声かけする

・自尊心を損なわないように声掛け見守りをして、共感しながら話を聴くことが大事
・子ども自身から話は届きにくいと思うので、地域でしっかり見守りをする

＜学校での対応＞
・学校等で把握し、関係機関に定期的に報告する機会を作る、関係機関との定期的な連携を図る
・学校での生活環境調査や個人面談などにより、状況を把握。担任教師だけでは負担がかかりすぎるので、複数名の内外サポートチームで、生徒を支える
・学校から、常に相談先を子どもたちにも知らせていく
・ヤングケアラーの子は忙しくて広報等を見る時間はない。学校のホームルームなどで、一斉にヤングケアラーの相談先など周知する
・小中高に積極的に資料を配布する

＜行政の支援＞
・本人の自覚がないので、学校や自治体が家庭訪問するなどで把握する
・行政と介護施設による支援
・地域相談担当の設置
・国としての法整備
・自治体だけではなく、国がしっかりケアするべき
・助けてくれる場所や人への支援
・公的な援助があることや、申請を助けてくれる大人が必要

＜地域の支援＞
・相談などの機関があることを広く周知し、町内会など、大人が目を配る、手をさしのべる事が第一歩
・自治会や学校で相談できる環境を整備
・潜在的な対象者を見つけるためには地域の活動が重要。自治会等の交流が多ければ住民から些細な情報も上がってくる

＜経済的支援＞
・気軽に利用出来る介護や医療サービスの充実と、それを利用する場合の経済的な援助
・むやみに手出しをすると負担になる。家庭の困窮解消を図るサービスが欲しい
・介護費用が支払うことが出来ないほど経済的に逼迫している家庭が殆どだと思うので、県や市町村には支援する仕組み作りをして欲しい

＜家事・介護等の支援・学習支援＞
・無料のヘルパー
・家事等のボランティア
・事務処理も難しくなくだれもが簡単に支援をお願いできる環境
・気楽に、お金のことを考えず外部に委託できるが一番
・介助サービスと学習支援を無償で受けられる
・家事支援。学習支援

＜居場所づくり＞

・プライバシーを守り、息抜きできる場所

・その子だけの自由な時間を作ってあげる事

・子ども食堂でヤングケアラーの子達の面倒をみている

＜支援が難しい＞

・身近にも将来なりそうな家庭があり心配しているが、よその家庭に入っていくのはなかなか難しい

・他人が干渉するのは難しい。親戚や身内が手を差し伸べて動いてくれるかだと思う

・外見では　ヤングケアラーとわからないので助けになることができない

＜その他＞

・高齢者が施設などの介護をもっと安易に利用できれば(金額など)ヤングケアラーは減る

・子どもへの支援よりも家庭を自立させる支援が必要

など

（１６） 追加分析

県政モニター調査において、「ヤングケアラー」という言葉をどこで聞いたかについて情報源別にみたところ、普段の情報源がどの媒体であっても、「テレビ」から聞いた人が最も高く、次いで「新聞」からとなっている。普段の情報源がインターネットの人は、「テレビ」「新聞」に次いで「SNS」、「web サイト」が高くなっている

最も利用する情報源も、どの媒体であっても、「テレビ」から聞いた人が最も高くなっている。

情報源に関わらず、「テレビ」が高いものの、「web サイト」、「SNS」も高くなっている。

図表 123 「ヤングケアラー」という言葉をどこで聞いたか

＜県政モニター調査＞：普段の情報源別 （%）

		全体（n＝）	テレビ	新聞	雑誌や本	国・自治体などの行政の広報誌	講演会やイベント	web サイト	SNS	友人・知人から聞いた	その他	無回答
普段の情報源	全体	303	83.0	43.1	10.6	13.2	3.9	15.1	10.8	4.8	4.0	2.2
	テレビ	269	85.9	45.7	10.5	14.2	4.0	12.1	9.0	4.6	4.5	2.5
	ラジオ	71	84.2	51.3	16.5	19.0	5.3	12.9	8.9	4.1	7.1	2.9
	新聞	166	85.2	69.3	13.9	16.4	4.8	12.0	3.5	4.8	3.5	2.3
	雑誌	31	86.1	56.2	21.9	13.9	6.8	9.6	12.3	13.6	8.3	2.8
	インターネット（ニュースサイトや一般のホームページ）	229	83.6	41.6	11.0	12.6	2.9	20.0	13.5	3.8	4.0	1.3
	インターネット（Facebook、Twitter、LINE などの SNS）	112	74.6	34.0	13.5	10.1	3.0	20.2	26.2	7.4	7.2	2.3
	インターネット（YouTube などの動画）	95	73.7	28.0	8.8	7.0	2.2	25.8	25.5	8.2	6.6	4.0
	インターネット（メールマガジン）	28	68.6	32.8	24.0	4.4	0.0	28.4	24.0	14.9	6.1	7.4
	家族、友人、知人との会話	183	83.1	46.1	14.5	12.2	5.3	17.1	12.7	6.6	4.9	1.6
	その他	2	100.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0

図表 124　「ヤングケアラー」という言葉をどこで聞いたか

＜県政モニター調査＞：最も利用する情報源別　（%）

		全体（n＝）	テレビ	新聞	雑誌や本	国・自治体などの行政の広報誌	講演会やイベント	webサイト	SNS	友人・知人から聞いた	その他	無回答
最も利用する情報源	全体	303	83.0	43.1	10.6	13.2	3.9	15.1	10.8	4.8	4.0	2.2
	テレビ	116	93.6	50.1	11.2	17.3	6.8	7.9	4.7	1.8	0.7	2.8
	ラジオ	6	66.7	53.0	53.0	13.6	19.7	27.2	13.6	0.0	19.7	0.0
	新聞	33	72.0	83.4	19.1	22.9	5.1	8.9	0.0	5.1	2.6	5.1
	雑誌	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	インターネット(ニュースサイトや一般のホームページ)	81	85.3	30.0	4.6	4.1	0.0	25.4	9.9	6.6	3.6	0.0
	インターネット（Facebook、Twitter、LINEなどのSNS）	44	70.5	23.7	11.4	5.6	0.0	14.2	37.1	2.8	5.8	3.9
	インターネット（YouTubeなどの動画）	8	42.3	25.9	0.0	0.0	10.6	21.2	10.6	10.6	25.9	0.0
	インターネット（メールマガジン）	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	家族、友人、知人との会話	3	66.7	66.7	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0
	その他	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

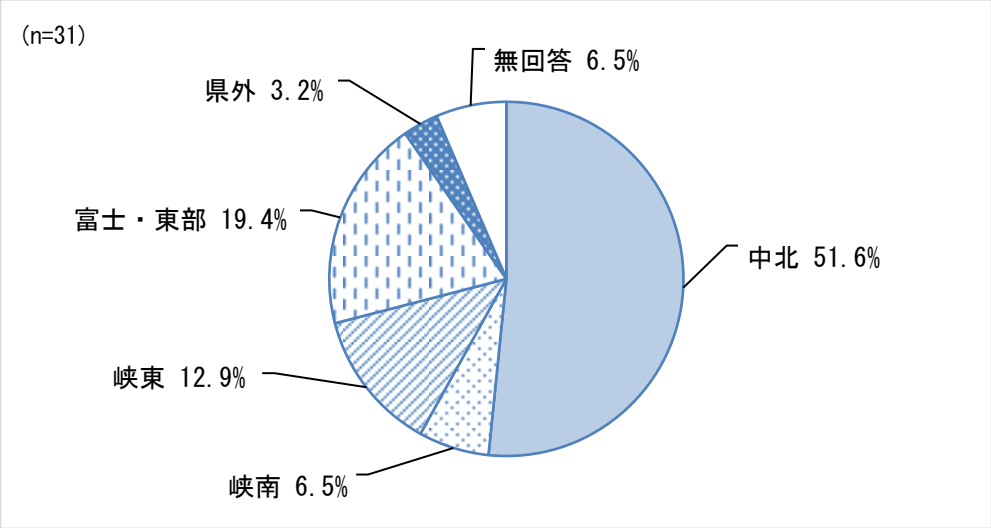
第V章　支援者調査（子どもの居場所運営事業者）

1．　回答者の基礎情報

（1）　団体の所在地

子どもの居場所運営事業者（以下「子どもの居場所」という）の所在地は、「中北」が 51.6%、「峡南」が 6.5%、「峡東」が 12.9%、「富士・東部」が 19.4%となっている。

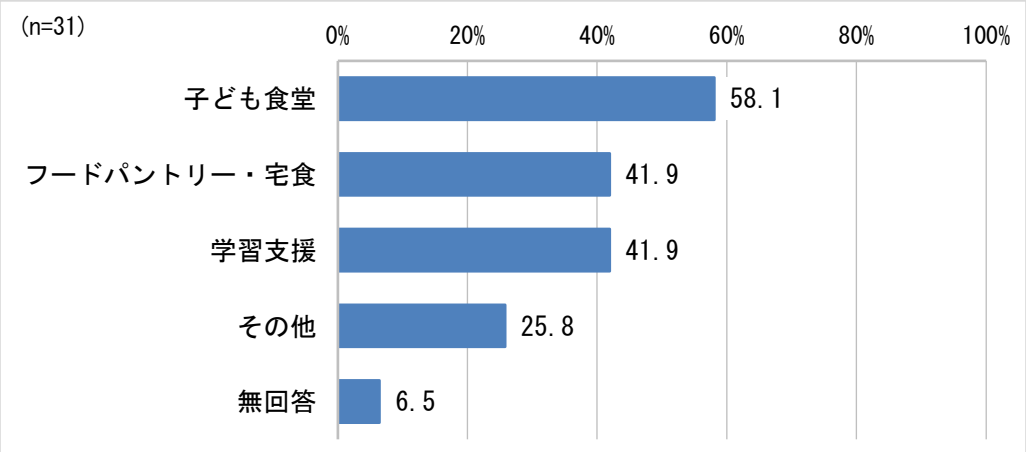
図表 125　子どもの居場所運営事業者の所在地



（2）　団体の活動内容

子どもの居場所の団体の活動内容は、「子ども食堂」が 58.1%と最も高く、次いで「フードパントリー・宅食」「学習支援」（ともに 41.9%）となっている。

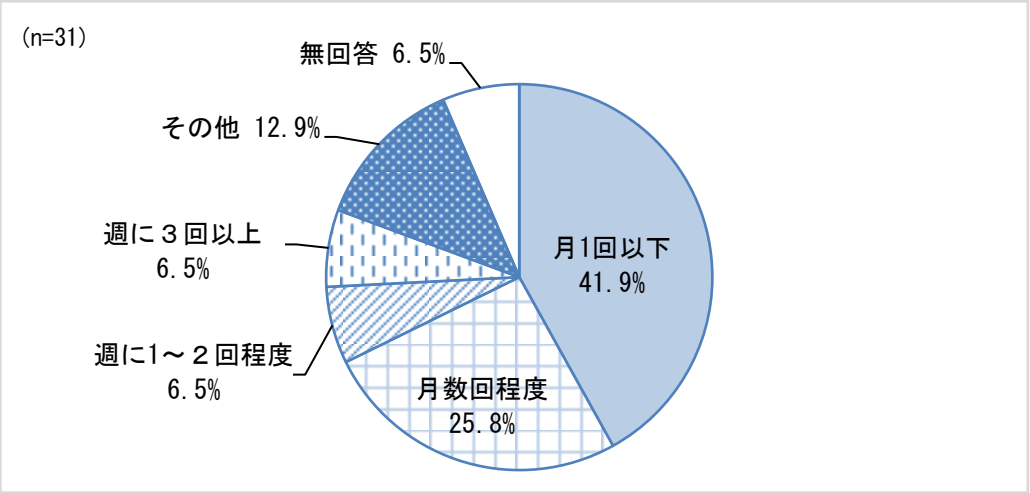
図表 126　団体の活動内容〈子どもの居場所〉（複数回答）



（３） 団体の活動頻度

子どもの居場所の団体の活動頻度は、「月１回以下」が 41.9%、「月数回程度」（25.8%）、「週に１～２回程度」「週に３回以上」（ともに 6.5%）となっている。

図表 127　団体の活動頻度〈子どもの居場所〉

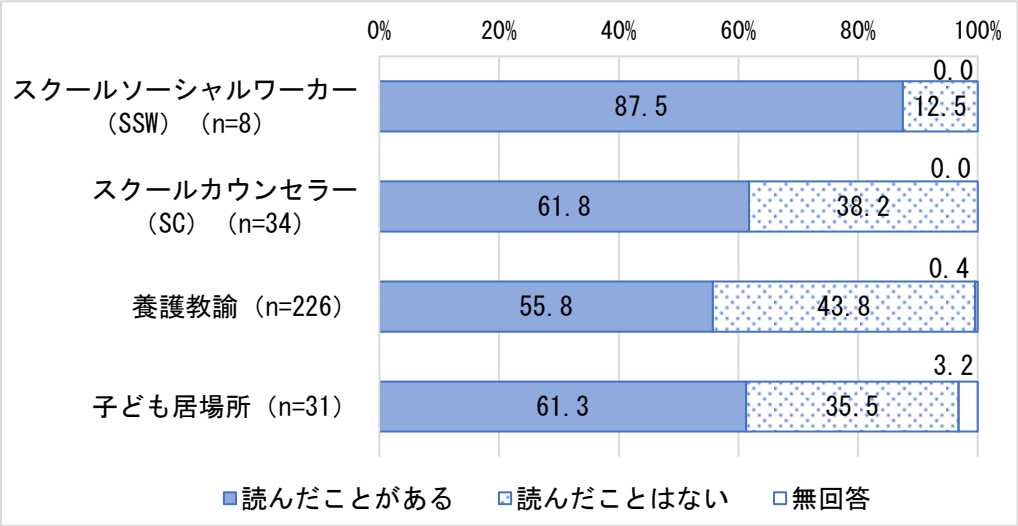


2． 県の「ヤングケアラー」に関する事業について

（１） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがあるか

「ヤングケアラー支援ガイドライン」について「子どもの居場所」では、「読んだことがある」が 61.3%、「ない」が 35.5%となっている。

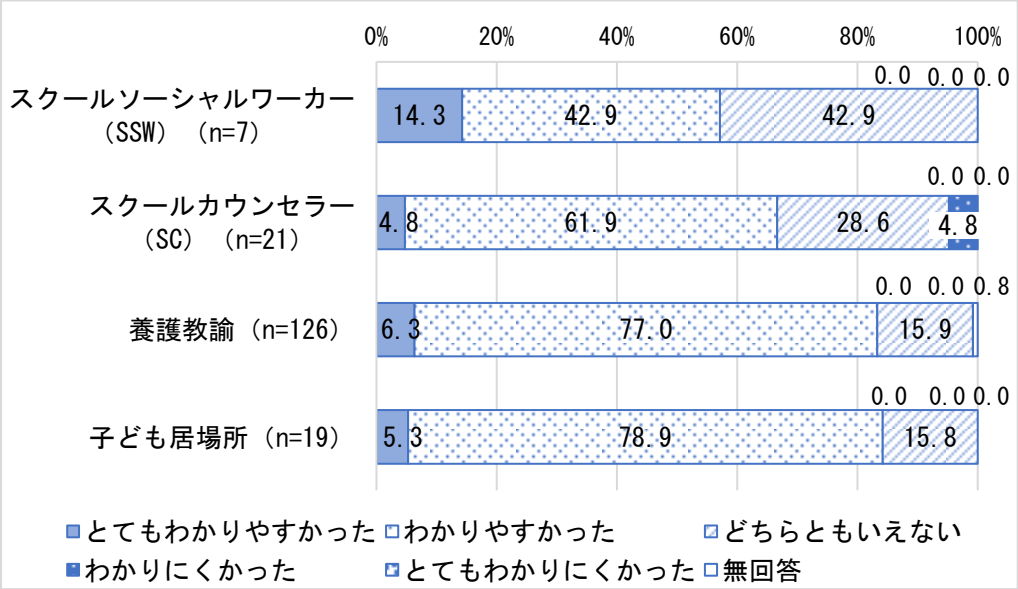
図表 128 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことの有無



（２） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ

「ヤングケアラー支援ガイドライン」を「読んだことがある」と回答した方に、わかりやすさについて聞いたところ「子どもの居場所」では、「比較的わかりやすかった」（「とてもわかりやすかった」と「わかりやすかった」の合計）が 84.2%となっている。

図表 129 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ

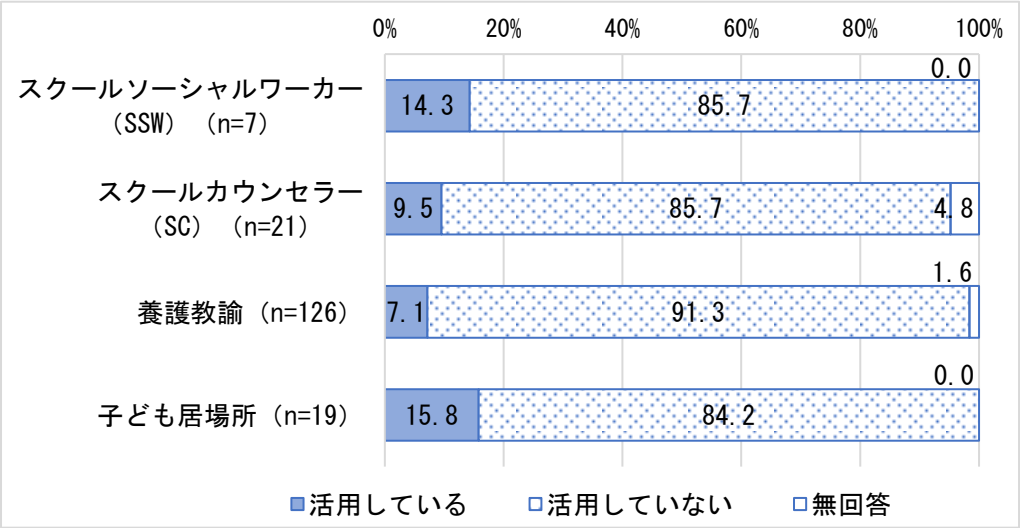


（３） 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートについて

① 活用状況

「ヤングケアラー支援ガイドライン」を「読んだことがある」と回答した人に、「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートを活用しているか聞いたところ、「子どもの居場所」では、「活用している」が 15.8%、「活用していない」が 84.2%となっている。

図表 130 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートの活用状況



② 活用場面、よかったところ、使いにくかったところ

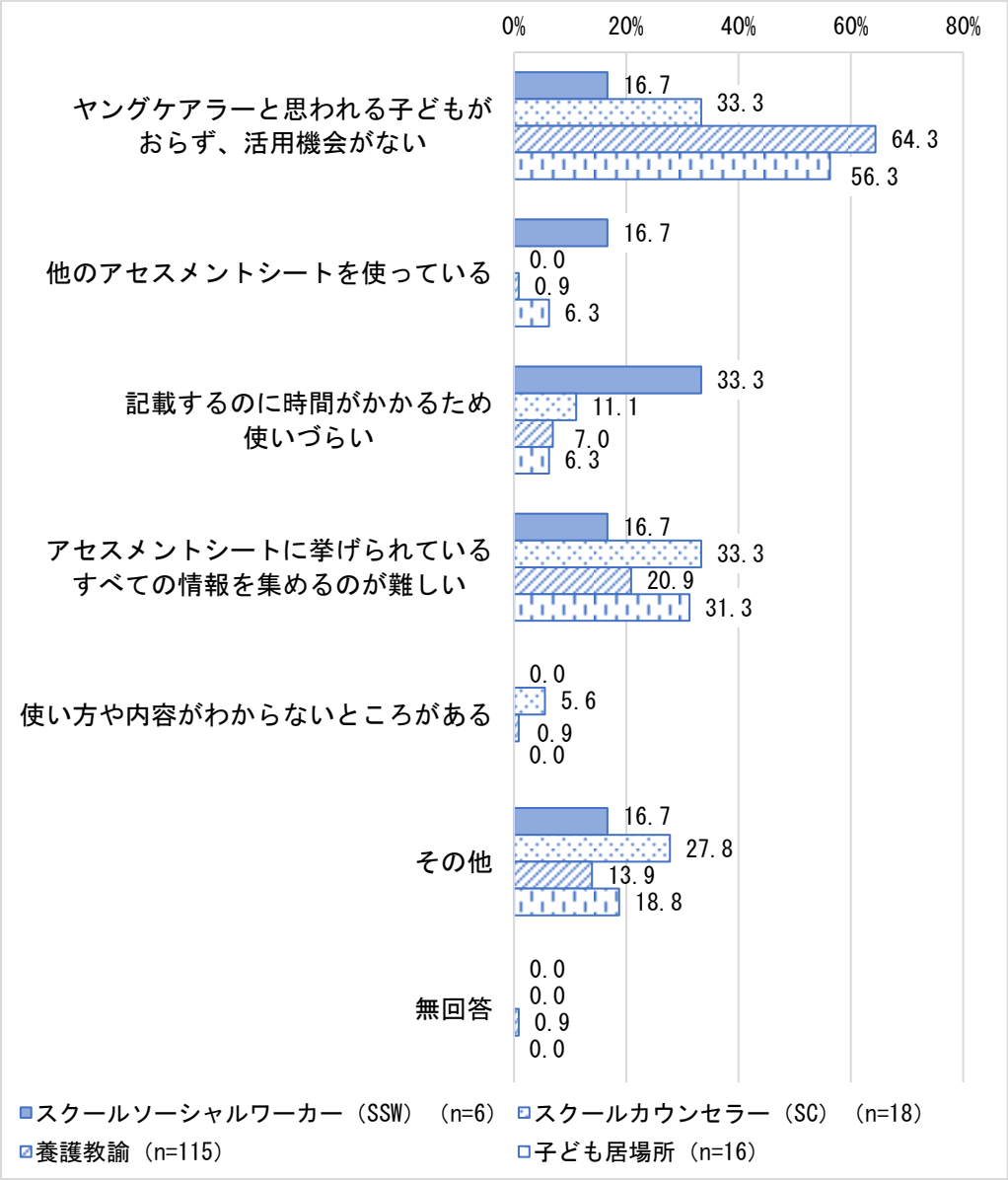
「ヤングケアラー」の早期発見のためにアセスメントシートを「活用している」と回答した人から、活用場面や使ってよかったところ、使いにくかったところについて以下のような回答があった。

活用場面	・子どもと関わるうえで可能性を探る程度 ・要保護児童対策地域協議会 ・介護現場での活用
よかったところ	・情報共有になった
使いにくかったところ	・特になし

③ 活用していない理由

「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートを「活用していない」と回答した人に理由を聞いたところ、「子どもの居場所」では、「ヤングケアラーと思われる子どもがおらず、活用機会がない」「アセスメントシートに挙げられているすべての情報を集めるのが難しい」などが上位に挙がっている。

図表 131　アセスメントシートを活用していない理由（複数回答）

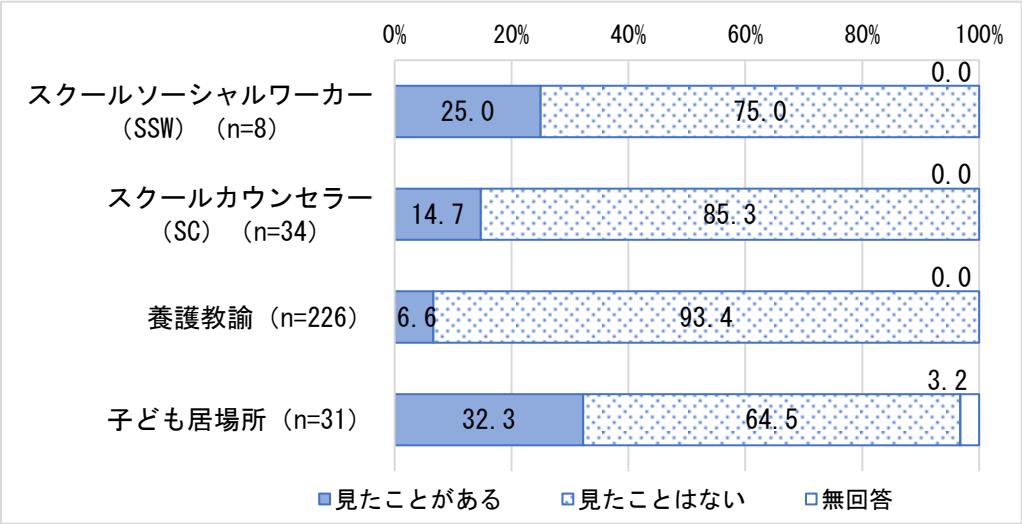


（４） ヤングケアラー啓発動画について

① 視聴の有無

山梨県公式 YouTube チャンネル「山梨チャンネル」で公開しているヤングケアラー啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」を視聴したことがあるか聞いたところ、「子どもの居場所」では、「見たことがある」が 32.3%、「見たことはない」が 64.5%となっている。

図表 132　ヤングケアラー啓発動画の視聴の有無



② 動画に関する意見

山梨県公式 YouTube チャンネル「山梨チャンネル」で公開しているヤングケアラー啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」を「見たことがある」と回答した人から、動画に関する意見について以下のような回答があった。

＜よかった点＞
- 学生が自然体に語っている姿がよかった
- 認識することで、日常生活の中で気づいた時に情報提供がしやすいと感じた
- ヤングケアラーに関心を持ったり気が付いたりできるものと思う

＜動画をより活用していきたい＞
- 個人で見たり、学校現場や行政セミナーなどで大いに活用できれば良いと思う
- 短くまとめてある動画なので、クラス全員で視聴する機会を作るなどして見せる事が必要

＜他の動画も作成してほしい＞
- ご近所編、自治会編など、より多くの立場から見た場面の動画があるとよりいいと思う

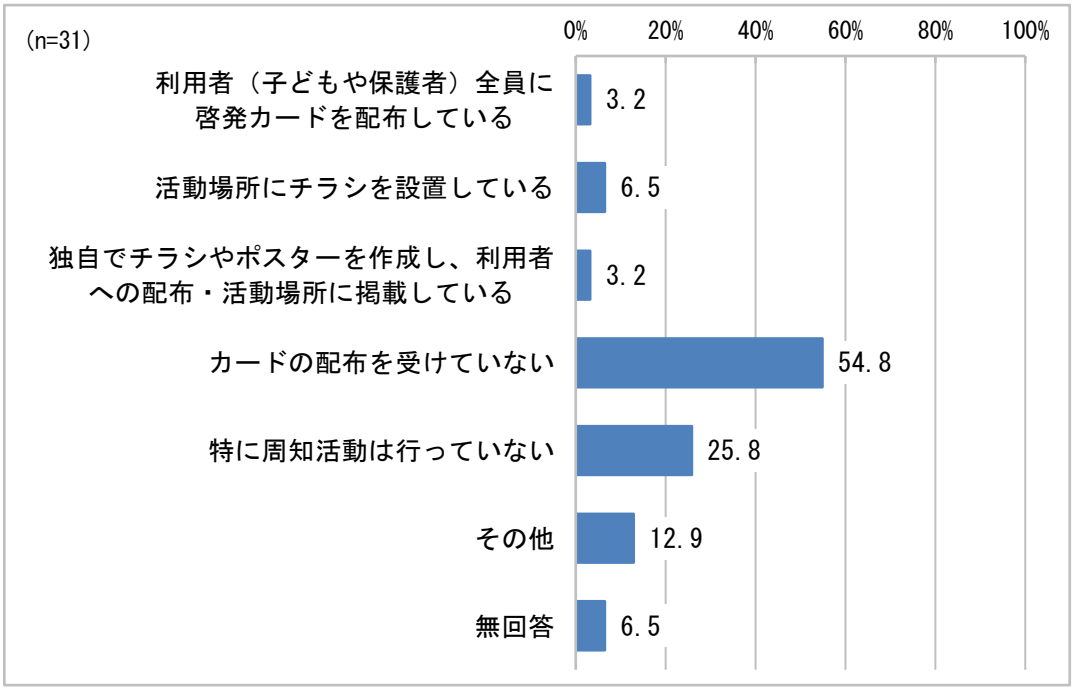
（５） ヤングケアラーの周知方法

① 団体でのヤングケアラー相談窓口の周知方法

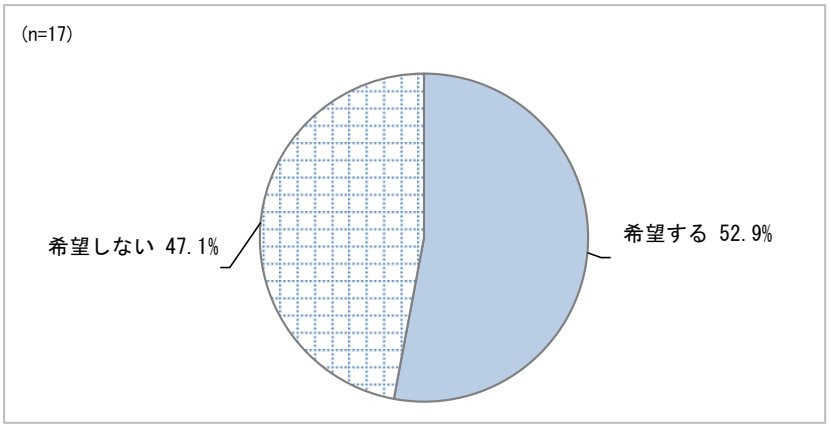
山梨県で令和４年１月に制作した「ヤングケアラー啓発カード」を利用したヤングケアラー相談窓口の周知について、「カードの配布を受けていない」が 54.8%と最も高く、次いで「特に周知活動は行っていない」が 25.8%となっている。（※啓発カードは、子ども食堂について、昨年度県内で運営委託した事業者のみに配布）

また、「カードの配布を受けていない」事業者に対して、配布の希望を聞いたところ、「希望する」は 52.9%、「希望しない」は 47.1%となっている。

図表 133　ヤングケアラー相談窓口の周知方法〈子どもの居場所〉（複数回答）



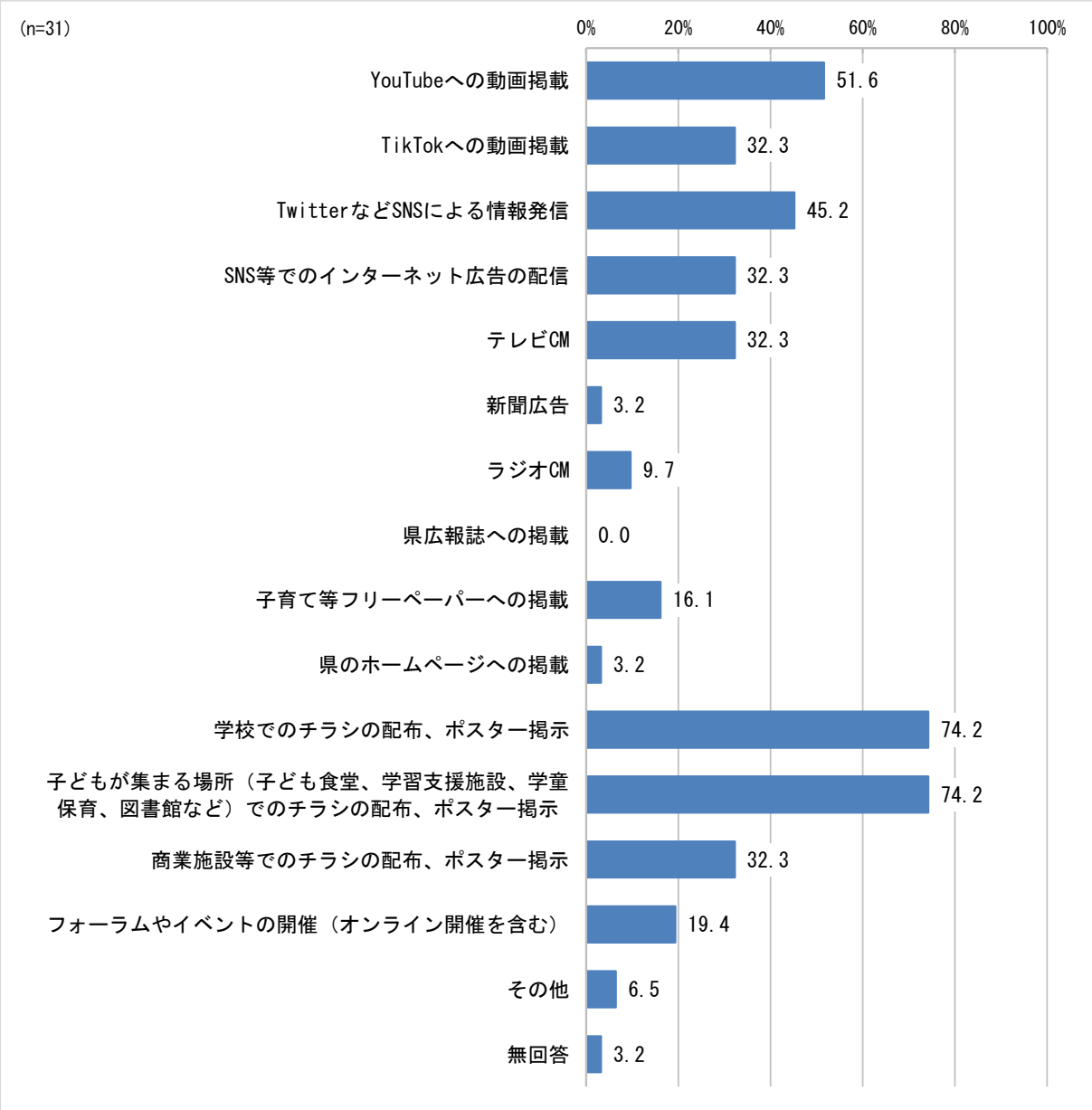
図表 134　カードの配布希望〈子どもの居場所〉



② 子どもへの啓発活動として効果があると思う取組

子どもへの啓発活動として効果があると思われる取組については、「学校でのチラシの配布、ポスター掲示」「子どもが集まる場所（子ども食堂、学習支援施設、学童保育、図書館など）でのチラシの配布、ポスター掲示」がともに 74.2%と最も高く、次いで「YouTube への動画掲載」（51.6%）、「Twitter など SNS による情報発信」（45.2%）となっている。

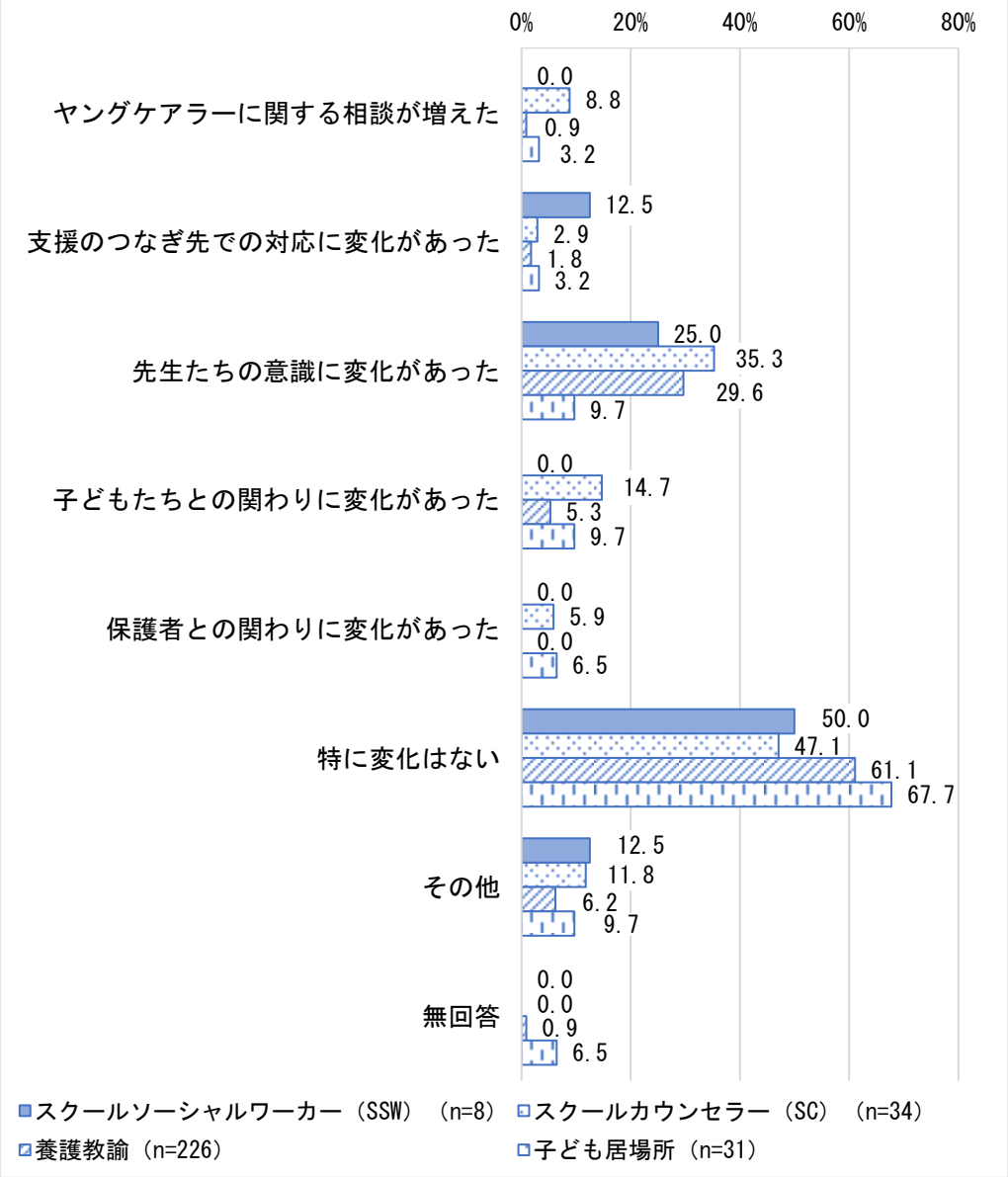
図表 135　子どもへの啓発活動として効果があると思う取組〈子どもの居場所〉（複数回答）



（６） 昨年度と比べての、ヤングケアラーの発見、支援における変化

昨年度と比べての、関係機関との連携や、ヤングケアラーの発見、支援においての変化については「子どもの居場所」では、「特に変化はない」が 67.7%と最も高く、次いで「先生たち（スタッフたち）の意識に変化があった」「子どもたちとの関わりに変化があった」（それぞれ 9.7%）となっている。

図表 136　昨年度と比べた、ヤングケアラーの発見、支援における変化（複数回答）



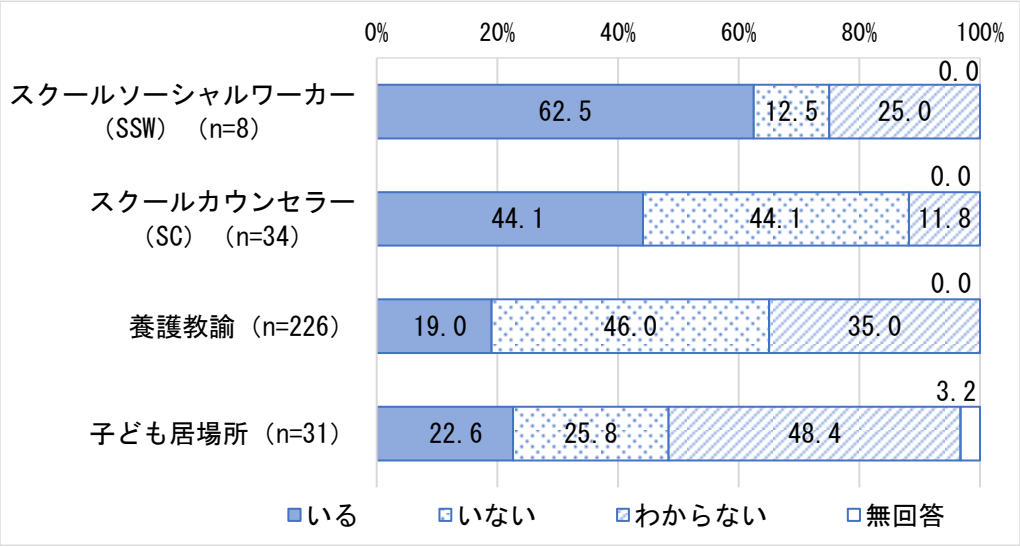
※「子どもの居場所」では「支援のつなぎ先での対応に変化」は、「関係機関との連携における変化」、「先生たちの意識に変化」は「スタッフたちの意識に変化」

3． ヤングケアラーの把握、支援について

（1） 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度）

「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無については「子どもの居場所」では、「いる」が 22.6%、「いない」が 25.8%、「わからない」が 48.4%となっている。

図表 137 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度）



（2） ヤングケアラーに対して配慮していること

「ヤングケアラー」と思われる子どもが「いる」と回答した人から、ヤングケアラーに対して特に配慮していることについて以下の回答があった。

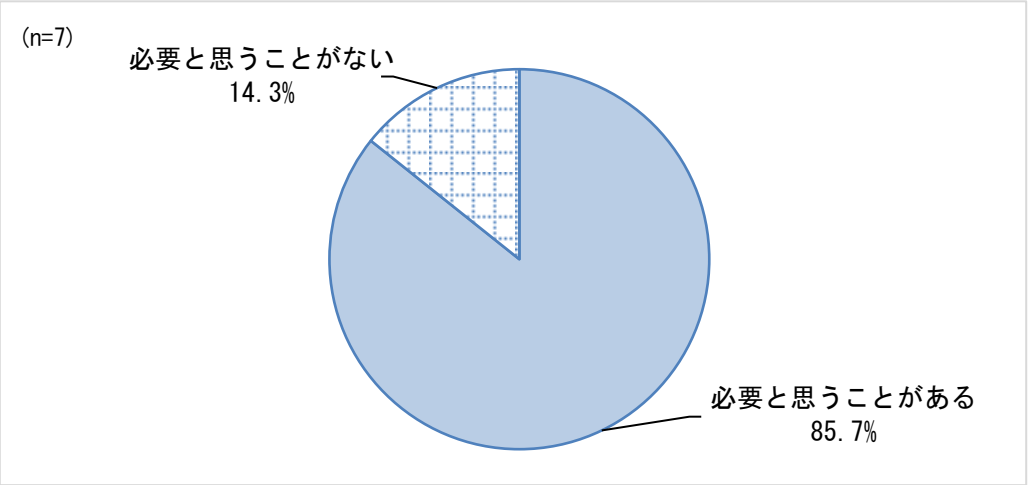
＜子どもへの声かけ・見守り＞
- 子どもに対しては SOS を出しやすいように声をかける・見守る・楽しい時間を提供する
- 信頼関係
- 声かけや見守り
- さりげなく日頃の話しを聞いて、家庭などの状況把握
- 普段からの声かけによる信頼関係の構築

＜保護者への声かけ＞
- 保護者の悩みを聞く

（３） 専門家のサポートの必要性〈子どもの居場所〉

「ヤングケアラー」と思われる子どもが「いる」と回答した人に、ヤングケアラーを支援するにあたって、専門家のサポートは必要と思われることがあるかについて聞いたところ、「必要と思うことがある」が 85.7%、「必要と思うことがない」が 14.3%となっている。

図表 138　専門家のサポートの必要性〈子どもの居場所〉



（４） 必要な専門家のサポートの内容

専門家のサポートが「必要と思うことがある」と回答した人に、いつどのようなことで必要か聞いたところ、以下のような回答があった。

必要な専門家	必要な時・場面	希望する利用形式
医療・介護	-	当事者の希望に沿った形
信頼できる心理カウンセラー	定期的に、家の近く	電話から訪問
通訳	親に理解してもらいたい必要な文章や情報を通訳してもらいたい	電話で気兼ねなく通訳をお願いできる体制
支援を繋ぐコーディネーター	本人達の困り事の相談時	LINE などのツールを活用し、受け応えにより訪問
ソーシャルワーカー	夜、祝日など	-

（５） 子どもの居場所運営事業者で実態把握をしやすい要因

昨年度実施した実態調査において、子どもの居場所運営業者では、ヤングケアラーを把握している割合が他の支援者と比較して７割程度高くなっていたが、実態把握をしやすい要因として、具体的にどのようなことが影響しているか聞いたところ、以下のような回答があった。

＜子どもが話しやすい環境である＞
- ・本人とコミュニケーションをとる総量が多いため
- ・子どもと向き合う時間が、ほかの支援者より多いこと。また、子どもとの良好な関係が築きやすいこと
- ・対面でコミュニケーションを取ることで、心を開くことができたり、家族の様子がわかったりする
- ・子どもと直接関われること、信頼関係があることで、子どもの抱えている見えない問題に気づける
- ・子どもの居場所では、いろいろな話をするので、警戒心なく話してくれる子どもが多い

＜保護者、家庭の状況が把握しやすい＞
- ・親子で顔を見て会える、話を聞ける場面がある
- ・地域の子どもが活動対象であり、子どもと直に接する機会が多く、家庭の状況などわりと把握しやすい状況にある

＜積極的に行動している＞
- ・自ら SNS を通じて情報収集を進め、積極的に支援を活用する方が増えたからではないか

（６） ヤングケアラーの支援にあたって、やるべきことややりたいこと、家庭やケアが必要な人への支援に関して行政やサービス事業所等に期待すること、学校、SSW、SC と連携したいこと〈子どもの居場所〉

やるべきこと、やりたいこと

＜子どもの SOS を見逃さない＞
- ・対面での会話や様子、身体的な変化など
- ・見守り・家族ではない関係作り・SOS を出しやすくする・保護者の悩みを聞く
- ・子どもが悩みを打ち明けられる大人でありたい。打ち明けられたら親身になって一緒に考えて良い方法を模索していきたい
- ・現在、対象となる児童がいないが、注意深く見守っていきたい
- ・精神福祉手帳を取得している者や、経済的に不安な家庭などを日常的に把握し、学校と情報共有をしておくことでヤングケアラーの早期発見に努めたい

＜子どもの居心地のよい場所をつくる＞
- ・楽しい時間を過ごしてもらう
- ・子どもとの信頼関係を築き、何でも話をしてもらえる関係作りを目指し、子どもの気持ちに寄り添える家庭的な居場所作り
- ・居場所、繋がりの提供
- ・現在、コロナ禍のためいつでもだれでもこども食堂を利用できる状況ではないが、子どもだけで気軽に利用出来る機会を作っていく

＜家庭との関係性をつくる＞
- ・まずは家庭との信頼関係を築き、行政との間に入って、行政へ理解を求めていくことを進めていきたい

＜関係機関につなぐ＞ ・参加する子どもをみて、気づくことを見逃さないで、他機関へつなぐ ・「ヤングケアラー」と思しき子どもがいたら、関係機関に繋ぐ ・関係機関と繋がる ・子どもの困りごとを解消するためのサービスへつなげる ＜食事、支援の提供＞ ・食の提供 ・たんぽぽたすけあい活動をしているので、ケアが必要な人がいればサポートできる体制がある ・専従のコーディネーターの配置
行政やサービス事業所等に期待すること
＜状況の把握、情報共有＞ ・当事者の状況を把握しておいてほしい ・情報共有が必要 ＜必要な資源の把握、連携＞ ・当事者に支援の選択肢を伝えてほしい ・支援を行っている団体や事業の紹介をしてほしい ・行政や事業所という組織を超えた、人と人との繋がりを作ってほしい ・地域、事業者に対して具体的な声かけがあれば協力していきたい ＜当事者が話しやすい環境づくり、地域での支援体制づくり＞ ・当事者からの相談を待つのではなく、行政や関係機関がもっと理解する、気にかける、つながって把握することが大事 ・相談者と同じ目線で寄り添ってくれる支援が必要 ・居場所づくり。居場所があれば、心を開き、悩みを話してくれると思う ・地域のボランティアなどと連携して、悩みを聞きだし、解決する仕組みが必要 ・ケアが必要な人が一方的にケアの対象になるのではなく、地域で繋がってお互いにお互いをケアしあえる様な仕組みづくり ＜相談窓口の明確化＞ ・窓口を明確にすること ＜ボランティアの支援＞ ・ボランティアを大事にしてほしい。労働に対する対価を考えてもらいたい
学校、SSW、SC と連携したいこと
＜情報共有、連携＞ ・個々の情報共有と、傾向や対策、対応について ・地域での情報共有 ・気になる子がいた場合の情報共有 ・活動に参加する子ども達の日常を知りたい。些細なことでも伝えてもらいたい ・生活歴や学校での様子についての情報共有と部署で気付いた事による課題分析の情報共有 ・支援を行っている団体同士の交流（どのような支援を行っているか。課題や問題点を話し合い、さら

なる支援の向上に向けて交流したい）

・学校と子どもの居場所だけでなく自治会などの地域の組織も巻き込んだ幅広い連携体制の構築

＜子どもが悩みを話しやすい環境づくり＞

・悩みを話していい環境づくりを進めて欲しい

・教師はもっともっと生徒一人ひとりの細やかな部分に踏み込む必要があると思う

＜学校と SSW の連携＞

・子どもや家庭のことに関しては学校、SSW がもっと積極的に連携を模索してほしい

４． 子どもの居場所において把握されたヤングケアラーの事例

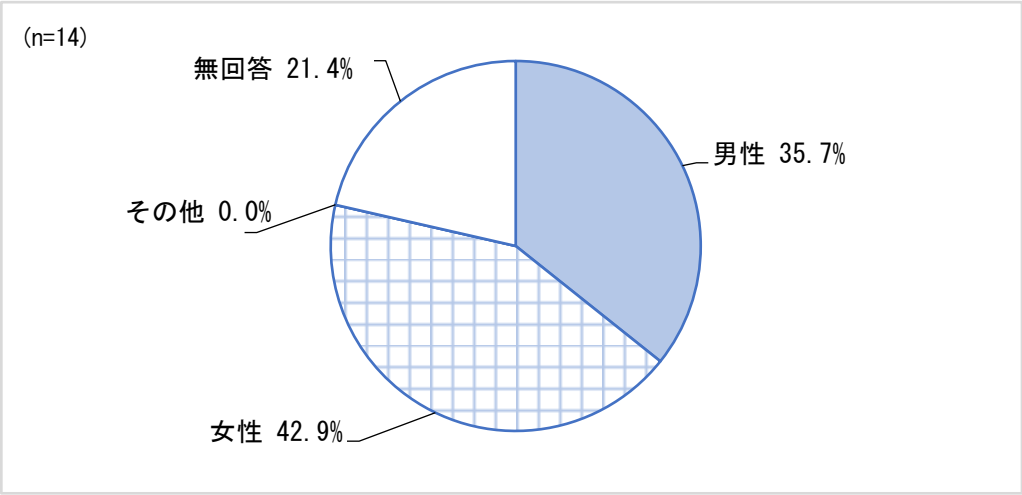
今年度、団体に参加する子どもの中に「ヤングケアラー」と思われる子どもが「いる」と回答した人に、子どもの状況などについて回答（最大２事例）をいただいたところ、合計 14 事例の回答があった。

（１） 属性

① 性別

「ヤングケアラー」と思われる子どもの性別は、「男性」が 35.7%、「女性」が 42.9%となっている。

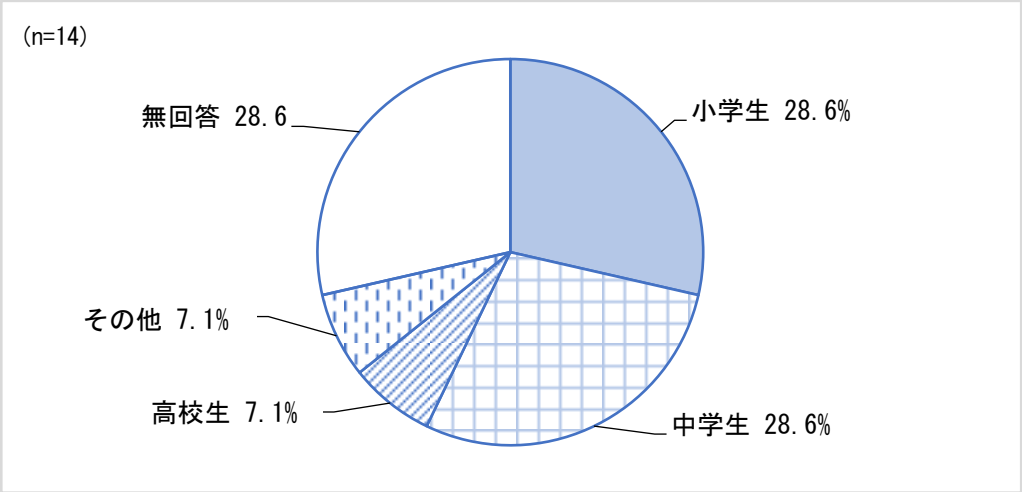
図表 139 性別



② 所属

「ヤングケアラー」と思われる子どもの学年は、「小学生」が 28.6%、「中学生」が 28.6%、「高校生」が 7.1%となっている。

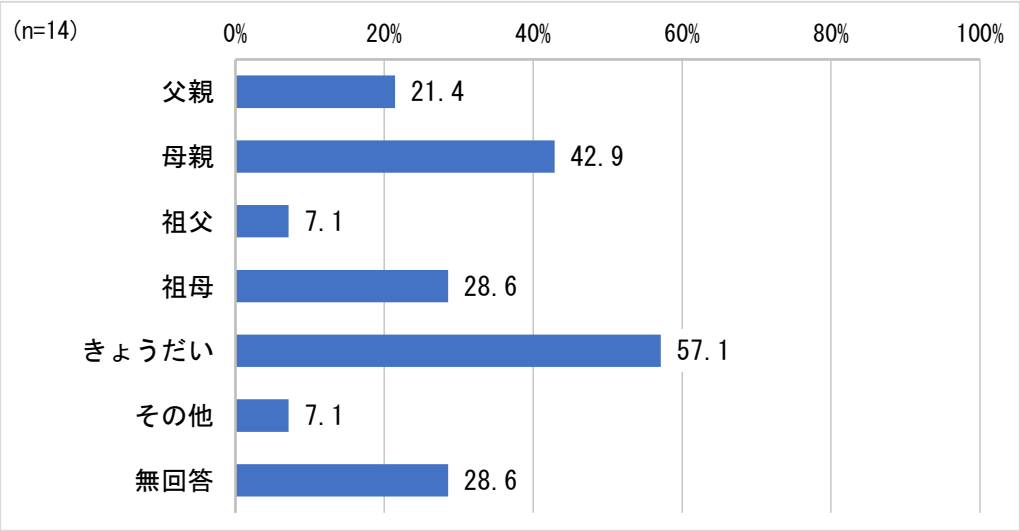
図表 140 学年



③ 家族構成

家族構成についは、「父親」が 21.4%、「母親」が 42.9%、「祖父」が 7.1%、「祖母」が 28.6%、「きょうだい」が 57.1%となっている。

図表 141　家族構成（複数回答）

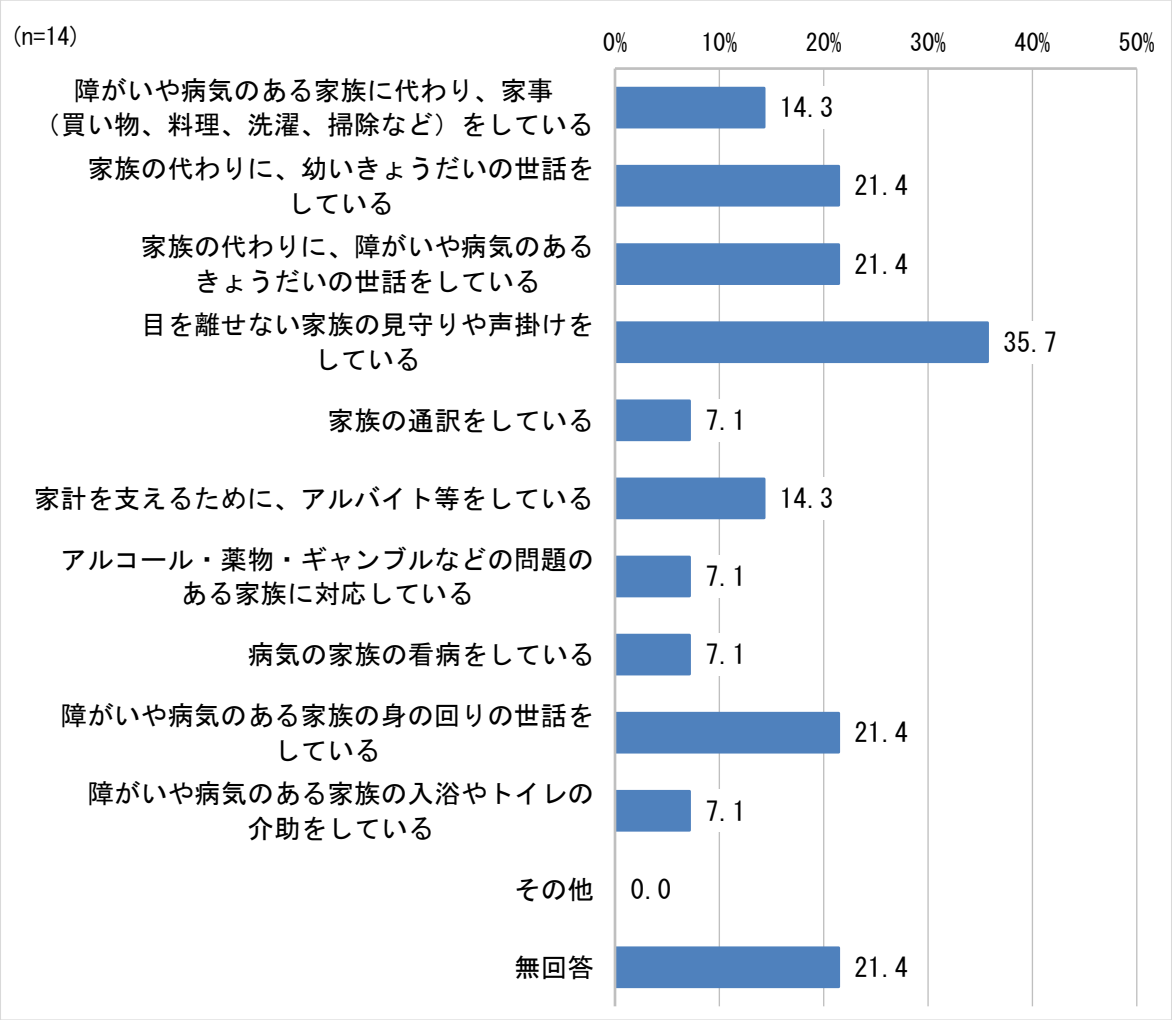


（２） ヤングケアラーの状況について

① ヤングケアラーの状況

「ヤングケアラー」と思われる子どもの状況は、「目を離せない家族の見守りや声掛けをしている」「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」「家族の代わりに、障がいや病気のあるきょうだいの世話をしている」「障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている」などが上位に挙がっている。

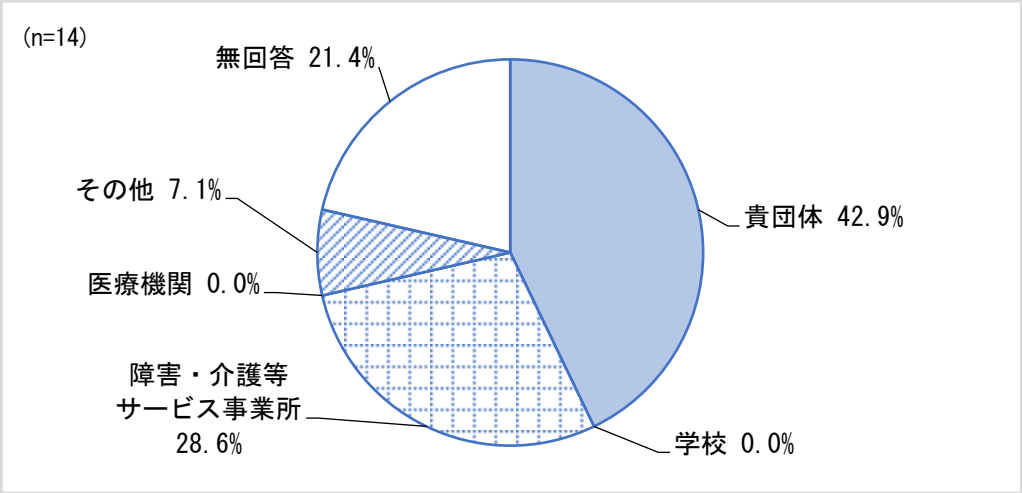
図表 142　ヤングケアラーの状況（複数回答）



② ヤングケアラーだと気づいた人・機関

ヤングケアラーだと気づいた人・機関については、「貴団体」が 42.9%、「障害・介護等サービス事業所」が 28.6%となっている。「学校」「医療機関」はともに 0.0%となっている。

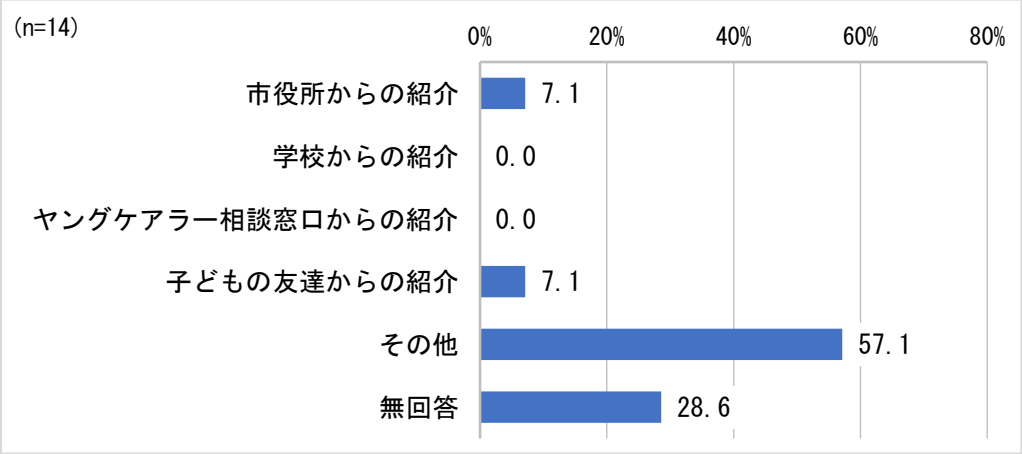
図表 143　ヤングケアラーだと気づいた人・機関



③ 子どもが団体につながった理由

子どもが団体につながった理由については、「その他」が 57.1%と最も高く、次いで「市役所からの紹介」「子どもの友達からの紹介」（ともに 7.1%）となっている。

図表 144　子どもが団体につながった理由（複数回答）

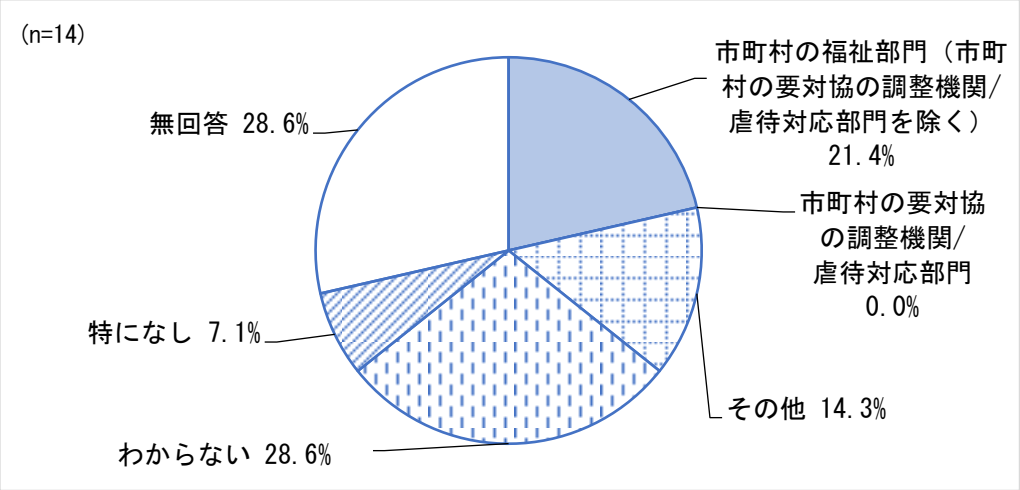


＜その他＞
・子ども食堂、フードパントリーに参加
・学習塾指導を通じて
・同法人が実施している居宅介護支援事業所のケアマネジャー業務で
・同法人が実施している放課後等デイサービスの中で
・ヤングケアラーの保護者が以前当施設で活動していた
・祖母からの訴え　など

④ モニタリング、援助方針決定、進捗管理を行っている機関

モニタリング、援助方針決定、進捗管理を行っている機関については、「市町村の福祉部門（市町村の要対協の調整機関/虐待対応部門を除く）」が 21.4%となっている。一方「わからない」も 28.6%となっている。

図表 145　モニタリング、援助方針決定、進捗管理を行っている機関



⑤ 団体で行っている支援

＜相談、見守り＞
- 声かけ、見守り、活動参加、相談
- 子どもの話を聞いて、関係者につなぐ
- 市役所に状況報告など

＜活動の参加＞
- フードパントリー案内
- 学習支援での月謝減免措置
- 食料支援

＜同法人での福祉サービス提供＞
- 居宅介護支援
- 放課後等デイサービスでの支援

⑥ 団体以外で関わっている機関、そこで行っている支援

市町村	・障害福祉課が計画相談員からの情報提供 ・地域包括支援センターが関与
その他	・障害児のきょうだいの計画相談員が、きょうだいのモニタリング時や支援を通じて状態把握し、フードパントリーの際など近況把握。それらの内容を関係機関に繋げている ・精神科医と連携

⑦ **どのような機関がどのような支援をするとよいか**

モニタリング、援助方針決定、進捗管理	・市町村が進捗管理するとよい ・専門機関が関われるといい ・関係者がつながることが必要
相談支援	・市町村の関係機関と連携をとり家庭を取り巻く環境を把握している機関 ・常に寄り添う事ができる団体 ・精神科医
見守り	・専門家だけでなく、子どもに関わっている人達が見守っている事も大切 ・NPO などの子ども支援団体が関わるのがよい ・ご近所や民生委員が関わるとよい ・地域と繋がりを増やしていくことが必要
その他	・学校との情報共有が必要

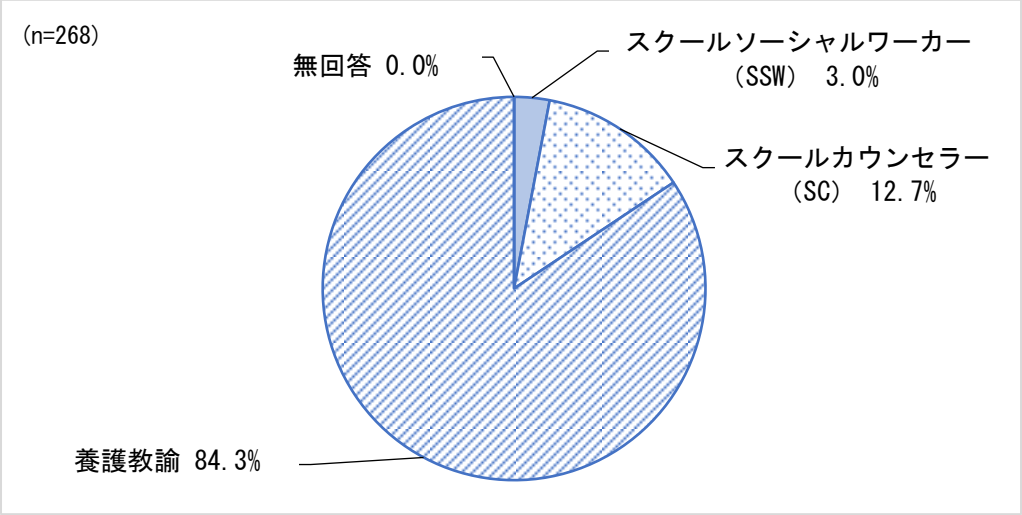
第VI章　支援者調査（スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー・養護教諭）

1．　回答者の基礎情報

（1）　回答者の属性

回答者の属性は、「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 3.0%、「スクールカウンセラー（SC）」が 12.7%、「養護教諭」が 84.3%となっている。

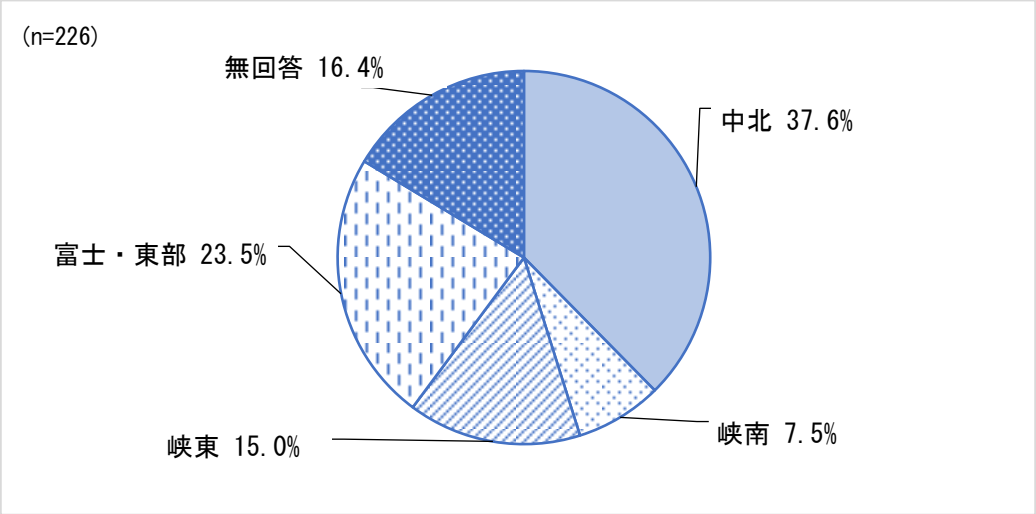
図表 146　回答者の属性



（2）〈養護教諭〉学校の所在地

養護教諭の学校の所在地は、「中北」が 37.6%、「峡南」が 7.5%、「峡東」が 15.0%、「富士・東部」が 23.5%となっている。

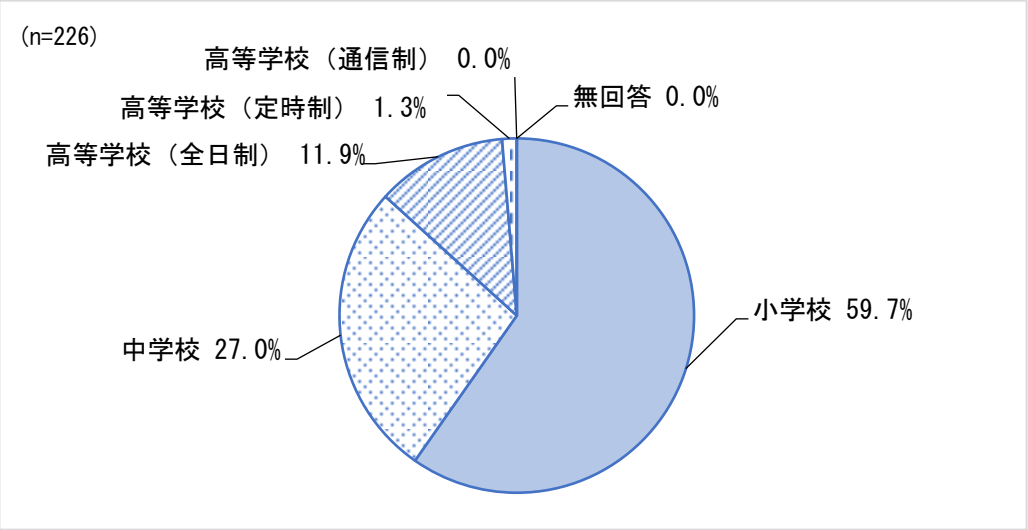
図表 147　学校の所在地



（３）〈養護教諭〉学校区分

養護教諭の学校区分は、「小学校」が 59.7%、「中学校」が 27.0%、「高等学校（全日制）」が 11.9%、「高等学校（定時制）」が 1.3%となっている。

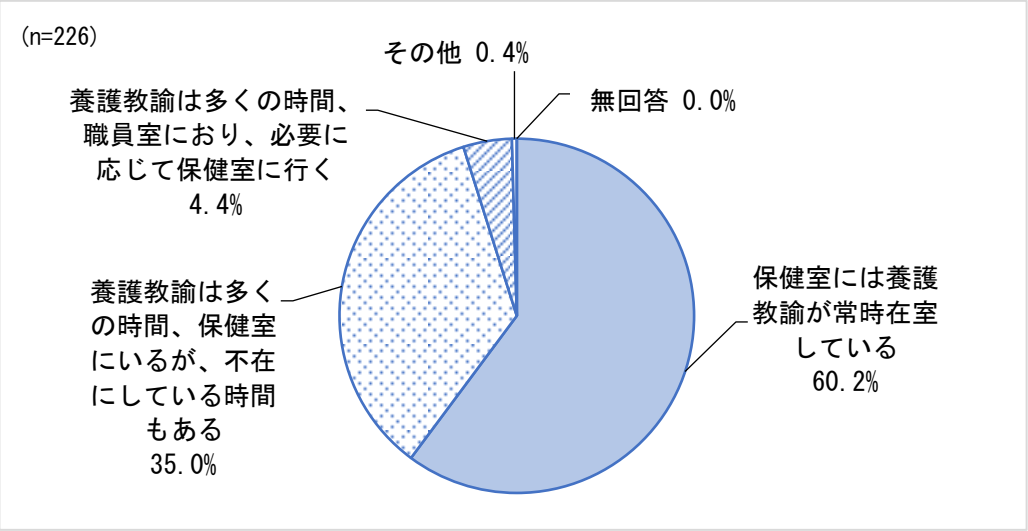
図表 148　〈養護教諭〉学校区分



（４）〈養護教諭〉保健室在籍状況

養護教諭の保健室在籍状況は、「保健室には養護教諭が常時在室している」が 60.2%と最も高く、次いで、「養護教諭は多くの時間、保健室にいるが、不在にしている時間もある」が 35.0%、「養護教諭は多くの時間、職員室におり、必要に応じて保健室に行く」が 4.4%となっている。

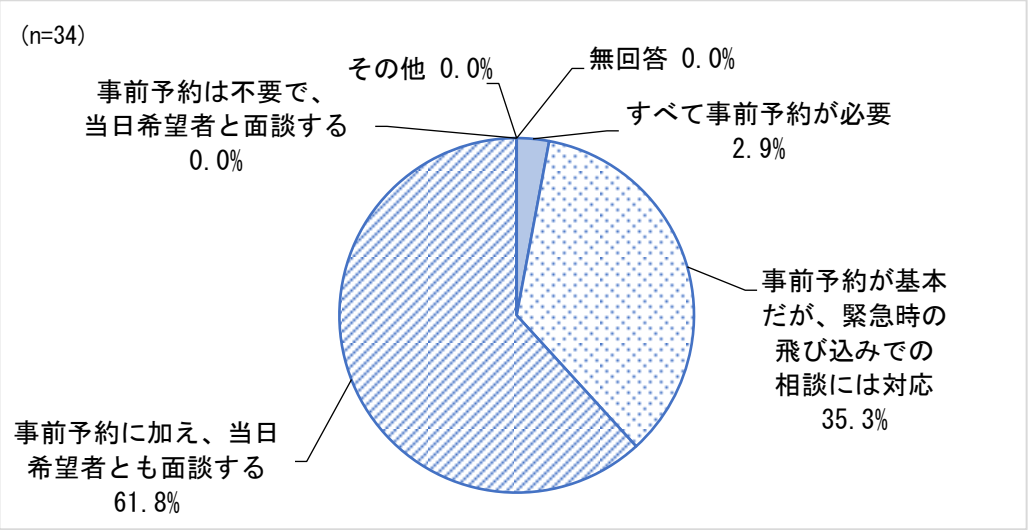
図表 149　〈養護教諭〉保健室在籍状況



（５）〈スクールカウンセラー〉子どもとの面談

スクールカウンセラーの子どもとの面談については、「事前予約に加え、当日希望者とも面談する」が61.8%と最も高く、次いで、「事前予約が基本だが、緊急時の飛び込みでの相談には対応」が 35.3%となっている。

図表 150　〈スクールカウンセラー〉子どもとの面談

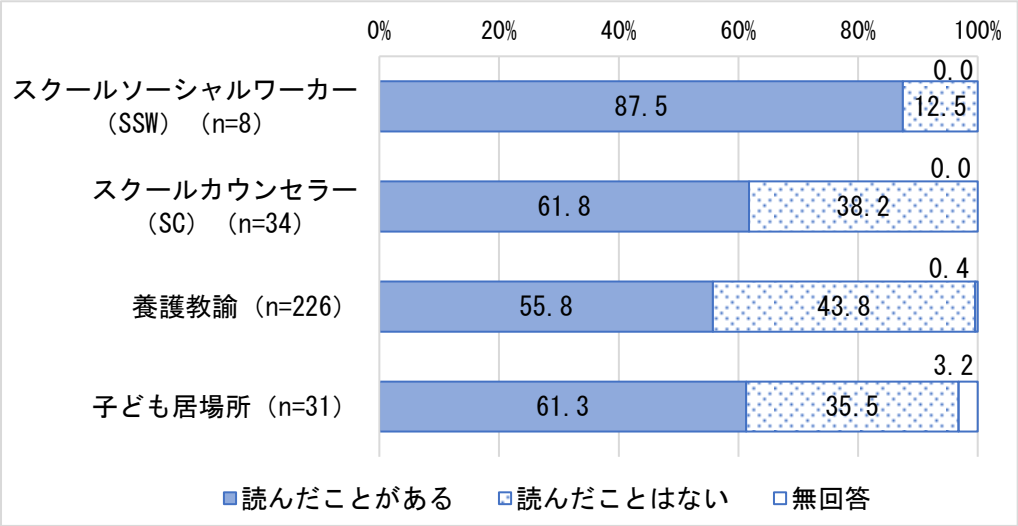


2． 県のヤングケアラーに関する事業について

（1） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがあるか

「ヤングケアラー支援ガイドライン」について「読んだことがある」と回答した人は、「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 87.5%、「スクールカウンセラー（SC）」（61.8%）、「養護教諭」（55.8%）となっている。

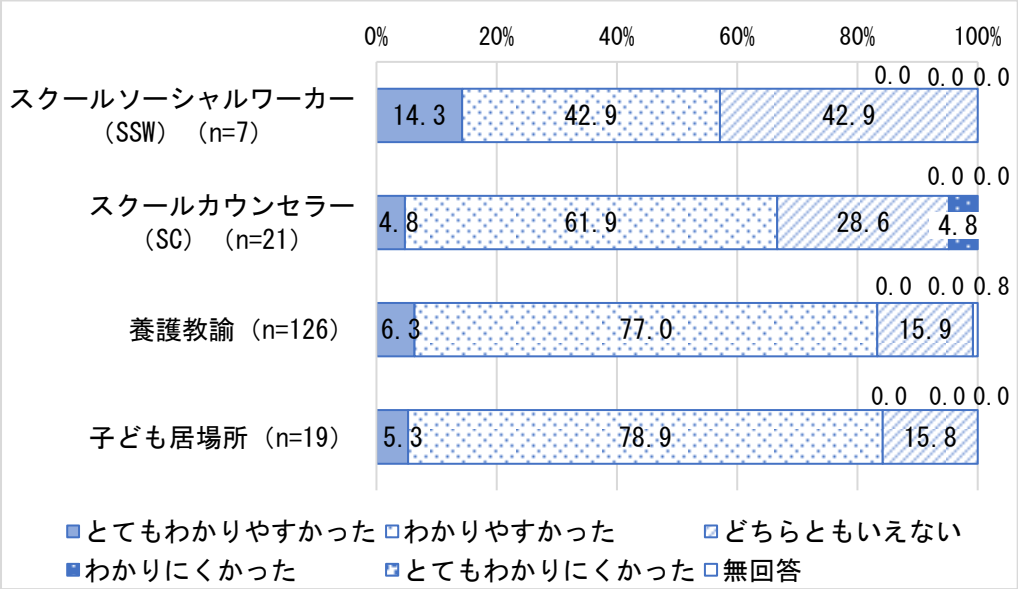
図表 151 「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことの有無（再掲）



（2） 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ

「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがあると回答した人に、わかりやすさについて聞いたところ、「比較的わかりやすかった」（「とてもわかりやすかった」と「わかりやすかった」の合計）は「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 57.2%、「スクールカウンセラー（SC）」が 66.7%、「養護教諭」が 83.3%となっている。

図表 152 「ヤングケアラー支援ガイドライン」のわかりやすさ

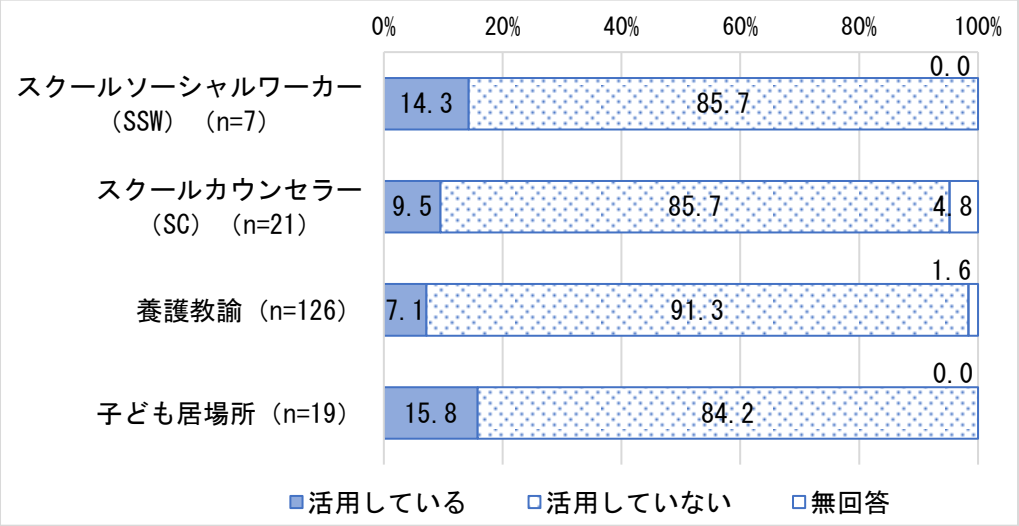


（３） 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートについて

① 活用状況

「ヤングケアラー支援ガイドライン」を「読んだことがある」と回答した人に、「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートを活用しているか聞いたところ、「活用している」と回答した人は「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 14.3%、「スクールカウンセラー（SC）」が 9.5%、「養護教諭」が 7.1%となっている。

図表 153 「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートの活用状況



② 活用場面、よかったところ、使いにくかったところ

「ヤングケアラー」早期発見のためにアセスメントシートを「活用している」と回答した人から、活用場面や使ってよかったところ、使いにくかったところについて以下のような回答があった。

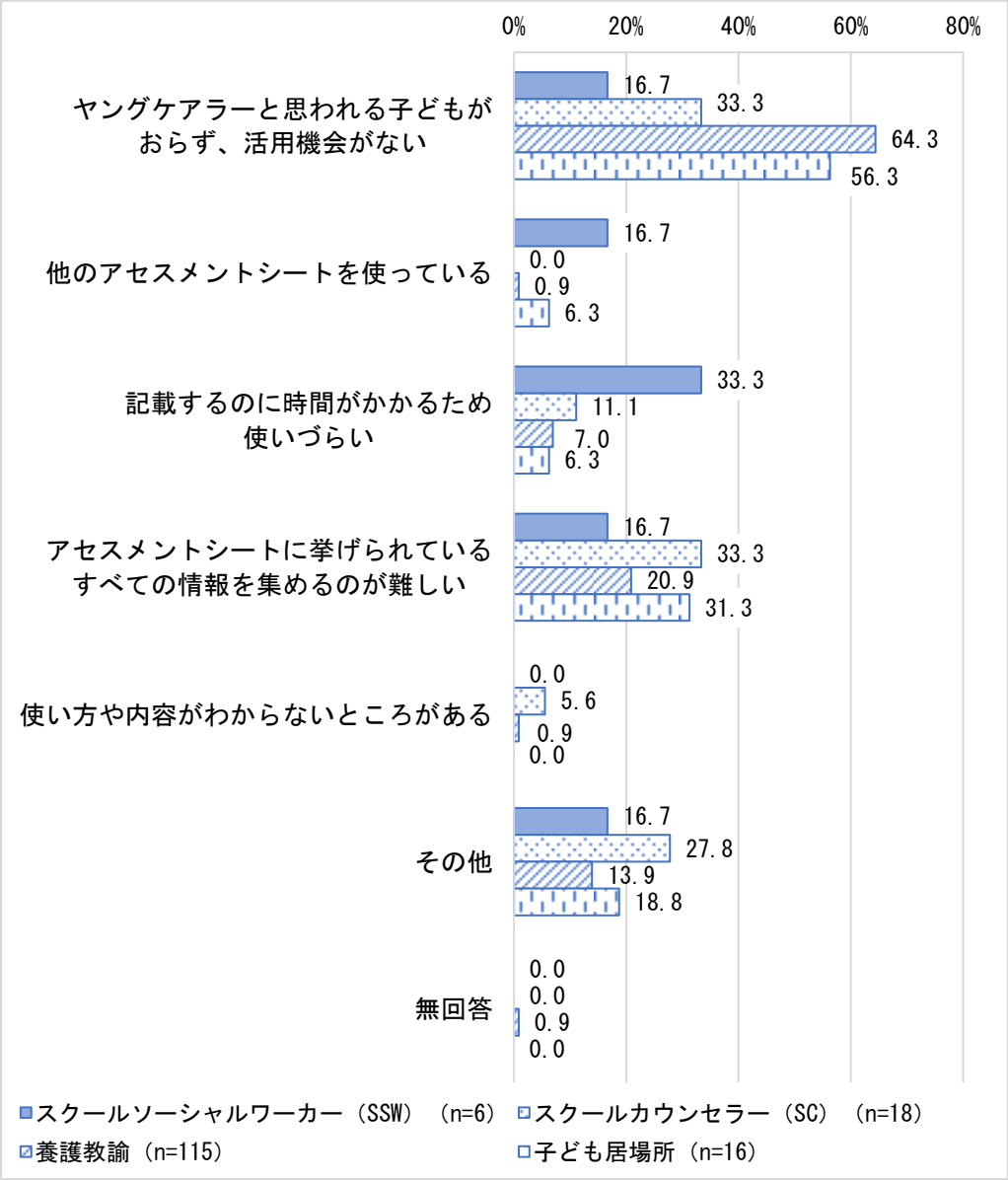
活用場面	・学校の教員からの相談場面（SSW） ・面談後のアセスメントの段階（SC） ・保健室来室時の対応（養護） ・疑われる生徒から話を聞いた時（養護） ・生徒が不調を訴えてきたり、精神的に不安定な時（養護） ・生徒へのアンケートの中でヤングケアラーを疑う生徒に、二次調査として面談しながら早期発見のためのアセスメントシートを使用した（養護） ・客観的に見た生徒の日常生活の様子や生徒の主訴から、ヤングケアラーに該当するか否かを教師側が判断する際の参考資料として活用（養護）
よかったところ	・ヤングケアラーに当てはまるのか客観的に考えることができた（SSW） ・ヤングケアラーの発見方法がわかりやすかった（SC） ・どんな視点で見ればよいかわかりやすかった（養護） ・客観的な判断資料になる。特に子どもの「何の権利が侵されているのか」がカテゴライズされているので漏れなく全体像をつかむことができる（養護） ・ヤングケアラーを考慮した対応ができる（養護） ・市こども家庭相談課と連携する上で情報を伝えることができた（養護）

	・早期発見のために職員への啓発に使用できる（養護） ・設問がカテゴリー別になっていたこと。カテゴリーの中には、余白があり項目を付け足すことができ使いやすかった（養護）
使いにくかったところ	・それ以降の対応に活かしにくかった（SSW） ・欄外にヤングケアラーに該当するかどうかのチェック欄があるが、その評価の基準が示されていないので、使用が難しかった（養護） ・家族関係について、血縁関係が複雑な場合聞き取りが難しい（養護）

③ 活用していない理由

「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートを「活用していない」と回答した人に理由を聞いたところ、「ヤングケアラーと思われる子どもがおらず、活用機会がない」「アセスメントシートにあげられているすべての情報を集めるのが難しい」「記載するのに時間がかかるため使いづらい」などが上位に挙がっている。

図表 154　アセスメントシートを活用していない理由（複数回答）

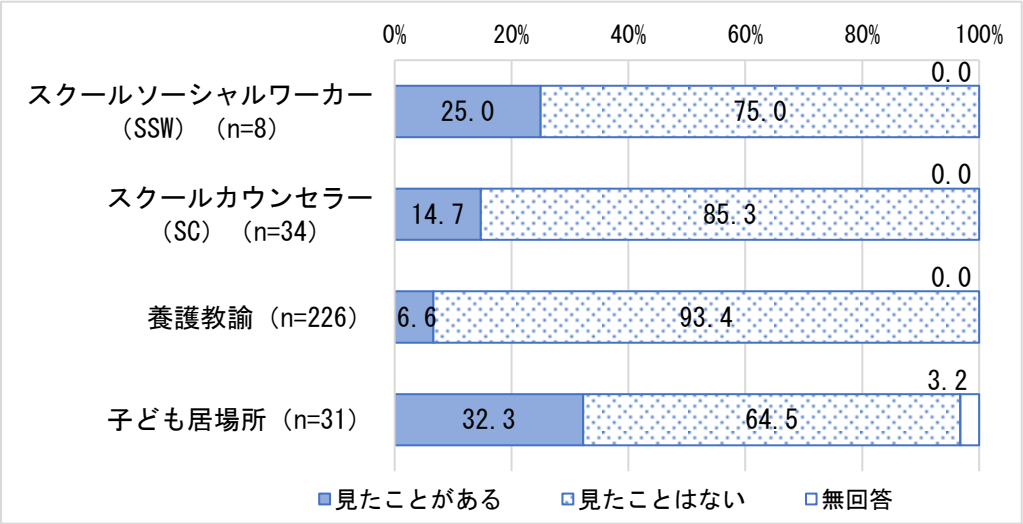


（４） ヤングケアラー啓発動画について

① 視聴の有無

山梨県公式 YouTube チャンネル「山梨チャンネル」で公開しているヤングケアラー啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」を視聴したことがあるか聞いたところ、「見たことがある」と回答した人は「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 25.0%、「スクールカウンセラー（SC）」が 14.7%、「養護教諭」が 6.6%となっている。

図表 155　ヤングケアラー啓発動画の視聴の有無



② 動画に関する意見

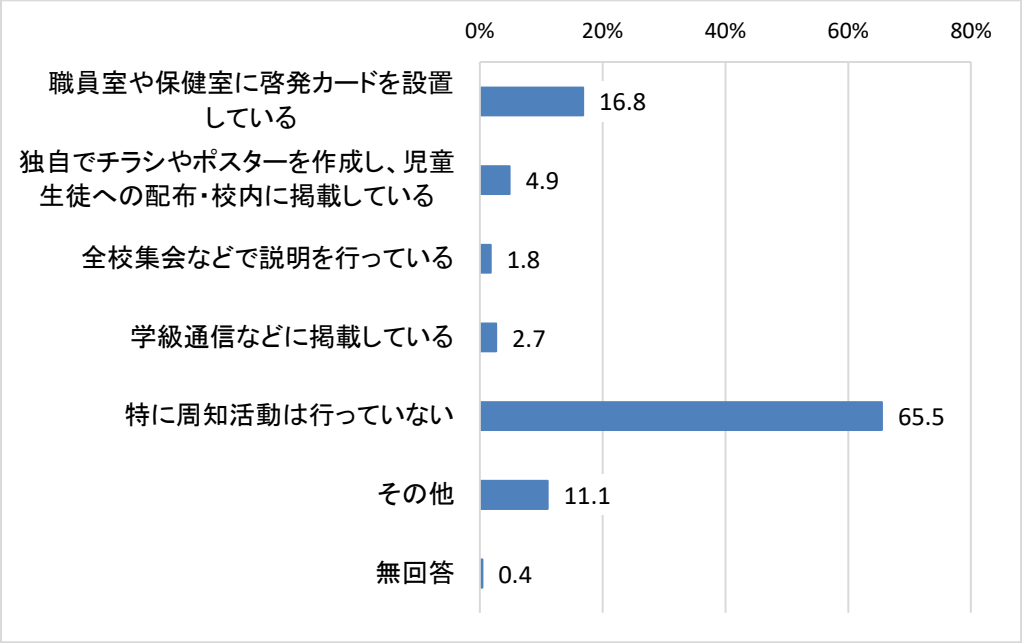
山梨県公式 YouTube チャンネル「山梨チャンネル」で公開しているヤングケアラー啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」を「見たことがある」と回答した人から、動画に関する意見について以下のような回答があった。

＜わかりやすかった＞
・まずは、年齢を問わずヤングケアラーについて「知る」「関心を持つ」ことが必要であり、その点で動画は理解しやすかった（SC）
・芸人の方が出演されていたこと、動画が短時間だったことからとても簡潔で見やすかった（養護）
・タレントさんが演じていたので、若い人たちは興味をもちやすいと思った（養護）
＜他の事例も紹介してほしい＞
・ヤングケアラーについて理解してもらうためにはいいと思うが、いろいろなケースがあるので、たくさんのモデル事例を知ることができることも同時に進めて欲しい（SC）
＜当事者や応援団体の声があるといい＞
・動画の中に県のヤングケアラー当事者（元当事者）や応援団体の声が入っているとよりヤングケアラーのことが伝わるのかなと思った（SSW）
＜より周知してほしい＞
・分かりやすく作成されている。より多くの人が、視聴するよう周知するとよい（養護）

（５）〈養護教諭〉啓発カード以外の山梨県ヤングケアラー相談窓口の周知

山梨県で令和４年１月に「ヤングケアラー啓発カード」を制作し、各学校の教職員、児童生徒（小学校高学年以上高校３年生まで）に配布しているが、この啓発カード以外に山梨県ヤングケアラー相談窓口を子どもにどのように周知しているか聞いたところ、「特に周知活動は行っていない」が 65.5%と最も高く、次いで「職員室や保健室に啓発カードを設置している」（16.8%）などとなっている。

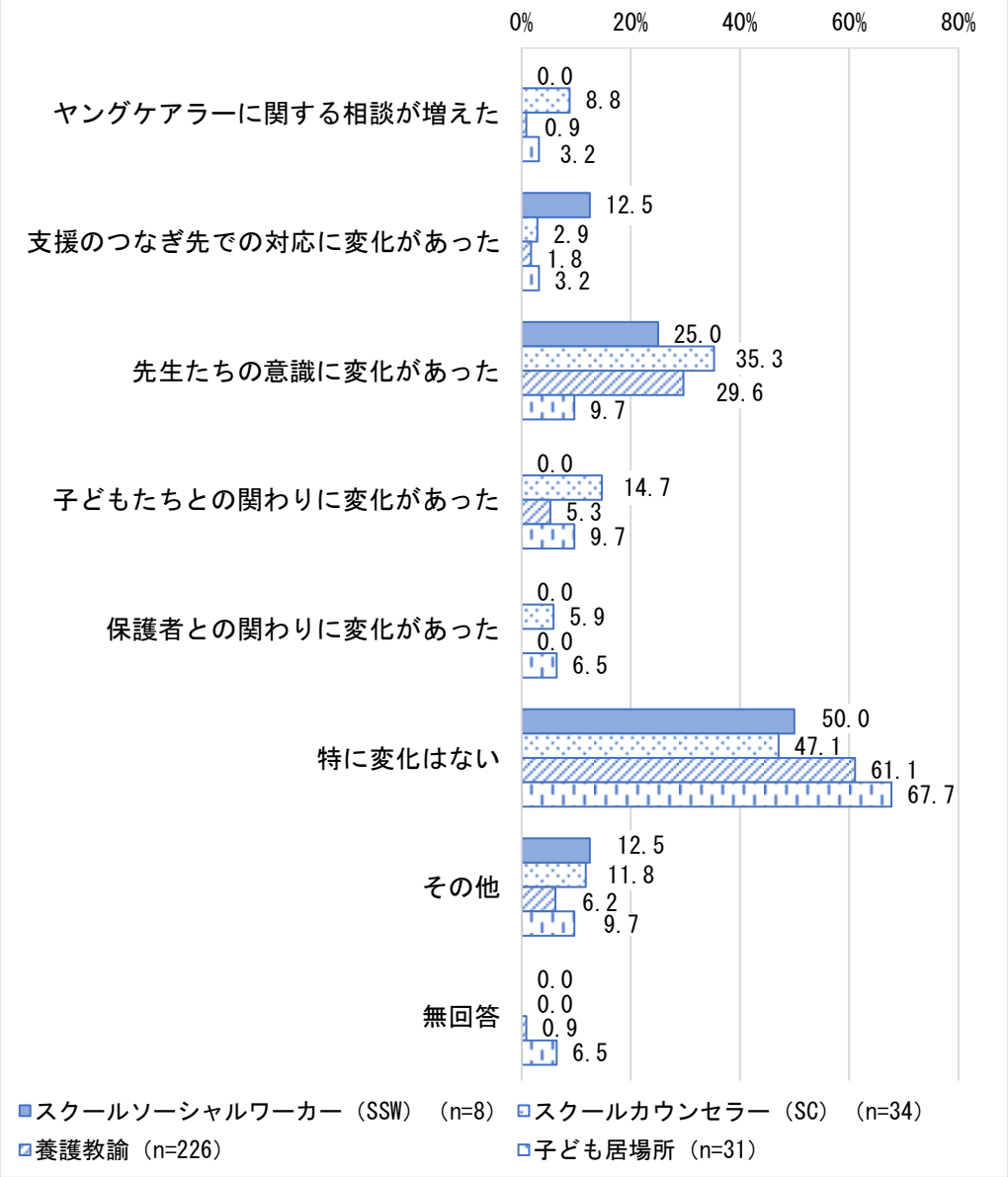
図表 156　〈養護教諭〉啓発カード以外の山梨県ヤングケアラー相談窓口の周知（複数回答）



（６） 昨年度と比べての、ヤングケアラーの発見、支援における変化

昨年度と比べての、関係機関との連携や、ヤングケアラーの発見、支援においての変化について聞いたところ、「特に変化はない」が最も高くなっている。次いで、「先生たちの意識に変化があった」、「子どもたちとの関わりに変化があった」などとなっている。

図表 157　昨年度と比べてのヤングケアラーの発見、支援における変化（複数回答）



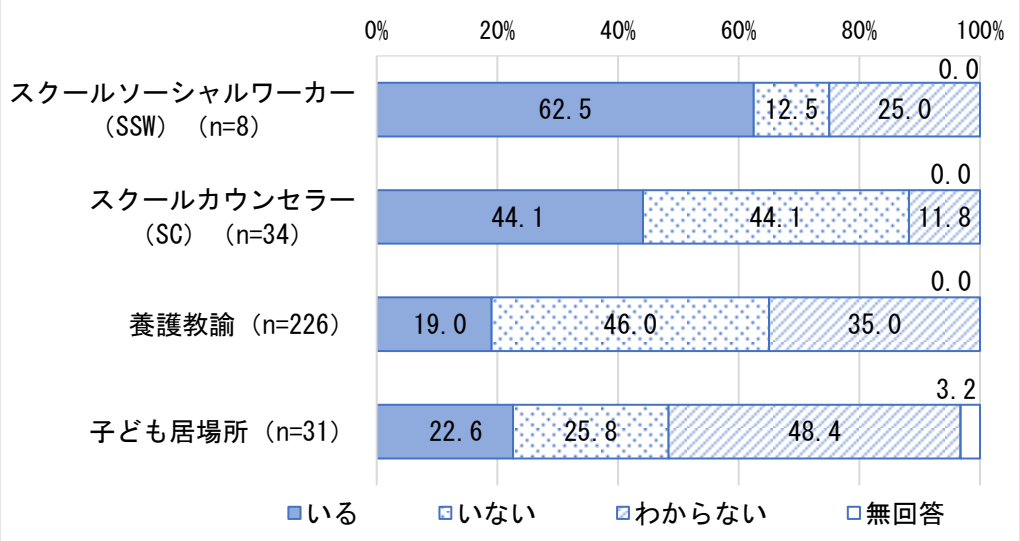
※「子どもの居場所」では「支援のつなぎ先での対応に変化」は「関係機関との連携における変化」、「先生たちの意識に変化」は「スタッフたちの意識に変化」

3． ヤングケアラーの把握、支援について

（1） 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度）

「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無について聞いたところ、「いる」と回答した人は「スクールソーシャルワーカー（SSW）」が 62.5%、「スクールカウンセラー（SC）」が 44.1%、「養護教諭」が 19.0%となっている。

図表 158 「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無（今年度）



（2） 〈スクールカウンセラー（SC）・養護教諭〉 学校で「ヤングケアラー」と思われる子どもを発見または相談を受けた際の対応として課題に感じていること

スクールカウンセラー（SC）・養護教諭に、学校で「ヤングケアラー」と思われる子どもを発見または相談を受けた際の対応として課題に感じていることについて聞いたところ、以下のような回答があった。

スクールカウンセラー（SC）
＜家庭へのアプローチが難しい＞ ・保護者とのつながりがない場合、家庭環境へのアプローチが難しい ・家庭との連絡が難しい ・制度的支援や経済的支援には保護者との面談が不可欠であるが、保護者は多忙なため面談につなげていくのが大変困難である ・明らかに支援が必要な家庭である場合でも、親に精神疾患などがあり他者への警戒心や攻撃性が強い場合に、家庭への介入をどのようにしたらいいのか ・親の相談において、少しでも問題視されていると親が感じたときに、相談が切れてしまう ・保護者への確認と支援の同意を得ることに、困難が生じるケースがある ＜家族がヤングケアラーと認識していない＞ ・家族に、ヤングケアラーという認識が少ない

＜子どもや家族からの SOS がない＞ ・本人や家族からの訴えがなければ精神疾患の要支援者にはアプローチ出来ない ・本人が自覚するための年齢や精神的な成長に達していなかったり、母親にもそれなりに重篤な課題がある場合には時間がかかる ・本人がヤングケアラーだと認識していない場合どのようにフォローしていくかが難しい ＜SSW との連携が難しい＞ ・SSW とつながれば良いが、現実には担当者が少なく残念である ＜学校の担任との連携が難しい＞ ・担任が子どもを囲ってしまい、なかなか連携を取らせてもらえなかったため、悪化のサインを見逃した経緯があった。担任によっては連携の難しさを感じる ・子どもが話をしてみようと思ってもらえるように心がけているが、担任経由になるので、担任が消極的だと、本人に関わることは難しくなってしまう ＜支援方法が難しい＞ ・具体的な支援策を誰が策定するのかわかりづらい ・本人の大変さを受け止めつつ、解決のための現実的リソース探しが難しい ・子どもの背景にある家庭の状況が複合的と思われること、また、そのような状況を子どもは話したがらないこと、子どもの自尊心に留意しつつ、侵襲的でない形で対応していくことなど。基本は見守りつつも、必要な時は介入することだが、それには連携機関との密な情報交換が必須 ＜子どもの気持ちを考えながら支援に入ること＞ ・ヤングケアラーであることを明かした子どもに対して、学校や支援機関の情報共有、さまざまな働きかけ・家庭へのアプローチにより、家庭の改善はみられたが、本人は、打ち明けたことで大事な家族を傷付けたという罪悪感をもち、心を閉ざしてしまったかに見えたケースがあった。複数の支援者がアプローチを急ぎ過ぎて、肝心な本人の心を傷付けてしまうことへの想像を欠いてはならないと思う
養護教諭
＜家族がヤングケアラーと認識していない＞ ・保護者に子どもにケアをさせている自覚がない場合の対応が難しい ＜保護者の同意がなく支援につなげられない＞ ・生徒を発見した場合、保護者に認識がないため、福祉へつないで支援をしていくことが難しい ＜子どもや家族からの SOS がない＞ ・子ども自身もヤングケアラーの認識なく生活をしているため、なかなか相談に繋がらず発見しにくい ・本人がヤングケアラーとの認識がない ＜子どもから家庭の話を聞くのが難しい＞ ・家庭のプライベートな部分をどのように聞くかが難しい ・家庭の詳細な情報を把握しづらい ＜家庭にどこまで踏み込んだらいいのか難しい＞ ・家庭生活や個人情報にかかわる微妙な問題を含んでいることが多いので、どのような支援策・方法があるのか、また、学校と関係機関がどのようにかかわっていったらよいのか判断に迷う ・家庭に踏み込みづらい

・家庭内のことであり、どこまでが本当の事かどこまで踏み込んでいいのか悩んでしまう ＜関係機関との連携が難しい＞ ・関係機関への連携がスムーズに行えるか ・関係機関と連携してもすぐに対応してくれるのか ・連携する関係機関が分からない ・直接的指導は難しいので、関係機関との連携を図っていきたいが、関係機関への働きかけ等について実情がわからないところがある ・相談を受けた時に、どこの機関に繋げてあげれば良いのがわからない ・地域関係機関と連携するにあたり、スムーズな対応、対応の分担が効果的にできるのか不安がある ＜SC や SSW との連携が難しい＞ ・学校では福祉や行政的な支援ができるわけではないので、SC や SSW との連携が必要だが、学校に常駐していないので連携の難しさが感じられる ＜市町村との連携が難しい＞ ・家庭の事なので学校だけの介入は難しい。家庭に関わることは市の担当だと考える ・家庭の問題に学校が関わることには限界があるが、学校と市町村がスムーズに連携していくことが難しいと感じている ・高校は市町村とのつながりがないため、発見してもどこに連絡すればよいかわからない ＜学校から外部機関につなぐことが難しい＞ ・外部連携に向けた校内の組織的対応の構築が必要 ・支援者側（学校側）の発見・相談後の明確な動きが全職員に周知されていない ＜教職員がヤングケアラーを知らないこと＞ ・教職員が「美徳」と感じる人がまだいることや「昔はみんなそうだった」と口に出す人がいる。職員の意識を変え、介入できる糸口を探すことが必要 ・教員も生徒の状況を知ってもヤングケアラーと認識しない ＜対応方法がわからない＞ ・相談を受けた後、どのように対応していくかがまだ分からない ・どのように支援していけばよいのか、どのような機関に繋げばよいのかについて知識が不足している

（３）〈スクールソーシャルワーカー（SSW）〉 ヤングケアラーの支援について、学校と外部の関係機関との連携にあたっての課題や連携を進めるために必要なこと

スクールソーシャルワーカー（SSW）に、ヤングケアラーの支援について、学校と外部の関係機関との連携にあたっての課題や連携を進めるために必要なことについて聞いたところ、以下のような回答があった。

スクールソーシャルワーカー（SSW）
＜時間がない＞ ・時間が足りず、十分に支援できない ＜社会資源が足りない＞ ・地域間の差はあるが、根本的に支援環境、体制に課題があり、社会資源不足、人材不足だと感じる

・連携先、相談先には児相が入っているが、児相は虐待対応などがあり、現時点で支援が不可能だと感じる。地域にもっと人材を育てる仕組み、お金の投入が必要

＜学校がすぐに SSW につなぐこと＞

・子どもの気持ちの聞き取りや状況が確認できたらすぐに要請を出してほしい。家族との関係性を築くのは慎重にする必要があり、大事になってからではかえって支援できなくなってしまう

＜学校と外部機関との連携がスムーズになること＞

・学校と外部の関係機関との連携をもう少し細やかにとり、寄り添いあい、風通しがよくなることが必要

＜支援の分担を確認すること＞

・具体的な支援の担当の分担。お互いに確認する必要がある

＜関係機関で考える場が必要＞

・児相は状況を関係者にフィードバックして、チームとしてどうしていくのか考える場を用意してほしい

（４） 役割分担についての課題

スクールソーシャルワーカー（SSW）・スクールカウンセラー（SC）・養護教諭に、それぞれの役割分担についての課題について聞いたところ、以下のような回答があった。

スクールカウンセラー（SC）
＜発見＞ ・カウンセリングの機会が少ないため、ヤングケアラーを発見すること自体が難しい場合がある ・学校と SSW の連携不足、職員間のヤングケアラーの捉え方の違いや学校の危機感の薄さにより発見自体の難しさや情報が SC にまで上がってこない ・ヤングケアラーの発見という役割は承知しているが、SC と養護教諭のみでは困難であること、SSW と連携できているのか疑問ということが課題としてあげられる ・養護教諭や SC が、相談過程のなかで”発見”することももちろんあるが、全ての子どもたちの様子や家庭状況を把握することは不可能で、学校にいるすべての職員の心がけとそれをすくいとる校内体制・管理職の意識が重要だと思う ・スクールカウンセラーの勤務日が少なく学校中の子どもについて把握することが難しい ・SC としてヤングケアラーの発見は、相談等、ヤングケアラーの方から何らかの関りを求めてくることがないと、一般的には困難である。児童生徒への全員面接も困難なことが多いと思われる。個別面接ができないとしたら、個別面接で聞きたい項目で構成されたアンケート調査をやることも 1 つの方法と思っている ・相談に関わる生徒より、来ない生徒の中に課題を抱える子どもが多いと感じる。発見は普段の関わりが最も多い担任の先生に負うところが多いと思う ・全員と面接をしたいと考えているが、学校の予定等により時間がとれず、予防的カウンセリングができない状況にある ＜学校との情報共有＞ ・小学校の場合、校内では SC と養護教諭また管理職とのつながりは時間的に可能だが、担任はなかなか時間がとれない。しかし、子どもの様子に毎日接している担任が最も情報が得やすいので、担任の時間的余裕が得られるような配慮が校内に周知できるようになればよいと思う

・連携は今のところ、大変スムーズに出来ており、助かっている

＜SSW との連携＞

・SSW をうまく活用するためには、日頃の学校との関係構築が必要である

・山梨県は SC、SSW、共に時間数が少なく、連携をとる機会や時間が物理的に少なすぎる

・非常勤のため、SC と SSW が会う機会が少なく、情報共有が難しい。同様に関係機関との連携会議に参加しづらい

・SSW は養護教諭や SC との情報交換だけではなく、担任も含めた場があった方が良いと思う。毎日接する担任は日常的な場での情報を結構持っている

＜関係機関との連携＞

・発見後は要対協と同じく、市役所、役場等の担当者が会議を招集して頂きたい

養護教諭

＜発見＞

・校内におけるヤングケアラーの発見は、養護教諭や SC だけに任されるものではなく、担任を含めた学校全体で対応していくのがよい

・必ずしもヤングケアラーの子が保健室や相談室に来室するとは限らないので、発見をその二者に限定しないでほしい

・養護教諭としては、頻回に来室する子どもについては、会話の中から状況を少しずつ確認していくことはできる。来室のない子どもについては、学級担任との連携が大切だと思う

・ヤングケアラーの発見は、全職員が見守り、情報共有する中でできる事だと思うので、役割分担することではないと思う

・コロナ禍での養護教諭の役割は増大しており、複数の養護教諭の配置を望む

・一人しか養護教諭がいない場合、連携をコーディネートすることも大変。複数配置にしてほしい

＜SSW、SC との連携＞

・SSW への連携がスムーズでない

・SC や SSW は常時いないことや、SC、SSW と話す機会は本校の場合、相手側からの意向がないと話す機会はないので、連携は特別支援の担当を通すことになる。養護教諭との連携はもっと複雑なケースでは必要と思う

・SSW の人数が限られており、つなげるのに時間がかかる

・以前 SSW がどんな役割を担うのか研修を受けたが、実際にまだ SSW が関わる事例に出会ったことがなく実際に連携ができるのか心配である

・本校では、SSW を介すことなくコーディネーター（養護教諭）が管理職に報告し外部機関へ繋げている。そのほうが、時間短縮、素早く市や児童相談所と連携できる。このように養護教諭は発見の他にコーディネーターの役割や子どもの対応も行っている

・SSW の存在を管理職は知らない

＜校内での情報共有＞

・当該生徒を発見し、メンタル面のサポートをしていくことが非常に重要であると考える。全校体制でサポートしてくことが求められるが、声掛けの際の留意点などを共通認識で持つなどの校内の理解を深めることが課題となっていくと考える

・連携をするうえで、リーダーシップ（調整役）の存在がなく、個々のケースにじっくり関りを持ち支援していくことが困難。学校で発見あるいは疑いを持つケースに、なかなか入り込んでいけない ＜関係機関との連携＞ ・ヤングケアラーに限らず家庭環境に対する子どもの支援対応において、情報共有はされてもその後の具体的な対応について効果的に行われていない、と感じることが多々ある。地域の担当機関が率先して関わってほしいと感じている ・学校からの情報提供も大切かと思うが、ぜひ市からの情報提供も積極的に行ってほしい。高校では、居住地が様々なのでより難しい
スクールソーシャルワーカー（SSW）
＜発見＞ ・発見はチーム学校(校内の体制づくりとスクリーニングシステム)のあり方が問われる。文科省でも出しているYOSS（AI スクリーニングシート）などの活用を考えた方が良いと思う ＜学校との情報共有＞ ・今年度、SC との連携がいくつかあり、問題の所在や今後の方針について検討しやすいと感じている ・実際にヤングケアラーについて養護教諭、SC と話ができる時間と機会が今のところない ・要請が来ない理由が知りたい ＜関係機関との情報共有＞ ・子どもを取り巻く環境に働きかける SSW なのに、スクール内のことだけとか、ケア対象が未就学児童の場合に縦割り行政の壁で状況の確認がしづらいのを解消してほしい ・ヤングケアラーは家庭で起きていることなので、当然保育園や特別支援学校、地域包括支援センターなど学校以外の家族の所属機関との連携が必要であるが、誰がそれらの関係のキーパーソンとして支援するのかが明確ではなく、その垣根を越えられる存在が必要になる

（５）〈養護教諭〉 今後のヤングケアラーの支援

養護教諭に、今後のヤングケアラーの支援にあたって、①自身の役割としてすべきこと、したいこと、②学校全体として取り組むべきこと、③行政に期待することについて聞いたところ、以下のような回答があった。

① 役割としてすべきこと、したいこと
＜子どもの SOS を見逃さない＞ ・普段から児童の声に耳を傾け、早期発見に努める。心のケアにあたる ・日常の生徒支援の中で、ヤングケアラーかどうかアンテナを高くしていく ・日々の学校生活の中で、欠席、遅刻、早退状況の把握をする中で気づきを早期にする ・長期欠席児童や気になる保健室来室児には、家庭での過ごし方を聞くようにしている ＜相談しやすい環境づくり＞ ・生徒や保護者が相談しやすい関係づくり ・児童生徒が相談しやすい場所となること ・ヤングケアラーの発見、相談者の一人となる、居場所作り ＜子どものメンタルケア＞ ・生徒のメンタル面のケア。必要な専門機関の紹介

＜担任などとの情報共有＞ ・生徒の様子から家庭内の状況を担任と確認すること ・気になる生徒の情報を担任や学年主任と共有する ＜ヤングケアラーについて周知すること＞ ・ヤングケアラー支援に関する理解を深め、校内に周知する ・ヤングケアラーについてお便り等で周知させる ・ヤングケアラーについての知識を深め、マニュアルを確認し、職員全体に共有すること
② 学校全体として取り組むべきこと
＜子どもを見守る体制＞ ・本人への声掛け等、見守る姿勢 ・学校全体で子どもたちをみる。気づきを大切にする ＜校内での連携＞ ・全職員で情報共有すること ・児童の状況を学校全体で把握しておき、問題が起きた時、適切に対応できるように体制づくりをしておく ・職員で生徒について、情報共有する。職員全員が共通理解の下、同一歩調で指導にあたる ・一人で抱え込まずチームとして関係職員みんなで対応する ＜SC や SSW との連携＞ ・SC や SSW と連携をとること ＜関係機関との連携＞ ・関係機関へのスムーズな連携 ・生徒の状況把握を定期的に行う中で、市教委や支援室等への情報共有を早期に行う ＜ヤングケアラーの周知＞ ・ヤングケアラーの存在の周知 ・校内でヤングケアラーについての認識を高め、きちんと情報共有をしながら、早期発見できるようにしていきたい ・教職員全員がヤングケアラーに関する研修を受ける ・管理職や担任含め、すべての教職員がヤングケアラーの問題を意識し、学校全体で考えていく雰囲気（体制）をつくること
③ 行政に期待すること
＜家庭への介入＞ ・学校では家庭に介入することは難しい。行政として関わってもらえる体制をつくって欲しい ＜行政による支援のコーディネート＞ ・支援にかかわる予算的な裏付けとヤングケアラーの対応を学校に任せるのではなくリーダーシップをとっていただきたい ・学校、家庭、医療等との調整をお願いしたい ・保健師や民生委員等、家庭に関わりの近い立場にある方々と情報を共有しながら連携し、継続して直接的な介入をお願いしたい ＜支援に関する相談、アドバイス＞

・ヤングケアラーについての相談担当等が決まっていたら、学校に教えてほしい。相談場所がわかると、支援につなげやすい
・相談後に対象家族へのケアだけでなく、学校へも連携の取り方など教えていただきたい
・対応の仕方を学校に教えていただいたり、連携を図っていただけるとありがたい
＜情報交換、連携＞
・学校との情報交換など、定期的な連携
・ケース会議など、連携のとりやすい環境整備
＜子どもが相談できる体制、居場所づくり＞
・生徒の居場所の提供
・本人が直接相談できる体制の整備
＜家庭の支援＞
・家庭内の支援
・家庭内の状況把握、家庭支援に向けた対応を行ってほしい
＜SC の増員＞
・SC の時間数を増やしていただきたい。早期発見が大事なので、面談だけでなく、参観など SC が学校全体を見ていける時間を増やしてほしい
・SC の配置数増加
・高校でも SC を配置
＜SSW の増員＞
・SSW の増員
・SSW の人数確保
・SSW との円滑な連携
・SSW につなぎやすくなる体制
＜学校の増員＞
・学校現場の人員の充実
・養護教諭の複数配置
・養護教諭の複数配置か、看護師の配置。
＜ヤングケアラーに関する研修＞
・教職員がヤングケアラーについての知識を高められるよう、研修の機会を作っていただけるとありがたい
・管理職への周知活動
＜食の支援＞
・一番は食事をきちんと食べることが大事だと思うので、食事のサポートがあると安心できる
＜家事代行などの支援＞
・家事代行などの制度の導入

（６）〈スクールソーシャルワーカー（SSW）・スクールカウンセラー（SC）〉 今後のヤングケアラーの支援

スクールソーシャルワーカー（SSW）・スクールカウンセラー（SC）に、今後のヤングケアラーの支援にあたって、①自身の役割としてすべきこと、したいこと、②学校に期待すること、③行政に期待することについて聞いたところ、以下のような回答があった。

スクールソーシャルワーカー（SSW）
① 役割としてやるべきこと、したいこと
＜適切なアセスメント＞ ・学校訪問をおこなう中で教師からの聞き取り、子どもの見取りをおこなう。早い段階で子どもからの聞き取りを行い必要な支援を取り入れていく ＜丁寧な支援＞ ・ヤングケアラーと呼ばれる子どもとケアを頼まざるを得ない親たちはとてもデリケートな関係にあることを留意して対応する。それぞれの家族関係やパワーバランスは違うので、丁寧に見極めて介入をしないと、子どもの人生も親の人生も破綻させることにつながるように、これまでの経験から思う ＜学校との関係づくり＞ ・SSW は校内の体制づくりが大切だと考える。学校の中にスクリーニングシステムを入れ、すべての子どもたちにとっての安心安全の学校生活、教育の保障、支えあえる地域づくりに注力したい ・学校や関係機関と連携し、必要なニーズをその都度検討し、当事者が求める支援を考え環境を整えていくこと ・保護者の思いや子どもの声を聴き寄り添いながら、よりよい環境を整えていくために、学校や関係機関とチームとして支援していきたい ＜情報収集、情報発信＞ ・速やかに支援の方向性について決めることができるよう、日頃から法律や制度に関して情報収集すること。また課題や必要と思われるが既存にない支援など、言語化し発信すること
② 学校に期待すること
＜早期発見、早期の相談＞ ・多角的な視点からの見取りを行い、早期発見につとめること ・出欠状況や中学校からの申し送り等から、早目に発見してほしい ＜SSW など外部との積極的な連携＞ ・チーム学校に向けて、教員以外の専門職との協働に向けて共に活動していただきたい ・ヤングケアラーらしき子どもがいたら保護者の了解が無くとも SSW 要請を出すなど、外部機関との連携をはかってほしい ・子どもの困り感に対して要請を出してほしい（学校が困るほどの状況になる前に対応したい） ・ヤングケアラーでなくても、心配と思われる生徒について、まずは速やかに相談することができる積極的な姿勢が必要
③ 行政に期待すること
＜不足している支援の把握、解決＞ ・既存の支援ではまかなえない課題について問題視する姿勢と、課題解決に向けての積極的な取り組み

がほしい

＜縦割りの解消＞

・当事者が勇気を出して電話や会いに来てくれた際は、縦割りではなく話を聴いていただきたい

＜柔軟な対応＞

・保護者の同意がないと動きようがない状況では支援ができない。もっと柔軟な判断をしてほしい

＜ヤングケアラーの情報発信＞

・ケアラーの具体的対応事例をまとめるなど、ケアラーに対する情報発信を今以上に努めてほしい

＜学校と行政と SSW の情報共有の場＞

・学校と行政と SSW との情報共有の場を設定してほしい

スクールカウンセラー（SC）

① 役割としてやるべきこと、したいこと

＜相談しやすい環境づくり＞

・ヤングケアラーの問題のみでなく、全ての子どもに対する支援のきっかけを作っていくこと

・いつでも相談できる存在であり続けること

・相談の機会を増やして充実した支援をする

・全員面接をしたい。問題の早期発見と早期対応の窓口になりたい

＜ヤングケアラーの可能性がある子どもを見逃さない＞

・カウンセリングに訪れた子が、ヤングケアラーの可能性があるかどうかを吟味し、判断すること

・少しでも、サインを見逃さず、また、相談が継続できるよう努める

＜学校との共有＞

・カウンセリングから得た情報を学校と共有すること

＜子どもの心のケア＞

・対象生徒の心のケアを継続すること

・子どもに寄り添い、子どもの元気が与えられるような活動をしたい

・ケアをしていることそのものより、その生徒の気持ちや、ケアがその生徒にとってどのような体験になっているかに焦点をあて、サポートしていきたい

② 学校に期待すること

＜子どもの見守り＞

・子どもの様子を確認し、見守りや声かけをしてくれること

＜情報共有＞

・先生方がキャッチする、子どもや保護者（家庭）に関する情報を、伝え、共有する姿勢をいつも持って欲しい

＜外部との積極的な連携＞

・SC から、保護者や関係者にアプローチすることが難しい場合が多い。学校全体でヤングケアラーの子どもへの支援を行い、積極的な外部への支援要請を期待したい

・外部との連携の判断を速やかにすること

・生徒指導、保健室など関係部門と行政外部が連携とれること

＜予防的カウンセリングの実施＞

・予防的カウンセリング、開発的カウンセリングへの理解を期待している。現状では、いわゆる個別対応の治療的カウンセリングしか実現していない
③　行政に期待すること
＜SC の常駐化、増員＞ ・SC の常駐や勤務時間の増加を検討してほしい。ヤングケアラーは生活の様子を見ていないと、実態を拾い上げることが難しい。少しでも子どもの様子を見る時間を増やしてほしい ・たくさんの困っている児童生徒と向き合うため、勤務時間数を増やしてほしい ＜家庭へのアプローチ＞ ・家族への上手なアプローチ ＜行政と学校の連携、役割分担＞ ・学校との定期的な連携 ・家庭訪問等をして本人や家庭が拒んだ際、結局学校に戻されるため、行政の対応と役割を明確にしてほしい ・福祉領域と教育行政の連携をよりすすめてほしい ＜制度のはざまに対応＞ ・制度の狭間でサービスを受けられない事案に対する新たな支援策の構築。相談窓口の開設、周知と電話相談等に応じられる専門員の配置 ・柔軟な対応のできる部署の設置及び人材 ＜新たな支援の検討＞ ・今の児相は命の危険がある時しか保護してもらえないが、深刻な愛着障害をきたしかけているヤングケアラーを保護する機能のある機関があったらよい ・実態に即して、支援が新たに必要となれば、そのための対策について検討していただきたい ・ケアする環境や状況を一方的に取り上げるのではなく、少しずつ負担軽減するようなリソースを提供してほしい ＜ヤングケアラーの研修＞ ・研修会の実施

４． スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー・養護教諭において把握されたヤングケアラーの事例

今年度関わっている子どもの中に「ヤングケアラー」と思われる子どもが「いる」と回答した人に、子どもの状況などについて回答をいただいたところ、支援に関わってよかったと思う事例 43 事例、支援が困難だった事例 36 事例の回答があった。

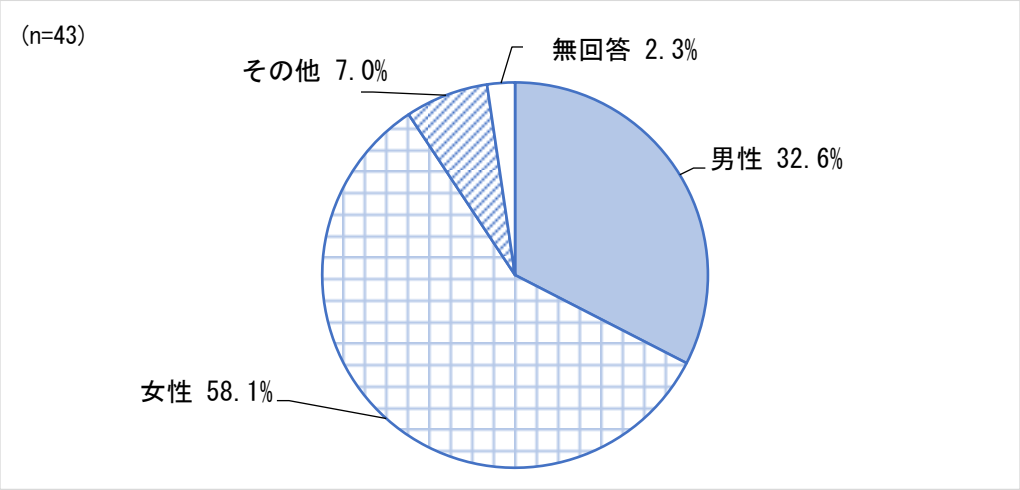
（１） 支援に関わって良かったと思う事例

① 属性

（ア） 性別

「ヤングケアラー」と思われる子どもの性別は、「男性」が 32.6%、「女性」が 58.1%となっている。

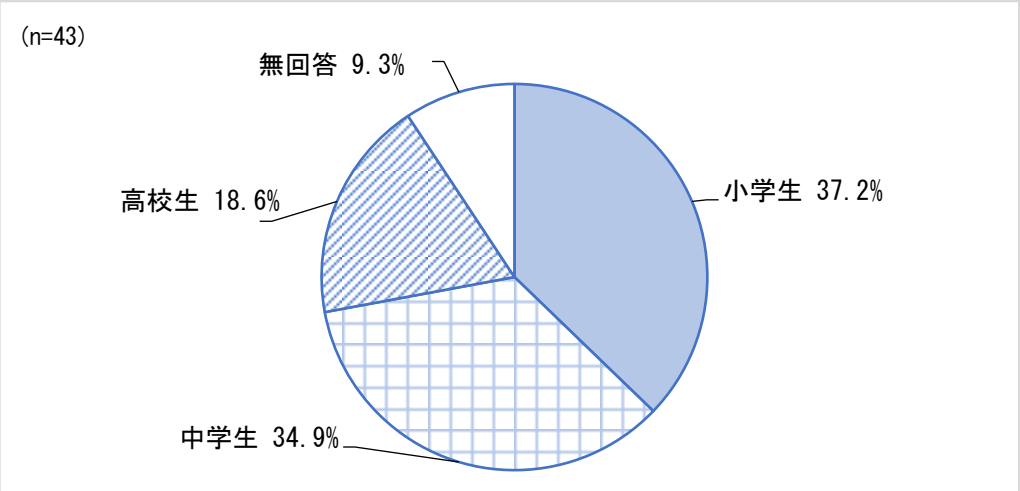
図表 159 性別



（イ） 所属

「小学生」（37.2%）、「中学生」（34.9%）が多くなっている。

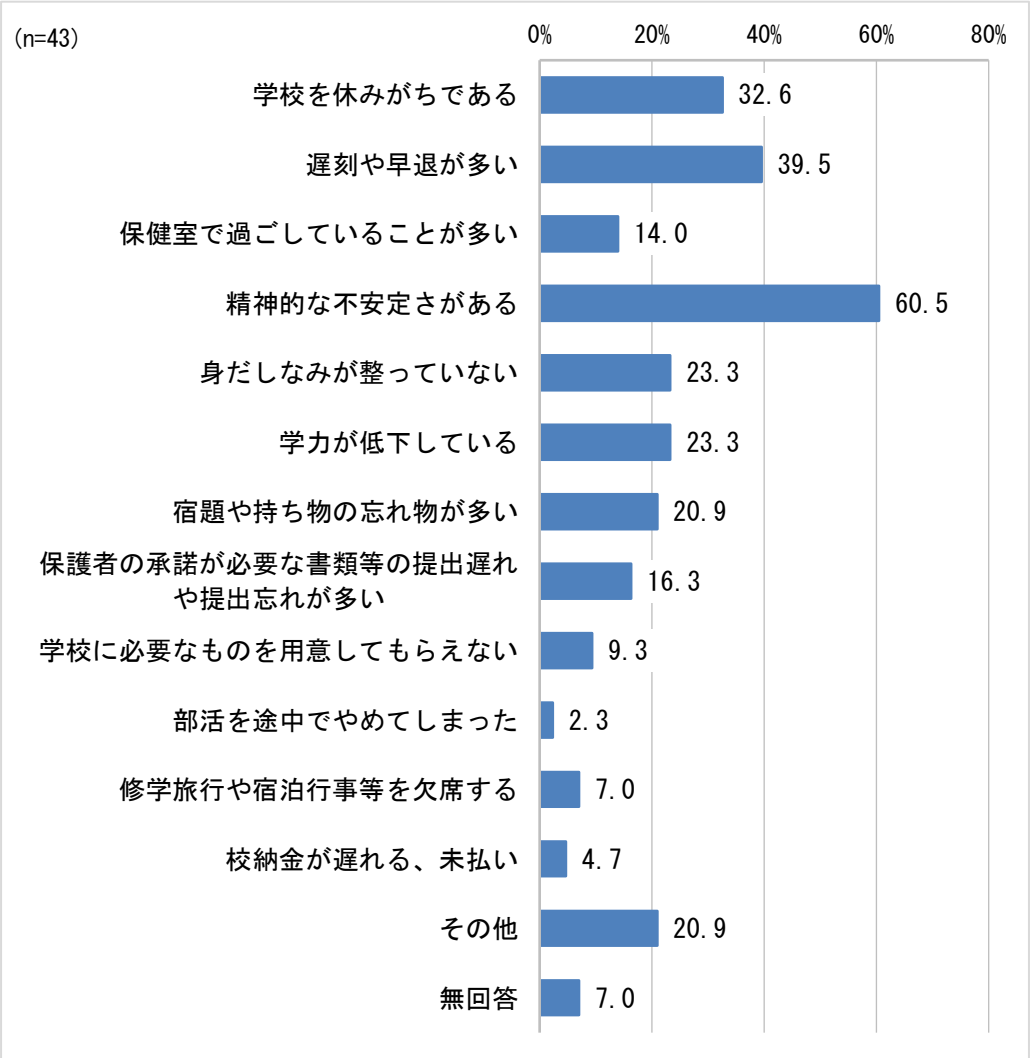
図表 160 学年



（ウ）　学校生活の状況

学校生活の状況については、「精神的な不安定さがある」「遅刻や早退が多い」「学校を休みがちである」などが上位に挙がっている。

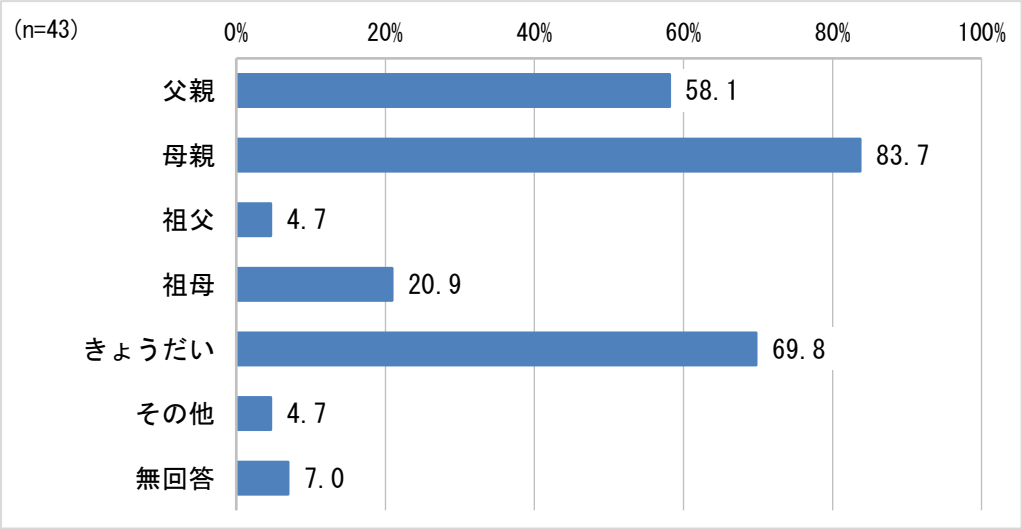
図表 161　学校生活の状況（複数回答）



（エ） 家族構成

家族構成については、「父親」が58.1%、「母親」が83.7%、「祖父」が4.7%、「祖母」が20.9%、「きょうだい」が69.8%となっている。

図表 162 家族構成（複数回答）

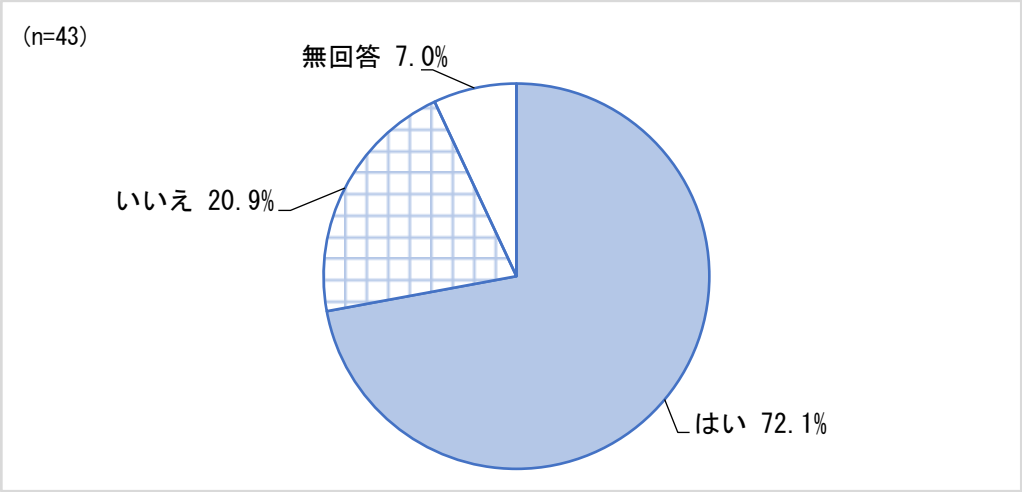


② 家庭でのケアの状況

（ア） ケアの状況の把握

ケアの状況を把握しているかについては、「はい」が72.1%、「いいえ」が20.9%となっている。

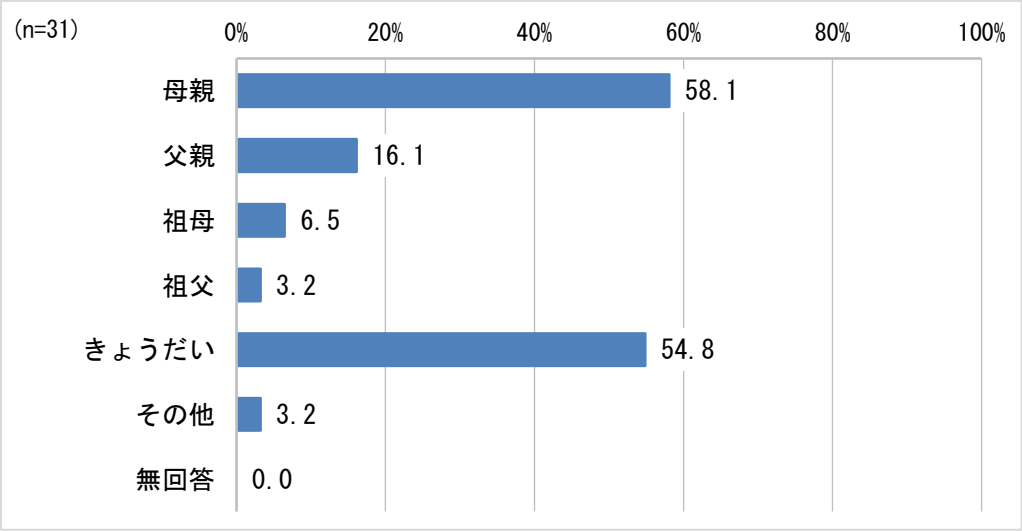
図表 163 ケアの状況の把握



（イ） ケアを必要としている人

ケアの状況を把握していると回答した人に、ケアを必要としている人を聞いたところ、「母親」が 58.1%で最も高く、次いで「きょうだい」（54.8%）、「父親」（16.1%）、「祖母」（6.5%）、「祖父」（3.2%）となっている。

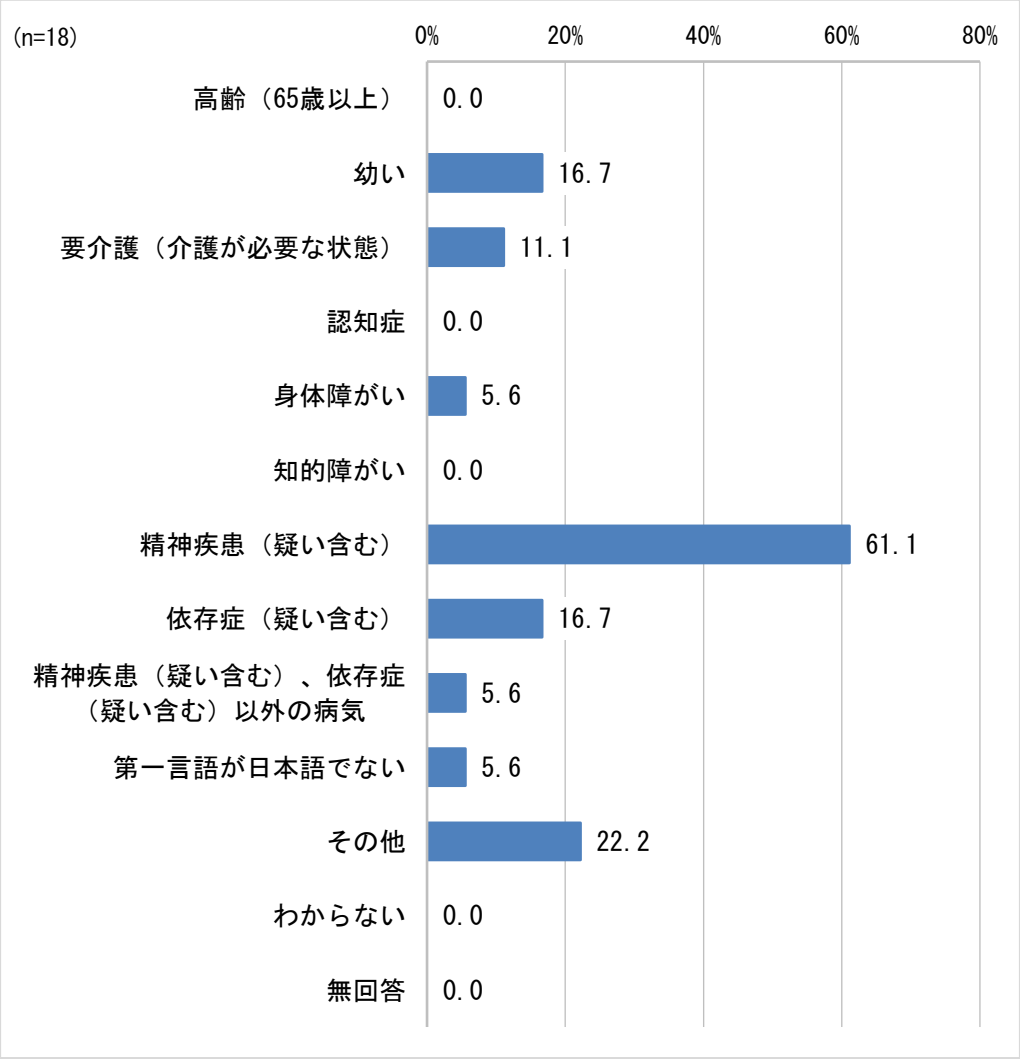
図表 164 ケアを必要としている人（複数回答）



（ウ） ケアが必要な「母親」の状況

ケアが必要な「母親」の状況については、「精神疾患（疑いを含む）」が 61.1%で最も高く、次いで「その他」（22.2%）、「幼い」「依存症（疑い含む）」（ともに 16.7%）などとなっている。

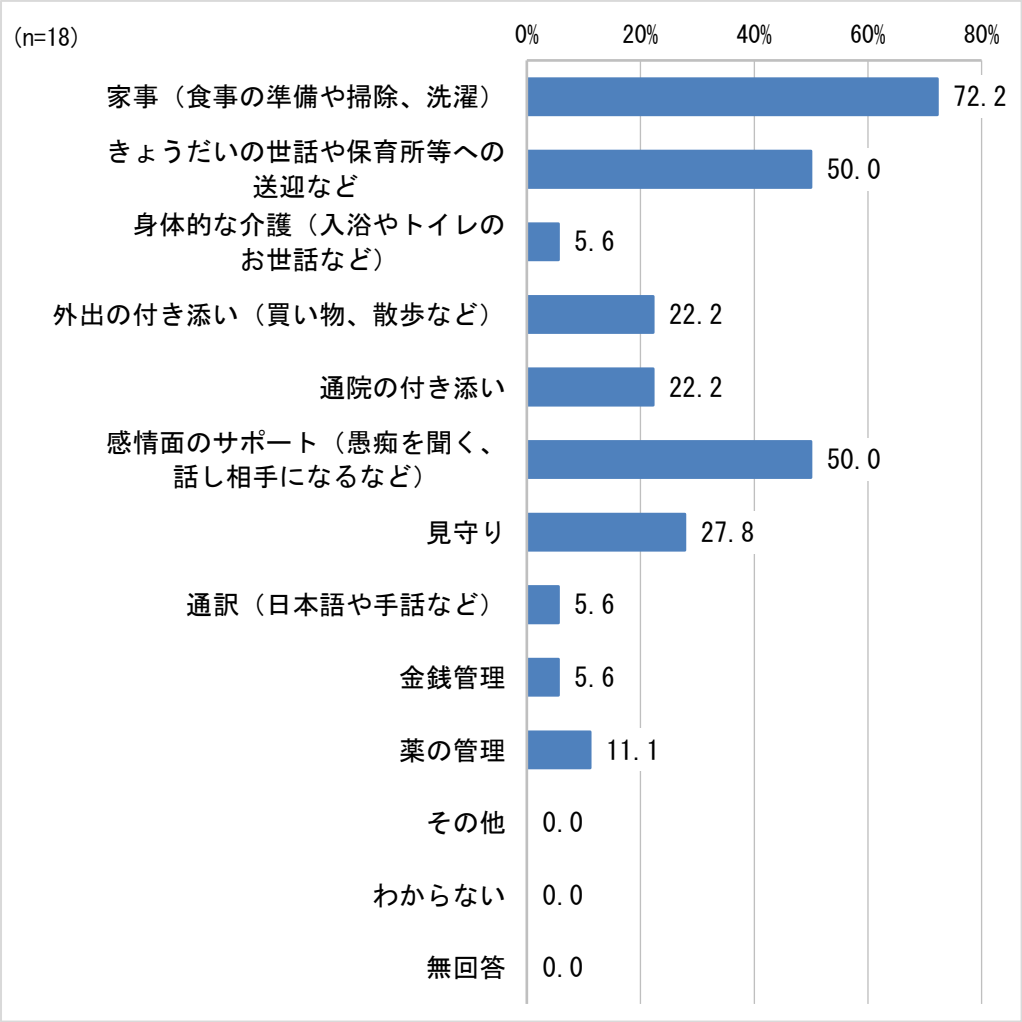
図表 165 ケアが必要な「母親」の状況（複数回答）



（エ） ケアが必要な「母親」のケアの内容

ケアが必要な「母親」のケアの内容については、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」が 72.2%で最も高く、次いで「きょうだいの世話や保育所等への送迎など」「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」（ともに 50.0%）、「見守り」（27.8%）などとなっている。

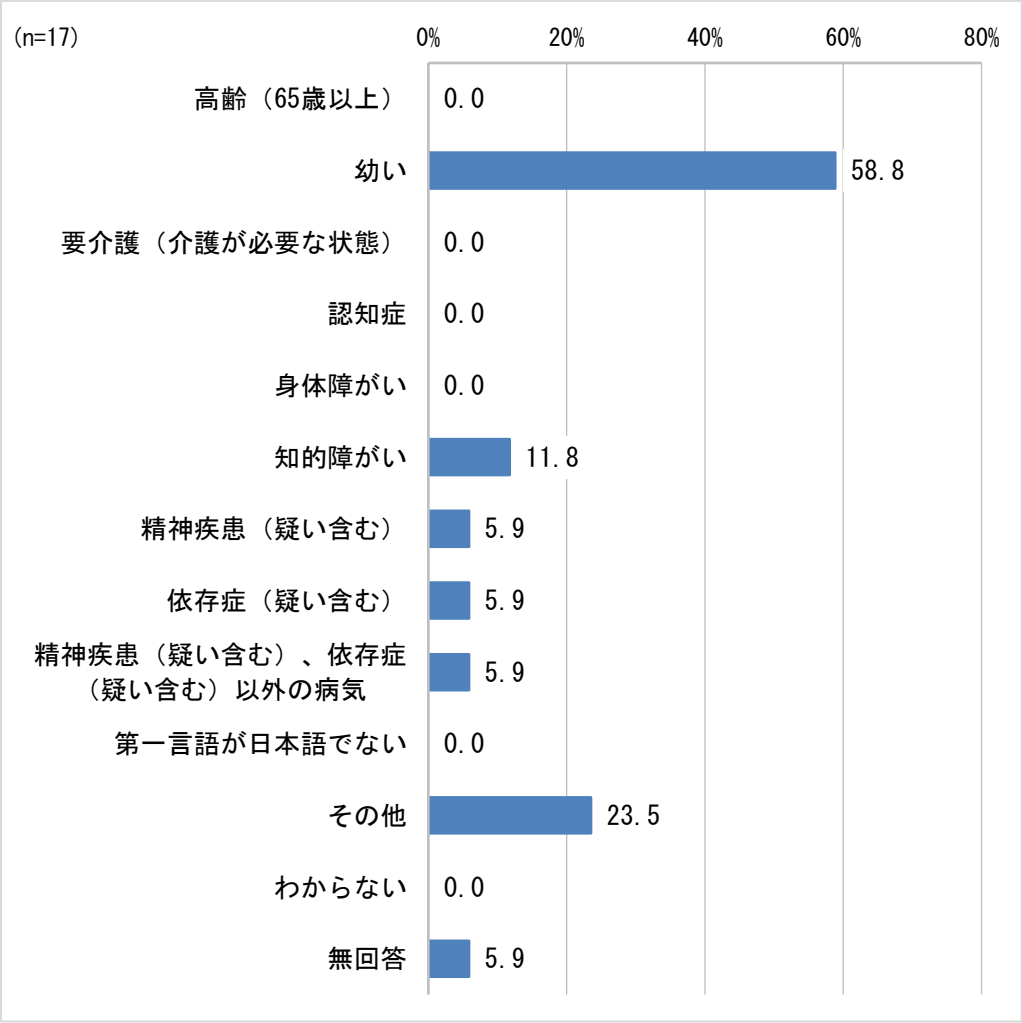
図表 166 ケアが必要な「母親」のケアの内容（複数回答）



（オ） ケアが必要な「きょうだい」の状況

ケアが必要な「きょうだい」の状況については、「幼い」が 58.8％で最も高く、次いで「その他」（23.5%）、「知的障がい」（11.8%）などとなっている。

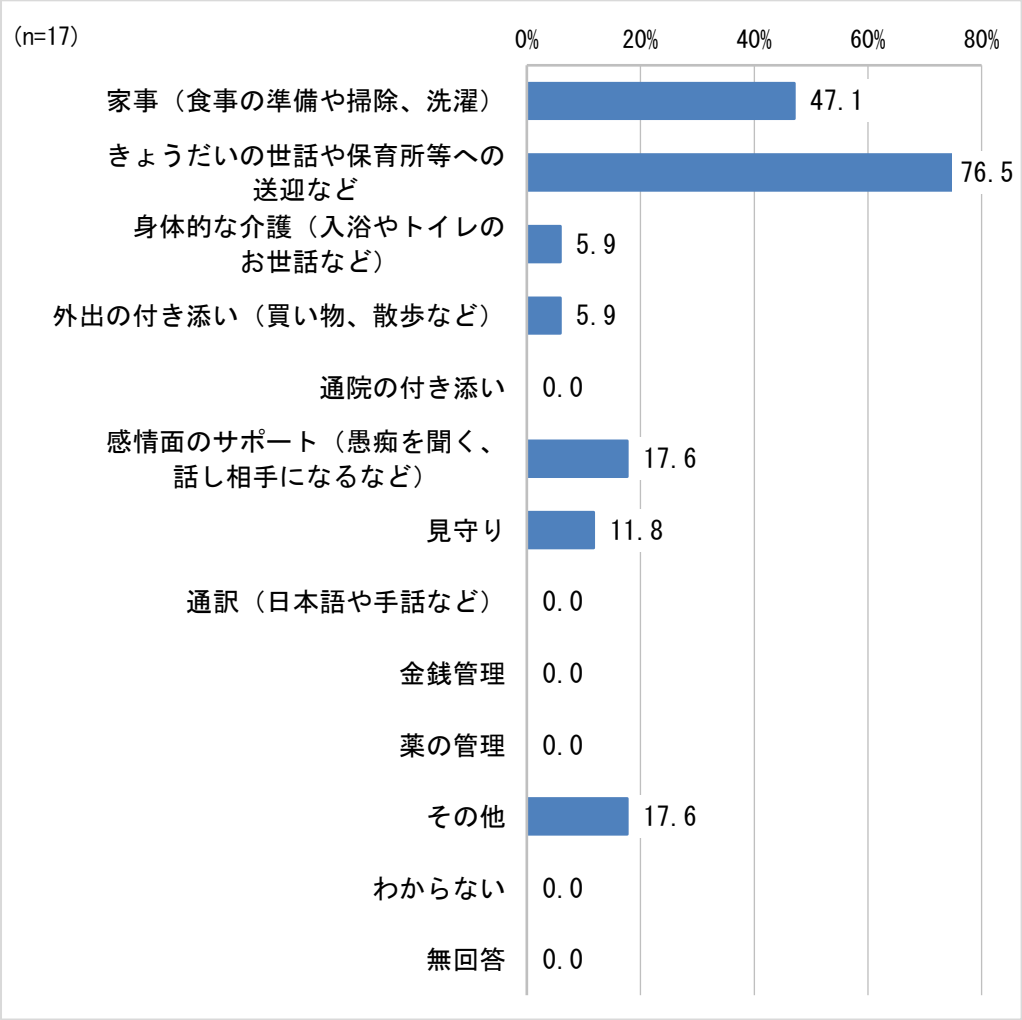
図表 167 ケアが必要な「きょうだい」の状況（複数回答）



（カ） ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容

ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容については、「きょうだいの世話や保育所等への送迎など」が76.5%で最も高く、次いで「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」（47.1%）、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」「その他」（ともに 17.6%）などとなっている。

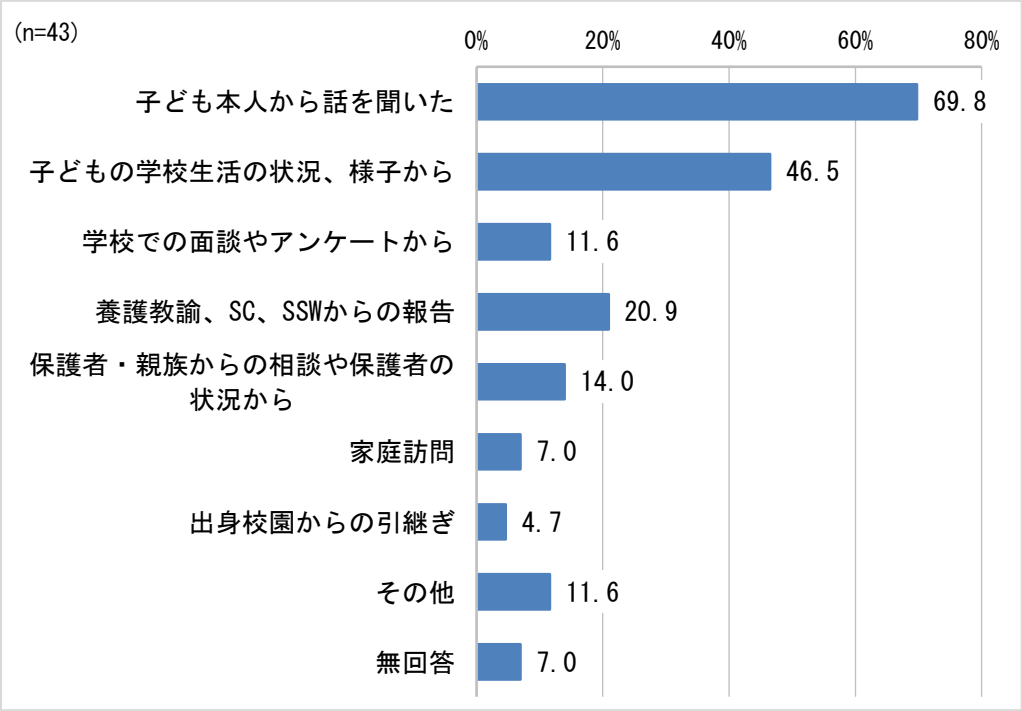
図表 168 ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容（複数回答）



③ ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけについては、「子ども本人から話を聞いた」が69.8%で最も高く、次いで「子どもの学校生活の状況、様子から」（46.5%）、「養護教諭、SC、SSW からの報告」（20.9%）などとなっている。

図表 169　ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ（複数回答）

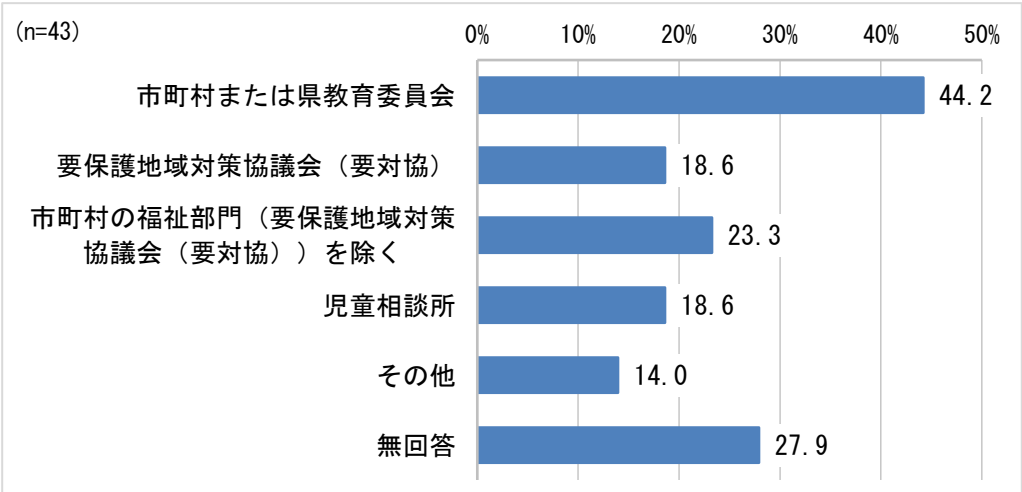


④ 支援について

（ア）　支援に関わった機関

支援に関わった機関については、「市町村または県教育委員会」が 44.2%で最も高く、次いで「市町村の福祉部門（要保護地域対策協議会（要対協）を除く）」（23.3%）、「要保護地域対策協議会（要対協）」「児童相談所」（ともに 18.6%）となっている。

図表 170　支援に関わった機関（複数回答）



（イ） 支援の内容、工夫、子どもの変化

子どもの所属とケアをしている人別で、支援の内容、工夫、子どもの変化を整理した。なお、それぞれのカテゴリーで複数の事例の内容について記載している。

子ども：小学生　ケアを必要としている人：母親	
学校で実施した支援	・SSW との面談 ・児童の学習保障のための体制づくり ・面談のための送迎や適応指導教室への対応
連携した機関が実施した支援	・面談 ・家族それぞれに対応する機関が役割を持ち、対応にあたった ・行政：情報提供、面談へのつなぎ、面談場所の提供、適応指導教室への通学経路のサポート ・適応指導教室：本児の状況の理解をした上での受け入れ
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・母親の相談相手 ・情報共有には要対協を活用した。権利侵害についての捉え方と支援機関の役割について学校内での共有や支援体制を考える機会を持つようにした ・学校との関係はよくなかったが、校長先生とは関係作りができたので、面談場所への送迎などのサポートをしていただいた ・適応指導教室での昼食を学校で集めている給食費の方から回せるような手配等、手続き面で配慮をしていただいた
支援してよかった点、うまくいったポイント	・面談をゆっくり丁寧に行う ・自治体が一体的に家族を支援する動きに変わった ・子どもが母の世話とそれまでの母の生活に対しての反抗的態度をとっていたが、そういったことへの指導ではなく、あくまで本児の思いを受け止めることを続けることで、信頼関係を築くことができ、その上で未来の話を一緒にしていった
支援した結果、子どもの変化	・母親の安心が子の安定につながった ・結果として憧れの高校生活に向けてここからどう一歩を踏み出すかという話をするようになり、不登校（昼夜逆転）から適応指導教室に毎日通学、中学へ進学し、当たり前の中学生として登校できるまでになった

子ども：小学生　ケアを必要としている人：きょうだい、母親・きょうだい	
学校で実施した支援	・本人の話を聞く ・学校へ来ることで、自分の時間や学習権が保障されることを本人にわかりやすく説明し、登校をうながした ・保健室で休養したり、養護教諭・担任と話をしたりして休み休み学校生活に慣れ、生活リズムを整えさせた

	・訪問時の面接 ・関係機関につなぐ ・要対協での話し合いで共有でき支援につながった ・他機関と関わり、母親の支援を行った
連携した機関が実施した支援	・月に１度学校で面談の時間をとる ・要対協で方向性の確認 ・家庭訪問 ・保護者と面談
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・本人が体調不良を訴えた時、ゆっくり話を聞く ・たわいもない日常会話を心がけ、リラックスできる雰囲気を心がける。本人が興味を持っていることに共感しながら話す。話の内容からどんなことに一番困っているのか、心配していることは何かを了解していく。担任の先生と共に支援を強められるように心掛けておく ・学校関係者がきめこまかく見守り、声かけをし、一人じゃないことを伝えた ・声掛けを多くし家庭での状態を把握できるようにした ・SSW との連携を行い相談につなげた ・関係職員でのこまめな情報共有 ・欠席などがある時は、他機関へも連絡をとるようにしている。児童の様子を学校の中で情報共有している
支援してよかった点、うまくいったポイント	・本人の話をゆっくり聞くと、だんだん体調が回復してくる ・本人が安心して話せる場所や人ができた ・本人の意識の中に、学校は友達とふれあえ、食事の準備の心配もなく、安心して過ごせる場所という認識が芽生えたこと ・限られた時間でも、面接をしている時間にはリラックスして好きな絵を描きながら他愛の無いおしゃべりする様子が見られるようになったこと。子どもらしい仕草や表情が和らいでいると感じられた ・先生方が複数人で、決して投げださずに見守り続け、学校がその子の居場所になるようにした。その支援の一端に、SC も加わった ・幼児期から要支援の家庭で、子育て支援課からもフォローされていたため、連携がとりやすかった ・母親が、学校に信頼をおき体調が悪い時には、早めに学校へ連絡をいれてくれるため、他機関へすぐにつなぐことができた
支援した結果、子どもの変化	・話を聞いた後は、顔の表情も明るく、教室へ自分で戻ることができた ・不調を訴えることが少なくなった ・遅刻、早退、欠席が減った ・母親ともよく連絡を取り合えるようになった。子どもたちも勉強に前向きに取り組めるようになった

	・学校で、キレたり暴力を振るったりすることがほとんどなくなり、友達と仲良く遊ぶ姿が見られた ・安定して学校へ登校することができた

子ども：中学生　ケアを必要としている人：母親	
学校で実施した支援	・相談相手 ・子どもへの心理的ケア ・保護者との心理面接 ・要対協を実施し、関係機関と連携している。いざという時に SOS を出す連絡先を紹介したことと、児相職員に中学校に来校してもらい、生徒と顔を合わせて話をしてもらった
連携した機関が実施した支援	・通院への同行 ・家庭環境の状態把握 ・使える支援の案内 ・生徒との面接、母親への電話相談、訪問
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・秘密保持 ・母子間の関係が壊れないように配慮した ・集団守秘義務の確認。生徒が知られたくないと希望していることに関しては、慎重に連携を行なった
支援してよかった点、うまくいったポイント	・精神疾患の治療が適切に行われるようになった ・家庭でできる対応、学校でできる対応を考え家庭だけで抱え込まないようにできた ・様々な機関が支援しているということが生徒にわかり、生徒自身が精神的に安定し、将来への不安感が減り、高校に希望を持つことができるようになり、受験に向けて学習に意欲的に取り組めるようになったことがよかった。父母にも関係機関が関わっていることがわかり、暴言暴力の抑止力になっていると思われる。生徒が安心して話をしてくれるように、関わる支援者それぞれが親身になって継続的に話を聞く機会を作ったことがうまくいったポイントである
支援した結果、子どもの変化	・子どもの精神的な負担感が若干軽減されたかもしれない ・子どもが困ったことを隠さずに教員やカウンセラーに話せるようになった ・生徒自身が精神的に安定し、将来への不安感が減り、高校に希望を持つことができるようになり、受験に向けて学習に意欲的に取り組めるようになった

子ども：中学生　ケアを必要としている人：きょうだい	
学校で実施した支援	・二者面談 ・教員と情報共有しながらあらゆる場面で本人に寄り添った支援を行

	う ・保健室での休養 ・市の子ども部門と連携
連携した機関が実施した支援	・小中の連携。きょうだいそれぞれの不安定な時期や、様子を共有し、見守りやフォロー
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・親への働きかけについてなど生徒の気持ちを優先する。生徒の様子を常に教員と情報共有。授業への参加、定期テスト、部活動への取り組みなど、関わっている先生方が支援目標にそって支援する ・保護者への対応の窓口は担任となる ・担任、養護教諭のほか、各教科の先生方にも状況を共有してもらい、生徒の様子をフォローしてもらう
支援してよかった点、うまくいったポイント	・校内で情報を共有したこと。生徒に寄り添った支援の展開 ・定期的に来る精神的な不安定さを共有する事で、それ以上の落込みを回避出来ているのではないかと思う
支援した結果、子どもの変化	・毎日登校している。進級し、先輩としての自覚が芽生えたり、自主的に自学ノートに取り組むことができている。養護教諭も含め先生方に相談できている ・波があるが、困った時の対応を本人が学んでいる

子ども：中学生　ケアを必要としている人：その他（祖父母、父など）	
学校で実施した支援	・本人の話を聴く ・カウンセリングの継続、提出物、課題、服装等の配慮、父親と教員の関係構築、他機関への報告と介入 ・状況把握、市の福祉課との連携 ・先生が子どもと丁寧なコミュニケーションをとる。両親とも手話通訳を入れたりメール等で丁寧にコミュニケーション
連携した機関が実施した支援	・家庭訪問 ・デイサービス、一時預かり、ヘルパーの派遣など ・両親が手話通訳の利用を適切に行えるよう支援
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・生徒の負担軽減 ・父親の果たすべき役割を、本人は長年にわたり父親に代わって行っていたが、中学校卒業間際まで父親を非難する言葉は聞かれなかったので、こちらから父親を非難するような言動は控えた ・CODA（きこえない・きこえにくい親をもつ聞こえる子ども）であるとはどういう事か先生方と共有
支援してよかった点、うまくいったポイント	・職員間でコンセンサスを得ることで、生徒の服装や課題等の注意指導が減り、本人が安心してカウンセリングに来れるようになった。また本人に合った担任に変えた

	・外部機関と連携したことで、サービスが受けられ、本人や家族の安心が得られた ・その子が支援される子ではなく、１人の中学生としてふるまえている
支援した結果、子どもの変化	・不登校ではあるが行事や半日授業等に徐々に参加。父の協力を得て受験の話も出てくるようになっている ・高校生になり、自分がヤングケアラーだったことを理解し公に発信できるようになった ・学校に適応しやすくなるという変化

子ども：高校生　ケアを必要としている人：母親、母親・きょうだい、母親・父親	
学校で実施した支援	・本人の話を傾聴する、休む場と居場所を作る ・毎週面談をしている。困っていることはないか確認をして、改善策を一緒に考えるようにしている ・スクールカウンセラーとの面談の勧め ・本人への精神的なケア ・母親からも話を聞き、母子ともに SSW へ繋げた ・SSW に支援をつなげた ・SSW が進学に向けて様々な奨学金制度を紹介し、担任の先生も一緒に検討してくださった
連携した機関が実施した支援	・介護保険サービスの活用等 ・受診同行、福祉課等への母の障害年金の手続きの同行 ・フードバンク提供 ・ヘルパーの派遣回数を増やした ・市役所障害福祉課でヘルパーの派遣をしてくれた ・経済的な援助 ・母子の話や困り感を聞き取る、必要な資源（奨学金等）や相談機関等の紹介
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・各種機関に連携すること ・ひとり親家庭であり、ケアする本人が孤独にならないよう担任と連携し、外部機関につなげていった ・担任の進路指導を尊重する。本人や保護者の希望に沿うには、どんな支援が必要かを考えた ・毎週面談をする。出来るだけ本人がストレスをためないように話を聞き、学業や部活動など他のことに集中が向くように促している
支援してよかった点、うまくいったポイント	・子ども自身が辛いことを訴えてくれた ・１年前からスクールカウンセラーを勧めて本人の辛さを聞き取れていたこと ・とても素直な生徒であるため、一緒に考えた解決策に真剣に取り組

	み、朝から学校にも登校できるようになり、友人も増え、前向きに学校生活を送ることができていること。また学業や部活動で結果が出ていること ・本人が一人残された時のことまで考慮した支援を学校・外部機関で考えられること ・母と共につなげられた事、聞いてもらえる場所ができた事 ・母親の病院への同行を度々行い、ドクターからの話も一緒に伺い、体調に合わせた対応ができたこと ・母親と本人生徒と SSW との間で信頼関係が築けたこと
支援した結果、子どもの変化	・志望する大学に進学できた ・今は病状が悪化し看病のため欠席しているが、学校・経済面・介護面でも配慮されているので落ち着いて過ごしてくれていると思う ・母親が落ち着いてくると、父親も少し変わり、本人への安定へ繋がった ・安心して受験ができ、また県外に進学することもできた ・学校で頑張っている子どもの姿を見て、母親が、できる限りお弁当を作ったり、結果が出たときには喜んでくれたりと、子どもに寄り添う姿勢が見られるようになったこと

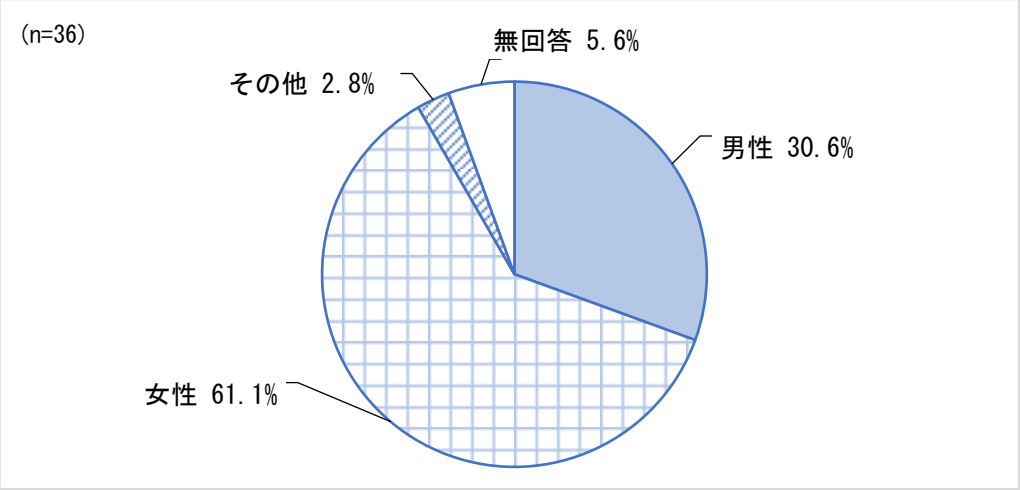
（２） 支援が困難だった事例

① 属性

（ア） 性別

「ヤングケアラー」と思われる子どもの性別は、「男性」が 30.6%、「女性」が 61.1%となっている。

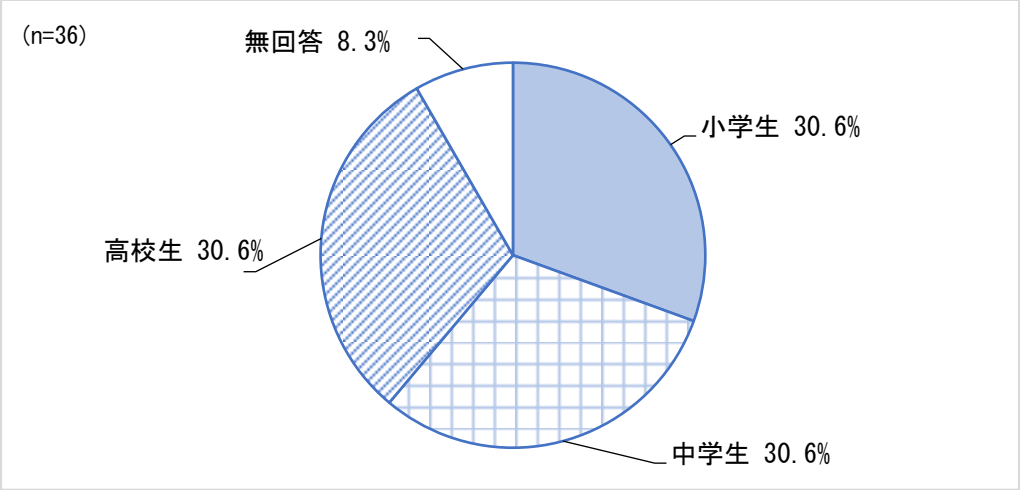
図表 171 性別



（イ） 所属

「小学生」「中学生」「高校生」ともに 30.6%となっている。

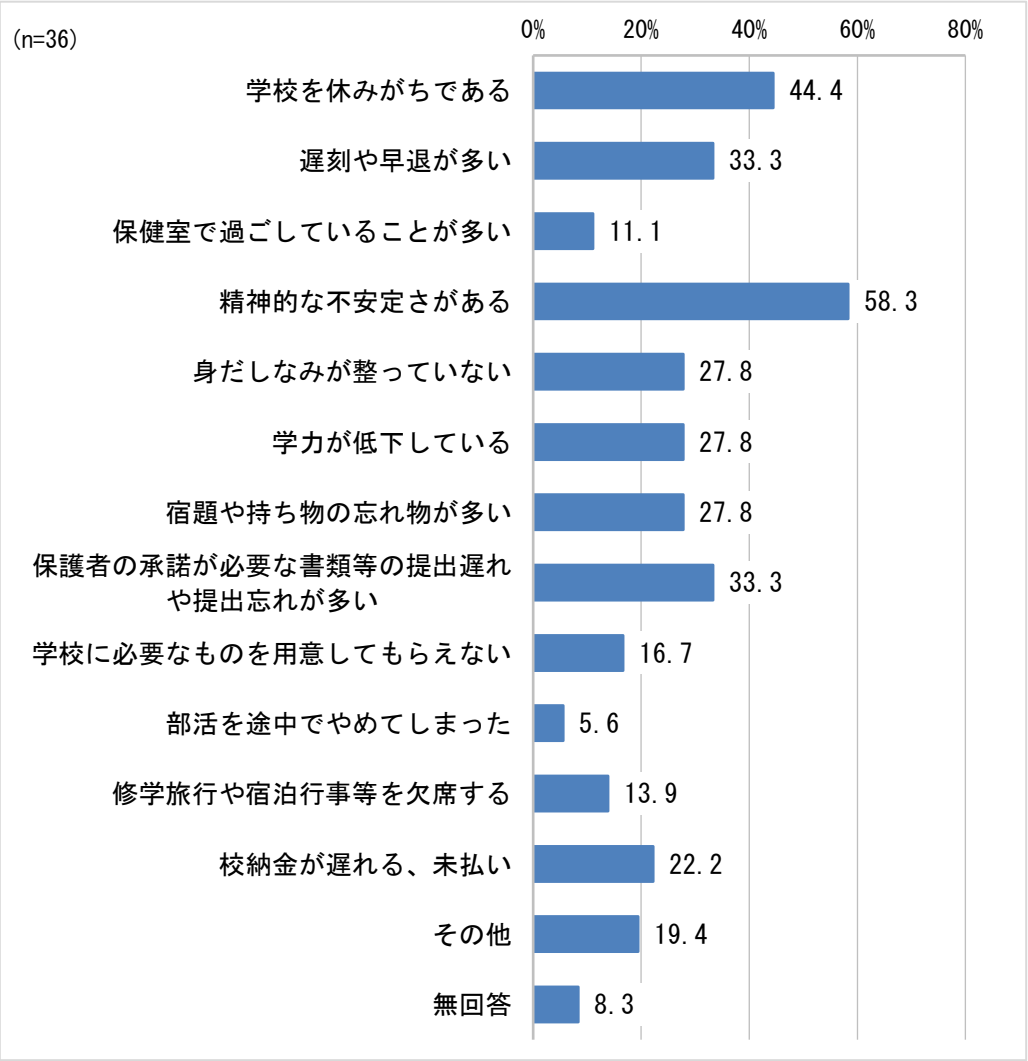
図表 172 学年



（ウ）　学校生活の状況

学校生活の状況については、「精神的な不安定さがある」「学校を休みがちである」「遅刻や早退が多い」「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」などが上位に挙がっている。

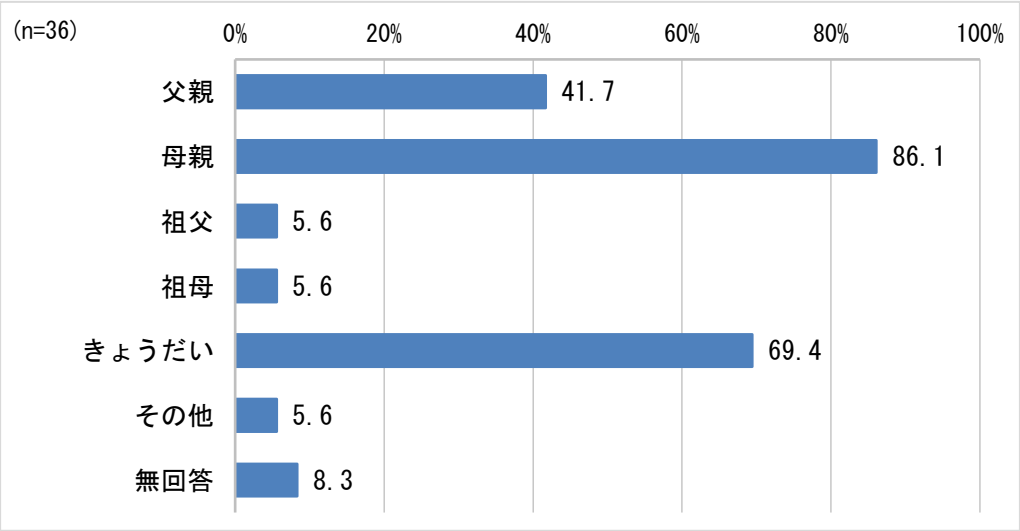
図表 173　学校生活の状況（複数回答）



（エ） 家族構成

家族構成については、「父親」が 41.7%、「母親」が 86.1%、「祖父」「祖母」がともに 5.6%、「きょうだい」が 69.4%となっている。

図表 174　家族構成（複数回答）

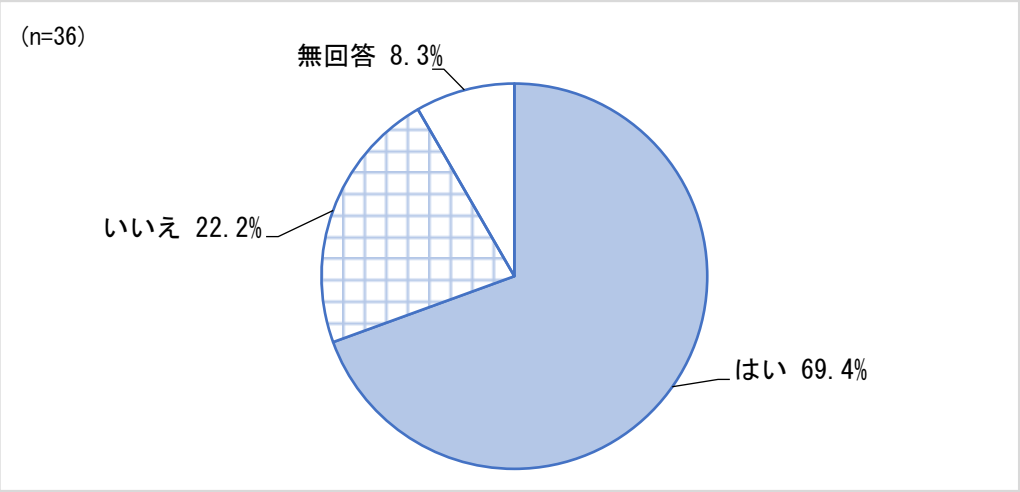


② 家庭でのケアの状況

（ア） ケアの状況の把握

ケアの状況を把握しているかについては、「はい」が 69.4%、「いいえ」が 22.2%となっている。

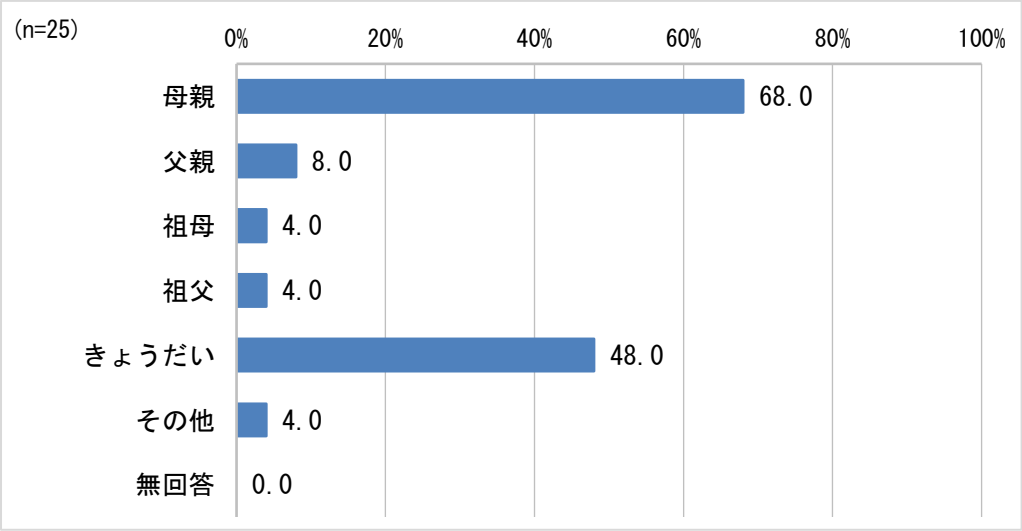
図表 175　ケアの状況の把握



（イ）　ケアを必要としている人

ケアの状況を把握していると回答した人に、ケアを必要としている人を聞いたところ、「母親」が 68.0%で最も高く、次いで「きょうだい」（48.0%）、「父親」（8.0%）、「祖母」「祖父」（それぞれ 4.0%）となっている。

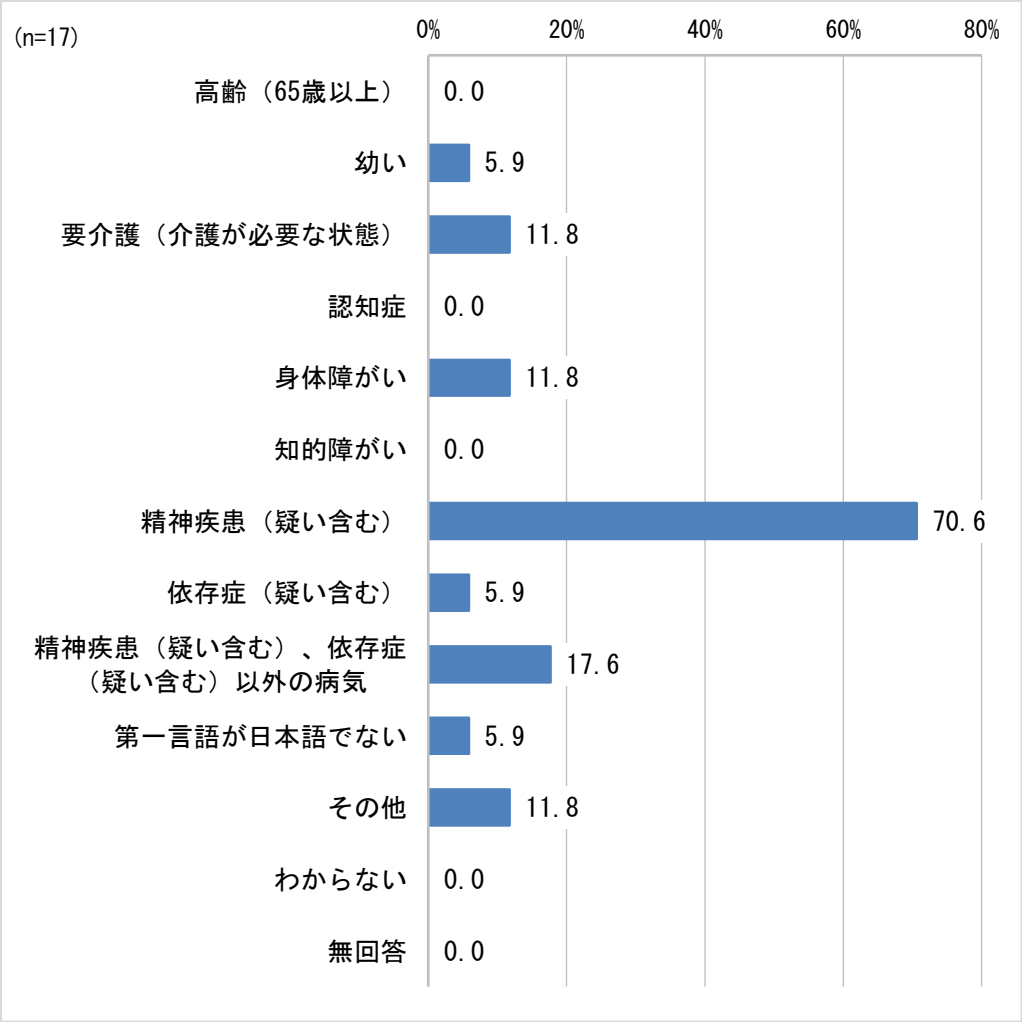
図表 176　ケアを必要としている人（複数回答）



（ウ） ケアが必要な「母親」の状況

ケアが必要な「母親」の状況については、「精神疾患（疑いを含む）」が 70.6%で最も高く、次いで「精神疾患（疑い含む）、依存症（疑い含む）以外の病気」（17.6%）、「要介護（介護が必要な状態）」「身体障がい」「その他」（それぞれ 11.8%）などとなっている。

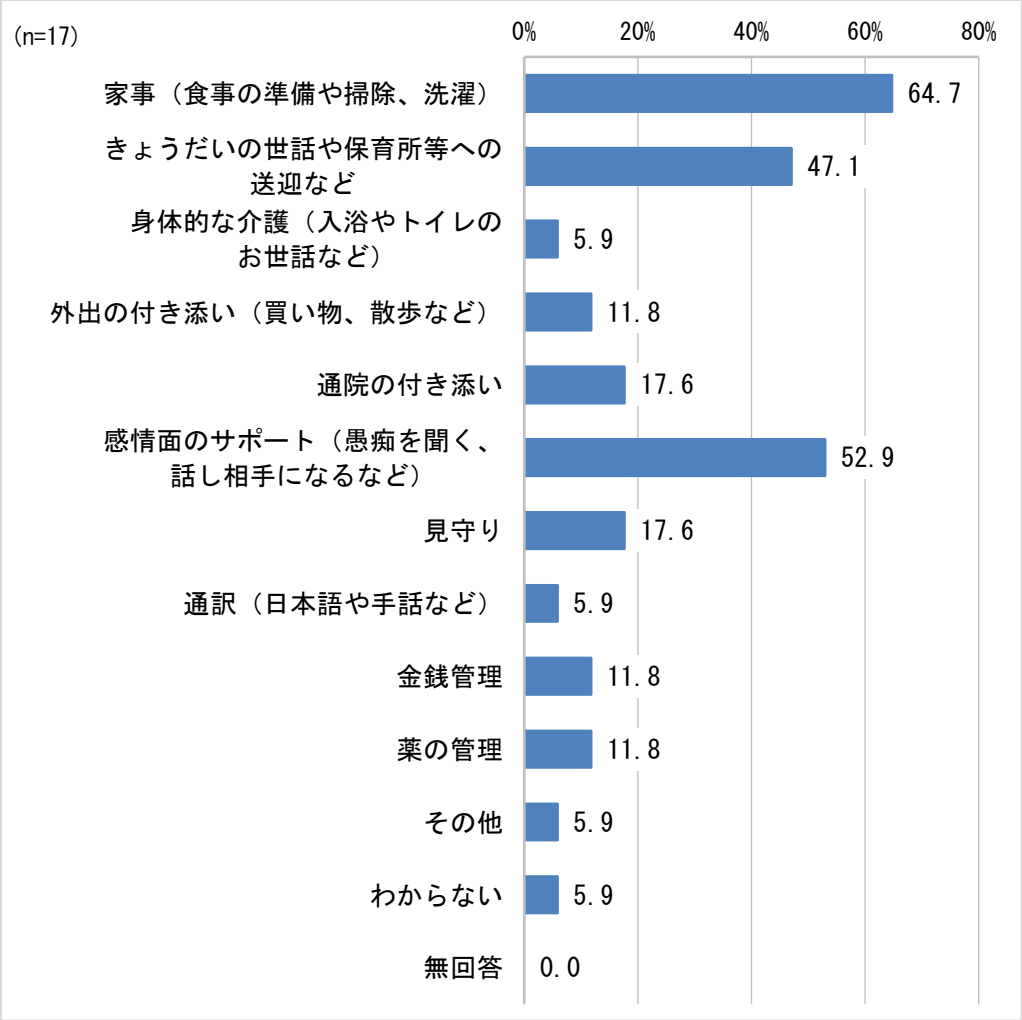
図表 177 ケアが必要な「母親」の状況（複数回答）



（エ） ケアが必要な「母親」のケアの内容

ケアが必要な「母親」のケアの内容については、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」が 64.7%で最も高く、次いで「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」（52.9%）、「きょうだいの世話や保育所等への送迎など」（47.1%）、「通院の付き添い」「見守り」（ともに 17.6%）などとなっている。

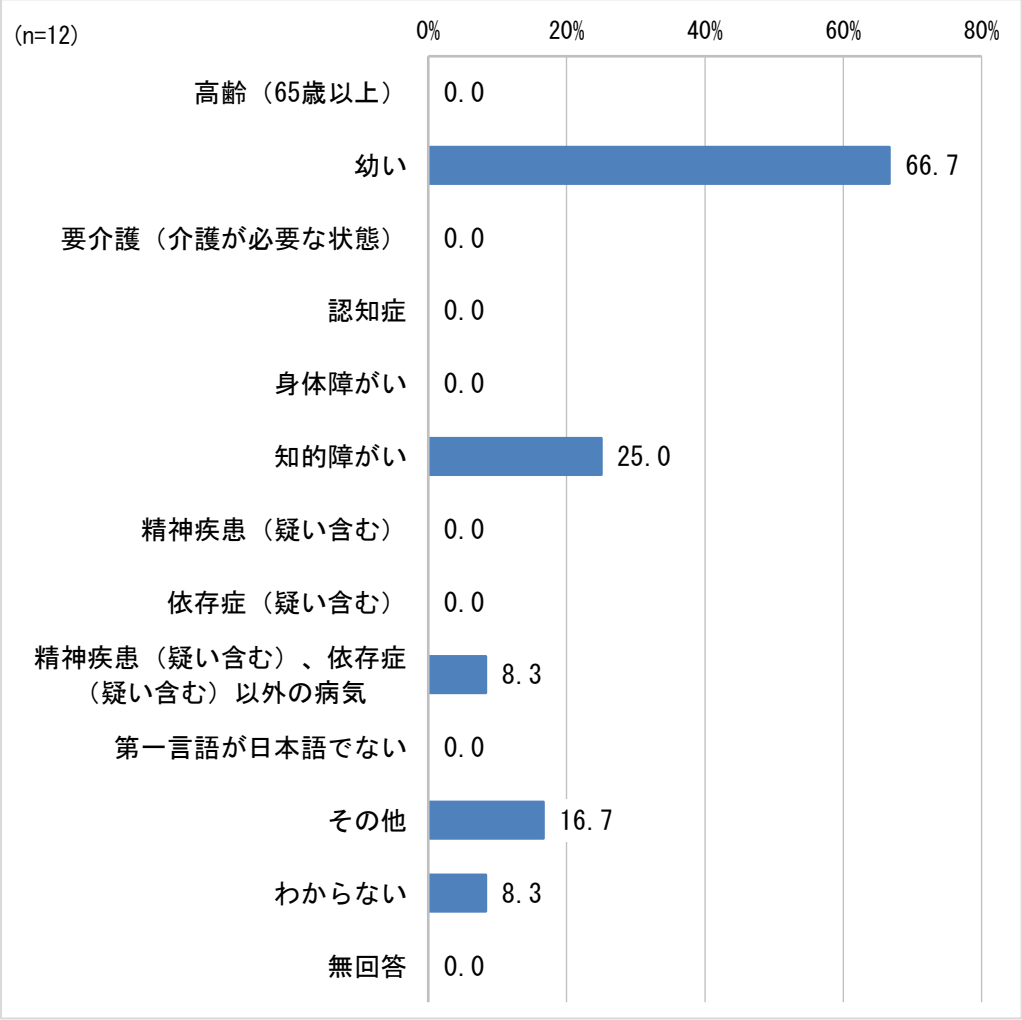
図表 178 ケアが必要な「母親」のケアの内容（複数回答）



（オ） ケアが必要な「きょうだい」の状況

ケアが必要な「きょうだい」の状況については、「幼い」が 66.7%で最も高く、次いで「知的障がい」（25.0%）などとなっている。

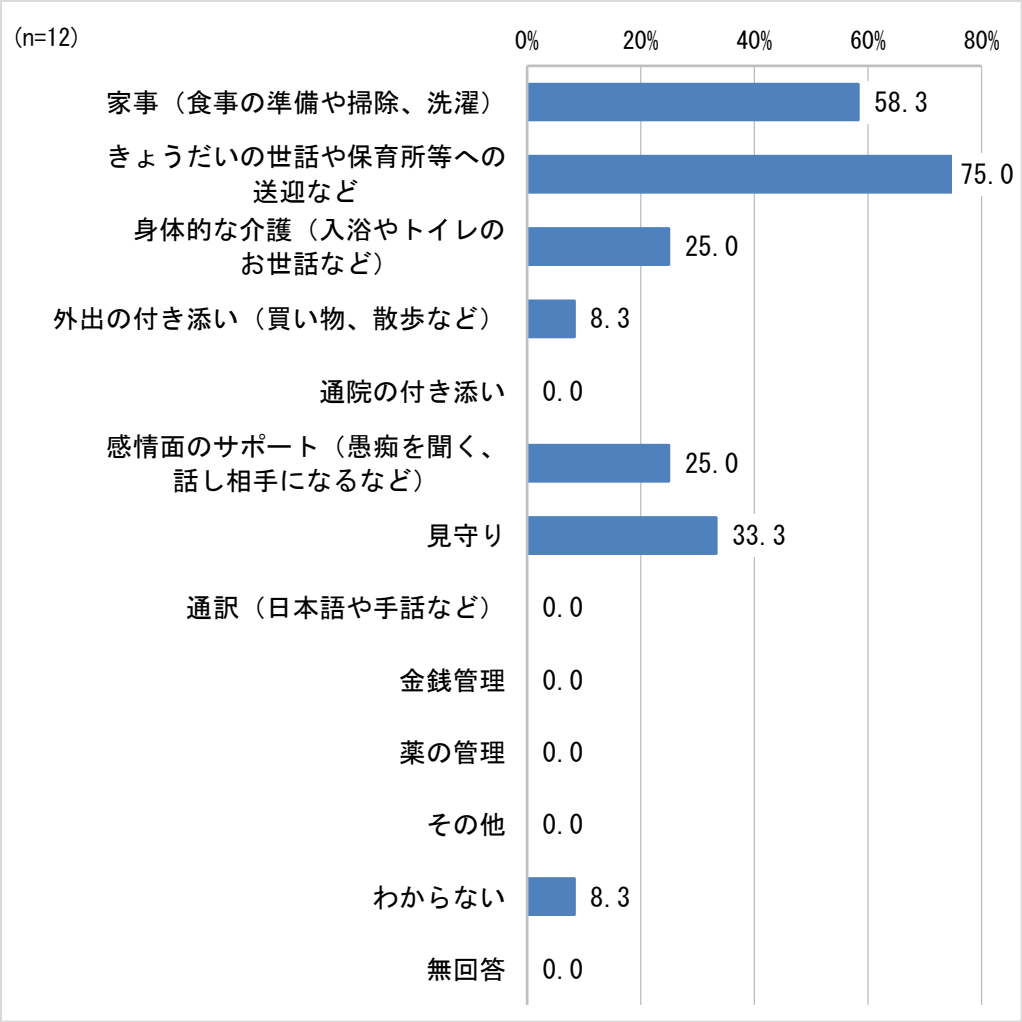
図表 179 ケアが必要な「きょうだい」の状況（複数回答）



（カ）　ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容

ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容については、「きょうだいの世話や保育所等への送迎など」が75.0%で最も高く、次いで「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」（58.3%）、「見守り」（33.3%）などとなっている。

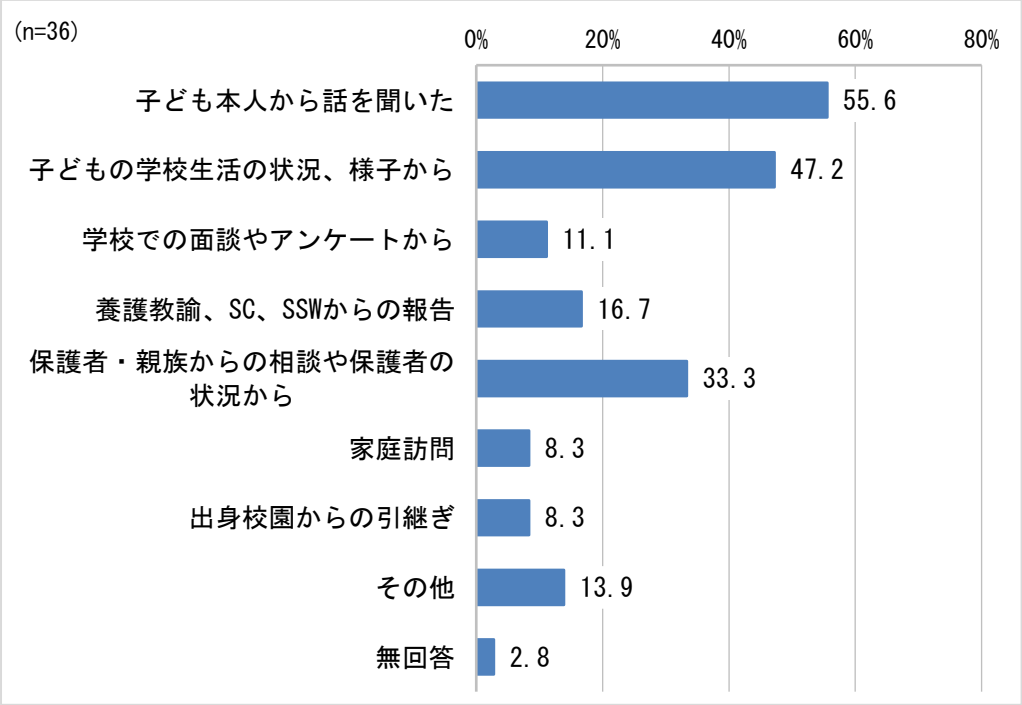
図表 180　ケアが必要な「きょうだい」のケアの内容（複数回答）



③ ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけについては、「子ども本人から話を聞いた」が55.6%で最も高く、次いで「子どもの学校生活の状況、様子から」（47.2%）、「保護者・親族からの相談や保護者の状況から」（33.3%）などとなっている。

図表 181　ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ（複数回答）

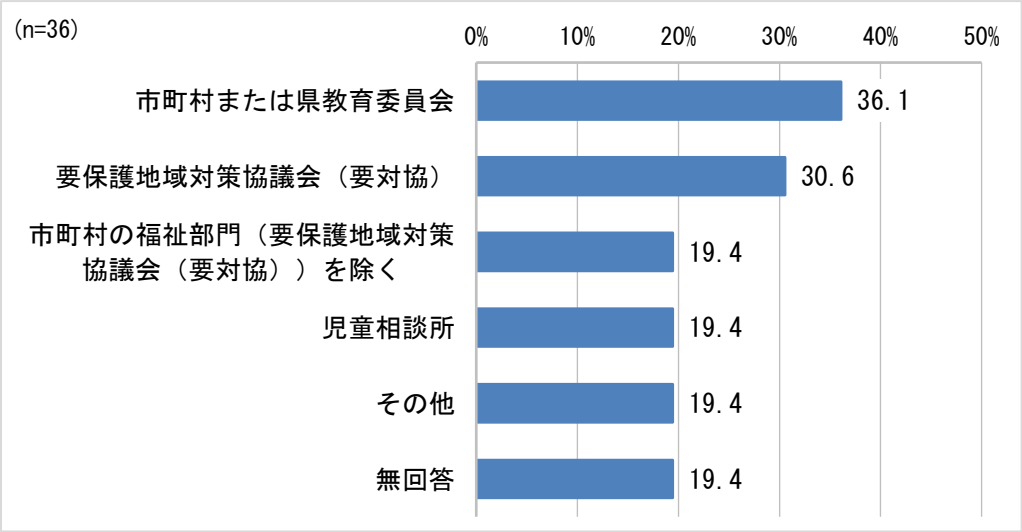


④ 支援について

（ア） 支援に関わった機関

支援に関わった機関については、「市町村または県教育委員会」が 36.1%で最も高く、次いで「要保護地域対策協議会（要対協）」（30.6%）、「市町村の福祉部門（要保護地域対策協議会（要対協）を除く）」「児童相談所」「その他」（それぞれ 19.4%）となっている。

図表 182 支援に関わった機関（複数回答）



（イ） 支援の内容、課題、子どもの変化

子どもの所属とケアをしている人別で、支援の内容、課題、子どもの変化を整理した。なお、それぞれのカテゴリーで複数の事例の内容について記載している。

子ども：小学生　ケアを必要としている人：母親、母親・父親	
学校で実施した支援	・親の話し相手 ・管理職が夜遅く家庭訪問した ・校内に居場所を作る ・学習の個別指導を実施する
連携した機関が実施した支援	・子どもの学習支援、食料支援 ・放課後支援 ・家事支援 ・金銭管理
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・単独で動かず２人以上で訪問することなど様々なルールを検討中 ・子どもに変化を起こしたいが、まずは母と信頼関係を作る ・受容的態度
支援が難しかった点、あればよかったと思う支援	・学校側にヤングケアラーという視点が乏しい ・交通の便が悪いが移動支援がない状態のため、家以外の場所で支援を受ける事に影響が出てしまい進んでいかない
支援した結果、子どもの変化	・まだ変化は見られない ・長い間、難しい状態を継続させてしまっている

子ども：小学生　ケアを必要としている人：きょうだい、母親・きょうだい	
学校で実施した支援	・近隣に住む祖父母へのアプローチ ・祖母（母方）がいるので、必要時連絡を取り、対応していることもある ・生活リズムが崩れている時に保健室で休養したり話をしたりした
連携した機関が実施した支援	・子どもとの面談 ・他市からの転入だったので、地域間の福祉機関は連絡調整していたと思う ・SSW との定期的な面談
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・保護者が拒否をしない範囲の対応を心がけた ・欠席した時等、必ず連絡をとる等、本人の話をよく聞き、つながりが途絶えないように対応している
支援が難しかった点、あればよかったと思う支援	・大きな変化や持続が難しかった ・母親の精神疾患の状況によるところが大きく、状態がいい時は良好な状況が保てるが、そうでないと、就学前の弟の生活も昼夜逆転する等、その時々で状態が変化し、児童の出欠席状況や登校時の様子も変わるので、対応に苦慮する ・SSW につなげても、保護者が面談を断るなど、定期的な面談が続かない
支援した結果、子どもの変化	・子どもの気持ちをききとることができている。祖父母が定期的に食事や洋服を提供してくれた ・担任と、家庭のことについて、話もできていること、友人関係も良好な状況なので、学校にいる時は安定しているように見える

子ども：中学生　ケアを必要としている人：母親、母親・きょうだい、きょうだい	
学校で実施した支援	・本人へのカウンセリング、市町村保健師との会議 ・子ども本人の気持ちの受け止め ・本人と話をする中で、学校内でどのような支援がよいのかを本人に選択させて対応しつつ、学校生活を出来るだけ継続できるよう支援し、欠席日数の軽減につながりつつある ・本人に寄り添った支援（傾聴、健康相談、進路指導） ・関係機関へ繋げる ・母親を SC につなげようとしたがうまくいかなかった
連携した機関が実施した支援	・親の受診援助 ・母親への治療継続 ・生徒本人の精神安定に向けたカウンセリング ・本人との面談。一時保護所の説明
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・本人が抱えている状況を先生方も共有して、いつでも変化を見逃さないように見守りをした ・本人の希望にそった支援を考えていくこと ・養護教諭と学年職員との連携。管理職への報告。子どもの意思を確認したり寄り添った支援 ・家庭支援がない中、不安定にならない様、生徒への声かけをこまめにし、本人の不安や体調不良を軽減する ・子どもの気持ちの母親への伝え方には気を付けた ・長い間心の傷や社会への怒りなどを抱えたままで子育てをしてきた母親の大変さを理解していくこと

支援が難しかった点、あればよかったと思う支援	・他者が介入することで、家庭の問題が大きくなる可能性があり介入困難であった ・母親の認識不足もあり、福祉も交えての関りを早期に開始できずに経過していたため、家庭内への支援になかなかつなげ切れていない ・母親が支援を求めていない状況で、学校以外の外部機関へどのようにつながるかが難しい ・本人は母親に振り回された日常を送る日が多く、情緒不安定であった。母親主権の生活を変える力は本人や学校にはなく、児童相談所職員とも面談したが一時保護所へ行く決心も家族を思い困難だった ・子どもたちだけで暮らしていた時期に児相の一時保護などが利用できると良かった
支援した結果、子どもの変化	・相談しても状況がなかなか改善せずに、本人がだんだん暗くなっていった ・３年間、養護教諭が寄り添い校内のコーディネーター役を行い、本人が成長したことで進学することができた ・話せたことで、子ども本人に理解してもらえる大人がいるという認識が生まれた ・本人自身の自立に向けた意識が芽生え始めた。進路実現に向けて、少しずつではあるが前向きに取り組もうとし始めた ・母子分離が進んできたこと

子ども：高校生　ケアを必要としている人：母親、父親	
学校で実施した支援	・相談相手 ・本人の話を聞く。SC との面談 ・担任やコーディネートの先生と本人生徒との面談 ・学年で情報共有、医療機関との連携、カウンセリング継続 ・SSW や関連支援機関との連携
連携した機関が実施した支援	・ケース会議の実施 ・情報の共有 ・家庭訪問 ・薬の処方 ・通訳の紹介
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・本人のコンディションに合わせて保健室利用の許可 ・精神状態の把握、校則の弾力的な運用 ・日々の観察。関係職員間での情報共有 ・個人情報の厳守
支援が難しかった点、あればよかったと思う支援	・家庭との連携 ・要支援者である母親が日本語を話せず、また精神疾患もあって電話や訪問を拒否した ・自傷行為への対応 ・SSW と父親との面談が困難 ・SC、SSW の常時配置があればよかった
支援した結果、子どもの変化	・服薬とカウンセリング継続等により本人の精神症状は改善傾向 ・いざというときには市が支援してくれるという安心感が持てたこと ・情緒不安定な面の解消。非常時に警察に通報することができた

	・父親に SSW と相談していることを話しづらいらしく、関係支援機関との連携に過敏

子ども：高校生　ケアを必要としている人：母親・きょうだい	
学校で実施した支援	・要対協出席 ・担任・相談支援員が聞き取り相談。学年で周知 ・SSW と連携 ・支援学校と連携 ・知的障害のあるきょうだいの卒業した学校経由で市役所の福祉課に相談依頼
連携した機関が実施した支援	・情報共有 ・面談し支援方法について本人や保護者と相談 ・家庭訪問
学校での支援にあたって工夫したことや気を付けたこと	・本人が話が出来るような環境作り ・本人の気持ちを尊重した。いつでも話を聞くことを伝えた ・本人が SSW と面談できるように調整した。本人が母親に相談したことを知られたくないということなので、その気持ちを尊重した
支援が難しかった点、あればよかったと思う支援	・本人からの聞き取りが困難 ・母が支援を受け入れない。本人が教員に話したことを知ると母が本人を叱る ・母親が周りに助けを求めるタイプではなかったので、本人から様子を聞いても、行政の支援を勧めることがなかなかできなかった
支援した結果、子どもの変化	・欠席が多いことは変わらない。本人が相談できるところがあると知れたと思う ・欠席が減ったこともあったが、家庭の中に介入することも難しく、本人も母親も助けを求めることには消極的なので、なかなか改善することが難しい

第VII章　調査のとりまとめ・考察

１．　各調査のとりまとめ

（１）　子ども調査

①　学校のことや家族のことなどに悩みや困りごとを抱える子どもの相談体制の充実

学校のことや家族のことなどに対して、悩みや困りごとを抱える子どもは小学生で４割程度となっているが、中学生以上では、半数以上が何らかの悩みや困りごとを抱えている。

一方で、学校の大人（先生など）に「相談したことがある」のは３割程度にとどまっている。また、学校の大人への相談のしやすさでは、担任の先生が、保健室の先生（養護教諭）やカウンセラーの先生に比べて「相談しやすい」とする割合が高いものの、５割弱にとどまっており、子どもにとって一番身近な存在である学校の大人が、子どもの悩みや困りごとを相談しやすい体制を整えておくことが望まれる。

②「ヤングケアラー」の認知度は向上しているが、さらなる正しい理解の促進

「ヤングケアラー」の認知度は、中学生以上で「内容を含めて知っている」とする子どもが半数以上と、昨年度の１～２割から大幅に増加している。「ヤングケアラー」という言葉の認知度は高まったといえるものの、子どもの自由意見にも多くあげられているように、「ヤングケアラーへの理解を広める」、「ヤングケアラーは決して悪いことではないと、「ヤングケアラー」という言葉を広めるときに一緒に伝える」、「1 人 1 人がヤングケアラーについて理解し、理解を持った上で行動を取る」など、「ヤングケアラー」に対して、偏見のないよう、正しく理解を深めていくことが重要である。

③「ヤングケアラー」の認知度は向上、周りにいた場合に何かしたいと考える子どもの意思を後押しできる支援の充実

また、友人や周りにヤングケアラーがいた場合、「相談にのったり話を聞くと」といった意見が７割前後いる他、「相談できる場所（相談窓口など）を教えてあげる」とする子どもも１～２割程度おり、ヤングケアラーに何かしたいという気持ちを持っている子どもが多いことがわかった。加えて、ヤングケアラーを助けるために必要なこととして自由意見であげられたこととして、「話をきいてあげる」といったことの他、「ヤングケアラーについて詳しく知る」「ヤングケアラーについて理解をしたうえで行動する」といったように、「ヤングケアラー」に対する理解を深めていくといった意見があげられた。

一方で、「ヤングケアラー」についての 24 時間電話相談窓口の認知度が低いことから、「ヤングケアラー」の周知とともに、相談窓口を含めた支援について、子どもにもわかりやすいツールなどを活用して周知を行い、子どもの何かしたいという意思を後押しできる体制づくりが求められている。

④「子どもの権利」の周知・理解の促進と、自身が「ヤングケアラー」と認識している子どもの他、認識していないが「ヤングケアラー」と思われる子どもが「ヤングケアラー」であることを言いやすい環境づくり

自身が「ヤングケアラー」であると認識している子どもは 0.8%と昨年度調査の 1.5%に比べて、減少している。一方で、「わからない」とする子どもが増えている。この「わからない」とする子どもの中には、家族のことや自分が自由に使える時間が少ないことに悩んでいる子どももおり、このような「ヤングケアラー」と思われる子どもは 2.6%いる。「ヤングケアラー」と思われる子どもは、「ヤングケアラー」についてよく理解できず、「わからない」

と回答している子どもがいたり、子ども自身が、現在自分が大人が担うほどのケアの責任を負っていることを認識することが難しい場合があると推察されるため、前述にもあげたが子どもたちの年齢などに応じてわかりやすいツールなどを用いながら理解を促していくことが期待されている。その他、自身が「ヤングケアラー」であると言いづらくて「あてはまる」と回答できなかった子どもがいると推測されるが、子どもには守られる権利があることを理解してもらうとともに、「ヤングケアラー」であると言ってもよいことを伝えていくことが重要である。合わせて子どもが言いやすい環境づくりを行うことも必要である。

⑤ ヤングケアラーが安心して相談できる環境の整備

自身が「ヤングケアラー」であると認識している子どもは、半数が家族のお世話を他の家族に助けてもらっているとしているが、３～４割の子どもは他の家族の助けがない状況にある。

ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもは、「ヤングケアラー」でない子どもに比べて健康状態がよくない子どもが多い、日常生活の困りごと悩みを抱えている子どもが多い、現在の生活の満足度が低く、日常生活等に支障などがみられる子どもが多いことがうかがえる。一方で、学校の大人への相談経験があるのは３～４割にとどまっていたり、さらには「電話相談窓口」の利用も１％前後と、さらに低い状況になっている。相談したことがない理由については、「特に相談する必要がない」が最も高いものの、相談することに対する不安を感じている子どもが多い。その他、相談しても何も変わらないからといった、諦めを感じている子どももいることから、子どもたちが安心して話ができたり、アドバイスや子どもが望めば必要な支援につなげていくといった環境を早急に整えていくことが求められている。

⑥ ヤングケアラー本人への支援の充実

ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもが助けてほしいこととして自由記述であげられた意見として、「家族のことを話せたり、聞いてもらえる人が欲しい」や「ヤングケアラーとの交流会があればよい」など、まずは自分や家族のことを聞いてもらえる場や人についての意見や、「気軽に相談できるところが欲しい」「学校でヤングケアラー専門の相談がしたい」といった相談窓口についての希望、「家事を手伝ってほしい」「一人になる時間が欲しい」「勉強できる時間が欲しい」「遊ぶ時間がない」といった、家族へのサービスの充実とヤングケアラー自身の自由な時間の創出への希望など、さまざまな意見があげられている。その他、「学校などで定期的なアンケートなどを実施し、大人が気づいてほしい」」といった周りから声掛けや気づきを期待する意見もあげられており、ヤングケアラー本人への支援の充実が重要であり、それとともにヤングケアラーが安心して自分の時間を持てるよう、ケアを必要とする家族などへのサービスの充実が必要である。

（２） 保護者調査

① ヤングケアラーのいる家庭への適切な支援とヤングケアラー本人への支援の充実

保護者調査では、家庭に「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるとするのは、約 1.4%であり、「ヤングケアラー」が担っている「お世話やケア」は、家事負担などが多くなっていた。また「ヤングケアラー」のいる家庭では、「子どもの学習支援」の他、「公的サービス（介護保険、障害福祉、家事支援など）が現行より充実すること」へのニーズが高い。また、インタビュー調査においても、「ケアを必要とする人のサービスを充実することで、子どもの負担を減らすことができる」といった意見があげられている。

そのため、ヤングケアラーのいる家庭が、個別状況に応じて適切なサービスにつながるように支援を行うとと

もに、学習支援などヤングケアラー本人への支援の充実が求められる。

② 「ヤングケアラー」の家庭に届きやすい情報提供の工夫

アンケート調査では 24 時間総合相談窓口の認知度が約 5 割であったが、インタビュー調査では、「ヤングケアラー」の保護者から、本来であれば利活用できたかもしれないサービス等を利用できない状況に陥りがちであるといった声が聞かれた。このようなことから、相談窓口の認知度をさらに高めていく必要がある。

特に、支援が必要な人に、適切な情報などを届きやすくするため、保護者への情報提供手段（各クラスや PTA 会における資料配布、コミュニティ誌 等）に、関連する利活用可能な支援機関等の情報提供の頻度を増やすなど、各家庭の手元に直接情報が届くよう、一層の工夫が求められる。

③ 民間を活用した、子どもにとっての「第三の居場所（サードプレイス）」づくり

「ヤングケアラー」のいる家庭の約 4 割が、「学校の勉強や受験勉強など、学習のサポートをしてくれる場」の必要性をあげており、子どもが息抜きでき、子どもらしい放課後を過ごせる場所や時間を求めている。また、インタビュー調査においても「子どもが自由に出入りでき、子どもが行きたいと思う施設があればよい」といった意見も聞かれた。

この創出のため、既存の地域・コミュニティ活動や子ども食堂等の場を活用した地域交流の拡充から、子ども自身が自由に選べ、居心地のよい場である「第三の居場所（サードプレイス）」を増やしていくことが求められており、民間資金等の活用による展開も考えられる。

④ 「気づき」と「気づきからの第一歩」の促進に向けた取組

保護者調査では、「ヤングケアラー」と思われる子どもを発見した際の行動のとり方や、その後の相談窓口等へのつなぎ方など、地域住民や周囲の大人が「ヤングケアラー」と思われる子どもに気づいた際にできることとして、「声掛けや話を聞く」といったことが多くなっていたが、インタビュー調査においては、「実際に声をかけるのはある程度顔見知りの子どもでないと声をかけづらい」「相談先がわかりにくい」といった声もきかれ、第一歩を踏み出しやすくなるよう、「ヤングケアラー」の周知の他、「ヤングケアー」の相談窓口や支援に関する普及・啓発の必要性が改めて指摘された。特に、保護者に対しては、各学校における保護者間の主要なネットワークの場である PTA の場を活かし、「ヤングケアラー」に関する普及・啓発活動を展開することで、保護者間での当事者意識を醸成させ、「ヤングケアラー」の気づきと支援に向けた第一歩の促進につなげていくことが重要である。

（３） 一般県民調査／県政モニター調査

① 高い認知度を保ちつつ、さらに理解を深める取組が必要

「ヤングケアラー」という言葉の認知状況は８～９割と高くなっているが、内容まで知っている割合は６～７割となっている。全国調査（「聞いたことがあり、内容も知っている」：29.8%、「聞いたことはあるが、よく知らない」：22.3%）と比較すると、認知状況は高くなっている。認知経路については、年代を問わず８割程度の人が「テレビ」を通して「ヤングケアラー」という言葉を認知している（全国調査も「テレビ」が 82.4%と同水準となっている）。若い世代では Web サイトや SNS も２～３割と比較的高くなっている。

一方、身の回りに「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるとするのは、一般県民調査で３～６％程度と

なっている（全国調査では２％程度）。

また、「ヤングケアラー」の支援について必要なこととして自由記述であげられたこととして、「世の中の全般、大人にも子どもにも正しい知識を伝える。特に「小学校でしっかり教える」「子ども目線で発信してほしい」「自らがヤングケアラーだと分かること、相談してもよいことを知ってほしい」「周りの人に頼ってよいという気持ちを持ってほしい」といった意見があげられており、今後、様々な媒体を通じて一般県民の「ヤングケアラー」に関する理解を深め、地域の気づきや支援とともに、ヤングケアラー本人の気づきを増やしていくことが必要である。

② 日常的な活動におけるヤングケアラーへの関りを増やし、地域全体で相談しやすい安心感の創出

一般県民で何らかの地域活動等に参加している人は４割程度となっており、全国調査（26.4%）よりも割合が高くなっている。そのうち、ヤングケアラーとの関りがある活動に参加している人は３割弱、今後、ヤングケアラーの支援として関われる活動に参加している人は４割弱となっている。いずれも、「自治会・町内会活動」の割合が高い。参加している活動として、「ヤングケアラー」と思われる子どもへ関われることは、見守り・声掛け、関係機関や相談窓口への相談、話を聞くといったことが多くなっている。日常的な地域活動の中で、そういったヤングケアラーの支援を担えると答えた県民が一定割合いることから、今後関わりたいとする人の支援の輪を拡げ、子どもが身近で相談しやすい安心感を地域全体で育てることが重要とである。

③ ヤングケアラーの相談窓口の周知や県民のヤングケアラーを支援する活動へのサポート体制の充実

地域活動等の中でヤングケアラー支援を行うために必要な行政からの支援としては「ヤングケアラー」に関する基本知識の提供や相談窓口の拡大、連携機関の紹介などが高くなっており、ヤングケアラー支援をしたいと希望する地域活動等への適切な支援が求められている。

（４） 支援者調査

① 支援者の研修機会の充実

「ヤングケアラー支援ガイドライン」について、読んだことがある割合は SSW では約 9 割になっているが、SC、養護教諭、子どもの居場所事業者では、５～６割程度にとどまっている。さらに、「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートについては、いずれの支援者においても活用している割合は１割程度で、ほとんど活用されていない状況である。

支援者自身が専門職として期待されている役割として、SSW は、自身の役割が子どもの適切なアセスメント、丁寧な支援であると考えている意見が多い。また、早期にアセスメント、支援するために、学校に対して SSW に早期に相談してほしいという意見が多い。養護教諭や SC は子どもからは SOS を見逃さないことを自身の役割として考えているといった意見が多くあがっている。学校で取り組むべきこと、学校に期待することとしては、情報共有、連携をあげる人が多く、また、SSW、SC、養護教諭がこれらの役割を果たしていくためには、人員の充実も必要であるという意見も多く聞かれた。

それぞれの専門職が期待される役割を十分に果たせるよう、支援者の研修機会を充実していくことが重要である。

② 多職種の連携の強化

「ヤングケアラー」と思われる子どもの有無については、SSW では約 6 割、SC では約 4 割、養護教諭、子どもの居場所運営事業者では約 2 割がいると回答している。

子どもの居場所運営事業者においては、ヤングケアラーの支援にあたって、専門家のサポートが必要であるという回答が 85.7%となっている。具体的な専門家としては、医療、介護の専門家、心理カウンセラー、通訳、ソーシャルワーカー、コーディネーターが求められている。また、行政やサービス事業所等、学校、SSW、SC に対して、情報共有や連携を求めている。

特にヤングケアラーの支援は、ヤングケアラー本人やケアを必要とする家族全体の支援が必要であり、その支援は多岐にわたることが多いことから、ヤングケアラーの状況に応じて多職種の連携を深めていくことが重要である。

2． 考察

①「子どもの権利」の周知と理解の促進

「ヤングケアラー」について理解を深めていく前提として、「すべての子どもには守られるべき権利がある」ということを、子どもから大人まで、すべての県民が正しく理解していくことが重要である。「子どもの守られるべき権利」を子ども自身が学ぶとともに、子ども自身が自分の思っていることを周りの人に伝えてみたり、周りの人に助けを求めてみるといった具体的な行動につなげていけるように手助けをする機会を増やしていくことも大切である。

この「子どもの権利」を守ることは、大人だけが行うことではなく、子どもも自分の守られる権利があるとともに周りの友達にも守られるべき権利があることを理解し、お互いが他者を尊重できる社会づくりにもつながることから、さまざまな場面で、「子どもの権利」についての周知と理解促進が重要である。

② 認知度の向上と「ヤングケアラー」への理解の深度化

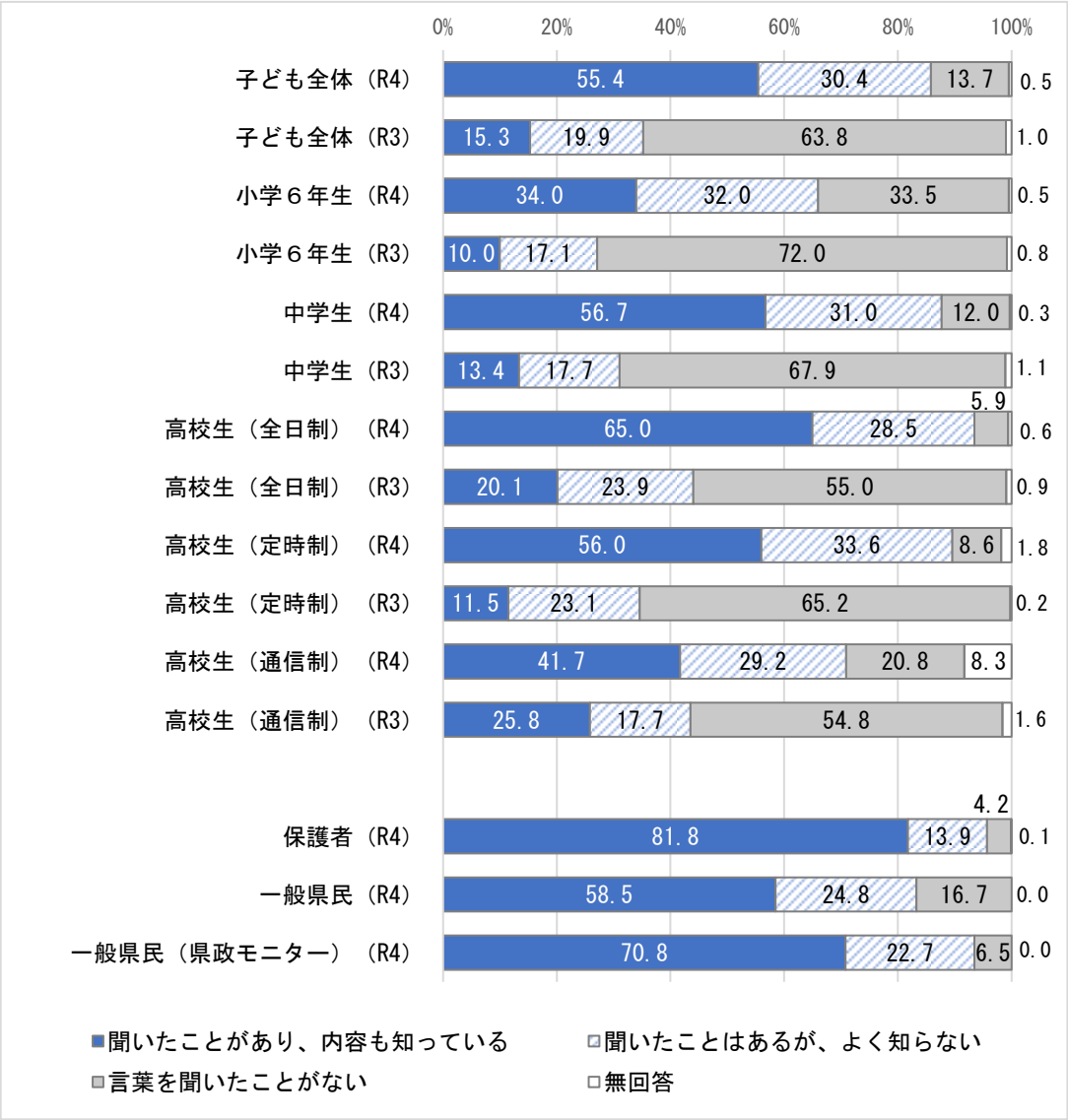
「ヤングケアラー」についての認知度は令和 3 年度から 4 年度にかけて、「言葉を聞いたことがない」と回答した子どもの割合が 63.8%から 13.7%と大幅に減少し、内容についても「知っている」と回答した子どもの割合は、中学生以上では半数を超えており、認知度は高くなっている。保護者や一般県民においても、内容についても「知っている」人が約 6～8 割と、概ね「ヤングケアラー」の認知度は高くなっており、県の広報やモデル事業など取組みも寄与している推察される。

しかし、認知度はあがっているものの、子ども自身が「ヤングケアラー」であると回答した子どもは、令和 3 年度から 4 年度にかけて全体で 1.5%から 0.8%に減少し、「わからない」と回答した子どもの割合は、全体で、12.8%から 15.7%に増加している。また、保護者調査では、家庭において「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるとするのは約 1 %、一般県民では、家族や親族に「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるとするのは約 3%、「友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子ども」に「ヤングケアラー」と思われる子どもがいるとしているのは約 6%となっている。

「ヤングケアラー」という言葉の認知度は高まったといえるものの、子ども自身が「ヤングケアラー」であることを認識できるようわかりやすく伝えることや、子どもの自由意見にも多くあげられているが、「ヤングケアラーへの理解を広める」、「ヤングケアラーは決して悪いことではないと、「ヤングケアラー」という言葉を広めるときに一緒に伝える」、「1 人 1 人がヤングケアラーについて理解し、理解を持った上で行動を取る」など、子どもから大人ま

で、「ヤングケアラー」に対して、偏見のないよう、正しく理解を深めていくことで、ヤングケアラーが安心して自身の状況を周りに話せたり、相談できる環境を作り上げていくことが重要であり、子どもから大人まで、そしてヤングケアラーへの支援者を含めて、理解が深まるよう、多様な媒体を用いながら進めていくことが重要である。

図表 183 「ヤングケアラー」の認知度



図表 184　「ヤングケアラー」としての自己認識　（単位：%）

		子ども全体	小学生	中学生	高校生（全日制）	高校生（定時制）	高校生（通信制）
自身がヤングケアラーにあてはまる	令和3年度	1.5	1.4	1.4	1.4	6.6	1.6
	令和4年度	0.8	1.2	0.8	0.6	1.7	8.3
	全国調査（令和2年度）			1.8	2.3	4.6	7.2
わからない	令和3年度	12.8	10.7	15.1	10.6	19.0	14.5
	令和4年度	15.7	22.5	14.2	13.9	23.5	16.7
	全国調査			12.5	16.3	26.8	16.9
該当しない	令和3年度	84.8	87.3	82.4	87.1	74.0	80.6
	令和4年度	82.3	74.8	84.0	84.4	72.1	66.7
	全国調査			85.0	80.5	68.0	75.5

図表 185　身近にいる「ヤングケアラー」と思われる子どもの状況　（単位：%）

	家庭や家族・親族	友人・知人やその子ども、子どものクラスメイト、近所の子ども
保護者	1.4	6.0
一般県民※	3.3	6.4

※一般県民調査の数値による

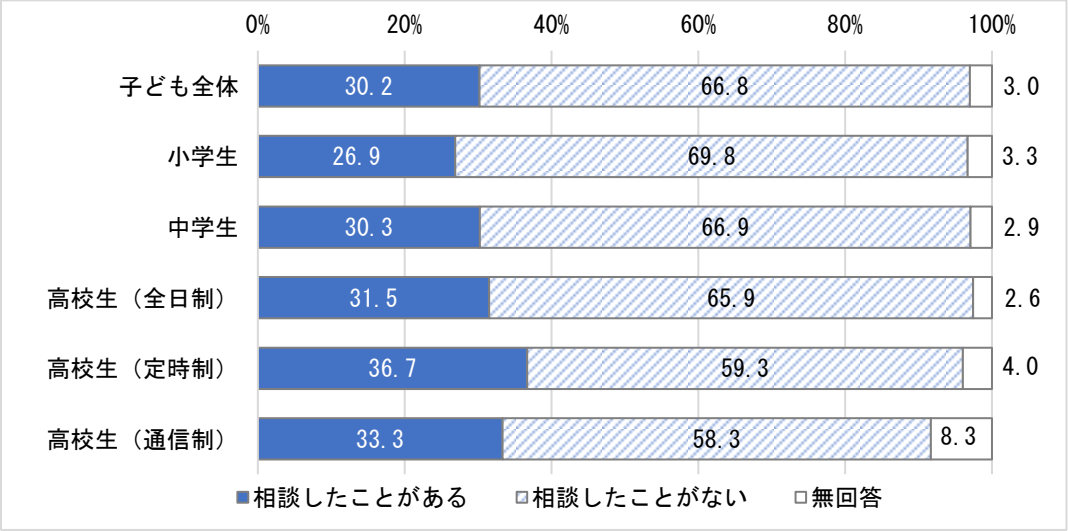
③ 相談先の充実と、相談しやすい環境づくり

ヤングケアラーに関わらず、この１年で学校の大人（支援者）へ相談した経験がある子どもは、全体で30.2%であった。学校の支援者への相談のしやすさでは、どの学年も相談しやすいとする割合が高いのは「学級担任」であったが、相談がしやすいとするのは５割程度にとどまり、養護教諭（保健の先生）、スクールカウンセラーにおいては２～３割と、必ずしも相談しやすいと感じる状況とは言いがたいことがうかがえる。

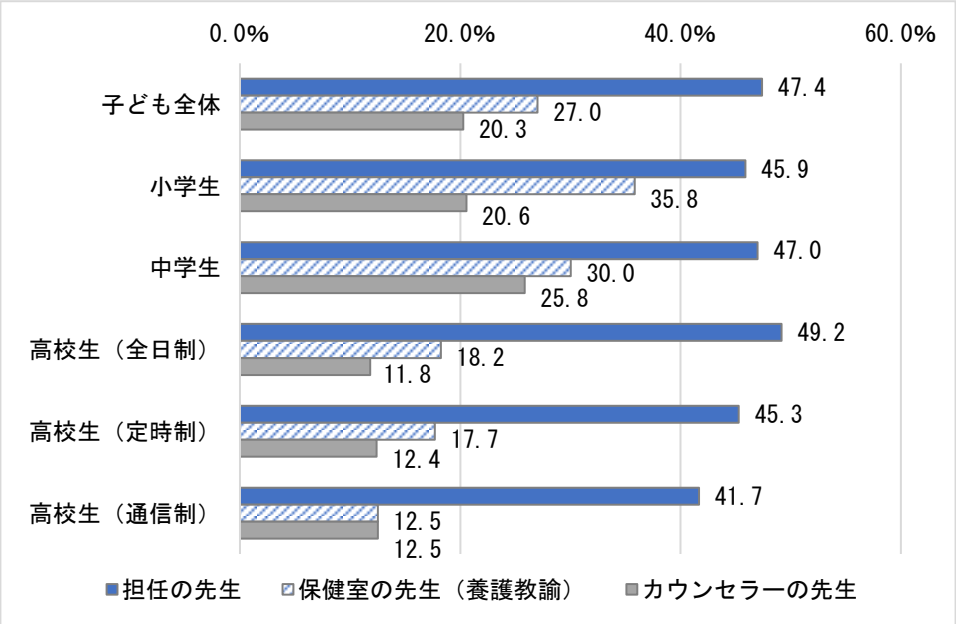
一方、支援者調査（養護教諭、スクールカウンセラー）の調査によると、養護教諭の大半は保健室への在室状況について「常時在室」あるいは「多くの時間在室」としており、スクールカウンセラーの大半が「事前の予約は基本としながらも、当日の面談希望者への対応を行える」としており、学校の支援者の対応と子どもたちの意識にギャップが生じている。ヤングケアラーにとって一番身近な存在である学校が、安心して相談できる場となるよう、子どもの声に耳を傾けながら、学級担任、養護教諭、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー等の役割に応じて適切に対応できる体制づくりが求められている。

また、子どもの調査結果からヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもは、健康状態がよくないとする子どもが多いことがうかがわれることから、まずはこのことを養護教諭に広く知らせるとともに、養護教諭のヤングケアラーへの関わりの必要性や認識を高めてもらうことが重要である。

図表 186　この１年で学校の大人へ相談した経験の有無



図表 187　学校の大人の相談のしやすさ（相談しやすいとする割合）



図表 188　養護教諭の保健室での在室状況

	養護教諭
保健室には養護教諭が常時在室している	60.2%
養護教諭は多くの時間、保健室にいるが、不在にしている時間もある	35.0%
養護教諭は多くの時間、職員室におり、必要に応じて保健室に行く	4.4%
その他	0.4%

スクールカウンセラーの子どもの面談体制

	スクールカウンセラー
すべて事前予約が必要	2.9%
事前予約が基本だが、緊急時の飛び込みでの相談には対応	35.3%
事前予約に加え、当日希望者とも面談する	61.8%
事前予約は不要で、当日希望者と面談する	0.0%

④ ヤングケアラーの子ども自身への支援の充実

ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもは、自身の状況を客観的に捉えることが難しい場合も多いため、支援者が子どもと一緒に、担っている家族のケアの状況が自身の学校生活や生きづらさとどのような関係があるか等を確認していくことも、重要な支援といえる。

ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもについては、健康状態が「あまりよくない」、「よくない」とする子どもの割合が１～２割おり、学年が上がるにつれ高くなっている。加えて、生活満足度についても、どの学年においても「ヤングケアラー」と思われる子どもの平均点が低く、健康状態があまりよくないことや家族との関係などに困りごとを抱えている子どもが多いことがうかがえる。

また、ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもの自由意見でも、「自分の話を聞いてほしい」、「相談しやすい場が欲しい」、「交流会」といった話せる場などを求める声や、「家族へのサービスを増やしてほしい」といった家族へのケアに対する支援の充実、「勉強に追いつけない」「友達と遊ぶ時間がない」といった自身の学習への支援や自分の時間を作りたいといった希望が聞かれた。

前述にもあげたが、ヤングケアラーや「ヤングケアラー」と思われる子どもに対し、子ども自身の守られるべき権利があることをより丁寧に伝えながら、「ヤングケアラー」であると声をあげてもよいということを伝えていくことが重要である。加えて、ヤングケアラーが安心できる場や自身のことを話せる場の他、ヤングケアラーの学習支援の他、ケアを必要とする家族全体への支援の充実により家族のケアから離れて子ども自身の時間がもてるようにするなど、ヤングケアラー自身への支援の充実が重要である。ただ、ヤングケアラーはそれぞれケアを必要とする家族への思いや意思などもあるため、支援する側は一方的な支援とならないよう、ヤングケアラーの意思や希望を確認し、寄り添いながら支援していくことが特に重要となっている。

また、ヤングケアラーそれぞれが自分で選んだ居心地のよい場所が見つかるよう、民間を活用しながら「第三の居場所（サードプレイス）」を増やしていくことが期待される。

図表 189　「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別　自身の健康　（単位：%）

		よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない
子ども全体	ヤングケアラー	48.9	16.9	19.4	11.8	3.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	26.5	19.6	35.3	16.0	2.2
	ヤングケアラーではない	62.7	16.3	17.7	2.8	0.4
小学6年生	ヤングケアラー	45.5	25.5	21.8	5.5	1.8
	ヤングケアラーと思われる子ども	37.7	14.4	34.9	11.6	1.4
	ヤングケアラーではない	64.7	15.5	16.9	2.4	0.4
中学生	ヤングケアラー	51.7	14.4	19.5	12.7	1.7
	ヤングケアラーと思われる子ども	24.1	22.6	35.2	15.3	2.3
	ヤングケアラーではない	62.6	16.4	17.8	2.8	0.4
高校生（全日制）	ヤングケアラー	53.8	17.3	13.5	13.5	1.9
	ヤングケアラーと思われる子ども	24.9	17.4	36.8	18.9	2.0
	ヤングケアラーではない	62.4	16.4	17.9	2.9	0.4
高校生（定時制）	ヤングケアラー	10.0	0.0	30.0	30.0	30.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	16.7	20.0	26.7	30.0	6.7
	ヤングケアラーではない	54.7	19.0	21.2	4.2	0.7
高校生（通信制）	ヤングケアラー	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーと思われる子ども	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
	ヤングケアラーではない	50.0	11.1	33.3	0.0	5.6

図表 190 「ヤングケアラー」、「ヤングケアラー」と思われる子ども別 生活満足度 （単位：点/10 点満点）

		平 均 点			平 均 点
子ども全体	ヤングケアラー	6.29	高校生（全日制）	ヤングケアラー	6.18
	ヤングケアラーと思われる子ども	5.02		ヤングケアラーと思われる子ども	4.96
	ヤングケアラーではない	7.42		ヤングケアラーではない	6.94
小学6年生	ヤングケアラー	6.13	高校生（定時制）	ヤングケアラー	4.56
	ヤングケアラーと思われる子ども	5.14		ヤングケアラーと思われる子ども	4.30
	ヤングケアラーではない	7.94		ヤングケアラーではない	6.64
中学生	ヤングケアラー	6.57	高校生（通信制）	ヤングケアラー	5.50
	ヤングケアラーと思われる子ども	5.08		ヤングケアラーと思われる子ども	3.50
	ヤングケアラーではない	7.59		ヤングケアラーではない	7.00

⑤ 日常の地域活動等、県民全体でのヤングケアラーへの支援の充実

「24 時間電話相談窓口」や「相談支援センター（山梨県総合教育センター）」ともに、子ども、大人に関わらず、「相談したことがある」とする人はごくわずかであり、認知度も高いとは言えない状況にある。世代を問わず、認知度を高めるとともに、相談しやすい環境づくりが求められている。

また、保護者や一般県民は、ヤングケアラーに対しては、声掛けや見守り、相談先を教えるといったことをあげている人が多いこともあり、ヤングケアラーの相談窓口などの認知度を高めていく必要がある。また、保護者や県民の「ヤングケアラー」への支援に対する活動の活性化を図るためにも、ヤングケアラーに対する様々な支援の充実と周知が重要である。

本県では、YouTube において、「ヤングケアラー」の啓発動画「山梨コネクトヤングケアラー」を掲載しているが、視聴したことがあるのは、子ども、一般県民ともかなり低く、５％前後となっていることから、動画の広報を進めていくとともに、さまざまな年代の目に留まり、「ヤングケアラー」への理解を深めてもらえる広報の在り方について、現在設置されている「広報啓発・相談窓口ワーキング」の専門家や元当事者の意見を聞きながら工夫していくことが求められている。

図表 191 相談窓口の認知度 （単位：%）

	24 時間電話相談窓口			相談支援センター		
	知っており、相談したことがある	知っているが、相談したことはない	知らない	知っており、相談したことがある	知っているが、相談したことはない	知らない
子ども全体	0.3	23.3	74.4	0.3	16.5	61.1
小学生	0.4	26.8	70.1	0.4	22.7	72.7
中学生	0.4	23.7	74.3	0.4	20.7	76.1
高校生（全日制）	0.1	20.9	77.2	0.1	7.3	33.6
高校生（定時制）	0.2	21.8	74.7	0.0	5.5	24.6
高校生（通信制）	0.0	20.8	66.7	0.0	8.3	29.2
一般県民調査	0.5	15.5	84.1	0.7	20.3	79.0

	24 時間電話相談窓口			相談支援センター		
	知っていて、利用したことがある	聞いたことがあるが、利用したことはない	聞いたことがなく、利用したこともない	知っていて、利用したことがある	聞いたことがあるが、利用したことはない	聞いたことがなく、利用したこともない
保護者調査	0.1	50.0	49.1	3.0	56.1	40.0

図表 192　YouTube「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴の有無　「見たことのある」割合

子ども全体	小学生	中学生	高校生（全日制）	高校生（定時制）	高校生（通信制）
6.7%	5.9%	6.6%	7.3%	4.6%	16.7%

一般県民	スクールソーシャルワーカー	スクールカウンセラー	養護教諭	子どもの居場所
4.8%	25.0%	14.7%	6.6%	32.3%

図表 193　YouTube「山梨コネクトヤングケアラー」の視聴　「わかりやすい」割合

子ども全体	小学生	中学生	高校生（全日制）	高校生（定時制）	高校生（通信制）
78.8%	78.4%	79.7%	78.6%	50.0%	75.0%

⑥ 専門職としてヤングケアラーへの適切な対応や支援ができる体制づくり

「ヤングケアラー」と思われる子どもがいると回答したのは、SSW は約 6 割、SC は約 4 割、養護教諭、子どもの居場所事業者は約 2 割と、実際に「ヤングケアラー」と思われる子どもと接したことがない専門職・支援者が多いことがうかがえる。

一方で、専門職や支援者の中には「ヤングケアラー支援ガイドライン」を読んだことがない人が多いことや「ヤングケアラー」の早期発見のためのアセスメントシートの活用は 1 割程度にとどまっていることから、専門職や支援者に対する研修等の充実が必要である。

また、ヤングケアラーに対する支援は、ヤングケアラー本人やケアを必要とする家族全体など多岐にわたることから、多職種での支援が求められることが多く、適切な支援が届くよう、ヤングケアラー・コーディネーターの充実が重要である。合わせて、重層的な支援ができるよう、多職種での支援体制の充実が期待される。

制作　山梨県子育て支援局子ども福祉課

電話：055－223－1457

E-mail：kodomo-fukushi@pref.yamanashi.lg.jp